

---

IS-Blaze7- &lt;インフィニット・ストラトス~ブレイズ・セブン~&gt;

ハンバル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS - Blaze7 - >インフィニット・ストラトス<ブレイス・セブン<<

### 【Nコード】

N0305S

### 【作者名】

ハンバル

### 【あらすじ】

パイロットに憧れていた少年、レイル・スカイラインはふとしたことから1機のISを起動させてしまう。ISなのに学園もハーレムもラブコメもない日々には翻弄されながらも、彼は大空に舞う。

オリ主人公、オリISによるIS二次創作です。ただし、学園入学はまだ先です。

元々はオリISを妄想していただけでしたが、妄想を膨らませていくうちにストーリーができてしまいました。処女作ですが、どうぞよろしく願います。

## プロローグ（前書き）

この物語はES＜インフィニット・ストラトス＞の二次創作です。  
オリキャラ、独自解釈、オリキャラと原作キャラのカップリングが  
苦手な方はご注意ください。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは一切の関係  
はありません。

## プロローグ

オレが5才ぐらいの頃までは。

大空を飛んでいたのは、親父のような戦闘機のパイロットだった。

操縦桿を握って、

ガンガンにGをかけて、

エンジンをメいっぱい噴かせて。

その先に何かが見えるんだ、つてからよく聞かされた。

だからオレも憧れてた。いつか、オレも親父のようなパイロットになつて、

大空を飛びたいつて。

それを話すと、親父は笑いながら、おまえが大人になったらな。つて大きな手で頭を撫でてくれた。

それが余計にうれしくて。

よけい飛びたくなつた。

どこまでも広がる大空を飛べる日が待ち遠しかった。

そう。確かに憧れていたはずだった。  
ブレイズ・ゼノン  
炎の7に。

## プロローグ（後書き）

プロローグだけだと何が何だか分からないですね。

というかキャラ名すら出てないのに謎の単語だけ出しちゃいました  
テヘW

それでは、次回から本編です！（当たり前だ）

## No.1 フロム・エア・ショー（前編）

「暑い……」

それがレイル・スカイラインの感想だった。

帽子でも被ってくるんだった、と遅い公開をする。

（暑すぎてハゲちまいそうだ……）

割と本気で心配になり、熱されたショートの金髪をいじってみる。  
うん。ハゲてはいない。

レイルは現在、砂漠の中でモロに日光まっじんひーむを浴びていた。

といつても、別にオアシスを求めて遭難したわけじゃない。ここは基地だ。

エドワーズ空軍基地。

カリフォルニア州モハーヴェ砂漠の中にある、アメリカ空軍基地。様々な航空機の実験が行われている場所でもあり、とにかくめちゃ広い。

ゲートをくぐってから駐車場まで車で数十分近くかかったほどだ。空軍基地ということもあって、周囲が厳重に警備されており、

本来、単なるジュニア・ハイ3年生のレイルが入れる場所ではない。

……が、本日は数年に1度の一般開放日。

エア・ショーである。

というワケで、レイルはようやく見つけた日陰（展示されている大型機の下）から、

数々のアクロバット飛行を眺めていた。

5機編隊の一系乱さぬ華麗な飛行。

複雑な軌道を描く2機のヘリコプター。

どれもすごいのだが、この時代では旧世代機にすぎない。

(……ま、オレの「本命」はヒコーキじゃねえけどな)  
今回のエア・ショーでは戦闘機やヘリコプターのほかに、とある兵器が大空を舞う。

わあ、と歓声が上がると。

「お、出てきた出てきた」  
空に2つの影。

どう見ても航空機の形をしていない。  
より正確に言えば……人型である。

IS。

正式名称「インフィニット・ストラトス」。

いわゆるパワードスーツの一種で、1機あるだけで世界の軍事バランスを崩壊させるほどの性能をもつ。

もっと言えば、既存兵器で束になってもIS1機に勝てないくらい強い。

10年前にこんなモンができたおかげで、今では既存兵器などとはやお役御免なワケだ。

戦艦とか、戦車とか、  
……戦闘機とか。

実際、2機のISは戦闘機には不可能な細かいターンを高速で繰り返して、色付きのスモークが空に細かな模様を描いている。いや、模様というより文字かもしれない。

(片方は第2世代型の アラクネ か)

アラクネ は人型の背中に8本のクモのような「脚」をもつISだ。

黄色と黒というカラーリングのせいで、余計にクモっぽく見える。



(だが、もう片方は何だあ？あれは見たことねえな)

もう片方のISは、あからさまなデザインの アラクネ とは違い、恐ろしく無骨なデザインだった。

漆黒の四角い装甲は手足どころか、胴体、肩や背中のスラスター、拳句の果てにバイザーまで覆っていた。

例えるなら、お菓子の空き箱を組み合わせて人型を作ったような感じだ。

(いかにもな重装甲だけど……それにしちゃあいい動きだな)

四角いISは、肩のスラスターを噴かし、 アラクネ にも見劣りしない繊細な動きで飛んでいる。

(推力が高いのか?)

また歓声が上がった。

スモークによる「お絵かき」は終わったようだ。

晴れやかな大空に、カラフルな「WELCOME TO AIR SHOW!!」の文字があった。

「で、待ち合わせはここでいいんだっけか」

レイルは、ある知り合いと会場で会う約束をしていた。

と。

「オオオーイー！ぼーず！、こつちだこつちイー！」

甲高い大声。

振り向いてみると、

むこうの建物の前で手を振ってる白衣の姿が。

小走りで向かう。

「ナガさん！久しぶりですね。」

「おう、しばらく見ないうちにでかくなっただんじやないの？今ハイスクールだっけ？」

「まだジュニア・ハイですよ」

きりさわながき  
桐沢永樹。日本人らしい黒髪に、年のせいかな所々白髪が混じっていて、

シヨウワ時代風の丸眼鏡が妙に似合う45歳。

航空機メーカー「クリムゾン・エアクラフト」のベテラン技術者で、主に航空機の開発に携わっている。

「んでぼーず、親父さんは？」

「オレも誘ってはみたんですけどね、俺はもうパイロットじゃない」って聞かなくて

「あー・・・やっぱりねえ。ったく。」

オレの親父は戦闘機のパイロットだった。それもエース級。

「でさでさ、ぼーずはやっぱりIS見に来たわけ？」

「ええ。開発職に進むんだったら実物を見ておきたいですから。」

「ふううん。昔はぼーずもパイロットになりたいって言ってたんだけどなあ」

「ISが出てきたんです。もう戦闘機の時代じゃないでしょーが。だいたい、スカイライン家

だからってパイロットにならなきゃならないなんて決まりは無いんですし。」

「あのな、ぼーず。仮にも戦闘機の開発職の前で戦闘機の悪口言うなよな」

「あ、すんません。つい」

「ま、いいけどな」

ハハハ、と笑うナガさん。

「俺らも作ってるし。IS」

.....は？

「おいちよっと！ナガさんって航空機が専門じゃ」

「いやー、ほらアレ。やっぱ今の時代戦闘機じゃ食ってけなくて

さー、

ISも作らなきゃやってけないのよコレが」

「いやいや、ノウハウとかあるんですか！？航空メーカーでしょうが！」

「だって世に出されてから10年でしょー。蓄積の差なんてたいしてないよ。んまあ、まだ試作機

だけどさあ。あ、ちなみに開発主任は俺ね俺。いやあー、久々に腕をふるって作っちゃったわけよ

コレがあー！」

「サラリと重要なこと言うな！」

何やらMAXハイテンションなナガさんだが、オレは正直信じられない。

ISの開発には莫大な金がかかるし、そもそも世界に467個しかないコアをどうやって手に入れたんだろう。

「ん~~~~、そんなに信じらんないなら、見るか？」

「へ？」

「だー、かー、らあー、ウチのIS。最新型だよ最新型。つつか、見に来てい！そして驚けえ！」

これがわざわざ待ち合わせた目的か！

ガツとシャツの襟首を掴まれ、そのままずるずるカートウーンのように引きずられるオレ。

ずざあー

「ちょ、ま、ってゆーか最新型って！軍事機密もいいところでしょーが！」

「だいじょーぶだいじょーぶ、『ブレイズ・セブン』の息子だつて言えばダイジョーブ！！

だいたい開発主任俺だし。つまり俺がいればダイジョーブイ！！」

バアアン！という効果音が聞こえた気がした。

ま、いつか。最新型のISを見れるというのはそれだけでもうれしい。

というかこの人に何言っても無駄だし。

ずざああー……

「分かりました、行きますから。手を離してください。自分で歩きますから。」

「ふふふ見て驚け感激しろそして感謝しろむしろ拜め」

ずざああー……

「話聞けよ！しかも歩くスピード上がってるし！！」

ずざざざああああー……

レイルは、移動用車両に乗せられるまで100メートルも引きずられた。

「ふあああ……」

会場から少し（と言っても3キロ以上ある）離れた道。

軍服姿の若い兵士は、あくびを漏らしていた。

兵士には、この道の警備という仕事があったが、

会場から離れているため、わざわざこっちに来る客はいない。

つまりほとんど仕事がなく、あくびを漏らすのも無理はなかったが、

珍しく人が来た。

「お客さん、ここから先は立ち入り禁止ですよ」

兵士が呼び止めたのは、スーツ姿の女性だった。

「あら、申し訳ありません」

ふわりとしたロングヘアが良く似合う美人だった。東洋人だろうか？

「この先って、軍事機密に関わる施設でしたか？」

「ええ。IS関連の施設もありますからね。一般の方は入れない

んですよ」

すると女性はにこにこした笑みを浮かべ、

「ああ、私、一般人ではないんですよ」

「?」

「悪の組織の一人だよ、クソ野郎」

サイレンサーに消された小さな銃声がした。

腹部に焼けるような痛みが走る。

「ぐあッ……」

薄れていく意識の中、兵士は見た。

自分を撃った目の前の女性の顔を。

さっきまでと変わらない、にこにこした空々しい笑いだった。

車で案内された先は、会場から数十キロ離れた建物だった。

10年前までは戦闘機が収まっていたであろうハンガーには、今は1機のISが膝をつけていた。

ISの周囲では、研究員や整備員らしき人たちが動きまわっている。

「これ、さっきの……」

漆黒の四角い重装甲のISが、そこにあつた。

「どーよ、クリムゾン・エアクラフト社製第3世代型試作IS。その名もオ

ブラックボックス ! どうだ気に入ったか?」

「……あー、正直あんまり……」

つてゆーか名前が見た目そのまんまだなオイ！

「ちよつとちよつとお、せつかく開発志望のぼーずに見せてやっ  
てんだからさあー」

「すんません、デザインがちよつとアレかな……って」

「この無骨さがいーじゃん！いーじゃん！スゲーじゃん！」

「んー、なんかこう、空を飛ぶのにふさわしくないっていうか…  
…飛行機つばくないっていうか……」

戦闘機には、空を飛ぶために洗練された機能美がある。

けど、こいつはそんなものが無くても戦闘機以上に飛べてしまう。  
それが、

なんとなく不愉快だった。

「ほーう。なんだかんだでぼーずもスカイライン家だねえ」

「家は関係ないでしょう！」

「家の名前を使ってここまで入ってこれたのはどこのどいつだ」  
う………確かにそうだ。

そうでなければこんな機密は見られないだろう。

「んまあ、どのみち ブラックボックス ってのは今のコードネ  
ームだな」

「『今のコードネーム』ってどういう意味ですか？」

「それはだな」

「しゅにーん！、ちよつといいですかー？」

むここの研究員がナガさんと呼んでいた。

「あー、すまんすまん、今行く行く」

オレも邪魔しちゃいけないな。少し外に出ていよう。

外に出たとたん、また日差しに焼かれるが、あまり気にならな  
かった。

なんとなく、ハンガーを振り返る。

ハンガー内の ブラックボックス 黒い箱 は、膝立ちの姿勢で佇んでいた。

「ホントに飛べるのかね、コレ」  
いや実際飛んだんだけどね。

## No.1 フロム・エア・ショー（前編）（後書き）

ようやく主役機搭乗！

と思ったら黒い箱の塊でした。

あと、なんか事件の二オイが…

エドワーズ空軍基地に関して。

ほとんど想像です。

実際行ったこともないので、表現も割と曖昧にしています。

エア・ショーは実際にあり、普段見ることでできない試作機まで見ることができそうです。

ちなみに面積は1,218k?あるそうです。メチャクチャ広い…

戦闘機に関しては、原作のほうでも特に言及されていないので独自解釈。

この時代の戦闘機は「あっても役に立たないけどISの数が少ないから数合わせに配備しとくか」レベルの待遇です。

エア・ショーのプログラムも、終盤はほとんどISだけで行っています。

ではまた。



No.2 フロム・エア・ショー（後編）

女性の足元には数人の兵士が倒れていた。

「……つたく、手間かけさせやがって」

『ISの警備にしてはザルでしょう。手間なんてかけてるオータムの方がどうかと思うけど？』

通信機から聞こえてきたのは、若い女性の声だった。

「チツ…黙ってるよスコール。どのみちあと少しだ」

『じゃあ、成功を祈っておくわ』

オータムの目の前には、ISのハンガーがあった。

ドオン！ という爆発音が聞こえた。

レイルは思わずそちらを振り返る。

「何だ今の！爆発！？」

「爆撃ショーじゃないの？あ、でも早すぎね？」

「オイ、あっち、煙が……第5ハンガーの方じゃないか！？」

研究員達が次々と外に出てくる。

30メートル離れた向こうハンガーから、黒煙が上がっていた。遅れてナガさんも外に出てきた。

「アレって確か アラクネ のハンガーじゃなかったっけか？」

オレのすぐそばを、車両に乗った兵士たちが通り過ぎていく。

「作業中止！スタッフは全員屋内退避だ！」

「オイ、なんかヤバそうだ。ばーずも早く退避しろ」

「あ、はい！」

スタッフたちも、建物の奥の方へ走って行った。

オレも踵を返して中に入ろうとした。

その時。

マシンガンの銃声とともに、複数の悲鳴が聞こえた。

「ぐあー！」

「あ、ISがあー！」

思わず振り返る。

それがいけなかったか。

向こうハンガーの方向には、倒れている兵士と、マシンガンを携えた1機のISがいた。

アラクネ。

その顔を隠すバイザーがざらりと光る。

それはまるで、次の獲物を見つけたかのように。

たとえばさ。

逃げ遅れたオレなんて、格好の獲物じゃねえか？

「……！ぼーず、逃げろお！」

「ツツツ！、のわああああ！！！」

転がりこむようにハンガーの中へ飛びこんだ。

直後、さっきまでオレがいた場所に無数の銃弾が撃ち込まれる。

銃弾にえぐられた土が体を叩く。

殺される。

冗談でも他人事でもなくオレは撃ち殺されていたかもしれなかった。

「こっちだ！」

ナガさんに手をひっぱられ、施設の奥に急ぐ。

同時に入り口のシャッターが音を立てて閉まっていく。

しかし遅かった。

鉄のはじける音とともに、シャッターがアルミホイルのように引き裂かれた。

外からの逆光に、毒グモのシルエットが浮かぶ。

操縦者の露出した口元が、にやり、と歪む。

マズい！

そのまま加速した アラクネ は、こちらへ一瞬で飛び込んできたかと思うと、腕でオレ達を薙ぎ払う。

咄嗟にナガさんがオレをかばうように被さってくれたが、そのまま数メートル吹っ飛ばされた。

「ぐツ……がああああああああ……！」

ナガさんがハンガーの奥の方に吹き飛ばされ、オレは何かの背中を打ちつけ、そのまま地面に転がった。

「があ……ぐ……」

「ギャハハハハ！すげえもんだなISってのは！人がゴミみたいにブツ飛んじまったぜえ！」

アラクネ の操縦者の声か。

口調はともかく、当然ながら女の声だった。

すでに アラクネ はオレの目の前まで迫っていた。

すぐに殺さないのは、いつでも殺せるという余裕か、いたぶって殺したいという嗜虐か。

どちらにせよ、無事では済まねえな。

「つーわけでそのガキ。目ざわりだから死ねよグツチャグチャに」

その手のマシンガンが構えられる。

死ぬ。

思わず目をつぶった刹那、銃声と金属が跳ねる音がした。

「チィ！ もう出てきやがったか！」

ゆっくり目を開けると、入り口にアサルトライフルを構えるISが、アラクネを銃撃していた。

アレは…第2世代量産型IS ワイバーン だろうか。

アラクネ はオレをあっさり捨て、ワイバーン の銃撃を細やかにかわしながら突進していく。

ワイバーン の操縦者、ユリアマリーは内心で舌打ちした。

(人がいるなんて！あれじゃうかつに撃てない…!!)

アラクネ の背後に(何故か)民間人の少年がいたため、ユリアは少年に当たらないように

注意しながら射撃をしなければならなかった。

しかし、それが アラクネ の接近を許してしまう。

「甘えんだよ！ガキなんざ気にしちゃってさあ！」

…ッ！盾に取っているのはあなたでしょう！」

懐に入り込まれた アラクネ の腕に、構えていたアサルトライフル「レッドバレット」を弾き落とされた。

「なら！」

両腕に装備された刃付きのトンファークイックエッジ」を展開。「たああ！」

両腕で連撃を繰り返すが、アラクネ はPICの細かな動きで全てそれを回避し、時にマシンガンを撃ってくる。

「当たんねえんだよ！」

(なんて動きなの！？馬鹿にしてえ！)

「へえ！こんな事もできるのかコイツ！ホント面白いモン手に入れたぜ！」

アラクネ の手にエネルギー・ワイヤーが現れ、それを両手で

複雑に絡ませる。

知る人が見たら、「アヤトリ」と表現するだろうが、ユリアはそれを知らなかった。

「こいつで終わりだあ！」

アラクネはその手からエネルギー・ワイヤーの塊を投げつけてきた。

至近距離から放たれたそれは、ユリアの目の前で巨大なクモの巣状に広がると、ワイバーンを絡め取った。

「な……！」

ワイヤーががんじがらめに絡まり、ユリアはバランスを崩し地面に倒れた。

「クモの糸つてのは強えもんだなあ！まさかここまでとは思わなかったけどよ」

敵操縦者がにやりと舌を出す。

「手間取らせんじゃねえよ。ザコが」

動けないワイバーンに向けて、アラクネがマシンガンを構えて

吹き飛ばされたダメージに、レイルは顔をしかめた。

全身が軋むように痛い。骨は……多分折れてない。

外からは断続的に銃声が聞こえてくる。

ワイバーンがアラクネを引きつけてくれているが、苦戦気味のようだ。

いつまでもここにいるのはマズい。

「ぐ……そうだ、ナガさんは！？」

ハンガーの奥の方にくったりと手足を投げ出したナガさんが見えた。

「ナガさん！しっかり！大丈夫ですか！」

「う……痛たたたッ！どうにかな……」

とにかく今のうちにナガさん抱えて逃げねえと。痛みを無視して手足に力をこめ、立ち上がるうとしたときだった。

ドシャアア！と、何かが倒れる音が聞こえた。

「……………！」

ひしゃげたシャッターの向こうには、網に捕縛され倒れているワイバーンと、

マシンガンを構える アラクネ の姿。

敵が何をしようとしているかが理解できた。

「……………ツやめろお！！！」

全身が痛むが、構わない。

とにかく立ち上がらなくては。

右手で手すりを掴んで、どうにか立ち上がる。

突然。

キイイイン……と、金属質の音が響いた。

「な、なんだ……………？」

音の聞こえた方に振り向くと、

手すりだと思って掴んでいたのは、ブラックボックス の装甲だった。

黒いISの全身が、淡い光を放っている。

正確には、その装甲の継ぎ目から、白い光がにじみ出ている。

起動確認

その瞬間。

止めを刺そうとしたオータムは、思わず引き金を引くの忘れた。  
「何イ……！？」

エネルギー残量：残り47パーセント

その瞬間。

動きを封じられたユリアは、その光を見た。

「ウン……」

各部センサー…異常なし

その瞬間。

すぐそこで起きた光景を、永樹は信じることができなかった。

「き、起動しているう！？」

搭乗準備完了

オレの目の前で、ブラックボックスの胴体装甲が開く。  
オレを受け入れるように。  
迷っている暇は、なかった。

「させるかよー！！」

ユリアの目の前で、アラクネが慌ててマシンガンをブラックボックスに向ける。

だがそのせいで、敵はユリアから注意をそらしていた。

動かせるスラスターをチエック。

「カッコつける前に死んじまいなあ！クソガキ！」

各部スラスター全開。

ワイバーン が アラクネ に体当たりする。

「ぐおあッ!!」

ワイバーン の全重量をまともに受けた アラクネ がバランスを崩す。

が、そこまでだった。

「このザコがあああ!!」

アラクネ は体勢を立て直し、ユリアを再び地面に叩きつける。

「あームカツクぜえ!死ねってんだよクソがあああ!!」

ワイバーン を踏みつけ、ユリアの頭にマシンガン突き付ける。

しかし、ユリアの顔には笑みがあつた。

そう。

(……時間は稼いだ!)

ドババババババ! と、 アラクネ にレーザーの連射が浴びせられる。

「クソ:!!」

遅れて回避行動をとる アラクネ 。

そこには、操縦者に乗せた ブラックボックス が立っていた。

四角いバイザーに隠れた瞳が、ぎらりと アラクネ を睨み据えた。



## No.2 フロム・エア・ショー（後編）（後書き）

ようやく原作キャラ登場です。

第5巻に登場した アラクネ 強奪の経緯を勝手に書いてしまいました。

あと、ユリアさんはメインキャラではなくぶっちゃけたただのモブです。

ワイバーン の簡単な設定

アメリカ製第2世代型量産IS。

同世代の ラファール・リヴァイブ と比べると拡張領域は少ないが、

扱いやすい固定武装を標準装備しており、戦闘能力は高い。

カスタマイズが容易であり、様々なバリエーションが存在する。

ユリア機は、両腕に近接戦闘用装備「クイックエッジ」を装備し、左肩にシールドを装備したデフォルトである。

ではまた次回！

### No.3 テイク・オフ（前編）

10年ほど前、オレは一つの夢をあきらめた。

代わりに、将来はISの開発職に就こうと考えていた。

そのために、時間を見つけてはISについて勉強していた。

まあ知っているのは一通りの基礎知識ぐらいで、動かし方だって理屈でしかわからねえけど。

少なくとも武器を使うぐらいは問題ない。

武装選択

腕部パルスレーザーガン。

オートで照準

アラクネ に設定。

発砲。

「コノヤロおおおおおおお！！」

ブラックボックス<sup>オレ</sup>の腕に内蔵された銃口から、レーザーが断続的に発射される。

よし。何発かが命中した。

が、アラクネは上昇して離脱した。

（チィ！ハンガーの中からじゃ狙えねえ！）

スラスターを噴かし、ハンガーの外へ出た。

「そこかよ！」

PICで空に浮かぶ敵に再び照準。

レーザーガンを連射するが、細かな機動で回避される。

「このクソガキィー！！」

アラクネ がマシンガンを発砲し、地上のオレに容赦なく弾丸が降り注ぐ。

「ぐう！」

前後左右に動き、避けようとしたが何発かが装甲に食い込んだ。シールドエネルギーが削られないのは、コイツの重装甲のおかげか。

再びレーザーを撃つが、やはり回避される。

それに対して、オレは アラクネ のマシンガンを避けきれないでいた。

『ぼーず、飛べ！ソイツは空中そらのほう動きやすいんだ！』

プライベート・チャネルからナガさんの声が聞こえた。

返事をするには 頭の後ろで会話する感覚、だっけ？

「やってますっつの！さつきから飛ばうとしてるんですけど、上手くいかねえんです！」

空中のほうが三次元的な機動ができる分、攻撃を回避しやすい。

飛行するには、円錐をイメージすればいいらしい。

テキストでは理解していたつもりだが クソっ！ダメだ。

イメージできない。

こんな空力もへったくれもない四角の塊が。

翼も付いていない陸戦兵器もどきが。

どうしても「飛べる」なんて思えない……！

『イメージはあくまでイメージだ！パイロット一族なんだから、飛び方ぐらいイメージできるだろ』

「んなこと言われても……ぐッ！」

ドガガガガッ！と、数発の命中弾に装甲を削られる。

パイロット一族。

そうだ。オレは空の飛び方を知っているはずだ。

確か、親父が言うには

空を飛ぶ自分をイメージするのではなく、自分が飛ぶ空をイメージしろ、だっけ？

ドウ！と ブラックボックス のスラスターが火を噴いた。

強大なGでブラックアウトしないのは、エネルギーシールドの保護のおかげか。

もはや戦闘機というよりロケットのような上昇。

「コイツ、なんて推力だ！」

アラクネ の操縦者が動揺する。

マシンガンが何もない地面を抉る。

一瞬で50メートルほど上昇したオレは、照準をオートにまかせてレーザーを撃ち散らす。

虚を突かれた アラクネ が距離を離し、マシンガンを撃つてくるがオレは上下に回避機動をとる。

気がつけば、オレは笑っていた。

嬉しかったからだ。

ISを動かさせた事が。

諦めていた空を飛べたことが。

これなら、オレは親父のようなパイロットになれる

！！

勢いに乗って両腕でレーザーを連射する。

何発か命中させたが、装甲を少し削るだけだった。

レーザーガンだけでは火力に限界がある。

(なら、コイツで！)

51口径アサルトライフル「レッドバレット」を呼び出す。

スラスターを全開にし、一気に アラクネ との距離を詰める。

マシンガンを避けつつ、レーザーを連射する。

全弾回避されるが、敵の動きが一瞬止まる。

「そこだあ！」

フルオートでアサルトライフルを撃ちまくる。

銃口が火を噴き、 アラクネ の装甲を削っていく。

「ぐああ！！！」

特徴的な8本脚のうち、2本が吹き飛ぶ。  
ぐらり、と敵の体勢が崩れた。

チャンスだ。

「…もらった！」

アサルトライフルを量子化させ、代わりに近接戦闘用ブレードを呼び出す。

『よせ！そいつは』  
スラスター全開。敵の懐へ

にやり、と。

敵の口が裂けるように歪む。

咄嗟に減速しようとしたが、間に合わなかった。

アラクネ は体勢を崩したフリをして、エネルギー・ワイヤーの塊を投げつけてきた。

それはオレの目の前で巨大な網のように広がると、ブラックボックス の全身に絡みついた。

振りほどこうとしても、網は余計にがんじがらめに絡みつく。

「くそっ……！」

「よくもやってくれたなあこのガキ」

アラクネ がマシンガンをフルオートで発砲。

「がああああ！」

絶対防御に守られていても、防ぎきれない衝撃に揺さぶられる。  
シールドエネルギーが削られる。

装甲の至る所が破損する。

『警告。ブラックボックス のダメージレベルがCを超えました』  
メッセージが表示されるが、気にしている余裕はない。

と、弾切れを起こしたのか、アラクネ はマシンガンを投げ捨てるこ、

40センチ大の機械を取りだした。

なんだアレは？

「へっへっ、それは何だ」って顔だなあ？」

4本足のそれは、動けない ブラックボックス の胸部装甲を脚で掴み、固定した。

「そいつは剥離剤リムーバーつつつてなあ！ISを強制解除できる秘密兵器なんだよ！生きてるうちに見れてよかったなあ！ま、どおせすぐに死ぬけどなあ！ヒヤハハ！」

空中でのIS強制解除。

それがどういふ結末をもたらすか。

現在の高度はおよそ1500メートル。

ISスーツすら身につけていないオレは、この高さから地面に叩きつけられるだろう。

ここで死ぬのか。

やっとパイロットの道をつかめたのに。

やっと空に飛べたのに。

やっと親父に胸を張れるのに。

ここで死ぬのは嫌だ。

「じゃあなクソガキ。お別れは済んだかあ！！！」

ふざけんな。

オレは、まだ。

「オレはまだ、飛び足りねえ……！！！」

キイイイン！

起動時よりも強い金属音がした。

装甲の継ぎ目や、破損でできた裂け目から、さっきよりも強い光

がにじみ出る。

そして。

『ファースト・シフト  
一次移行が完了しました。制限装甲 リミッター ブラックボックス を解除  
します』

ボンツ という破裂音と共に、漆黒の装甲が継ぎ目からパージされる。

全身に絡まっていたエネルギー・ワイヤーはその勢いに耐えきれず、引き千切れた。

リムバー剥離剤は、パージされた胸部装甲ごと落下していく。

つま先から頭部に至るまで、全ての装甲がパージされ、量子に還っていく。

そして

そこに、ブラックボックス の真の姿があった。

オータムは息をのまずにはいらなかった。

目の前のISが、あの ブラックボックス の中身だとは思えなかった。

細身のシルエット。

純白の装甲に、赤いラインが映えるテストカラー。

極端にシェイプアップされた装甲は、空力さえ考慮されているのか、滑らかな流線型。

左腕には物理シールドが装着されているが、取り回しを優先したのか通常より一回り小さい。

両肩と背中には、ジェット機のエンジンのような半固定のスラスタターが浮かぶ。

そして、右腕には見慣れないライフルが握られている。

「これが、オレのIS……！」

白いISがゆっくりと顔を上げる。

「行くぞ！ ゴーストエース ！！」



### No.3 テイク・オフ（前編）（後書き）

ようやく真の主役機を出せました。

ゴーストエース のカラーリングですが、最初は「ゴースト」のイメージで、UCのデルタプラスみたいなカラーリングにしようと考えていました。しかし、テスト機なので派手なカラーリングを施すべきであること、主人公機であることを考慮した結果、白と赤と言うテンプレなカラーリングに落ち着きました。

ナガさん  
桐沢永樹について

ISが一夏や弾以外に男キャラがほとんどいないので、博士ポジションの人を男キャラにしてみました。

しかもイケメン青年ではなくテンションの高い中年オヤジです。個人的にはかなりお気に入りになりました。

ではまた次回！

## No.4 テイク・オフ(後編)

「行くぞ！ ゴーストエース ！！」

白いISが、ギンツ！とバイザーごしにオータムを睨み据える。

「くっ！」

マシンガンの弾はない。

代わりに、未だ使い慣れない「脚」を射撃モードに切り替える。

さらに両手にカタールを呼び出し、一気に飛びかかる。

実弾と刃が ゴーストエース に襲いかかるが

ドン！という音とともに、

突然、 ゴーストエース が消えた。

「なにい！？」

カタールが空を切る。

瞬間移動した、という冗談はない。

おそらく高速移動でこちらの攻撃をかわしたのだろうが、

「あの野郎！どこに消えやがった！！」

スラスターを噴かした瞬間、視界が歪んだ。

周りの雲が高速で流れていく。

「ぐ、あああああああああああああ！何じゃこりゃあああああ  
あああああ！！？」

ようやくスラスターを逆噴射させて停止できた。

アラクネ の攻撃を上回避しただけのハズだったのだが、  
高度計が4000メートルを指していた。

(マジかよ……！これだけで2500メートルも上昇してやがる！なんて加速力だ！)

考えてみれば、ブラックボックス を装着した状態でもコイツはそれなりの機動性を発揮していた。

そして、今は重装甲はパージされたのだ。

その機動性はもはや ブラックボックス の比ではない。

(こんな機体、扱いきれんのか……？)

もちろん、そのための備えがないわけではない。

オレの頭に装着されているバイザーは、超高感度ハイパーセンサーだ。

これは高速戦闘用のハイパーセンサーであり、その効果を一言で言うと、

「世界がスローモーションに見える」というものだ。

正確には、ハイパーセンサーが操縦者に対して詳細な情報を送るために、

感覚が鋭敏化され、逆に世界が遅くなったように感じる、という事なのだ。

(冗談じゃねえぞ、これでスローモーションかよ……)

ハイパーセンサーに不慣れとはいえ、少しでも気を抜いたら感覚が追いつかなくなりそうだ。

地面に激突したり宇宙の果てまで飛んだりして本物の幽霊ゴーストになりたくなければ集中するしかなさそうだ。

(武装は……？)

武装一覧を呼び出す。

#### 武装一覧

- ・腕部小口径パルスレーザー機銃「ラピッドレイ」
- ・44口径特殊アサルトレールガン「メタルブレイカー」
- ・ハンドシールド

「これだけかよ！」

「ラピッドレイ」は腕部装甲に内蔵されている。

「メタルブレイカー」はオレが右手で構えている。

小型のシールドは左腕に固定されている。

つまり、これ以上武器は出てこない。

ブラックボックス の時使用した近接戦闘用ブレードは装備されていなかったらしい。

(オイオイ接近されたら終わりじゃねえか)

『警告。下方より敵機接近』

来たか。

今度は慎重にスラスタを噴射して回避機動をする。

直後、さっきまでオレがいた空間に、実弾が降り注ぐ。

センサーが上昇してくる アラクネ を捉えた。

「逃げんなクソガキイイ！」

背中「脚」からの射撃が、ゴーストエース に追いつがる。

「んなるおお！」

ハイパーセンサーから膨大な量の情報が送られてくる。

敵の射撃がスローモーションで見える。

余裕でかわせる。

同時に、腕の「ラピッドレイ」を撃つ。

ブラックボックス のものよりも細かい つまり収束率が高くなった

光軸が連射される。

アラクネ は回避行動をとるが、何発かが命中する。

ブラックボックス よりも威力が高いレーザーは、アラクネの体勢を崩すのに十分だった。

今度こそ。

「もらったああー!!」

距離を詰め、「メタルブレイカー」を両手で構える。

「フン、バカがあ！」

アラクネ がこちらを向く。

その手には、エネルギー・ワイヤーの塊が。

「同じ手にかかるでも思ったかあ！ガキがああああ！」

オレの目の前でクモの巣のような網が展開される。

「獲ったあ！」

この時、オータムは勝利を確信した。一度捕まえてしまえば、どんな高機動型でも

倒すのは楽だ。さっきは装甲のパージという形で逃げられたが、今度はそうもいくまい。

目障りな羽虫を捕まえて、蹴り殺しにしてやる。

オータムの顔が狂喜の笑みを浮かべる。

突然、<sup>ゴースト</sup>ゴーストエース が消える。

まさに<sup>ゴースト</sup>幽霊のように。

「なあ！？」

網は空を切り、そのまま失速する。

「化け物かよ、こいつ……！」

「同じ手にかかるでも思ったかよ、オバサン」

背後から声がした。

振り向いたときには、

<sup>ゴースト</sup>ゴーストエース が両手で「メタルブレイカー」を構えていた。

「こいつなら！」  
単発に設定した「メタルブレイカー」の引き金を引く。  
フレミングの左手の法則により音速の5倍にまで加速された特殊  
徹甲弾は、銃口から飛び出すと一直線に アラクネ の元に飛び、  
盾代わりに差し出されたカタールを苦もなく砕き、オータムの体に  
直撃した。

「ぐわあああああああ！！」

絶対防御のおかげで怪我はしなかったものの、その衝撃は アラ  
クネ を数十メートル吹き飛ばした。

(ここまでかチクシヨウ……！)

その時、

『オータム、 もう一つ はあきらめて撤退なさいな。 アラクネ  
を手に入れただけでも上出来よ』

スコールからか。

どの道撤退するしかない。

射撃モードの「脚」を ゴーストエース に向け、ありったけの  
弾丸をバラ撒く。

敵が怯んだ隙に、スラスターを全開にして離脱する。

「クソツ……あのガキはいつかブツ殺す……！私の顔に……よくも泥  
を塗ってくれたなあ……！」

オータムの殺意だけが、後に残された。

アラクネ が弾丸をばら撒きながら撤退する。

「逃がすか！」

こちらもスラスター全開で追撃する。

速度ならば、圧倒的にこちらが有利だ。

が、

唐突に、スラスターが噴射をやめた。

「ありゃ!?!」

スラスターのエネルギーが、底を突いていた。

(そういえば、起動した時にエネルギー残量が47パーセントとか表示されてたっけか…)

アラクネ はもう米粒よりも小さくなっていた。

取り逃がした。

あの危険な敵を。

オレやナガさんを殺そうとしたヤツを。

「チクシヨオオ!!」

夕陽の照らす大空は、悪態さえ空しく吸い込んでしまう。

「レイル、もういいぞ。降りてこーい」

それだけ言うと、永樹は携帯端末を閉じた。

アラクネ に吹き飛ばされたダメージは浅くはなく、

数日は安静とのことだった。

そんなわけで医務室のベッドで寝転がっていたのだが、

彼の仕事はまだ終わらない。

「……で、あのぼーずはどうなっちゃうワケさ？」

首を動かすと、そこには一人の女性が椅子に座っていた。

歳は二十歳ほど。ブルーのカジュアルスーツを着ていて、鮮やかな金髪が月明かりに映える美人だ。

「世界初のISを扱える男性ですからね。本当なら一躍有名人になるんでしょっけど…」

「機密扱いか」

「ええ。上層部は彼の情報を独占したいようですから」

「うえ〜ケチだなあ。ぼーずだって窮屈だろうにまったくもー…」

「私に当たらないで上層部に言ってくださいよ」

「ああスマンスマン。ただ俺としちゃあさ、折角の優秀な操縦者が機密扱いつてのが気に入らなくてさあ。」

「結局 ブラックボックス なしで戦ったんですね」

ブラックボックス は、意図的に重量を増やし、高すぎる機動性を抑え込むための装備だったのだが。

「だけれも扱いきれないから装着させてたのにね。それを捨ててもで操縦出来るんだもんビックリしたなあ」

「パイロットの血ですかね。初めてにしては大した腕じゃないですか」

「ナタルちゃんだって大した腕でしょうが。銀の福音シルハリオ・ユースベル だっけ？アレだってそうとう速いハズだよ」

「ゴーストエース には負けますよ。性能を全て引き出せば、の話ですけど。」

「で、そのためにしばらく訓練でしょ。素直に学園に入れてやりやあいいのに。コストも浮くしさ」

「心配なく。教官なら私の知り合いを当たってみますよ。それに」

彼女 ナタルが席を立つ。

「ん？」

「あなたこそ素直に『レイルには楽しく学園生活を送ってほしい』って言ったらどうですか？桐沢博士」

ナタル ナターシャ・ファイルスは、そのまま医務室から立ち去った。

「……………そうかもねえ……………」

静寂だけが、残された。

「ま、なるようになるかな」

永樹の頭の中では、退院したらやるべきことが山積みになっていた。

「……………けどさあ」

窓の外を見ると、月が見えた。



きれいな満月だ。

「ナタルちゃんの知り合いって、国家代表クラスじゃね？こりゃぼ  
ーずも大変だわ」

この日。

「世界初のISを使える男子」レイル・スカイラインの存在は、合  
衆国の機密事項となる。

## No.4 テイク・オフ(後編)(後書き)

アラクネ 戦、終了です。

オータムは原作5巻だと アラクネ を使いこなして白式を追い詰める強さがありました。今作の時点では奪ったばかりであまり使いこなせていません。

レイルがオータムを撃退できたのは、ゴーストエース の性能だけではなく、敵が本来の性能を活かしきれなかったおかげでもあります。

なので、原作5巻時点のオータムと戦ったら多分負けます。

ではまた次回：の前に、キャラやISの設定を載せる予定です。

## オリキャラ、オリES設定(前書き)

イラストがあるので、挿絵表示でご覧下さい。

## オリキャラ、オリIS設定

キャラクター

・レイル・スカイライン

> i 2 0 9 4 1 — 2 8 6 2 <

年齢：14歳（物語開始時）

出身：アメリカ、カリフォルニア州

好き：スイーツ、大空

苦手：コーヒー、同年代女子

家族構成：父

イメージCV：斎賀みつき

パイロット一族スカイライン家の嫡子。

幼いころはパイロットである父と大空に憧れていたが、白騎士事件を機に、ISの開発職に就き「男性でも使えるIS」を開発することを目指していた。

ISの基礎知識を、ほぼ独学でモノにしている。

目つきと口が悪く、不良のように誤解されがちだが、規律はしっかりとする割と真面目な性格。

エースパイロットの血か、超高機動型ISである　ゴーストエースへの適性が高い。

・桐沢 永樹

年齢：45歳

出身：日本、東京

好きなもの：航空機

嫌いなもの：事務作業

家族構成：父、母、妻、娘、息子

イメージCV：千葉繁

航空機メーカー「クリムゾン・エアクラフト」の設計エンジニア。アメリカで博士号をとっているため、桐沢博士とも呼ばれる。

レイルの父とは友人同士で、桐沢が開発した機体のテストパイロットをしたこともある。

レイルともその関係で知り合い、「ぼーず」「ナガさん」と呼び合うまでの親しい仲である。

ISの台頭により、戦闘機が旧世代になったため、ISの開発に手を染める。

IS

・ゴーストエース

> i20942 — 2862 <

操縦者：レイル・スカイライン

分類：第3世代型限界性能試験機

国籍：アメリカ合衆国

開発：クリムゾン・エアクラフト

待機状態：腕時計

固定武装：腕部パルスレーザー機銃「ラピッドレイ」×2

初期装備：44口径特殊アサルトレールガン「メタルブレイカー」  
×1

ハンドシールド×1

後付装備：「メタルブレイカー」用マガジン×4

特殊能力：????

換装装備：増加装甲「ブラックボックス」、????

拡張領域：2つ（通常はマガジン4個が量子変換されており、拡張領域を1つ分使っている。）

## 機体説明

アメリカの第3世代IS開発計画において開発された試作機。

両肩と背部のスラスタ、極限までシエイプアップされた装甲、軽量の武装といった、徹底的に機動性を追求された設計がなされている。

反面、機動性向上に不必要なものが極限まで切り捨てられた設計であるため、装甲が薄く、パワーも低い。

特に、脚部は通常のISに備わっている「歩行機構」までもが削られており、「着陸脚」程度の機能しかない。

そのため、格闘戦には不向きな機体といえる。

しかし、過剰なまでに向上させた機動性は第3世代型ISの中では群を抜いて高く、スペック上ではこの機体以上の機動性を持つ機体は第4世代型の「紅椿」のみである（ただし、燃費ではゴーストの方が優れているため、総合的な機動性では勝る）。

この機動性のため、操縦者は常時バイザー型の超高感度ハイパーセンサーを装着するが、それでもピーキーな機動性を完全に扱いきれる者は少ない。

第3世代IS開発計画時に、開発競争で「ファング・クエイク」とのトライアルを行ったが、敗北（ゴーストエースが操縦者に恵まれなかったことに対して、競合相手のファング・クエイクの操縦者が国家代表であった事が敗因のひとつと言われている）。

要はイサムが乗らないYF-19状態である。

その後も操縦者に恵まれずお蔵入りになりかけたが、レイル・スカイラインによって偶然に起動され、以来彼の専用機となる。

## 武装説明

### ラピッドレイ

両腕装甲に内蔵された小口径レーザー機銃。レーザーを断続的に放つ事ができ、高い連射性を持つ。サイズの割に出力が高く、収束率も高いため、威力はそれなりに高い。本機の主力武装である。

#### メタルブレイカー

クラウド社製51口径アサルトライフル「レッドバレット」が一次移行によって変化したレールガン。

小型で取り回しが良いが、マガジンを上部に、発射機構を後部におく構造のため、実際の銃身の長さはアサルトライフルと同程度である。

最大の特徴は、その形状から「釘」と呼ばれる、細長い特殊徹甲弾である。

電磁加速によってマッハ5で射出される「釘」は、極めて高い貫通力を持ち、「小型シールド・ピアース」と呼ばれるほどの破壊力を持つ。

銃身の上部を丸ごとマガジンにすることにより、装弾数も確保されている。

出力の調整によって、アサルトライフル程度の連射性能を持つアサルトモードと、ISを一撃で撃破することさえ可能なシングルモードを使い分けられる。

取り回しの良さ、高い破壊力、アサルトライフル並みの連射性能をあわせ持つ、本機の専用装備である。

#### ハンドシールド

高機動型の本機の特徴に合わせた、小型、軽量のシールド。

シールドの側面は刃となっており、格闘にも使用できる。

ただし、本機の格闘戦能力が低いため、あくまでも予備的な装備である。

装着してもラピッドレイの銃口を塞がないようにできており、装備時でもラピッドレイを使用可能である。



「紙装甲」と揶揄される本機の、「唯一まともな装甲」である。

ブラックボックス

あまりにも高い機動性を抑えつけ、操縦性を高めるための増加装甲。黒く、四角い外見からこのような名がついた。

全身を覆う重装甲であり、防御力が非常に高い。

ただし、パワーの低い ゴーストエース での運用のため、燃費が悪くなる。

分類上は、<sup>パッケージ</sup>換装装備の一種である。

・ワイバーン

操縦者：ユリアマリー ほか

分類：第2世代型量産機

国籍：アメリカ合衆国

開発：レゼリオン社

待機状態：不明

固定武装：腕部トンファークイックエッジ

肩部シールド ほか

初期装備：なし

後付装備：レッドバレット 等

特殊能力：なし

換装装備：不明

拡張領域：5つ

#### 機体説明

拡張性の高さが特徴の量産型。

各パーツがモジュール式になっており、状況に応じて固定装備を変更することが可能。

そのため、様々なバリエーションを持ち、新装備のテスト用として重宝されることが多い。

機体性能は平均的だが、装備の変更によって上下する。  
カラーリングはグレー。

#### 装備説明

クイックエッジ

腕アーマーに装着可能な刃付きのトンファー。

小型で扱いやすく、デフォルトで装備されることが多い。

肩部シールド

肩アーマーに装着可能な大型シールド。

取り外して手に持たせたり、腕アーマーに装着したりできる。

これを両肩に装備した防御重視のカスタムも存在する。

## オリキャラ、オリES設定（後書き）

画力が無いので、あくまでイメージとしてご覧ください；

ではまた次回！

## No.5 プラクティス・スタート

第一次世界大戦。

アメリカのパイロット、ウィル・スカイラインはこの戦争で52機を撃墜した。

彼の乗機には、とあるマーキングが施されていた。

「炎のように赤い塗料で書かれた「7」。

彼はいつしか、

フレイズ・セラン  
「炎の7と呼ばれていた。

事件の翌日、レイルは自分の家に戻っていた。

親父は……今は海外出張だったか。

サラリーマンも大変だな。

お袋は、4年ほど前に事故で他界した。

今、この家にいるのは、オレだけだった。

「はあ……」

ベッドに倒れこむ。

やっぱり自分の部屋は落ち着く。

「あー……疲れた」

昨日、エドワーズで一泊したが、やたらとベッドが固くて眠れなかった。

「機密、か……」

と勝手に昨日の出来事が思い出された。

アラクネ との戦闘後、地上に降りたオレを待っていたのは、

「レイル・スカイラインくん。あなたがISを扱える事は、ランクAの機密事項になったの」

青スーツの女性                      ナターシャ・ファイルスと名乗った

のこの言葉だった。

「ランクAがどのくらいかという」と

「家族にすら口外厳禁。口外した場合は形だけの裁判を受けて十年はムシヨ暮らし…でしたっけ」

「あら、さすがね」

「親父が空軍の少佐でしたから。それで、オレはどうなるんです？」  
「帰ったら普通の生活に戻って構わないそうよ。ただし、これから毎週日曜日はここに来てISの訓練を受けてもらうわ」

ええー…平日は学校で休日はISの訓練かよ…

「本当なら、毎日訓練に来てもらうところなのよ。ただ、あなたはまだ義務教育の途中だし、桐沢博士からの意見もあってこういう形になったの」

桐沢博士…？

ああ、ナガさんの事か。

「つて事は卒業したら毎日訓練になるんですか？」

「そうなるわね。…けどあなたもまんざらではないでしょう？」

確かに。

このまま行けば、将来はISの操縦者コースまっしぐらだ。

お役御免の戦闘機ではなく、ISで空を飛べる。

それは、夢のような話だ。

本来、男のオレはどう頑張ってもISには乗れないはずだからだ。

「…ええ。好きにしてください」

だから、そう答えた。

「じゃあ、決まりね」

にこり、とナターシャさんは笑った。

緊張を溶かすような、やわらかな微笑だった。

「この後も検査があるでしょうけど、終わったらしっかり休みなさい。あなたはテロリストを撃退したヒーローなのだから」  
そう言っただけで、ナターシャさんは立ち去った。

その後は検査とか聴取とかがあって、眠れたのは夜中の二時過ぎた時だった。

次の日曜日。

エドワーズに着くなり、ケガが完治したナガさんから腕時計を渡された。

「何です？コレ」

「ゴーストエースの待機形態だよ。どーよ、イカすでしょ」  
早速腕にはめてみる。

ピツタリとなじむ。

白い本体に、赤いラインが入った機体カラー。

しかもご丁寧に、ディスプレイにはデジタルの時刻が表示されている。

「あー、ちなみに時計機能は太陽光発電と体温発電のオマケつきね。あ、電池はいらないから」

（待機形態なのに、機能詰め込みすぎじゃねえか？）

「ISスーツも届いてるからさ。着てみてよ」

「え？」

ISスーツって、あのスク水かレオタードみたいなアレか？

あのピッチピチでムッチムチなアレを着るのか…？

このオレが？

……ハッ!?

今、すごく恐ろしい想像をしてしまった。

一刻も早く記憶から消さないと、アラクネ に殺されかけた記憶よりも深いトラウマになりかねない。

「いや、男用の特注だから。ダイバースーツに近い感じだよ」

ほっ… と、胸をなで下ろした。

いや、ホントよかった。

というわけで着替えてきた。

ほとんど黒に近いダークグレーのISスーツは、確かにダイバースーツに近い。

下は膝まで、上は肘まで覆われているのは、データ取りのためでもあるらしい。

「へえ、似合ってるじゃん。じゃ、早速起動してみてよ」

「あー、はい」

左手の腕時計を胸の前に掲げ、意識を集中させる。

「テイクオフ、ゴーストエース！」

左手から、薄い膜が広がる。

光の粒子が流線型のアーマーを構成する。  
ふわりと体が軽くなる。

各種センサーが起動し、視界が鮮明になる。

気がつけば、オレは ゴーストエース を装備して地面から10センチほど宙に浮かんでいた。

ここまでの所要時間、0.5秒。

(けっこう早いんだな、コレ)

…と、ナガさんが何やらぶるぶると震えている。

「どおしたんです？」

「ぶくく…いやだって、『テイクオフ、ゴーストエース！』って…」

「な!？」

「ぶくく…うひやはははは！やっぱダメだ！何それえ！それ何の変身シーン!?しかも変身後の決めポーズは何よ！カツコイー！うひやはははははは！」

顔から火が出る、という言葉の意味が分かった。

「な…悪りいですか！このほうが展開をイメージしやすいっつってんです！ブン殴りますよこのヤロウ！」

「ひゃひゃはははははは！ひいー…ひっひ…ISで殴らないでよせっかく完治したのにまた病院は…うひははは！ひーひっひっひい！」

あー、ものすげー殴りたいわー。

つてか殴っていいよな？

よし、死なない程度にブン殴っところ。

基地内の、少し離れた建物の応接間。

イーリス・コーリングは、窓からその光景を眺めていた。

「うわ、脳天にモロに…痛そ…」



「…?どうかしたの、イーリ」

飾り気のない応接間、そのソファアに座ったナターシャが怪訝そうな顔をする。

「いや、何でもない。ふーん、あのガキが世界初の男のIS操縦者か」

「どう?あなたに任せられる?」

「まだ何も動いてないから何とも。まあ、元気はありそうだけどさ」

「悪かったわね、ファング・クエイク のテストもあるのに呼びだしちゃって」

「いいっていいって。実践テストができると思えばな……お、飛んだぞ」

夏の太陽が、晴れやかな空に輝いていた。

一週間ぶりの空。

だが、オレにその感慨に浸る余裕はなかった。

ゴーストエース がピーキーすぎるからだ。

「だああああ! やっぱ速ええええええええええええ!!」

『気を抜くなよー、墜落すつぞおー』

空中で上昇、降下、ターン、減速……一通りの動きをやってみたが、反応が過敏すぎる。

特に、急降下なんて気を抜くと地面に激突しかねない。

スピードを抑えれば簡単なのだが、そうすると別の問題が発生する。

……つまるどころ、悪く言えば ゴーストエース は速い「だけ」なのだ。

極限まで軽量化された装甲は紙のように薄く、防御は小型のシー

ルドだけが頼り。

パワーも並以下で、接近戦には向かない。

この機体に接近戦用の武器がないのはそのためだろう。

武器を増やそうにも、拡張領域は最低限の2つのみ。

それも1つは「メタルブレイカー」用の弾倉<sup>マガジン</sup>4つを量子変換して

あるので、実質的に空いているのは1つだけ。

パッケージでも量子変換<sup>インストール</sup>してやれば、すぐに埋まってしまう。

おまけに高速機動には高出力のスラスタを酷使することになる

ため、燃費も悪い。

ナガさんいわく、「燃費は改善できるかもしれないから待ってる」

だそうだが。

要するに、この機体は動かなければメチャクチャ弱い。

よって、とにかく高速機動をマスターするしかないのだ。

はあ。

より高く飛ぶとためとはいえ、面倒だ。

(…まったく、トライアルで負けるわけだぜ！ほとんど欠陥機じゃねーか！)

ゴーストエース は第3世代開発計画のトライアルにおいて別のISと競合し、敗北してお蔵入りになりかけた機体らしい。

それを、ブラックボックス によつて無理やり重装甲型のISとして復活させようとしていたらしいが…

『そろそろ降りてきてちょーだいな。教官がお待ちだぞー』

「了解」

……教官？

地上に降り、ISを解除すると、ナガさんに加え、2人の女性が

いた。

一人はナターシャさんだった。  
もう一人のISスーツの人は…

「はじめまして、だな。国家代表イーリス・コーリングだ。今日から私がお前の教官だ」

国家代表!?

そんな人がオレの教官だって!?

「れ、レイル・スカイラインであります!よろしくお願いいたします!」

なんかものすごいバカ丁寧になってしまった。  
いやでもだつてそのあれだ国家代表だぞ。

「ハハハ、そう固くなるなよ少年。なんならイーリさんと呼んでも構わんぞ。」

「あ、はい。よろしくお願いします、イーリ教官」

「おう。私がいっしょに鍛えてやる。というわけで模擬戦だ」

「……………いきなり、ですか?」

もっとこう、基礎的な事をやるのかと…

「まずは少年、おめーの戦い方を見極めてやるからかかってこい、てことだ」

そう言うのと、イーリ教官はISを展開した。

一瞬で現われたそれは、タイガーストライプ虎縞模様のISだった。

「ほら何してる、おめーも展開しろ」

そうだった。

オレは腕時計を胸の前に掲げ

「テイクオフ、ゴースト！」

本日二回目の展開。

すぐそこでナガさんが笑いをこらえているようなので後で殴つと  
こう。

「じゃ、あつちでやるぞ」

「了解……」

イーリ教官が指差した先には、広大なモハーヴェ砂漠が広がって  
いた。

二機のISが砂漠へ消える。

それを見送った永樹は静かに口を開いた。

「……ナタルちゃんさあ」

「なんででしょうか？」

「本当に国家代表連れてきちゃってどーすんのよー！」

「その方が彼も上達するでしょう」

「上達するどころか勝負にならないだろうねありゃ」

国家代表と素人。

どちらが勝つかなど、論じるまでもない。

「それを言ったら、IS学園なんて先生が初代ブリュンヒルデです  
よ」

「……まあ、そっか。俺らも見てやらんとなあ」

「そうですね」

「ま、個人的には相手が ファング・クエイク だつてのが気に入  
らないけどね」

「あら、銀の福音相手のほうがよかつたんですか？」  
シルハリオ・ユスベル

「軍用を持ち出すな軍用を」

冗談じゃない。

永樹は、己の心血を注いだISを見送る。

「どうせなら勝ってほしいなあ。トライアルもやり直してさ」

……………まあ、無理だろうけど。

## No.5 プラクティス・スタート（後書き）

この時点で、原作開始（一夏の入学）8カ月前ぐらいです。5話使ってまだ一週間しか経っていませんが、これからは一気に数か月単位で飛ばすことがあります。

イリスと ファング・クエイク は原作の出番が少なく、詳しいこともあまり分かってないので想像で補っています。

……ヒロイン、いつ出てくるんだろう。

ハーレムラブコメの「ハ」の字もありませんね；

ではまた次回！

## No.6 スノウ・イン・ザ・ルーム

フアング・クエイク。

「アメリカ製第三世代型。」

安定性と稼働効率を重視した近接戦闘型。

これならば……………

うまくやれば勝てるかもしれない。

あっちが接近戦型ならば、距離をとればいい。

どのみち、接近戦ではこの機体に勝ち目はない。

フアング・クエイクの機動性がどの程度だかは知らないが、

ゴーストエースより上だということはないだろう。

ならば、速度差を最大限に利用して距離をとり、射撃戦に持ち込む。

どんな強力な攻撃でも、届かなければ意味はない。

距離さえ取れば、相手が国家代表とはいえ勝ち目はあるはずだ。

……………と思っていた時期が、オレにもありました。

「くそっ……！またかよ！」

肩のスラスタが被弾。

出力が低下。

(こっちはフルスピードで回避しているはずなのに……！)  
先ほどから、ただのアサルトライフルの攻撃をかわせない。

スラスタはメイっぱい噴かしているのだが、高速機動中に無理な方向転換をすれば空気抵抗で骨折する恐れがあるため、方向転換の際には速度を緩める必要がある。

(動きが読まれているのか……！クソッ！)

「ほらどーした！スピードが自慢なんだからこれぐらい避けて見せる！」

ファング・クエイク が投げナイフを投げつけてくる。

弾丸よりはるかに遅いそれを、横スライドで避ける。

が、

ファング・クエイク が瞬間加速で目の前に迫る。

その拳がオレの体に叩き込まれる。

「がはッ……！！」

シールドエネルギーが0になる。

オレの負けだ。

「どんなに速く動いたって、動きが単調じゃあ簡単に被弾しちゃうぞ」

「射撃もだ。自動照準に頼ってるからいつまでも当てられねーんだ。まあ訓練だな」

待っていたのは、イーリ教官のありがたいお言葉でした。

「ま、センスは悪くはない。これからバリバリ鍛えてやるから覚悟しろよ。OKか？」

OK、ボス。



「……ナタルちゃん、コレいつまで続くの？」

「少なくとも今年度はずつとでしょうね」

永樹から遠くの砂漠では、どうやら決着がついたようだ。

「ただ、上層部はアメリカで彼を独占したいようですから。学園にも入学させないでしょう」

世界初のISを扱える男。

彼から得られるデータには莫大な価値がある。

ならば、IS学園に入れて世界中にばらまかれるより、自分たちで独占したほうが利益になる。

それが、上層部の決定だった。

「……気に入らないねえ」

永樹はため息をもらした。

それからは、ひたすら基礎的な訓練を繰り返した。

飛行訓練。

「遅い遅い！今のターンはもっとスピードが出せたはずだ！」

「さ、更に速くかよ！」

射撃訓練。

「しっかり脇を閉めろ！照準をもっと早く！」

「は、はいい！」

基礎体力作り。

「オラオラー！あと十週！」

「ぜえ…はア…は、はひ……」

体術訓練。

「ISの操縦にはこういう技術も必要なんだ。生身でも戦車ぐらいは倒せるようにしろ」

「せ、戦車！？…りよ、りよーかい…」

「…いや、さすがに冗談だ」

模擬戦。

「殴殺される覚悟はOKか？」

「NOオオオオウ！」

ガギイイーン！

「ぐがああああああああ！…！」

オレの四ヶ月は、こうしてあっという間に過ぎて行った。

…っていつか時間経過おかしくね？

まあ、確かにこの四ヶ月間はひたすら訓練に明け暮れてて特に何もなかったけどさ。

永樹も、この四ヶ月間はひたすら研究室でキーボードをたたくに終始していた。

だが、それも今日で終わる。

「ふいー…。AFCもようやく完成かー」

椅子に座ったまま、体を伸ばす。

「お疲れ様です、主任」

研究員の一人がコーヒーを差し出してきた。

「おう、サンキュ。これではーずにも少しは楽をさせてやれるな」

「ええ、いつも頑張ってますからね。僕らも彼に応えないと」  
ああ。

自分は良い仲間に使われた。  
ここにいる研究員は皆、形は違えど大空への情熱を燃やす男たちだ。

自分がISを作ろうと言い出し、成果を上げられずにいた時でも付いてきてくれた。

コーヒーを一口すすする。  
うまい。

仕事の後のコーヒーは格別だ。

そういや、あのぼーずはコーヒー嫌いだったっけ。

苦くて飲めないとか言ってたけど、

まだまだガキだな。

そんな弛緩した空気が、

「主任！大変です！」

この一言でかき消された。

「こ、これ、今日の会議の結果だそうです…」

震える手で一枚の紙が差し出される。

A4のプリントに書かれた文を読むと、その場の全員の血の気が失せた。

内容を要約するところだった。

我がクリムゾン・エアクラフトのIS部門は、成果を十分に挙げられておらず、試作一号機　ゴーストエース　もトライアルで敗北した。

よって、これ以上の損害を防ぐため、本日をもってISの開発を中止する。

関係者の処遇は、追って知らせる。

ゴーストエース の開発中止。

目の前が真っ暗になる。

俺たちの情熱は、ここで終わるのか。

折しも、冬。

研究室にも、吹雪のような冷たさが舞い降りた。

## No.6 スノウ・イン・ザ・ルーム(後書き)

オリ主であるレイルはともかく、博士ポジションの永樹とその研究員ズも男ばかりです。今後も原作キャラやオリキャラで女性キャラがたくさん出てくるので、それ以外のところでは意識的に男キャラを増やします。

一気に4ヶ月もスルーしたのは、冬にならないと新キャラが出せないからです。

ではまた次回！

## No.7 ゲッバイ・ドクター

12月20日。

エドワーズの冬は寒い。

最近は冬休みを利用してほぼ毎日訓練に通っているが、明後日からはクリスマス休暇だ。

四ヶ月間の厳しい訓練のおかげで、今のオレは代表候補生に近いレベルにまで達しているらしい。

「今日は晴れてるな……」

レイルは真つ白な基地を見渡す。

見渡す限りの白の世界。

広い基地の中で迷子になりそうだと思っただが、四ヶ月も通っていれば全く問題ない。

ただ、雪の中を移動するには苦労する。

ISを展開して飛べれば良いのだが、ゴーストエースは一週間前からナガさんに預けてある。

何でも、メンテナンスとマイナーチェンジをするとか。

今日は割と特別な日だった。

模擬戦が控えているからだ。

それも、いつものボロ負け確定のイーリ教官との模擬戦ではなく

ゴーストエース 用に割り当てられているハンガーに入る。

当然だが、アラクネ 事件で壊されたシャッターは新しいものに取り換えられている。

と、

「なんですって!?!」

ハンガーの中では、イーリ教官とナガさんが何やら話しているようだ。

「だからあ！ ゴーストエース の開発は中止になっちゃったの！」

え？

今何て？

「ナガさん！ それどーゆーことですか！」

「おう。 おめーも聞け少年」

ナガさんとイーリ教官のもとへ駆け寄る。

やつれてるな、ナガさん。

「元々開発に乗り遅れた中でのIS開発だったんだけどね」

吐き出すように言葉を紡ぐ。

「予算も技術も無い中でようやく完成したのが試作一号機 ゴーストエース だったわけよ」

ISの開発には莫大な金がかかる。

それを自力で完成させたナガさん達の実力は、称賛に値するものなのだが。

「その ゴーストエース もトライアルで負けて以来、ずっと負け続きでさ。これ以上は予算の無駄って事だよ」

そう言いながらナガさんはイーリ教官を睨む。

トライアル相手だった ファンング・クエイク の操縦者には、少なからず遺恨があるのだろう。

そして、負け続き、と言うのにはこの訓練での模擬戦も含まれている。

要するに、

「フアング・クエイク の開発元が、どうしてアンタがウチの操縦者の教官になるのを許したのか、それが分かったよ」

突然、ナガさんが教官の胸倉をつかみ、

「こういうことかよッ！ライバルの足引っ張って、潰すつもりだったのかよ！ええ！！」

「ナガさん、やめろ！」

オレは慌ててナガさんを羽交い絞めにする。

「教官だって、そういうつもりで来たんじゃない！国家代表として、ド素人のオレを鍛えてくれたんだ！」

「ぼーず！離せよ！」

「それに、悪いのはオレだ」

ナガさんの体から、力が抜ける。

「オレがもつと強ければ。教官に負けてばかりじゃなければ、まだ結果を残せたかもしれないんだ」

「……」

「私も、すまないと思ってます」

イーリ教官だった。

「上の思惑に薄々は気づいていながら、教官として容赦せずに……」

「……」

重い沈黙が降りる。

この中の誰もが悪いのかもしれないし、誰も悪くないのかもしれない。

「でも、どうするんですか」

鉛のように重い口を開く。



「ゴーストエース はもうオレの専用機なんです」

「……」

「今開発元が潰れたら、ゴーストエース はどうなるんですか」

「そういえば」

イーリ教官が、思い出したように口を開いた。

「今日の模擬戦はどうする？」

……あ。

「何？また俺のESをいじめたいワケ？もう潰れてるのに？」

「ナガさん、そうじゃない！そうじゃなくて…代表候補生との模擬戦ですよ。この前話しましたよね」

「……ああ、アレか。冬休みでこっちに戻ってきてる代表候補生と模擬戦の約束をしたってやつか」  
そうだった。

実力差がありすぎる教官との模擬戦で負け続きのオレに、もっとレベルの近い代表候補生との模擬戦を行い、実力を試してみる、という話があった。

これはイーリ教官が持ち出した話であり、もう予定まで組んであるらしいが。

ちなみに、そのためにゴーストエース と、それに付きっきりのナガさんがいない一週間の間にオレは密かな特訓をさせられる羽目になったのだが。

「どうします？今からでも取り消しますか？」

「いや……もうこっちに向かっているそうだと。たった今、ゲートを通過したらしい」

「……………」

えー、どうすんのコレ？

「あーもういいいいよ」

「ナガさん？」

「勝手にやれ勝手に！どうせ最後なんだろうから勝手にやれ！ホラ、コイツやるから勝手にやれコンチクショウ！」

俺の手に待機状態の「ゴーストエース」を押しつけると、そのままずかずかと去ってしまった。

「ええー…ありかよ」

「まあ、そういうことだな。ホラ何ボサっとしてんだ。とっとと準備しろ」

「り…了解…」

確認しておこう。

オレは世界で唯一ISを扱える男であり、その存在は極秘とされている。

これは代表候補生相手でも例外ではなく、この模擬戦はオレの存在を秘匿しながら進めなければならない。

厳密には、「オレが男だということ」を秘密にする必要がある。

つまり、それがどういふことかと言うと

「お、似合ってんじゃん」

着替えを終えて出てきた少年　　レイルの姿に、私　　イーリス  
は思わず吹き出しそうになった。

「ええ…そりゃあどうも…」

レイルは今、ISスーツを着ている。

ただし、「彼」の姿がいつもと違うのは、ショートのコブ髪がブラシで整えられていて、特製のISスーツを着ている、ということだ。

「ホラ、練習の成果の確認だ。お前は誰だ？」

「は、はい…わ、…私は…レ、レイラ・スカイウォーカーです」

再び吹き出しそうになるが、ガマンする。

レイルに女装させる。

これが、機密を守るための策なのだが、

「いやー、イイ感じじゃねーの？よっ！カワイイぞ少年！」

レイル いや、今はレイラか は、よっほど恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俯きながらわなわなと肩を震わせている。

実際、レイルは目つきの悪さを除けば整った顔立ちをしており、少し髪をいじって化粧をしてやればそれなりに女の子に見える。

声に関しても中性的な声色だったので、すこし頑張れば十分イケる。

体系は特製のダミーEISスーツでごまかしており、腰のくびれもばっちりだ。

おまけに、…盛ってある。くぐらいに。

「教官。これ、腰がキツインですけど」

「ガマンしろ、レイラちゃん」

「くっ……！」

やべ、カワイイかも。

「っていうか何ですかスカイウォーカーって！どこのスター・オーズですか！」

「いや、スカイツながらで適当に」

「適当っすか!?!」

「ホラ、お客さんが来るから出迎えに行くぞ」

「うわあああああああああ!!!」

彼、もとい彼女には珍しく、裏返った悲鳴を上げた。

「違う、女の子なら『キヤー（はあと）』だ。分かったな」

「YES……」

あ、どうでもいいけど、レイラの「ラ」を「ア」に変えれば思いっきりスー・ウォーズのヒロインじゃん。

そんなことを言ったら、レイルに涙目で睨まれた。

午後一時。

待ち人はやってきた。

車から降りてきた少女の姿に、オレ、もとい私は息をのんだ。

男のオ…私と同じくらいの長身に、腰まで届くしっとりとした赤毛。

上は分厚い毛皮のコート、下はロングスカートという服装もあいまって、どこかの令嬢のように見える。

が、その瞳が。

そのしっとりとしたまつ毛に包まれた灰色の瞳はそれだけで宝石のような輝きがある。

オレはもはや令嬢を通り越してお姫様を連想してしまった。

その小さな唇が、わずかに開く。

「はじめまして。エリーゼ・レゼリオンと申します」

静かな、しかし芯の通った声だった。

## No.7 グッバイ・ドクター（後書き）

タイトルはマクロスFのパクリ…オマージュです。

ついにやっちゃったぜ女装！でも後悔はしていない！

それと、新キャラ登場です。詳しい話はまた次回になるでしょう。  
もちろん新ISSも出ます。

それではまた次回！

## No.8 シャル・ウィー・ダンス

ウィル・スカイラインの息子もまた、パイロットを志した。

彼もまた、やがて「炎の7」フレイズ・セブンと呼ばれるエースパイロットへと成長した。

さらにその息子も「炎の7」フレイズ・セブンの異名を持つエースパイロットとして名を上げた。

そしてその子共も……と言うように、「炎の7」フレイズ・セブンは次々と受け継がれていった。

こうして、スカイラインの一族は、自然とパイロット一族となった。

しかし、彼らは「パイロット一族だから」パイロットになったのではなかった。

「はじめまして。エリーゼ・レゼリオンと申します」

そう自己紹介した少女は、にこりと微笑んだ。  
不覚にもどきりと胸が鳴る。

私 レイラは、思わず気圧されそうになった。

隣のイーリ教官が一步前に出る。

「私は国家代表イーリス・コーリングです。そしてこっちが」

「レイラ・スカイウォーカーです。クリムゾン・エアクラフトのテストパイロットをしています」

自分でも驚くほど、すらすらと言えた。

「あら、ではあなたがわたくしの相手をしてくださるのですね。よろしく願いますね」

「こちらこそ、よろしく願います」

戦う以上、目の前の少女と対等でありたい　そんな気分が、私をここまで饒舌にさせているのかもしれない。

「それでは、演習場にご案内します。模擬戦の開始は予定通り14時からでよろしいですね」

「はい、結構です」

私たちは、廊下を歩いていった。

レゼリオンさんの周りには、ボディガードらしき四人の男が歩いていた。

おそらく、本当に令嬢なのだろう。

「スカイラインさん」

唐突に、エリーゼさんが話しかけてきた。

「はい。何でしょうか」

「失礼ですが、あなたはIS学園にはいらつしやらないのですか？」  
「私はまだ中学三年生ですから。その…レゼリオンさんは代表候補生として入学されているんですね？」

「ええ。まだ一年生ですが。それと」

「？」

歩きながら、レゼリオンさんが少し近づいてきた。

「わたくしの事は、エリーゼとお呼びください」

「はい、エリーゼさん。私の事もレイラで構いません」

「ええ。よろしく願いますね、レイラさん」

「こちらこそ」

着替えのため、いったんエリーゼさんと別れた。

私は既にダミーISスーツに着替えているのでイーリ教官と部屋で待機だ。

「相手は専用機だが、第二世代のワイバーンの改造機だ。良かったな、機体性能ではまだおめーに分があるぞ」

「相手は代表候補生ですからね。オ……私も油断するつもりはありませんよ」

応えながらISを部分展開し、データを見る。

ワイバーン。

アメリカの第二世代量産型で、固定装備を換装することによって様々な状況に対応できる機体だ。

そのため量産機らしくらぬ個性が出ることもあり、エリーゼさんの機体もおそらくその類だろう。

この機体を開発したレゼリオン社は、量産機で世界第二位のシェアを誇るらしいが……

ん？

レゼリオン？

「もしかして、エリーゼさんって……」

「ああ。レゼリオン社の社長令嬢だそうだ。ワイバーンの様々な武装も、彼女がテストしてるらしい」

道理で。

彼女、本当に令嬢だったのか。

「言つとくが実力は本物だぞ。アメリカは社長令嬢だからって代表候補生にはしないからな」

「分かってますよ」

「お、こんな時間か。そろそろ行くぞ」

「了解！」

砂漠

今は雪に埋もれた白の平原

で私とエリーゼさんは向



かい合っていた。

『双方、準備はいいか？』

オーブン・チャネルでイーリ教官の声が聞こえる。

「OKです」

「ええ。いつでも」

『では、ISを展開しろ』

「了解」

左手を胸の前に掲げ

「テイクオフ、ゴーストエース！」

「来なさい、プロミネンス・クイーン」

光に包まれ、ISを装備する。

実はこの時、オレは女装用のダミースーツを量子化し、普段のISスーツを呼び出して装着したのだ。

いや、さすがに「盛った」スーツで戦闘はしたくないし。

地面から浮かび、正面のエリーゼさんを見て　また息をのんだ。

「あ、あれのどこがワイバーンなのよ……」

よし、女子口調完璧……ってそういう場合じゃない。

いかに個性が出るワイバーンとはいえ、あの優雅な曲面に包まれたシルエットは、明らかに<sup>セカンド・シフト</sup>おかしい。

『うふふ、この子は先日第二形態移行いたしました』

「な、なんですって……！」

『この子の名前はワイバーンES第二形態「<sup>プロミネンスクイーン</sup>陽炎の女王」……』

<sup>セカンド・シフト</sup>第二形態移行。

経験を積んだISが、自身の形状や性能を大きく変化させ、より進化した状態になること。

おそらくあのISは、第二世代どころの性能ではない。

『通称、 プロミネンス・クイーン です』

プロミネンス・クイーン。

そのISは、美しかった。

いや。

それだけじゃない。

薄い赤の曲面で構成された装甲は、優雅なドレスを連想させる。

実際、腰アーマーが足元まで広がった様は、ドレスそのものだ。

だが、一番目を引くのは四つの巨大なバインダーだ。

肩と背中に二つずつ浮かぶそれは、優雅な局面で構成されてはいるが、それだけで機体を覆いかねない巨大さは、見る者に威圧感さえ与える。

あのISは、美しく、強いのだ。

戦闘能力とか、そういうレベルの話ではない。

あのISは、空を舞うだけで美しく、地に降り立つだけで強いのだ。

まさに 女王。

本気でやらないと、勝てない。

オレは、右手に「メタルブレイカー」を呼び出し、十メートルほど上昇して戦闘態勢に移る。

『ふふ、いい気迫。今日の踊りは、とても楽しめそうですね』

対して クイーン は両手を広げ、静かに待つだけだった。

その動作さえ、優雅に見える。

『では、模擬戦を開始する。三秒前』

イーリ教官の声が聞こえる。

『3』

オレは、「メタルブレイカー」のグリップを握りしめる。

『2』

彼女はただ、静かに待つ。

『1』

両者の距離は50メートルほど。

『始め!』

「はああああ!」

まずは上昇。

スラスターを噴射させ、一気に100メートルほど上昇する。

とたんに違和感を感じた。

オレの両肩に、スラスター炎が見えない。

と、ウィンドウが開き、データが表示される。

『アクティブ・イナージェル・スラスター  
A.I.S。』

空間圧作用によって生じた衝撃を推進力として噴射する推進装置。

従来のバーニア型スラスターと比較して燃費効率が35パーセント向上(当社比)』

なるほど。

従来のスラスターは、推進力以外の熱や音としてエネルギーを無駄遣いしてしまうが、空間圧作用によって推進力そのものを生み出

すA I Sはそれが無い。

これが、ナガさんが言ってた燃費向上策か。

「これならガンガン戦える！」

一気に距離を詰める。

照準を クイーン に合わせ、腕の「ラピッドレイ」を数発撃つ。

クイーン は動かない。

全段命中。

撃つたらずくに距離を離す。

いわゆる、一撃離脱だ。（ヒット・アンド・アウェイ）

が。

「そんな…傷一つないなんて…！」

無防備にレーザーを受けたはずの クイーン の装甲には、命中した痕跡すらない。

（避けられたんじゃない。確かに命中したはずだ！）

『ふふ。 プロミネンス・クイーン の装甲は分厚いですわよ』

エリーゼさんの唇がわずかに笑みを作る。

「……………！！！」

反射的に横スライドで避ける。

すぐ横を、光と共に熱波がかすめる。

（ビーム兵器…！？それも高出力の……！！）

一発だけではなかった。

続けざまに二発、三発とオレを狙ってくる。

どうやら、肩のバインダーにビーム砲が内蔵されているらしい。

「…この！」

「メタルブレイカー」を三発連続で撃つ。

彼女は動かず、バインダーで受け止める。

ガガガッ！ と全弾命中。

だが、放たれた特殊徹甲弾「釘」は、バインダーの装甲に浅く刺さっているだけだった。

（バカな……！連射モードとは言え「メタルブレイカー」の直撃を受けて……！?!）

『あら、クイーン の装甲に傷をつけるとは、やりますわね』

彼女は、指の長いマニピレーターで「釘」をたやすく引き抜くと、地面に放り投げた。

『ふふ』

プロミネンス・クイーン が静かに浮遊する。

『さあ、踊りましょう。炎のステージで』

## No.8 シャル・ウィー・ダンス(後書き)

ようやく同世代の女の子登場です。

一夏やレイルの一学年上の先輩です！

エリーゼはお嬢様キャラという点でセシリアと被りますが、セシリアが「動」だとすればエリーゼは「静」というのを意識しています。

最後のセリフ「さあ、踊りましょう。」は、

セシリアの「踊りなさい。」というセリフのオマージュであり、二人の違いが現われるように意識したものでもあります。

プロミネンス・クイーン は、最初から第二形態です。

当初は、重火器をゴテゴテに付けた ワイバーン の予定でしたが、それじゃなんかつままないな、それに優雅さがないな、と考え、このような形に。

詳しい性能については、次回以降をご覧ください。

ではまた次回！

## No.9 プロミネンス・クイーン

『さあ、踊りましょう。炎のステージで』

レイルの50メートル先で、プロミネンス・クイーンが上昇する。

オレは再び「メタルブレイカー」を構え

『あら、レディーファーストって言葉、ご存じありません？』

ゴウ！ という音と共に視界がオレンジや赤で塗りつぶされる。

(炎……！?)

咄嗟にシールドを構えたが、膨大な熱にあぶられる。

「……くっ！」

すぐにスラスター全開で後退する。

炎がやむ。

『機体ダメージは軽微。戦闘続行可能』

炎を浴びた時間は一秒もなかったハズだが、シールドがわずかに溶解している。

まともに浴びたら

『まだまだ。これで終わりではありませんよ』

「……ッ……！」

スラスター全開で離脱。

ついさっきまでオレのいた空間が紅蓮の炎に包まれる。

距離が離れているはずなのに、ここまで熱が伝わってくる。

「炎炎放射器……？」

『つぶぶ。さすがに呑み込みが早いんですね』

クイーン がその両手を広げる。  
その掌から、紅蓮の炎が噴き出し、一直線にオレに向かう。  
すぐに回避。

だが、彼女は腕を払うように動かす。  
連動して、炎も薙ぎ払われる。  
スラスター全開でも

避けきれない。

「くっ！」

シールドで受け流すようにして炎をやり過ごす。

『あら。陽炎の手をやりすごすなんて驚きですね』

言葉とは裏腹に、彼女の表情は余裕の笑みを浮かべたままだ。

一方、オレに余裕はない。

さっきの防御でシールドは半分以上が溶解していた。  
これ以上は無理そうなのでパージする。  
それに。

(スラスターの出力が落ちてる……?)

この前までの出力ならばさっきの炎もかわせたはずだ。

A I Sに変更したせいだろうか。

ともかく、これでは思うようなスピードが出せない。

A I Sのデータを見る。

『従来のバーニア型スラスターと比較して燃費効率が35パーセント向上(当社比)。ただし、最大出力が低いという課題がある』

(おいおいおいおい！ふざけんな！燃費が良くなってもスピードが落ちたら意味ねーだろが！！)

だが、さらに続きがあった。

『最大出力が低いという課題がある。そのため、A F Cとの



併用が不可欠である』

(AFC?)

首をかした刹那、すぐ隣の空間が炎で焼き尽くされる。

あまりの高熱に膨張した空気が、爆風となってオレを弄る。

とにかく距離をとり、レーザーを撃ち散らしつつ回避機動をとる。

(くそっ！AFCって何だ！？データは……！)

と思っていたら、ウィンドウが現れた。

『AFCはロックされています。解除用パスワードを入力してください』

「うおい!!!」

思わず叫んでしまう。

プライベート・チャンネルで呼び掛ける。

「ちよつと管制室！クリムゾン・エアクラフトの人はいねえんですか!?!」

ビームが足を掠め、焦げ跡を残した。

部屋の明かりはついていなかった。

ただ、モニターの光だけが桐沢永樹の顔を照らしていた。

モニターに映っているのは二機のISの模擬戦だ。

その片方は、彼が心血を注いだISだ。

情熱を燃やす男たちと共に技術の粋を集めて開発したIS。

最高の機動性を持ちながら、乗り手に恵まれずにお蔵入りになりかけたIS。

そして「彼」によってついに大空に飛び立ったIS。

けれど、もう終わりだろう。

アフターサービスのなくなったISは、朽ちるのを待つだけだ。あのぼーずは新しいISに乗り換えなければならないだろう。

悪いな、ぼーず。

俺は、最後まで付き合えそうにない

ガチャッ

「主任」

研究員の一人が部屋に入ってきた。

確か、大空に情熱を燃やす開発陣の中でも、ひととき情熱を燃やしていたヤツだ。

「カギをかけておいたはずだよ」

「管理室に行けばマスターキーぐらいもらえますよ」  
「つかつかと部屋の中に入ってくる。」

やめてくれ。

「AFCの起動パスワード、知っているのは主任だけでしょう。教えてください」

一人にしてくれよ。

「アレが無いと、本来の機動性が発揮できない！あなただって…あなただからこそ分かるでしょう！」

「別にいいだろうが。勝っても負けても、ゴーストエースに未来なんてない」

「何言ってます！彼が…レイルが負けそうなんですよ！」

「アイツは別に…唯一のISを使える男なんだ。負けようが何しようがすぐに代わりのISが贈られるだろうさ」

勝っても負けても未来のない俺たちとは違う。

「もう行ってくれ。一人にしてくれないか」

湯気が上っていた。

雪が解けたせいだ。

プロミネンス・クイーン を中心に、半径十メートルほどの雪が解け、水蒸気と化しているのだ。

クイーン が更に炎を噴く。

炎は回避できたが、突然、巨大な爆発が起こる。

湯気が水蒸気爆発を起こしたのだ。

オレは爆風に吞まれて吹き飛ばされた。

「があッ！」

地面に叩きつけられる。

更に炎が上から迫る。

「くっ…！」

叩きつけられた炎が、周りの雪を瞬時に莫大な水蒸気に変える。

スラスター全開で離れるが、左手が焼かれた。

オレの手は絶対防御のおかげで無傷だが、ゴーストエースのマニピレーターはドロドロに溶け、レーザーも使えなくなっていた。

左腕のアーマーを解除する。

自分の左手で、「メタルブレイカー」のマガジンを交換する。

これで最後のマガジンだった。

撃てるのはあと十発。

どういうワケか、ラピッドレイのレーザーが全く通じないので、この十発だけが彼女に通じる攻撃手段だ。

それも、最大出力で撃たないと通じないだろう。

連射モードで撃った弾は、クイーン の装甲に刺さる程度しか

効果が無かった。

だが、単発<sup>シングル</sup>で撃つても所詮は一発。

これだけでは超重装甲の クイーン を倒せる程のダメージは期待できない。

(どうするッ……?)

『あら。もう終わりですか？もう少し楽しんで踊りたかったのですが……』

エリーゼさんが迫る。

その拳動に、一切の揺らぎはない。

その手が、静かに、そして優雅に広げられる。

ガッ！と襟首を掴まれた。

「いい加減にしてください！そんなことで、彼が喜ぶとも思ってるんですかッ！！」

「勝とうが負けようが、あいつには関係ない。……どうせ、ゴー

ストエース はもうお終いなんだよ」

「私はッ！！」

これまで聞いた中でも、一番強い口調だった。

「私達はあきらめませんよ！会社から見放されようが！どっかの町工場で開発を続けてやりますよ！」

「……………」

「だから、そんなに簡単に諦めないでください。私達の夢を。一番情熱があったのは、あなたのハズじゃないですか」

その肩が震えていた。

手が離される。

「彼だって、ゴーストエース で飛びたいはずでしょう……他でもない、あなたが開発した機体で……」

モニターを見る。

レイルが飛んでいた。

だが、苦しんでいる。

羽の抜けた翼で、それでも羽ばたいて。

俺はどうだ。

羽を差られたぐらいで飛ぶのをあきらめるのか？

周りの鳥達は諦めてないのに？

「確認するぞ。AFCのパスワードだったな」

「……え？」

「AFCのパスワードだよなって言っただよ！どうなんだ？」

「あ、ハイ！私が伝えておきます！」

「いや」

ネクタイを締め直す。

「これは俺の仕事だ。俺がやらなきゃならないんだよ」

まずは、管制室に向かおう。

炎が迫る。

クイーン の両手が振るわれるたび、空が燃える。

こいつの火力は異常だ。

攻撃範囲、破壊力ともにトップクラスだ。

おそらく大規模殲滅戦用の兵器なのだろう。

それに、あの装甲。

レーザーが一切通じない重装甲を破るには、近距離から最大出力で「メタルブレイカー」を撃ちこむしかないだろう。

だが、接近すればするほど、炎の攻撃範囲も広くなり、近づけな

い。

「それでも！」

スラスタ噴射で一気に距離を詰め、「メタルブレイカー」を構える。

「その闘志は素敵ですが、この プロミネンス・クイーン に近づくのはやめておいた方がいいですよ」

火炎放射がワイドレンジで放たれる。

炎でエリーゼさんが見えなくなる。

まるで炎の壁だ。

これではいくらスピードがあっても近づけないだろう。

「だとしても！」

炎の壁に向けて、最大出力で「メタルブレイカー」を撃ち込む。

ガキン！ と音がした。

「な……」

「やったか!？」

炎が消える。

クイーン は健在だった。

だが、バインダーの一つに命中したらしく、装甲が吹き飛んでいった。

狙いが甘かったが、直撃させれば勝機はある。

「レディの服を破くなんて。そういう殿方は嫌われますよ」

炎が薙ぎ払われる。

上昇して避けるが、右足の先が溶けていた。

シールドエネルギーが削られる。

「そろそろファイナレでしょうか。あなたには、特別に盛大な最後ファイナレをさしあげましょう」

クイーン の四つのバインダーがゆらりと広がる。

そのバインダーから、薄い赤のガスのようなものが噴き出した。

「これは……!?」

『気化させたIS用エネルギーですよ』

一旦距離を取ろうとするが、赤いガスに包まれる。

ガスは、みるみるうちに半径100メートルほどにまで膨れ上がる。

『つまりは、陽炎コロナハンドの手の燃料です』

ぞわり、と悪寒が走る。

自分が今、火炎放射の燃料に包まれているとしたら。

回避はできない。

全速力を出してもガスからは抜け出せないだろう。

だがおかしい。

それではエリーゼさん自身も巻き込まれるはずだ。

いくら重装甲とはいえ、あの炎を浴びればただでは済まない。

まさか

『レイラさん。あなたとの試合、とても楽しいものでしたよ』

エリーゼさんがその手を構える。

これで終わる。

負けるのか、オレは。

『聞こえるか！ぼーず！』

この声は……！！

「ナガさん！」

『いいかよく聞け！AFCのパスワードは』

瞬間、世界が炎に包まれた。

クイーンを中心として、半径200メートルが三千度の炎に

包まれた。



## No.9 プロミネンス・クイーン（後書き）

というワケで、プロミネンス・クイーン の武器は、火炎放射です。

まあ、ミステリアス・レイディの武器が水なので、こういうのもアリなんじゃないかな、と思いつつ書いてます。

ほとんど欠陥機の ゴーストエース とは違い、鉄壁の防御力、広い攻撃範囲、高い火力、という風に、かなりチートな機体です。唯一の弱点は機動性ですが、装甲が厚いので大して問題にならない。機動性のみの特化した ゴーストエース とは対極の性能です。

原作7巻がもう発売しているみたいですね。

ではまた次回！

## No.10 フライ・ハイ

エリーゼはその光景に酔いしれていた。

全てが炎に包まれた世界。

「ふふ…やはり壮観ですわね。ワールドオブバーン 陽炎の世界は。」

彼女自身炎に包まれているが、ダメージは一切ない。

サンライト・イーター。

自身に触れたエネルギー質の攻撃を全て吸収し、自らのエネルギーとして再利用する能力。

これが、セカンド・シフト 第二形態移行で発現した プロミネンス・クイーン の ワンオフ・アビリティ 単一能力だった。

（おかげで自らの炎に焼かれなくて済みますし、ビーム兵器も無効化できます。我ながら便利な力を持ちましたね）

炎が鎮まる。

湯気が立ち上っているのは、大量の雪を蒸発させたせいだろう。

おかげで視界が悪い。

（レイラさん、大丈夫でしょうか。絶対防御があるので心配ないとは思いますが…）

「うう……死ぬかと思った」

レイラの声がした。

湯気が晴れる。

そこには。

いまだに健在な ゴーストエース が浮遊していた。

「え……な、何故陽炎の世界を受けて……」  
ありえない。

この模擬戦では初めてのことだが、彼女は心底動揺した。

ギリギリで間に合った。

レイルは未だに健在な自分の姿に、ふう、と息をついた。

アクティブ・フルイド・コントローラー  
AFC。

ドイツで実用化されているAICと原理は同じだが、こちらは機体周囲の空間に作用することによって、周りの流体を制御する。

アクティブ・イナーシャル・スラスター  
AISの開発途中で生み出された副産物だが、今回は思わぬ形で役に立った。

何のことはない。

炎に包まれる直前に発動したAFCは、機体周囲の空気を全て押し分け、炎と機体の間に真空の空間を作り出し、シャットアウトしたのだ。

「しかしホント、悪趣味ですね。パスワードが『FUCK YOUくたばれ』」

CRIMSON AIR クリムゾン・エアクラフト CRAFT『だなんて』

『へへ、今の俺の気持よキモチ』

「じゃ、終わったら再就職先でも一緒に探しましょうか！」  
一気に上昇する。

AFCが空気の流れを制御し、結果として空気抵抗がゼロになる。当然、その分スピードは段違いだ。

これだ。

このスピード。

ようやくゴーストエースらしくなってきた。



オレは、「メタルブレイカー」を右手だけで構える。  
(そうだ。コイツが…ゴーストエースが…！)  
素早く燃料タンクに照準を合わせる。

「オレ達の、翼だああああ！！」

発砲。

最大出力で放たれた「釘」が正確に燃料タンクを貫くのを待たず、そのまま最大加速で離脱する。

直後に、燃料タンクが爆発した。

よほど容量が大きかったのか、全速離脱中のオレにまで爆風が伝わってくる。

プロミネンス・クイーン が爆発に呑み込まれる。

「サンライト・イーター」では熱によるダメージは防げて、爆風によるダメージは防げなかった。

絶対防御が作動し、エリーゼを守る。

シールドエネルギーが一気に減り

爆発が収まった時には、ゼロになっていた。

『試合終了！ 勝者、……レイル・スカイライン！！』

イーリ教官の声が、模擬戦を締めくくった。

ISを解除されたエリーゼは、砂漠の中に座り込んでいた。

辺りには、残留した炎がちろちろと燃えていた。

「負けたのですね……わたくしは……」

悔しさは無かった。

むしろ、あのまま勝っていた方がまだ気分が悪かっただろう。

だが、最後に ゴーストエース は全力を出すに値する相手になつてくれた。

そして全力を出して負けたのだ。  
むしろ清々しい。

と、

満身創痍の ゴーストエース が近づいてきた。

「大丈夫でしたか？爆発を起こした私が言うのもなんですけど……」  
レイラさんが右手を差し出す。

私はその手を取り、立ち上がる。

「ご心配なく。わたくしも プロミネンス・クイーン もヤワでは  
ありませんよ」

「そうでしたね」

レイラさんが微笑む。

私もつられて笑う。

「ところで……」

私は少し意地悪をする気になった。

「何ですか？」

「よろしければ、ISで基地まで運んでくださいませんか？」

「え？ええ。では、失礼しますね」

そう言うと、レイラさんはISの右手と自分の左手で私を抱え上げた。

いわゆる、「お姫様だっこ」である。

そのまま、ゆっくりと砂漠をホバリングする。

風が、心地よかった。

そろそろ、良いだろうか。

「ふふっ」

「どうしたんですか？エリーゼさん」

「お姫様だっこの正しい構図ですね」

「え？」

「殿方が女性を抱えているのですから。正しい構図でしょう?」

とたんに、「彼」の様子慌ただしくなる。

「な、ななな、何言ってるんですか!オ…私は…」

「まさかとは思いましたが、あれだけ殿方らしい言動をされれば、誰だって気付きますよ」

「ぐうつ!」

「特に、最後の時なんて『オレ達の、翼だー』なんておっしゃるんですもの」

「……………いやー、オ、わた、私、戦闘中はボーイッシュなんですよー……………」

「なら、後で着替えを一緒にしません?女同士なら平気でしょう?」

「ぐあッ!」

うるたえている辺り、やはりそうなのだろう。

「うふふ。大丈夫ですよ。私、口は固い方ですから」

「……………ぐ。そうしていただけると、助かります」

どうやら認めたとようだ。

「それにしても、あなたは何故ISに乗れるのですか?」

「…オレにも分かりません。コイツに乗ることになったのも、偶然ですし」

「そうですか。それにしても…」

「?」

「あなた、女装しない方がかわいいですわね」

「んな!?!」

目はバイザーに隠れて見えないが、顔が赤くなっているのが分かる。

「ふ、普通カツコイイって言うもんでしょうが!か、カワイイなんて言われても嬉しくないですよ!」

「ふふ、半分冗談ですよ」

だって、戦っているあなたは、とてもかつこよかったから。

「半分は本気なんですか！？と、とにかく！オレの事は秘密に……！」

あ、強引に話切り替えましたね。

まあ、いいでしょう。

「秘密にはしますけど……私以外気付いてない、なんて保証はありませんよ」

「……………」

彼の顔色が、目に見えて悪くなった。

「アホかおまえは！」

「ごがつ!？」

基地に戻るなり、ナガさんとイーリ教官のダブルでゲンコツを食らった。

脳天が痛いです。

まだISを展開したままなのに！

どうなっただ絶対防御！

「どーすんだよぼーず！あちらさんに完つつつつ壁にバレたぞ！」

「まったく。調子に乗って『オレ』とか言うから、私たちでもフォ

ローのしようがねーだろうが！」

二人の後ろでは、こちらに猜疑の視線を向けるエリーゼさんのボディガードの方々が。

抱えていたエリーゼさんを降ろす。

「め、面目ないです……………」

一応言っておくが、オレの事は機密ランクAの極秘事項だったりする。

「まあ、良いではありませんか」

エリーゼさんだった。

「彼が例え女性でも、私が負けた事には変わりありません。私たち



も、このことは秘密にいたしましょう」

「ありがとう！エリーゼさん！この状況でフォローしてくれてるのはあなただけです！」

「しかし、秘密にするって機密事項だからな。関係者以外にバレたら監視がつくぞ」

「ホントごめんなさいオレのせいです」

「関係者とは？」

エリーゼさんが問う。

「んーと、軍上層部はいいとして、このバカの教官とかISの開発関係者だな」

「なら、私たちが関係者になれば良いのです」

「え？」

「なに！？」

「はい？」

三者三様の声が出る。

だが、エリーゼさんはあくまで堂々と、気品を持って、

「聞くところによりますと、あなたがたのISは、研究・開発ができませんか？」

「え、まあ。そーだねえ。会社にダメって言われちゃったし」

「ならば、ぜひレゼリオン社にお越しく下さい。設備も資金もはずみますよ」

「ええ！？そんな、いいんすかあ！？」

ナガさんがものすごく驚いている。

「我がレゼリオン社は量産機で世界二位のシェアがあるものの、第三世代機の開発に遅れています」

そうだったのか。

そう言えば、レゼリオン社の最新鋭機というのは聞かない。

クイーン だって量産機が変化しただけだ。

「しかし、あなた方に来ていただければ、第三世代機ごと優秀なスタッフが手に入ります」

なるほど。

怪しさ満点の無償の善意ではなく、ギブアンドテイクというワケか。

「ふふん、なるほどねえ。おい！お前らはどうだ？」

ナガさんは後ろの研究員ズに問いかける。

「私はいと思いますけど」

「さんせい！」

「ま、開発できるならどこでも…」

「うっひょー！感謝します！」

大賛成だった。

「じゃ、決まりだな」

ナガさんはエリーゼさんに向き合い、

「俺達の再就職先、よろしくお願いします！！」

深く頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくお願いしますね。あなた方なら、お父様も大歓迎ですよ」

「ナガさん、良かったじゃないですか」

「ぼーずもな。これからも ゴーストエース で飛べるようになってんだしな」

「そうでしたね。エリーゼさん！オレからも…お願いします！」  
頭を下げる。

「ええ。もちろんですよ」

彼女は、聖女のように微笑んだ。

くらり、とその笑顔に吸い込まれそうになる。

「あー、そういえば少年」

イーリ教官が水を差した。

「なんですか？」

「おまえ、いつまでIS付けてんだ？」

「あ、そうでしたね。解除します」

ゴーストエース が粒子になって解除される。  
解除完了。

…と、なんかナガさんが「うつ」て感じの顔をしている。

なんだ？と首をかしげつつ、エリーゼさんを見ると、微笑んでいたはずの顔が、若干引きつっている。

「ん？どうしたんですか？」

後ろの方の研究員ズやボディガードの方々も、なんかオレから半歩引いているように見える。

ようやく、ナガさんが口を開いた。

「オマエ……その格好……」

言われて気付く。

そもそもオレは、女性としてこの模擬戦に臨んだのだった。

そのために特製のダミーISスーツを着て、ISの装備時に本物のスーツとすり替えたのだが

それを、解除するとどうなるか。

つまりここに、女装した変態がいた。

「ちょ……こ、これは、男だとはれないように……」

「ぼーず、オマエ、意外に似合ってたんじゃないかね？」

「嬉しくないですよ！」

「あなた……そういうご趣味をお持ちなのですか？」

「エリーゼさんまで！うわああ！そんな目で半歩引かないで！」

「お嬢様に近づくなこの変態！」

「ボディガードの皆さんまで！教官もなんとか言ってください！」

「ぷくくく……ふふ……」

「イーリ教官？」

「あー、そうだったなー。おまえが女装してたのすっかり忘れてたー（棒読み）」

「ちよっ……！確信犯かアンタ！あと、ボディガードの皆さんが懐から拳銃を抜いてるんですけど！」

「おめーの今日の訓練は、その人たちから逃げ切ることだな、それじゃー」

「ふざけんなああああああああああああああああああああ！！！！」

「お嬢様を守るぞ！」

「この変態があ！死ねえ！」

「お、オレにはレイルって名前があんだよ！変態って言うな！」

「がんばってくださいね、レイラさん」

「全然わかってないよこの人！」

全力で砂漠（雪原）を走る。

「コラ変態！待てえええ！」

「誰が待つかああああああああああああ！！」

数分後、少年の悲鳴が冬空に響いた。

もっとも、女装した変態の悲鳴だったが。

## No.10 フライ・ハイ（後書き）

お、オレは…とんでもない変態を主人公にしてしまった。

今回はオリIS2機の新能力が出てきました。

特に、プロミネンス・クイーン は第2形態なので  
ワンオフ・アビリティを持っています。

エリーゼさんは学園でも先輩として登場する予定です。

まあ、レイルの入学はまだ先になるでしょうが。

エリーゼさんの登場で、年上と野郎だらけの本作も少しは  
華やかにできました。

では、また次回！近いうちにエリーゼさんや クイーン の  
設定も上げる予定です。

No.11 メイド・イン・ジャパン

春。

オレの目は、テレビにくぎ付けになっていた。

「世界初、ISを扱える男子が現れた」

どのチャンネルも、同じ内容のニュースを流していた。

最初は、まさかオレの事がバレたか！？  
などと焦ったが、実際は違った。

イチカ・オリムラ。

発見されたそいつは、ジャパニーズ日本人だった。

漢字で書くと、織斑一夏、だったか。

なんでも、IS学園入試の試験会場でISを起動させてしまったらしい。

……っていうか、なぜ男がIS学園の入試会場に？

まあともかく。

オレは機密扱いになったが、彼はそうもいかなかったのだろう。

ま、当然彼はIS学園に入学することになるだろうな。

オレはと言うと

「……つまりさ、『えー、今更公表しちゃったら今まで隠してたみた

いじゃん！そしたら国際社会から非難されちゃうじゃん！だったらこのまま隠しとこうぜ！』ってことらしいよ」

「分かりやすい説明台詞をありがとございます、ナガさん」

オレはと言うと、相変わらずエドワーズで訓練に明け暮れている。ハイスクールへの進学はせず、中卒のIS操縦者としての生活を送っている。

IS学園への入学が許可されなかったのは、ナガさんが要約した上層部の保身に走った思惑のおかげだ。

クソツタレな上層部の思惑が絡むのは嫌だが、正直学校ってのは苦手だ。

中学時代は、放課後に一緒に遊ぶような友達は一人もいなかった。これは、ISの勉強や訓練に明け暮れていたから、オレ自身の性格が割と攻撃的だったから、っただけじゃない。

オレ自身が、クラスに溶け込もうとしなかったからだ。できなかつたのではなく、やらなかつた。

それでもクラスメイトと一緒に過ごさなければならぬ、というのは正直疲れた。

増してやIS学園は99・99パーセント女子校だ。

そんなところにいたら、疲れるどころではないだろう。

ならば、毎日飛び続けるのも悪くない。

そんなワケで、オレは現在の状況を甘受していた。

そんなこんなで、いつの間にか五月。



「かあ〜〜！着いた着いた！」

空港から出るなり、ナガさんが盛大に伸びをする。

「久しぶりだなー、トウキョウも」

オレとナガさんは、日本の東京に来ていた。

観光ではない。

仕事だ。

「えーと、レイルは何年ぶりだっけ？」

「小学四年の終わりでしたから……あー、六年ぶり、ってところですかね」

オレは、小学二年生から四年生までの三年間は神奈川で過ごした。もっとも、東京には数えるぐらいしか行っていないが。

「そう言うナガさんは？」

「オレは年末年始は浅草の実家で家族ですごすからねー。東京にはちよくちよく来てるよ」

そもそもナガさんは日本人だったか。

大学時代にアメリカに留学し、そこで知り合った彼女　今の奥さん　と暮らすためにアメリカ国籍取ったんだっけ。

「ま、お互いニッポンゴができるってことで。行きますか」

とはいえ、小学四年生までの日本語なので、正直自信ないところもあるが。

目的地までは、地下鉄で行こう。

倉持技研。

日本のIS開発企業であり、あのイチカ・オリムラの専用機の開発室でもある。

そう。

それが重要だった。

「久しぶりだな桐沢！そしてはじめましてだなスカイライン君！」  
玄関で、いきなりテンションの高い白衣のおじさんに出迎えられるた。

「三棚みたなか！久しぶりだな同窓会以来だっけ？」

ナガさんの知り合いなのだろうか。

「こちらは、白式 開発室の三棚。大学時代の同期だよ」

「レイルです。よろしくお願いします」

ビヤクシキ というのがオリムラの専用機か。

後で聞いたことだが、漢字で書くと 白式らしい。

これでビヤクシキって読むのか。

やはり日本語は難しい。

それはともかく。

「さあ、案内しよう」

オレ達が案内されたのは、応接間らしき狭い部屋だった。

日本の、ましてや東京の土地は狭い。

この部屋は、むしろ広い方なのだろう。

ソファアに座ると、オレが外国人なのを気遣ってか、コーヒーが差し出された。

実はオレ、コーヒー苦手なんだよね。

理由は、苦いから。

日本のグリーンティーの方が好みだ。

「桐沢。おまえクリムゾン辞めてレゼリオンに鞍替えしたのか？」

「まあね。それなりに待遇はいいし、設備も整っているからね。三棚は大丈夫なの？」

「おれはおれで忙しいぞ。この間まで、依頼された専用機の開発をしていたのだが、途中で 白式 の面倒を見ることになってな。今では 白式 に付きつきりだ」

やはり、オリムラの影響は大きい、ということか。

「そりゃー大変だなあ。今夜は久しぶりに飲もうと思ってたのに、無理そうだなあ」

「いや、せつかくおまえが来たんだ。今夜は付き合おう」

なんか二人が同期生トークを始めてしまったので、オレは蚊帳の外だ。

「さて、本題だが」

三棚さんがコーヒークップを置き、語り始める。

「おー。約束のブツは？」

今回の目的は、一種の取引だ。

「ああ。これが 白式 の稼働データだ。お前の方は？」

「はいよ。ゴーストエース の稼働データ。」

お互いにデータディスクを交換する。

倉持技研とレゼリオン社（ゴーストエース 開発部門）には、一つの共通点がある。

双方ともに、男性の操縦者を擁する、ということだ。

よって、お互いにまだ少ない男性操縦者のデータを持っているのだが、今回はそれを共有しよう、という話だった。

オレの事は機密のはずなのだが、企業間ではこういう取引が行われていると言うのか。

ナガさん曰く、

「ま、上層部も一枚岩じゃないからね。今回の取引は割と良心的なお偉いさんが許可したものだよ」

との事だったが。

「じゃ、確認も兼ねて分析してみようよ」

「ああ。第二研究室が空いてるな。そこに行こう」

良心的であれ保身的であれ、お偉いさんに振り回されるのはウンザリする。

空軍のパイロットとは独立独歩を良しとする風通しのよいものでなければならぬのに。

もやもやした気分を、四個の角砂糖を入れたコーヒーで飲み干した。

「……ほう。織斑君とはまた違ったフラグメントマップだな。やはり経験が多いと複雑になるものだな」

「その織斑君だけどさ。経験が少ないにしては、ずいぶん複雑なマップみたいだけど？」

ナガさんと三棚さんがモニターと睨めっこして話し込んでいる。

「けどさあ、そっちの白式って織斑君が乗るまで動かなかったんでしょ」

「ああ。だが、ゴーストエースは普通に動いていたのだろう？」

「まあね。でも、今思うとそうでもないかもしれないね」

え？

「ナガさん、それどういうことですか？リミッター付けてたとは言え、動いていたでしょ？」

思わず割って入ってしまった。

けど、確かにエア・シヨアの時は、ブラックボックスの状態とはいえ、飛行していたはずだ。

「だからさ、なんでリミッター付けないとダメだったのよ」  
「…？なんでって、機動性が高すぎて扱いきれないからでしょ？」  
「けどよ、考えてもみなよ。前の操縦者だってそれなりに腕は良かったはずだよ。彼女がダメで、素人のぼーずがいいなんておかしいでしょ？」  
「…む」

確かに。

オレも「エースパイロットの血が流れているから」なんて都合のいいことを考えていたが…

「あくまで仮説だけだよ」  
そう前置きして、ナガさんは続けた。

「ゴーストエースは確かに扱いづらいけど、本来は操縦者が頑張れば扱いきれるんだよ」

素人のオレが、たかだか数カ月で扱いきれたように。

「ところが、実際にはいくらやっても扱いきれなかった。なんでだ？」

「…桐沢。まさか、ゴーストエースが操縦者に、その…『いやがらせ』をしていたって事か？」

「おそらくね。例えば、スピードメーターでは時速40キロって表示されているのに実際には60キロで走ってる、て感じにね」

だとすれば、

「じゃあ、オレだけが『いやがらせ』を受けなかったって事ですか？どうしてオレだけ…」

「そこまで知ってたら俺も三棚も苦労しないでしょうが」

まあ、それもそうか。

「ただ一つ言えるのは、ゴーストエースは自分の操縦者として

「ぼーずを選んだ、ってことかな」

「ゴーストエース がオレを……」  
思わず、腕時計を見る。

なぜオレなんだろう？という疑問もあるが、嬉しさもある。

自分の愛機に認められた、と言つのはパイロット冥利に尽きる。

そんな気分浸っていた時。

イーリ教官からプライベート・チャンネルで通信が入った。

『あーもしもし、未確認のISがそっちに向かっているから迎撃しろ』

………はい？

まず、落ちつこう。

「教官。詳細な説明を要求します」

『あー、悪い悪い。アラスカの方で未確認のISが発見されてな。追撃部隊を振り切ってそっちの方に向かっている』

「未確認機？けど、コア・ネットワークを見れば分かるんじゃないですか？」

コア・ネットワークとは、読んで字のごとく、ISのコアが形成する情報ネットワークだ。

これをたどれば、そいつの所属ぐらいは分かるはずだ。

『分からなかった』

「え？」

『おそらく、コア・ネットワークを切断しているのだろう。今、データを送る』

腕を部分展開し、空中投影ディスプレイを表示。

「なんです？ずいぶん不格好ですね」

ディスプレイに映っていた写真には、一機のISが映っていた。  
黒いボディ。

異様に長い腕。

背中には 増設ブースターだろうか？

だが、何よりも異質なのは、

「フル・スキム  
全身装甲？」

『よっぽど操縦者の正体を知られたくないのだろうな。衛星リンクで探知できるはずだ。およそ一時間後にそちらの海域に着く』

データを見ると、確かにこちらの方向に向かっている。

「けど、仮にもアメリカ所属のオレが、日本で暴れて大丈夫なんですか？」

『アメリカで発見された獲物だからな。多少無理言えば何とかなるし、そこはメンツをつぶされたくないお偉いさんが上手くやるさ』  
なるほど。

あのクソツタレどもも、こういうときは役に立つ、というワケか。

「了解しました。所属不明機の迎撃のため、直ちに出発します」

『おう。気をつけるよ。相手はアラスカのISの追撃を振り切るほどの実力がある。あまり無理はするなよ』

「了解」

通信を切る。

ナガさんに事情を説明すると、オレは外に駆け出した。

まずは、人目に付かない場所を探そう。

一時間後。

陸地から数十キロ離れた海。

オレは ゴーストエース を展開して海の底に潜んでいた。  
仕方がない。

時間まで標的を待ち伏せするには、ここが一番だった。

こんなときでもAFCが大活躍しており、海中の酸素を取り出してくれている。

おかげで、一時間近くも海底ですつと待つことができた。

「……………来たか」

衛星リンクによって、こちらに近づく光点がレーザーに映る。

予想よりも速度が速い。

そろそろか。

「行くぞ！ ゴーストエース！」

スラスタ噴射で一気に海面まで上昇する。

空間作用推進機のAISは水中でも地上と同等の推力を発揮し、AFCの流体操作は水の抵抗をゼロにする。

（コイツホントは水中用なんじゃね？）

一気に海面から飛び出す。

そのまま水面から8000メートルの高度まで上昇。

「……………いた！」

200メートル先、拡大画面には全身装甲のAISが飛行していた。

視界に、あのISの識別名「Unknown-1」と表示される。

未確認機ではアレなので、便宜上「フルスキン」と設定しておく。

フルスキン もこちらを補足したのか、その軌道が変わる。

そして、フルスキン が右手を構え

ゴウ！と大出力のビームが迫る。

（野郎！いきなりぶっ放してきやがった！）

回避しつつ、「ラピッドレイ」を撃ち散らす。

だが、フルスキン は見かけによらず機動性が高いようで、全弾回避された。

（いいぜ。いきなり撃ってきたんだからな、テメエも警告なしでぶ



っ飛ばす！)

極太ビームと連射レーザーの応酬が続く。

あのビームは威力が高い分連射が効かない様だが、薙ぎ払うように撃ってくる事もあり、回避は簡単ではない。

そして、あの機動性。

よく見ると、全身にスラスターが付いており、巨体に見合わぬ速さで動いている。

(でも、オレのほうが速い！)

「メタルブレイカー」を呼び出し、右手で構える。

同時に加速し、ビームを回避しつつ左腕のラピッドレイで牽制。

フルスキン の動きが一瞬止まる。

「もらった！」

すれ違いざま

「メタルブレイカー」を単発で撃ちこむ。

背中のブースターを撃ちぬき、衝撃波と高熱の破壊の嵐を撒き散らす。

フルスキン が背中のブースターを切り離す。

すぐに距離を離し、敵を見る。

(…よし！もう一発！)

再加速し、今度は頭部に直撃させた。

さすがに絶対防御が働いたのか、外見上の破損は無かった。

(よし、いいぞ…)

この調子でヒット&アウェイを繰り返していけば、ISを強制解除させて搭乗者を捕まえることも可能だろう。

アメリカに喧嘩売ったこと、後悔させてやる。

さらに再接近

突然のアラームに、急停止した。

「な……！上か！」

ISのセンサーで知覚できたそれは、数十発のミサイルだった。方位からして、フルスキンが撃ったものではない。一体誰が。

「くっ……！」  
後退しながら回避。

追尾性なのか、オレをめぐらせて軌道修正をかけてくる。

ゴーストエースの踵が開き、熱を持ったエネルギー小球が数発放出される。

いわゆる、フレアディスプレイだ。

ゴーストエースのそれは、熱源としてだけではなく、小球の一つ一つが膜状に展開する「壁」としての機能も持つ。

大部分のミサイルが「壁」にぶつかり、巨大な爆発を撒き散らす。それでも十数発がしつこく追いかけてくるが、「ラピッドレイ」の連射で撃墜する。

最後の一つを急加速で振り切る。

（撃ってきたヤツは……？）

レーダー、全方位視界を探しても何一つ反応はない。

ISの探知から逃れるほどの強力なステルス能力があるのか。

待てよ。

何一つ反応がない？

（……クソッ！）

ミサイルに気を取られているうちに、フルスキンを逃してしまった。

レーダーの効果範囲から逃げられたのだ。

（衛星リンクは……？）

数秒で衛星から情報が送られてくる。  
いた。

フルスキンは海から陸を目指して飛んでいる。

あれ？

オレが狙われていたんじゃないのか……？  
だとしたらヤツの目的は

衛星情報をさらに詳しく見る。

フルスキン の移動予測ルートを見ると

（そうか！ヤツの目的は  
）

No.11 メイド・イン・ジャパン（後書き）

今回から、本格的に原作に介入していきます。

4月になってもレイルは入学しません。

っていうかいい加減入学させたい…

自分で設定しといて何ですが、AFCってホント水中のぼうが  
使えますね。

水中用ISとかってあるのかな？

出番なさそうだけど。

ではまた次回！

## No.12 ゴー・フォー・ブレイク

「IS学園!?よりによつて!」

アメリカの地図イレイストにない基地の指令室。

イーリス・コーリングは内心で舌打ちした。

IS学園。

この土地はどこの国家にも属さず、他国からの干渉を受け付けない。

つまり、これ以上の追撃は不可能だ。

『どうします?』

レイルもそれは分かっている。

「やむをえまい。撤退を」

「いいではありませんか」

振り向くと、恰幅のいい軍服の男がいた。

「准将!?何を言っているのですか!IS学園は」

「上層部」の一人であり、日本での「取引」を許可したのも彼だった。

「幸いにも、IS学園は緊急事態です。日本政府への助勢要請も出ている。そこに付けこむ余地はありますからねえ」

「しかし……!」

「これはチャンスですよ」

にたり、と無駄に脂肪が多い頬を歪ませる。

「IS学園の緊急事態を、我が国のISが解決する　　そういう

チャンスですよ」

この男はそういう考えの持ち主だ。

アメリカの繁栄のためなら、手段を選ばない

わが身可愛さにレイルの表出を恐れる他の高官とは一線を画す存在だ。

「了解しました……レイル、聞いての通りだ。学園に突入、アンノウンを破壊しろ」

『……了解』

プライベート・チャネルの声は、感情を押し殺しているように聞こえた。

(クソツタレが！ああまで本音を言われるとホントムカつくぜ！)  
『遮断シールドがレベル4、扉もすべてロックされているな。中で学園の生徒二名が交戦中、とのことだ』

見えた。

目を引く螺旋のようなタワー。

煙が上がっている　　なんとというか、その

某宇宙人の肩パッドに似ている建物がアリーナか。

(さあて、破壊工作といきますか)

アリーナを覆う遮断シールド。

まずはそれを壊さなければ突入できない。

だが、行ける。

このゴーストエース　ならば。

オレを選んでくれたESならば。

「どれ、行きますかねえ」

一度、アリーナの上空で上昇する。  
高度数千メートルまで上昇した後

全速力で急降下する。

アリーナめがけて一直線に。

「メタルブレイカー」の照準を正面 遮断シールドに合わせる。  
メタルブレイカーの最大出力は、弾丸をマツハ5で射出できる。

それをマツハ2で急降下しながら撃てばどうなるか。

ゴバアツ！ というすさまじい音と共に、遮断シールドをすさまじい物理衝撃が襲い、遅れて衝撃波が撒き散らされる。

相対速度マツハ7で放たれた「釘」は遮断シールドに破壊を撒き散らしても進行を止めず、そのまま眼下の地面 フルススキンのすぐそばに着弾した。

その後を追うように ゴーストエース が突入する。

瞬時に状況把握。

アリーナ中央に陣取る フルスキン に対して、少し離れた場所に二機のISが飛んでいる。

一体は中国の第三世代型 甲龍<sup>シエンロン</sup>。  
操縦者は中国の代表候補生 鳳鈴音<sup>ファンリンイン</sup>。

もう一体は よりによってヤツか。

日本製の 白式。  
操縦者はイチカ・オリムラ。

二人は突然の乱入者に驚いた様子だが、構っている暇はない。

さあて。

あの フルススキン をブツ潰すとするか。

織斑一夏は、思わず息を呑んだ。

突然現れた白いISは、目にも止まらぬ速さで敵ISにレーザーを浴びせながら、敵のビームを軽々と回避する。

「アメリカ製第三世代型 ゴーストエース …… 操縦者はレイラ・スカイウォーカー？ 聞いたことないわよ！」

すぐそこで鈴がそんなことを言っていた。

どうも、白いISのデータを見ているらしい。

あの敵ISも速いが、白いIS …… ゴーストエース だったかはそれ以上だ。

敵ISの攻撃が、まるで当たらない。

正面にいたと思ったら、いつの間にか背後に回り込んでライフルを撃ちこむ。

足を撃ち抜かれた敵ISがよろめき、その腕が何も無い空間に振るわれる。

そこに ゴーストエース がライフルを構え

『一夏あつー！』

アリーナのスピーカーから、箒の声が聞こえた。

(な、なんだあ！?)



突然の大声に、注意をそらしたのが失敗だった。

その隙を付いて、止めを刺す寸前のフルスキンが大きな腕を振るう。

「ぐっ！」

咄嗟にシールドで防ぐが、軽量で華奢なゴーストエースが大きく吹き飛ばされた。

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』  
さっきの女の声が、アリーナに響く。

スラスターで逆噴射をかけ、体勢を立て直す。

フルスキンがスラスターで接近してくる。

「ちょ、ちょっと馬鹿！何してんのよ！？どきなさいよ！」  
「いいから撃て！」

オリムラ達の声だった。

何だ？

見ると、フルスキンと一直線になるように、甲龍と白式が並んでいる。

甲龍は何かの構えを見せ、白式は刀を構えた突撃体制。

（オイ、まさか）

「ああもうっ……！どうなっても知らないわよ！」

言うなり、甲龍が「見えない何か」を白式の背中に放つ。  
（そう言うことか……なら！）

「ラピッドレイ」を両腕で撃ち散らし、フルスキンを足止めする。

直後。

イゲニッション・ブースト  
瞬時加速で急加速した白式がフルスキンに斬りかかる。

オレに気を取られて反応が遅れた フルスकिन は、かわしきれずに右腕を切り落とされた。

しかし、その反撃で フルスकिन が左拳で 白式 を打ちすえる。

倒れた 白式 にビームを叩き込むつもりらしいが

(グツジョブ！)

オレは「メタルブレイカー」を連射モードで撃ちまくった。

無防備な フルスकिन は背中から連射を受け、全身を撃ち抜かれた。

(オレを忘れてんじゃねえよ)

フルスकिन が倒れる。

任務完了だ。

(しかし…)

切り落とされた右腕の断面を見る。

そこにあるはずの人間の肉や骨、血は見えない。

ただの機械だった。

(コイツ、まさか無人機だとも言うのか……?)

敵ISが倒れる。

一夏は、ようやく肩の力を抜いた。

ゴーストエース は無人機(?) に近づくと、敵ISを観察し始めた。

「あ、ゴーストエース の操縦者さん？」

俺が声をかけると、ゴーストエース はこちらを向いた。

バイザーに隠れて顔も見えない相手だが、せめて礼を言っておきたかった。

「えっと、助けてくれてありがとうございます」

ゴーストエース は礼を言われたのが意外だったのか、しばし言葉を詰まらせたようだが、

「こ、こちらこそ助かったわ。キミの攻撃、ナイスだったわよ」  
褒められると、なんか照れくさい。

それにしてもこの人、なんか違和感が

「!」

ゴーストエース の背後、倒れた敵ISが残った左腕を構え、  
ビームを撃とうとしていた。

『敵ISの再起動を確認！警告！ロックされています！』

「!?!」

ゴーストエース も気付いたようだが、背後を向けていたため  
か、反応が遅れる。

「危ない！」

ためらいなく俺は ゴーストエース へと向かった

白式 がオレを横に突き飛ばす。

「な」

何を、と言いかけたところで、白式 をビームが直撃した。

「うわああああ!!」

オリムラが吹き飛ばされ、倒れたまま動かなくなった。

「一夏あつ!!」

甲龍 が彼に駆け寄る。

この男はオレを庇った。

コイツはどうして、初対面のオレなんかを

フルスキン がこちらを向く。

『警告。敵ISにロックされています。』

(クソッ……！)

その左腕が構えられる。

(オレが油断したせいで )

頭の中で、何かが切れた。

「このおおおおおおおおおおおおおお！！」

上昇し、ビームを避ける。

足元を高熱が掠めるが、気にしない。

そのまま急降下し、左腕でシールドの刃を叩き込む。

敵の首に食い込んだそれを、さらに何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も叩き込む。

右腕では「メタルブレイカー」を打ち散らし、敵の左腕を瞬時にスクラップに変えると、そのまま弾が切れるまで撃ち尽くす。

気付いた時には、フルスキン だったスクラップは、機能を停止していた。

息があがっていた。

『もういい、レイル！退け！』

「……了解……」

急上昇し、アリーナを離脱する。

振り返ると、倒れたオリムラに黒髪ポニーテールの女生徒が駆け寄っていた。

その姿に心が痛んだまま、オレは空に向かって再加速をかけた。

(……チクシヨウ……)

オレの油断が、人を傷つけてしまった。

これが実戦だ、人が傷つくことだってある　　そういう理屈では  
納得できなかった。

これはまぎれもなく、オレのせいだ。

RRRRRRR!

RRRRRRR!

ピッ

……

……

……

……ええ。

相変わらず鋭いですね。

え？「彼女」の教官？

まさか。

「彼女」に師事していたのはイーリですよ。

私は新型のテストがありますし、そうそう付き合えませんから。

それで、そちらはどうなんですか？

……そうですか。

生徒さんが一人、倒れたのですか…

もしかして弟さんですか？

あ、やっぱり。

彼、具合はどうなんですか？

目が覚めた？それは良かったですね。

…いえ、彼のケガがひどかったら、「彼女」が更に落ち込んでしまいますから。

ええ。

彼女、自分の油断で弟さんを危険な目にあわせてって落ち込みっぱなしで。

大丈夫ですよ、若いから。

すぐに立ち直れますよ。

そうでしたね。

それでは、あなたも無理はしないで下さいよ。

ブリュンヒルデ。

プッッ

ッー…ッー…

## No.12 ゴー・フォー・ブレイク（後書き）

ようやく原作主要キャラが出てきました！

ここまで来るのに10話以上かかってしまいました。

前回と今回で無人IS戦に介入したわけですが、

「どうやってレイルを追い詰めるか」で悩みました。

普通に戦っていたら、得意の高速戦闘で一方的に倒してしまうので。

なので、前は正体不明の敵の介入、今回は箒の声に気を取られたレイルの未熟さを追い詰められる原因にしました。やはり主人公は窮地に陥ってこそ輝くのだ（殴

ではまた次回！

## オリキャラ、オリIS設定 その2（前書き）

イラストがありますので、挿絵表示でご覧下さい。  
画力が無いのは見逃してくださいませ；



## オリキャラ、オリIS設定 その2

・機体名：ワイバーンES第二形態「陽炎の女王」プロミネンス・クイーン

> i222004—2862<

・操縦者：エリーゼ・レゼリオン

・分類：第二世代型量産機（改造）第二形態  
（第三世代相当）

・国籍：アメリカ合衆国

・開発：レゼリオン社

・待機状態：髪留め

・固定武装：偏向ロングレンジビームカノン「太陽の輝き」ソーラ・レイ × 4  
掌部火炎放射装置「陽炎の手」コナハンド × 2

・初期装備：なし

・後付装備：近接戦闘用大型鎌「レヴァンティーン」

・単一能力：サンライト・イーター

・換装装備：不明

・拡張領域：2つ

・機体説明

通称 プロミネンス・クイーン。  
元々は量産機である ワイバーン をエリーゼ用にカスタムした機体だったが、  
セカンド・シフト 第二形態移行によって、原型をとどめない完全な専用機として生まれ変わった。

その性能はもはや第三、四世代の域に達しており、エリーゼの腕もあいまつて強力な機体に仕上がっている。

超高温火炎放射器「コロナハンド」を持ち、単機で一個師団を殲滅可能な火力を持つ。

装甲が厚く、単一能力もあいまつて鉄壁の防御力を発揮する。

肩と背中に4つの大型バインダーを持ち、それぞれに「ソーラ・レイ」と燃料タンク、高出力スラスタが内蔵されている。

バインダーの装甲は核シェルター並の耐久性を誇る。

高火力、重装甲の代償として機動性は低い。

カラーリングは薄い赤。

・武装説明

ソーラ・レイ  
太陽の輝き

大出力のビーム砲。各バインダーに一基ずつ装備されている。

「コロナハンド」が届かない遠距離用の攻撃装備である。

コロナハンド  
陽炎の手

両掌部に内蔵された火炎放射器。

三千度の炎を噴出し、ワイドレンジからロングレンジまで自在に調

節できる。

圧倒的な攻撃力と攻撃範囲を誇る、広域殲滅用兵器である。タンクから気化した燃料を放出し、大爆発を起こすことも可能である。

レヴァンティーン

近接戦闘用の大型の鎌。

攻撃範囲が広く、一対多の戦闘が想定されている。

プラズマ刃の形成も可能だが、本来はエネルギーを温存するための非エネルギー兵器である。

近接格闘用に後付されたものであり、使用頻度は低い。

サンライト・イーター

セカンド・シフト

ワンオフ・アビリティ

第二形態移行によって発現した単一仕様能力。

機体に触れたエネルギー兵器を吸収し、自らのエネルギーに変換する。

これにより、敵のエネルギー兵器や自らの炎を浴びても無傷で済み、使いすぎたエネルギーの再回収さえ可能になる。

鈍重で集中砲火を受けやすい事を逆手に取った能力でもある。

・機体名：ゴーストエース（改修型）

> i 2 2 0 0 1 — 2 8 6 2 <

・操縦者：レイル・スカイライン

・分類：第3世代型限界性能試験機

・国籍：アメリカ合衆国

・開発：レゼリオン社

・待機状態：腕時計

・固定武装：腕部パルスレーザー機銃「ラピッドレイ」×2  
脚部エナジーフレアディスプレイ

・初期装備：44口径特殊アサルトレールガン「メタルブレイカー」  
×1

ハンドシールド×1

・後付装備：「メタルブレイカー」用マガジン×4

・特殊能力：AFC  
アクティブ・フルイド・コントローラー  
AIS  
アクティブ・イナードナル・スラスト

・換装装備：???

増加装甲「ブラックボックス」

・拡張領域：2つ

・機体説明

スラストーが高出力のため燃費の悪かった ゴーストエース を最新技術を用いて改修した機体。

第3世代兵器のAFCとAISを搭載し、燃費が大幅に向上、中国の 甲龍 並の低燃費を実現した。

・武装説明

エナジーフレアディスプレインサー

脚部に装備された回避用兵装。

戦闘機のフレアと同様、熱源を放出することによって敵の誘導兵器を回避するための装備である。

IS用エネルギーで構成されたフレア球は、展開してエネルギーの「膜」を作ることができ、

簡易的なエネルギーシールドの役割も果たす。

使用時には、カカトのアーマーが開き、中から放出される。

メタルブレイカー

> i 2 2 0 0 2 — 2 8 6 2 <

> i 2 2 0 0 3 — 2 8 6 2 <

クラウス社製51口径アサルトライフル「レッドバレット」が一次移行によって変化したレールガン。

小型で取り回しが良いが、マガジンを上部に、発射機構を後部におく構造のため、実際の銃身の長さはアサルトライフルと同程度である。

最大の特徴は、その形状から「釘」と呼ばれる、細長い特殊徹甲弾である。

電磁加速によって超音速で射出される「釘」は、極めて高い貫通力を持ち、「小型シールド・ピアス」と呼ばれるほどの破壊力を持つ。銃身の上部を丸ごとマガジンにすることにより、装弾数も確保されている。

出力の調整によって、アサルトライフル程度の連射性能を持つアサルトモードと、ISを一撃で撃破することさえ可能なシングルモードを使い分けられる。

取り回しの良さ、高い破壊力、アサルトライフル並みの連射性能をあわせ持つ、本機の専用装備である。

#### A I S

第3世代型特殊兵器。中国の 甲龍 の衝撃砲と原理は同じであり、空間圧作用によって生じた衝撃を推進力として噴射するスラスターである。

推進力そのものを噴射するため、エネルギーロスが多いバーニア型スラスターと比較すると、燃費効率が最大で35パーセントも向上している。

熱や光、音をほとんど出さないため、ステルス性も高い。

ただし、試作段階であるため高出力化が難しく、本機に搭載された最高出力型でも ラファール・リヴァイブ と同程度の出力しかない。

外観上の変化として、ノズルに3枚の可動力場展開翼が付いており、ベクタード・ノズルのように見える。

#### A F C

第3世代型特殊兵器。A I Cと同系統の空間作用兵器であるが、A F Cは機体の周囲の空間にのみ干渉し、周囲の流体の流れを操作することによって、空気抵抗をほぼゼロにする兵器である。

流体を操作できるため、水中でも同様の効果がある（水のほうが抵抗が大きいことを考えると、むしろ水中で真価を発揮する兵器である、といえる）。

本機の機動性や燃費の向上に大きく貢献しており、性能に直接関わる重要なファクターである。

## オリキャラ、オリIS設定 その2（後書き）

プロミネンス・クイーン の待機状態は、最初は指輪の予定でしたが、髪留めに変更しました。

原作で指輪が出てきたので。

機体デザインは、F・S・Sのマシンメース・オージェとガンダムUCのクシャトリヤの影響を多分に受けています。エリーゼさんの設定はまた次の機会に。

クイーン の待機状態もその時に。

べ、別に設定画が描き終わってないわけじゃないんだからね！

ゴーストエース はスラスター部分の変更、前回忘れた待機状態を描きました。

「メタルブレイカー」はムダに3DCG使ってます。

「ブレイカー」のスペル間違えてた…

正しくは「BREAKER」でした。

使用ソフト：Google SketchUp

今回はイラストに時間かかりました（時間かけてこれかよ）。

ではまた次回！

No.13 オーシャンズ・イレブン

その少年に興味を持ったのは2ヶ月ほど前の事だった。

より正確には、最初に興味を持ったのはISの方だ。

「なるほどねー。まともじゃないISが動くのは、まともじゃない操縦者が乗ってるおかげかなー？」

薄暗い部屋。

ウサギの耳のようなカチューシャを付けた彼女は、モニターに釘づけだった。

「ふむふむ。少し予定を変えようかな。いやー、忙しいね私！ハワイにも日本にも行くことになりそうだよ！」

彼女は椅子ごと後ろに振り向き、

「ま、みーちゃんは予定通りでいいよ」

みーちゃんと呼ばれた少女は、こくりと頷くと、そのまま外へ出てしまった。

「んもー、相変わらず愛想ないなあ。……あ、私もそろそろ行かないとね！」

七月。

夏だ！

海だ！

冒険だ！



……つてのが一般的な夏休みなのだろうが、生憎とオレ、レイル・スカイラインにそんな余裕はない。  
っていうか、冒険はなんか違う気がする。

「お？生意気にも当ててきやがったな？だいぶ上手くなったじゃねーか！」

フアング・クエイク のイーリ教官がこちらの射撃をかわしつつ投げナイフを放つ。

こちらもナイフをシールドで弾き、レーザーを連射する。

「そりゃ、毎日鍛えられてますからねえ！！」

「メタルブレイカー」を構え、連射するが、数発が装甲を掠めるだけだった。

「そももらった！」

リボルバー・イクニッション・ブースト  
「個別瞬時加速！？」

猛加速で懐に飛び込んだ フアング・クエイク が、拳を振るう。ガードが間に合わず、そのまま吹き飛ばされた。

「どわあああああ！」

シールドエネルギーがゼロになる。

ISを解除する。

「いやー、おめーもメキメキ上達してきてるなあ！教官として鼻が高いぞ」

「ここまでやられっぱなしじゃあ、実感ないですけどね」  
もう何十連敗中だよ。

一度勝ったことはあるけど、あれは「一撃でも当てたら勝ち」ルールの時だったか。

ゴーストエース に出会ってからもう一年近く経つが、戦闘で勝てたのは数えるほどしかない。

(……それに、あの無人機との戦いは、オレの負けだ)

二か月前の戦いは、今思い出しても悔やまれる。

オレの油断のせいで、一人の人間を危険にさらしてしまった。

(借り、返さねえとな)

あー…

それにしても。

「うー…あぢい…アイスが恋しい…」

去年のエア・ショーの時もそうだったが、砂漠のド真ん中のエドワーズはメチャクチャ暑い。

「冷蔵庫にハー　ンダッツがあつたな、私も食おう」

「いえ、さつきナガさんが最後の一個を平らげましたよ」

「な…！」

しばし、お互いに沈黙が流れる。

内心では、二人とも「あの野郎冷房付きの部屋で仕事してるくせにオレ(私)のダッツを」などと考えていたのだが。

「……まだガリ　リくんが残っていたはずです。それでガマンしましょう」

「くっ………！」

そんなどうでもいい、しかし二人にとっては死活問題の会話が流れていた時。

「あら、二人ともお疲れ様」

久々に、ナターシャさんが来た。

「ナターシャさん、こんにちは」

「おう、ナタル。…ん？そのバッグは何だ？」

「保冷バッグよ」

ナターシャさんは、手に持った保冷バッグを開き、

「はい、差し入れ。ストロベリーとグリーンティーどっちがいい？」

「ああっ…ダッツだ………なんと神々しい…」

「ナタル……！おまえ最高だ！」  
ナターシャは、なぜ涙を流すほど感謝されているのか分からず、  
思わず一歩引いてしまった。  
「じゃ、私はグリーンティード」  
「はい。レイルにはストロベリー」  
「どうも」

二人が無我の境地でカップをつついていた時、不意にナターシャ  
さんが口を開いた。

「ねえ、次の日曜からの三日間、空いてるかしら」  
「まあ、することと言っても訓練ぐらいだから空いてるぞ」

「なら、ハワイに行かない？」

え？

「Hawaii!？」

「ナタル、それ本当か！？つまり、泳ぎに行くよ！」

「じゃあ、ナガさんも誘いましうよ！」

「ま、まあ……それはそうだけど」

「今のうちに日焼け止めも買っておくかな！」

「あーどうしよう！水着買つとかないと！」

「ふふふレイル！私のセクシーさに魅了されるなよ！」

「いや、オレ年上は興味ありませんから。あと教官に手を出したら  
命がありません」

「なに！まさかおめー…ロリコン」

「なんでそーなるんですか！オレはいたって正常です！守備範囲は  
±2の同世代です！」

「学園なら1〜3年生まで網羅できんじゃないかねーか！……あれ？なん

で守備範囲の話になっただけ」

「えーと…」

ナターシャさんは、なぜか冷や汗をたらたらと掻きながらなにかに言いたそうにしていた。

「なんだナタル？おまえまさか泳げないのか？」

「それぐらいできるわよ！そうじゃなくて」

「大丈夫ですよ。ナガさんは既婚だし、オレは年上には興味ないですし」

「そ・う・じゃ・な・く・て！！」

「試作機の演習よ」

夏だと言つのに吹雪が吹いた。

主に無駄に盛り上がっていたオレ達2名の心に。

「エンシュウ？」

「そう」

「ハワイでね、私がテスト操縦者を担当しているIS  
の演習をするの」

シルバリオ・ユースベル  
銀の福音

「へえ、もうそこまで完成してるのか」

「それに、オレ達が参加しろってことですか？」

「ええ。試験稼働中の警護をお願いしたいの。なんなら模擬戦もね」  
「……………」

「ってか軍用！？」

「アンタそんなもんと戦わせようってのか！？」

「ま、たまにはお仕事もいいんじゃないの？レイルは？」

「……………まあ、そう言うことなら行きますよ。軍用機とやらも見てみたいですし」

「なら決まりね」

その後、細かい予定とか計画とかを話し合つと、ナターシャさん

は行ってしまった。

「よし、私たちもハワイに向けて特訓だ！」

「げ。さらにハードにするつもりですか……」

「なになに？ハワイ行くの？」

遅れてやってきたナガさんは、この後二人に鬼のような形相で睨まれることになる。

食い物の恨みは恐ろしいのだ。

そして、日曜日。

「アロハーーーー！！」

おお、思いつきり叫ぶと気持ちいい。

ハワイに到着したぜー！！

オレ、ナガさん、イーリ教官、ナターシャさんの四人は、浜辺まで来ていた。

「それじゃ、12時30分には全員ここに集合で」

もちろん、全員水着である。

シルバリオ・ゴスベル  
銀の福音の試験稼働は明日なので、今日一日は自由時間である。

だから、

「よっしゃあ！遊ぶぞおぼーず！」

なんかナガさんが一番盛り上がったた。

いや、いつもの事なんだけどね。

「いや、オレは適当に泳ぎますから。ってか何バットとスイカ持ってきてんですか！遊ぶ気満々ですよね！」

「日本の夏と言えばコレだろうが！」

「いやここハワイですから！あと一見アロハシャツに見えるそれは、かりゆしウェアですね！」

ちなみにナターシャさんはパラソルの下で本を読み、イーリ教官は砂の城を作り……

「チエストオオー！」

ドツパアアア！

「壊した！？」

なんか、自分で作った城を盛大に吹き飛ばしてる。

しかも、なんかご満悦のようだし。

(ひよつとして、普段の破壊衝動はオレで晴らしてるのか……?)  
あの人には逆らわないようにしよう。

「は、破壊衝動なら負けねえ！こっちはスイカ割りで対抗だ！」

「何対抗意識燃やしてんですか！食べ物で粗末にするな！」

ダメだ、すでに目隠しをしてバットを握りしめている。

仕方ない。

「そのまままっすぐ！ずっとまっすぐ！」

「えー、けどさつきから結構歩いてるぞ？」

無論、馬鹿正直にスイカ割りなどする気はない。

ナガさんをうまく誘導した先は

「チエストオオオー！」

「じばらっぺえ！？」

イーリ教官の拳の前だった。

「さーて、泳ぐかぁ」

砂の城と共に吹き飛ばされたナガさんを尻目に海に向かう。

いざ、エメラルドグリーンの海へダァーイブー！！

この暑さで！  
このきれいな海で！  
泳がなきゃ損だろ！！

「……ずいぶん泳いじまったな」

ひたすら泳いでみたのだが、ISの訓練のおかげで体力が付いたせいか、さっきの浜辺からずいぶん離れた岸辺に着いてしまった。

「……ってかココどこだ？元いた浜辺ってどっちの方向だったっけ？」

マズイ。

本当に迷ったかもしれない。

(ってか迷うほど泳げるなんて、オレの遠泳能力も磨きがかかったな。今ならハドソン湾横断できんじゃないかね？)

いや、さすがにムリだろ。

なんて心の中でセルフツッコミしている時だった。

「おーいたいた、キミがレイルくんかなー？」

振り向くと、一人の女性が立っていた。

青と白のワンピース。

頭のウサギの耳のようなカチューシャと相まって、不思議の国のアリスを連想させる人だった。

「…誰です？オレに何か用ですか？」

オレにバニーガールの知り合いはいないはずだが、この人どっかで見えたような…

いや、それよりも。

「なんでオレの名前知ってるんですか？」

仮にもオレは、「世界で唯一　　じゃないや、2人目の　　男の

IS操縦者」だ。

歩く軍事機密のような存在だが、それでもオレを狙う組織はあるだろう。

例えば

一年ほど前の、アラクネ を奪った犯人だってオレの事を知っているはずだ。

彼女が、その仲間だと言う可能性もある。

ならば、この女性は警戒すべきだ。

「あー、ごめんねー。まだキミとは初対面だったね。じゃあ警戒されるのも無理ないね！」

「……で、アンタは誰なんです？」

なるべく口調は平静を装い、しかし、頭ではいざというときの逃走ルートを考える。

そんなオレをよそに、彼女は豊かな胸を張ると、

「私が天才の束ちゃんだよー！どう？驚いた？」

タバネ。

その名前で、ようやく思い出した。

「ア………アンタが、篠ノ之博士……！ISの開発者の……！」

「えへへ、そうだよー。いやー、そこまで驚かなくてもいいんだけどねー」

篠ノ之 束。

ISを開発した女。

世界に467個しかないコアは、すべて彼女の手によって製作された。

なぜそれ以上出てこないのかというと、コアは完全にブラックボックスになっており、彼女にしか作ることができないのだが、彼女が行方不明になった事でこれ以上のコアが作られなかったのだ。



「……その篠ノ之博士が、なんでこんな所にいるんです？あと、オレの名前まで……」

「まあ、ちょっとキミに興味があったからねー…あ、キミの事『れつくん』って呼んでいい？」

「……お好きにどうぞ」

「っていうか、この人のテンションだと嫌って言うてもそう呼んできそつだ。」

「うーん、れつくんっていけずだなー。ほら笑って笑ってー」

言いながら、オレの顔に手を伸ばす篠ノ之博士。

「ひゃ、ふあふあひはしたはら、はなへー！」

ようやく頬が開放される。

「…ふお、オレに興味？男だってんなら、もう一人いるでしょう？」

「ああ、いつくんにはこれから会いに行くけどね。キミについては、むしろISの方に興味があるんだけどね」

ゴーストエースに……？

「うん。なんで動いたんだろうねー？ってね」

「なんでオレが動かせたのか、分かるんですか？」

「いや、そうじゃなくてだねー。キミのISに使われているコア、失敗作のはずなんだよ」

No. 13 オーシャンズ・イレブン（後書き）

タイトルは、原作3巻のまんまです。

ただし時差があるので、ハワイの日曜昼11時は

日本の月曜の朝6時です。

この時差に気がついたのは投稿直前。

下手すれば同じ時間に東さんが二人いるというミステリーが  
発生するところでした。

（それはそれで面白かったかも）

それではまた次回！

「いや、そうじゃなくてだねー。キミのISに使われているコア、失敗作のはずなんだよ」

「失敗作!？」

思わずオウム返しをしてしまった。

「うん。いつだったかなー? コアをくれコアをくれ、ってうるさい日本人がいたから、嫌がらせに失敗作あげたんだよー」

「……その日本人、やたらとテンションの高い眼鏡の中年じゃないですか?」

「あー、そうかもね。あんまり覚えてないけど」

まあ、多分ナガさんなんだろうな。

あの人、まさか篠ノ之博士に泣きついていたとは……

「で、どのへんが失敗作なんですか?」

「そうだねー、聞きわけが無いっていうか、意地が悪いっていうか。そのIS、れつくんが乗る前はとうだった?」

「そういえば……」

五月の倉持技研での会話を思い出す。

「操縦者に『嫌がらせ』をしてた、とか……」

「でしょー。だからくれてやったはずなのに、れつくんが乗ったとたんにおとなしくなっちゃうんだもんね、びっくりだよ」

「……って、篠ノ之博士にも分からないんですか?」

「もー、束ちゃんって呼んでよー」

「は、はあ……束さんにも分かんないんですか?」

「うーん、そうだね。調べさせてもらえれば分かるかもしれないけ

ど、いいかな？」

それは

「すみませんけど、お断りします」

はつきりと言った。

「えー、なんで。キミがなんで動かせるのか、分かるかもしれないんだよー」

「『かもしれない』なんてことに、機密の塊のISを差し出せませんから」

「私以上の機密の塊つても無いと思うけどね。それに東さんが近づく。」

「もしかすると、れっくんの人生変えるかもしれないよー」  
その時、オレはどんな顔をしていたのだろう。

「ふざけないでください」

「……え？」

「そうやって、アンタは親父の人生を……」  
今分かった。

オレ、この人が嫌いだ。

この人がISを作ったから、親父は夢を無くした。

オレも夢を無くしかけた。

いや、実際に無くしたんだ。

今ある夢は、その代用品。

人生が変わるってのは、そういうことだ。

「オレや親父の人生が……」  
だから。

そんな簡単に、人の人生を変えるなんて言うな。

「アンター一人にメチャクチャにされるほど、安いもんかああ!!」

海に飛びこんだ。

手を伸ばしかけた篠ノ之博士を見たのを最後に、冷たい水の間が全身を包み込んだ。

彼は海の中に消えてしまった。

東はそれをただ、見送ることしかできなかった。

と、

チャキツ　と音がした。

「みーちゃん、ダメだよ」

彼女の背後には、部分展開したISの腕でロングレンジライフルを構える少女がいた。

「けど…！アイツ、東にひどいこと言った！許せない！」

銃口の先には、どこかへ向かって泳ぎ続けるれっくんがいる。

もう数百メートル離れてしまったが、彼女の腕なら確実だろう。

「やめて、みーちゃん」

「……っ！」

みーちゃんは、渋々といった様子で銃を降ろす。

「……どうするの？」

「どーしよっかなー？まさかフラれちゃうとはねー、つくづく予想外だね、れっくんは」

東は、いつもどおりに笑っていた。

「むしろ余計に興味が沸いちゃったかなー！だから予定通りにやっちゃおう！」

「…分かった」

みーちゃんと呼ばれた私は、今後の予定が変わらないなら問題ない、と結論付けた。

それなら、予定通りに準備を進めておこう。

「フラれてもフラれても追いかけてようなんて、私ひよっとしてストーカーかなあ？」

彼女と出会ってから、もう2年ほどになるだろうか。

そんな私だからこそ、分かったのかもしれない。

彼女はいつもどおりに笑っているはずなのに

その笑いに、陰りが見えたような気がした。

「レイル・スカイライン……」

東にあんな顔をさせる男を、私は許さない。

その夜。

夕食は、バーベキューだった。

「いやー、最高だねえ。これでビールが飲めたら言うことないんだけどさあ！」

ナガさん、なんかハワイに来てからテンションがさらに上がってないか？

「飲まないんですか？」

「開発中の装備があるからさ、明日にでも試してみようかと思ってんのよ！」

「はあ」

「で、結局見つかなかったの篠ノ之博士？」

「ええ。レイルから聞いた場所を調べましたが、何の手がかりもなし。もうどこかに行った後でしょうね」

あれからようやく元の浜辺にたどり着いたオレは、篠ノ之博士との一件の一部始終を話した。

秘密にしておく義理はないし、見つかったら見つかったでアメリカ

カの利益だ。

すぐに搜索が開始されたが、結果はナターシャさんが言ったとおりだ。

さすがは何年間も行方不明の人物、と言ったところか。

「あー、食った食った」

「ごっそさん！」

「レイル、明日に備えて早めに寝ておけよ」

「了解」

ホテルの部屋割は、オレ・ナガさんと イーリ教官・ナターシャさんの二部屋だ。

「しかしアレだなあ。篠ノ之博士の誘い断っちゃうなんて、思い切ったことしたなぼーず」

夜10時。

そろそろ眠ろうとした時、パソコンに向かっていたナガさんが話しかけてきた。

「別に。だからって困ることはないですし」

「あるだろーが。あの人ならばぼーずがISに乗れる理由が分かるかもしれないじゃん！」

「……アメリカの機密を、部外者に明かすわけには……！」

「ウソつけ、単に篠ノ之博士が嫌いだったただけだろ」

「う……そりゃそうですね……」

「当てようか。あいつがISなんか作ったから、パイロットの居場所がなくなっただんだ！……ってカンジ？ま、気持ちはわからんでもないけどさ」

「……悪いですか？」

「いいんじゃないの？若々しくて。」

「それ、どう受け取ったらいいんです？」

「さあ」

「ただ、そういうお前がIS乗ってるんじゃないや世話ないよな」

「ナガさんこそ、あの人に頼み込んでコアもらったんでしょ」

「あー……まああの時は割とラッキーだったよ。行き倒れの女性助けたらその人が篠ノ之博士でさ。ギブ&テイクってことで頭下げまくったんだよ。さすがにウザがられる寸前だったけどね」

「いや、あの人の口ぶりだと既にウザがられてましたよナガさん。」

「ま、結局失敗作のコアだったらしいけどね。おかげで仕事失いかけるし」

「いいじゃないですか。そのおかげでオレも ゴーストエース に乗れたし、ナガさんも新しい職場ができたし」

「そう、それだよ」

「？」

「確かにさ、あの人がしたことで、失ったモンもあるだろうけどさ、ナガさんはいつもより真剣な顔で、

「得たモンもあるんじゃないの？」  
なるほど。

そういう考え方もあるのか。

「……そうかもしれないですね。では、オレはそろそろ寝ます」

「あ、なんだよイイ話してたのに！」

ベッドに寝転がり、布団を被る。

「いい話でしたよ。おかげで少し、楽になれました。今度あの人会ったら少しは謝るときます」

「……そっか」

それつきり、オレは目を閉じた。

泳いだせいで疲れがたまっていたのか（結局キロ単位で泳いだ）、オレはすぐに眠りに落ちた



「……まったく、寝顔だけ見てるとあの親父の子には見えねーな」  
「ぼーずが寝静まった後、俺は再びパソコンに向き合った。  
プログラムは一通り書き終えたので、後はわずかなチェックだけだ。」

これが終われば、持ってきた新型装備も使えるようになる。  
「さてと、もうひと頑張りしますかねえ」  
後には、キーボードをたたく音だけが聞こえた。

「テイクオフ、ゴーストエース！」

朝10時30分。

いよいよシルバリオ・ゴスヘル銀の福音の試験稼働が始まる。

「行くぞ、レイル」

プライベート・チャンネルから、ファンゲ・クエイクを装備し

たイーリ教官の声が聞こえる。

「了解！」

オレ達が向かった先では、浜辺に佇むISスーツ姿のナターシャさんがいた。

「ナタル、こっちは準備OKだ。いつでもいいぜ」

「ええ。それじゃ、始めましょうか。…シルバリオ・ゴスヘル銀の福音！」

ナターシャさんが光に包まれたのも一瞬、ISが現れた。

「これが、福音……！」

現れたのは、銀色の天使だった。

全身を銀色の装甲に包まれた天使。

顔はバイザーに隠れて見えない。

なぜオレが天使だと思ったかと言つと

翼があるからだ。

頭部から生えた一对の翼。

本体と同じく銀色のそれは、大型スラスターと広域射撃武器を搭載した複合システムだ。

『実物を見るのは初めてだが、すごいもんだな…』

イーリ教官も息を呑んだのが分かる。

『それじゃ、しっかりと警護お願いね』

天使が飛び立つ。

静かに数メートル上昇した 福音 は、バアッ と翼を広げると

ドウ！ とスラスター音が聞こえたかと思うと、一気に沖の方へ向かう。

俺も吹き飛ばされそうになる。

「うおう！？」

『何してる！行くぞ！』

「はい！……なんて速いんだ…」

こちらも加速し、 福音 を追う。

『スペック上はお前の方が速いはずだ。お前も飛ばせ！』

「了解！お先っ！」

オレもスラスターの出力を上げ、一気に加速する。

稼働試験は沖合で行うので、海の方へ向かう。

『やっぱりすごいわね、ゴーストエース は。この子に追いつくなんて』

前を見ると、 福音 の後ろ姿がどんどん大きくなり、あつと言う間に隣に並ぶ。

「そりゃ、これを取り得ですからね！」

『そろそろ着くわよ』

演習地点到着。

スラストを制御し、ぴたりと止まる。

ナターシャさんも減速し、精度のよい動きで演習地点に着く。

『シルバリオ・ゴスベル銀の福音、指定海域に到着』

「ゴーストエース、同じく指定海域に到着」

『ファング・クエイク、到着……っ』

遅れてイーリ教官も到着した。

『まったく、はえーよお前ら』

『では、試験稼働を開始します』

『レイル、センサー感度を上げておけ。福音に見とれすぎるな』

『よ』

『了解』

視野が広がる。

レーダーに敵の反応はなし。

「レイル、異常なし」

『イリス、異常なし』

準備完了。

周辺海域は巡洋艦数隻によって封鎖されている。

『始めるわよ』

『ターゲット展開』

「ターゲット展開」

イーリ教官とオレで量子変換してきたターゲットを展開する。

(しかしこの数をどうするってんだよ……)

二人で展開したターゲットの数は、20個に及ぶ。

それも、かなりの広範囲にランダムに散布する。

『シルバリオ・ゴスベル銀の鐘』稼働開始』

福音が翼を広げ

次の瞬間、光の雨が降った。

海上に展開したターゲットが次々と弾け飛び、狙いをそれた光弾が海に着弾し、海が爆ぜる。

ようやく雨が止んだ時には、波打つ海面だけが残された。

「全ターゲット撃破……一瞬で……」

「これが、「銀の鐘」……！なんて威力だ……」

おそらく、あの光弾の雨は、命中精度は高くない。数撃ちや当たる。

あれは、その言葉をそのまま実践するような兵器だ。

しかも一発一発が炸裂性なのか、ターゲットが粉みじんに吹き飛んでしまっている。

IS学園でも射撃訓練用に使われているターゲットで、ダーツのような同心円模様と点数まで書いてあるのだが……

（当たれば全部吹き飛ばせるんだもんな。点数の意味ねええ！）

「二人とも、次のターゲットの展開をお願い」

「おう」

「了解」

今度は空中にもターゲットを設置する。

薄っぺらい丸い板を空中にばら撒く。

「なんか、ターゲットの意味あるんですかねえ」

「同感だな……全方向攻撃とはよく言ったものだな」

二人でそんな会話をしていた時。

一筋の閃光が、ファング・クエイクを貫いた。

「なっ………！！？」

「どこからだ！」

すぐに索敵。

いた。

オレ達の1000メートル上空。

ハイパーセンサーでとらえたそれが拡大される。

「灰色のIS！？ここまで近づかれて気付かなかったなんて！」  
ソイツは、全身が灰色だった。

細長い手足。

例によって顔はバイザーで隠れている。

手にはさつき撃つたであろう長いライフルが握られている。

異様なのは、ソイツに翼があることだ。

福音 の天使の翼とはちがう、むしろ悪魔的にシャープなデザインの翼が一对、背中から生えている。

それに…尻尾、だろうか。

四角いパーツを連結してできた、尻尾のようなものが一本、これまた背中から生えている。

尻尾と翼、そして両肩のアンテナが相まって、オレは伝説の龍ドラゴンを想起した。

そして、そのロングレンジライフルが構えられる。

「……………！！！」

回避運動をとった直後、オレのすぐそばを閃光が貫く。  
設置してあったターゲットが、撃ち抜かれる。

丁度、ど真ん中だった。

『クソッ！スラスターをやられた！』

さっきの一撃のせいだろうか、ファング・クエイクの背中から煙が出ている。

あれでは高機動戦はムリだろう。

「オレが行きます！」

『待……………』

上昇し、敵との距離を詰める。

「てめえ、何モンだ！」

返事が返ってくるとは思っていなかったが、

『このISは 灰龍<sup>かいりゅう</sup>』

女性の声だ。

静かな、少女のような声。

(カイリユウ…日本語か?)

敵の口が静かに歪む。

『レイル・スカイライン。おまえの、敵』

## No.14 アッシュ・ドラゴーン(後書き)

またオリキャラ&オリES出しちゃいました。

これで当分は出す予定無いです。

束さんとの邂逅イベントは割とテンプレなので、レイルには違う対応を

とってもらいました。

ではまた次回！

## No.15 アウト・オブ・コントロール

『レイル・スカイライン。おまえの、敵』

「…っ！なぜオレの名前を！！」

『答える必要、ない』

灰龍<sup>かいりゅう</sup> がロングレンジライフルを撃つ。

回避し、こちらも「メタルブレイカー」を単発<sup>シングル</sup>で撃つ。

だが、灰龍 は細かな動きでそれを回避する。

(この動き…)

『その程度か、レイル・スカイライン』

「なにぃ……！」

更にライフフルが放たれる。

オレンジ色の光軸がオレのすぐそばを擦過する。

この弾丸の速度、摩擦熱に輝く閃光は

「レールガンか……！！」

『そうだ。おまえ以上のな』

さらに一発撃ってくる。

足元を掠める。

こちらも「メタルブレイカー」を応射。

また細かな動きでかわされる。

さらに「ラピッドレイ」を連射するが、やはり 灰龍 は複雑な

機動でそれをかわす。

(そうか、あの動き、 アラクネ と同じ…！あの翼に独立したP  
ICが積まれているのか！)

『レイル、待ってる！私も行くぞ！』



イーリ教官からだった。

『ダメよ、イーリ！その機体じゃあ！』

ナターシャさんがそれを制止する。

ファング・クエイク は不意打ちでスラスタをやられている。  
この高速戦闘に介入するのは難しいだろう。

さらに敵のレールガンが襲いかかる。

シールドで反らす、その表面が大きく抉れた。

「コイツ……！」

「メタルブレイカー」をさらに5発連続で撃つが、敵の装甲を掠めるにとどまった。

(まずいな…これ以上は弾切れになっちまう)

元々、ゴーストエース には2つだけの拡張領域パススロットの1つを使って「メタルブレイカー」用のマガジンを積んでいる。

しかし、今回の演習用に40個近いターゲットを量子変換インストールしており、そのために拡張領域パススロットが2つとも埋まっている。

つまり、マガジンを持ってきてないので、今ある弾を撃ち尽くしたらそれまでだ。

残弾3発。

コイツには一発もムダにはしたくない。

『考え事をしている暇があるの？』

灰龍 のレールガンをギリギリで回避する。

恐ろしく正確な射撃だ。

大した連射力も無いのに、高機動型のオレがかわすのがやっただ。  
おそらくアレは、オレの軌道を読んでいる。

このままでは、反撃の余裕がない。

ラピッドレイで牽制するが、あの細かな動きを捉えきれない。

(それなら……！)

(この程度か、レイル・スカイライン)

墜とすのは簡単だ。

速さだけに頼った単調な機動。

当てる気があるのかと疑いたくなる精度の悪い射撃。

本当なら、このロングレンジレールガン「稲妻」いなづまの一撃で簡単に

撃墜できる相手だが、今は墜としてしまっただけは意味が無い。

面倒だ、と私は思う。

本当ならば殺してやりたい相手を、わざと見逃して引きつけるだけなんて。

そんな想いが射撃に出たのだろうか。

(……しまった)

数発目の弾丸が、直撃した。

敵が爆煙に包まれ、破片が飛び散る。

ゴーストエースに命中してしまえば、あの装甲だ。

あっさりと撃墜してしまうだろう。

(それでは困る……！)

私はゴーストエースを拡大して状況を知ろうとする。  
すると、

猛加速で私に迫るゴーストエースが見えた。

「なに……!!?」

「メタルブレイカー」が放たれる。

咄嗟の事で、回避が間に合わなかった。

直撃は避けたものの、灰龍の片翼の3分の1が吹き飛ぶ。

(バカな……！確かに直撃したはず……！)

『ターゲットだよ!』

「なに!？」

『訓練用のターゲット、数枚重ねとけばダメー代わりになるだろうが!』

その腕からレーザーが連射され、数発が 灰龍 の装甲を抉る。

『目的は何だ! 灰龍 の操縦者あ!』

灰龍 が体勢を立て直し、レールガンを放つ。

それを回避し、「ラピッドレイ」で牽制する。

オレは残りのターゲットを全て呼び出す。

それを適当に空中にばら撒く。

レーザーを回避した敵が、ターゲットにぶつかる。

動きが鈍った一瞬、「メタルブレイカー」を発砲。

敵のレールガンが真つ二つになる。

『この…!』

灰龍 の特徴的な「尻尾」がその体に巻きつく。

何だ?と思う間に、「尻尾」を構成する各パーツのハッチが開く。ハッチの中には

「やべ……!!」

慌てて距離をとった直後、「尻尾」から百発近いミサイルが放たれる。

脚からフレアを放ち、十数発が火球に変わるが、残りがまだオレめがけて高速で迫る。

(これは、5月の時の まさか…!)

「ラピッドレイ」を撃ちつつ回避行動を取るが、数が多すぎて捌ききれない。

ミサイルが目の前まで迫る。

(やられるッ…!)

刹那、目の前に光の雨が降り注ぎ、ミサイルを火球に変えた。衝撃で弾き飛ばされる。

『レイル、無事！？』

「ナターシャさん！」

『銀の鐘を撃つわ！離れなさい！』

オレの眼下300メートルほどの場所に、銀色の天使が舞い踊る。

「了解！頼みます！」

接近警報。

灰龍 が迫る。

その手に握るは

「大剣！？」

2メートル近い剣を振りかざしながら、一直線にオレに迫る。

マズい。

ゴーストエース に接近戦の能力はない。

シールドで受け止めても、あの太剣相手ではシールドごと粉碎されるのが関の山だろう。

だが、

（かかった！）

接近戦を挑むということは、オレに近づくしかないということだ。

つまり、軌道が読みやすく

「ナターシャさん！」

『もちろん！』

灰龍 も気付いたようだが、もう遅い。

この距離なら、外さない。

シルバリオ・ゴスベル  
銀の福音 が翼を広げ、その36門の砲口が火を

噴かなかった。

「え……？」

直後、目の前まで迫った 灰龍 が太剣を振り下ろす。

咄嗟にシールドで防ぐが、ダメージを負ったシールドは、あっさりと砕かれた。

「がああああああ!!!」

なんとか海面に叩きつけられるのだけは防いだが、灰龍や

福音 からだいぶ離れた場所まで吹き飛ばされた。

「ナターシャさん!? どうしたんです! 今がチャンスだったのに!」  
「撃とうとしたわよ! それがなんで!?!」

灰龍 はオレを見下ろすと、そのままどこかへ飛んで行った。  
(どういうことだ...? 撤退したのか?)

「レイル、無事か?」

イーリ教官からだった。

「教官こそ、大丈夫ですか?」

「スラストーをやられたただけだ。戦闘に参加できなかったのが悔しいがな。とにかくこちらも退くぞ」

「了解」

言われて、オレも踵を返そうとするが

「おい、ナタル! 何やってんだ。とつとと退くぞ」

福音 は動作不良でも起こしたのか、さっきから全然動いていない。

「それが、動かないの。故障かしら?」

「そうか。なら、私が運んでやるよ」

フアング・クエイク が 福音 に近づく。

「……!!! イーリ! 逃げて!!!」

「え?」

見ると、福音 がゆっくりと フアング・クエイク を振り返り

「銀の鐘」シルバー・ベルを容赦なく浴びせた。

『ぐあー!!』

イーリ教官が吹き飛ばされ、海に叩きつけられる。

『ナタル！おまえ何やってんだ!』

「教官!」

福音 が上昇する。

『違うの!そんな...!この子が言うことを聞かない!イーリ達を敵だと認識してる!』

『なに...』

福音 の装甲が太陽に反射し、ぎらりと光る。

「まずい!教官!」

スラスターを全開にし、教官の元へと急ぐ。

ズタボロの ファング・クエイク を抱え、すぐにその場を離脱する。

直後、オレの背後に光の雨が降り注いだ。

『どうなってるんだ...!』

『レイル!イーリを連れて逃げて!』

「ナターシャさん!本当に制御できないんですか!?!」

『ダメ...!!どうなってるのよ!』

言われた通り、とにかく距離を離す。

『ナタル!脱出しろ!』

『できないの!どうなって...キヤアア!』

福音 がスラスターを全開にし、飛んでいってしまっ。

「ナターシャさん!」

すぐにその姿が見えなくなり、レーダーからも反応が消える。

『そんな...ナタルウウウウ!!!』

教官の絶叫だけが、昼の海に響いていた。

あれからどれくらい経ったのだろうか。

時計を見ると、およそ3時間弱と言ったところか。

その間にも 福音 はアメリカの監視空域を突破し、現在はIS学園の専用機持ちに対処が命じられているらしい。

オレ達はと言うと        ハワイの数ある軍事基地の一つで待機中だ。

オレはすぐさま 福音 を追いかけてしようとしたが、 灰龍 戦での無理が祟り、エネルギーが足らず断念した。

どうしようもなく、無力だ

パシユツ と自動ドアの開く音に、少しだけ首を動かす。

ナガさんとイーリ教官だ。

「教官、もういいんですか」

「ああ。私は無事だが……」

「フアング・クエイク はダメージレベルC。当分は動けないね。あ、ゴーストエース は無事だよ。シールドだけ付け替えといったよ」

待機状態の ゴーストエース が放り投げられ、オレはそれをキヤツチする。

「それともう一つ」

ナガさんの表情が曇る。

「IS学園側の作戦、失敗したそうだよ」  
陰鬱な胸に、さらに衝撃が来た。

「そんな……」

「福音 はまだ日本にいますみたいだね」

「なら、オレに行かせてください！ ゴーストエース のスピード

なら」

「無理だな」

教官に一蹴された。

「距離が遠すぎる。仮に交戦しても、軍用IS相手では分が悪すぎる。諦めろ」

「ゴーストエースの速さならあれぐらい避けられます！それに、教官は平気なんですか！あそこにはナターシャさんが」

「平気なものかッ！！」

教官に胸倉を掴まれる。

「私だつて、今すぐにも追いかけていんだ！行って、ナタルを助けていさ！」

「う……」

「でも無理なんだ。追いつけないし、勝てないし、何より私のISは動けん」

その肩が震えていた。

オレはバカだ。

この人も辛かったのに。

苦しいはずなのに。

それでもできないって分かってて。

国家代表だからこそ、誰よりも冷静にそれを知っていて。

それも知らずに一人で騒いで。

ほんと、バカだなオレは。

「それでも…オレは行きたいです」

ああ、本当にオレはバカだ。

「少しでも可能性があるなら、オレは諦めたくはありません。オーバード覚悟で加速すれば、追いつくはずですよ」

「だがどうする。そんな加速をすれば、例え追いついてもエネルギー



「切れて墜落するのがオチだぞ」

「でも……！」

「なら大丈夫じゃない？」

「ナガさん……？」

彼は、作戦室のスクリーンを操作すると、パソコンのデスクトップ画面を映し出した。

パソコンの画面をそのまま出力しているのだろう。

「今の問題は2つだよな」

カタカタとキーボードを叩く音。

「1つ、距離が遠すぎて 福音 に追いつけない」

福音 の現在位置が表示される。

リーダーには映らなかつたものの、衛星写真で確認できたようだ。

日本の陸地から30キロほどの海上か。

「2つ、戦っても勝てない。銀の鐘シルバークロウがあるからね」

逆に、あの主武装さえ封じることができればいいのだが。

「なら、なんとかできるかもしれないよ」

ナガさんがパソコンを操作すると、データが表示される。

「これは」

これなら、行けるかもしれない。

「こんなこともあるのかと……！なんてね！一度言ってみたかったんだよねえ！」

海上200メートル。

そこで静止していた シルバリオ・ゴスヘル 銀の福音 は、まるで胎児のような格好でうずくまっている。

膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。ふと、顔を上げる。

『接近警報。10時方向、距離4500、マツハ3・8』

接近してくる機影を拡大する。

ナターシャは気絶していたが、もし意識があったのなら驚いていただろう。

そのシルエットは

どう見ても「ファイター戦闘機」だったのだから。

『識別名                      ゴーストエース』

No.15 アウト・オブ・コントロール(後書き)

福音 も暴走し、いよいよ原作介入が強くなってきます。

「こんなこともあろうかと」

私も一度言ってみたいセリフですね。

「戦闘機」が出てきますが、可変機ではありません。  
いずれ出したとは思ってますが。

詳しくは次回。

ではまた次回！

## No.16 ドッグ・ファイター

自身が弾丸になったかのような加速感。

PICではなく揚力によって空を飛ぶ爽快感。

ISでは味わえない高揚感に、レイルは心を躍らせた。

「これが、『ドッグ・ファイター』……！」

『敵機補足。距離4000』

数十分前。

「まず1つ目の問題はこれで解決よ！ ゴーストエース 用一機能特化専用パッケージ《オートクチュール》、その名も『ドッグ・ファイター』！」

「これ、戦闘機……ですか？」

モニターに映し出された三面図を見る。

センサーの集合体である「機首」。

ISを保持するための「胴体」。

F-15にも似た可変翼は、ウェポンラックも兼ねているようだ。

そして脚部には、エンジンポッド兼燃料タンク。

その全体図は、もはやISとは呼べない。

「正確には、追加装備一式を装備するところという見た目になるのよ。空力まで考慮して設計すると、まあやっぱり戦闘機になっちゃうワケ！」

ナガさんはパソコンを更に操作し、

「コイツはね、なんとIS本体のエネルギーをほとんど使わずに

マツハ4で飛べるスグレ物よお！」

「すごい！これなら……」福音にも追いつける！ナガさん！さつそく量子変換をインストール」

ナガさんはオレを手で制すと、

「言つたるお、『こんなこともあるうかと』ってな。点検のついでに入れといたよ。さて、もう1つの問題の方は」

福音 もこちらを捉えたようだ。

エネルギー消費抑制のためのゴーストエースのスリープを解除。

シールドバリアー、再展開。

ハイパーセンサーが起動し、福音に照準を合わせる。

全武装のロックを解除。

左右の翼に懸架された小型ミサイル12機、機首内蔵のレーザーガトリング機銃、準備よし。

両者の距離が残り1000を切る。

「……ファイア！」

12機の短距離誘導ミサイルが福音に迫り、機首からの光軸が追いつがる。

だが、ミサイルは福音の「銀の鐘」シルバークロウに全て撃墜され、レーザーは回避される。

そのセンサーが、ぎらりとオレを睨む。

ゴーストエースに向けて容赦ないエネルギー弾が放たれる。

「ドッグ・ファイター」は戦闘機以上の速度を出せるが、戦闘機以上の旋回性能は無い。

完全に回避不可能だ。

しかし、空力を無視すれば話は別だ。

ぐりん、と戦闘機にはありえない挙動で「ドッグファイター」が宙返りし、光の矢をかわす。

AFC。

機体周囲の流体を操作することで空気抵抗すら無視できる能力。出力を上げれば、航空力学に縛られた戦闘機を解放することだってできる。

宙返りの勢いで 福音 と正対し、そのまま突っ込む。

(ナガさん、すまねえ!!!)

「強制解除！」

戦闘機のシルエットがバラリと崩れ、ゴーストエース が現れる。

直後、パージした「ドッグ・ファイター」に「銀の鐘」の光の矢が次々と突き刺さる。

爆発し、火球と化した「ドッグ・ファイター」の残骸を破り、「メタルブレイカー」の「釘」が 福音 を掠める。

「ッ！ハズしたか！」

「ラピッドレイ」を連射しながら上昇、福音 よりも高高度に出る。

『敵機Aの撃墜を最優先』

複数のエネルギー弾が迫る。

回避しながら16連ミサイルポッドを呼び出す。

本来なら、その重さからゴーストエース にはめったに載せない武器なのだが、今回の作戦には必要不可欠だ。

「食らえ！」

全弾発射。

16機の誘導弾が銀色の天使を追いかける。

だが、いずれも回避されたり撃ち落とされたりして直撃できない。

さらにエネルギー弾が放たれる。  
フレアを撒きながら回避。  
とにかく動きまわる。  
動きを止めたらやられる。

(この辺か…！)

銀色の天使から光の矢が放たれる。  
直撃コース。  
回避は間に合わない。  
だが。

「成功だツ！！」

突然、光の矢が弾けた。  
爆発したのではない。  
拡散したのだ。  
オレに直撃するはずだった矢は、ひとつ残らず碎け散る。  
さつきまで、闇雲にミサイルを撃っていたわけではない。

ビーム拡散膜。

「ドッグ・ファイター」やミサイルポッドから発射された28機のミサイルには、全てこれが含まれている。

爆発の際に撒き散らされた粒子は、ビーム兵器に触れると蒸発してエネルギーを拡散させる性質を持つ。

どうも、福音を知ったナガさんがひと泡吹かせてやろうと思っ  
って開発したものらしいが、

(お望み通り、ひと泡でもふた泡でも吹かせてやる！)  
これなら、相手の攻撃を気にせずに戦える。

「メタルブレイカー」を2発放つが、避けられる。

「ドッグ・ファイター」とミサイルポッドで拡張領域を埋め尽くしてしまっているため、「メタルブレイカー」のマガジンは積み重なった。

残り7発。

ムダ弾は撃てない。

拡散膜を楯にしながら移動する。

ビーム拡散膜はあまり長くは持たない。

ならば、一気に決着を付ける必要がある。

「それなら！」

拡散膜を突っ切って 福音 に突っ込む。

もう拡散膜の保護は無い。

当然のごとく光の矢が降り注ぎ

オレの目の前で弾け飛んだ。

これまたAFC。

機体の周囲の流体を操作するこの能力を使い、オレは周囲の空気ごと拡散膜を機体に纏っていたのだ。

オレが撃墜されるものと判断していたのだろうか、福音の動きが鈍る。

「もらったああ!!」

至近距離から「メタルブレイカー」を放つ。

オレンジ色の閃光が 福音 の片翼を根元から引き千切る。

「よし」

福音 の体勢が崩れる。

もう一撃!

今度はもう片方の翼を

ガシィッ! と「メタルブレイカー」の銃口が掴まれた。



「な」

片翼の天使が、その砲口をオレに向ける。

慌てて銃を離し、スラスタ加速で離脱する。

直後、光の矢が殺到し、「メタルブレイカー」が爆散する。

「くそっ…！」

「ラピッドレイ」を撃つが、福音は失った片翼の分、むしろ軽くなったのではないかと思えるような機動で楽々と回避し、こちらに迫る。

光の矢が放たれ、回避しようとするが、一発が右腕に直撃し、アーマーが爆ぜた。

「しまった…！」

右腕のアーマーが吹き飛ばされ、生身の腕だけが残る。

しかも、今の衝撃で体勢を崩してしまった。

一気に加速した福音はオレの懐に飛び込み、腕を伸ばしてオレの首を掴む。

「ぐ……あ……！！」

一旦掴まれてしまうと、ゴーストエースにはそれを引き剥がすだけのパワーが無い。

残った左腕のレーザーで応戦しようとしたが、もう片方の腕でそれを封じられる。

さらにその片翼がオレに向けられる。

（やられる　　！）

その砲口がオレに

ドンツ！と、福音の頭部に砲弾が直撃した。

衝撃でオレは開放され、すぐに離脱する。

『初弾命中。続けて砲撃を行う！』

オープン・チャンネルで女の声が響く。

砲弾が来た方向を拡大すると、5キロ離れた先に、黒いISSが見えた。

データ照会。

ドイツ第3世代型 シュヴァルツェア・レーゲン。

『こちらISS学園所属、ドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒだ。ここは私たちが引き受ける！』

ISS学園の代表候補生。

専用機持ちか。

『こちらはアメリカ合衆国レゼリオン社テストパイロット、レ…レイラ・スカイウォーカーです。救援、感謝します』

こんな時にまで、機密を守らなければならないとは。

ちなみに、こんな時にまでデータ上は「レイラ・スカイウォーカー」で登録されている。

機体のダメージジエック。

右腕アーマーと「メタルブレイカー」を喪失したが、それ以外に大したダメージは無い。

『こちらはまだ戦闘続行可能です。それに、1機だけで太刀打ちできる敵ではありません。この場にとどまらせてもらいます！』

両肩に大型砲を装備した シュヴァルツェア・レーゲンは、なおも 福音 に砲撃を加える。

だが、その距離が次第に縮まっていく。  
まずい。

あの砲撃型の機体では、素早い回避など望めまい。  
接近されたらアウトだ。

『逃げ』

『私達が1機だけだとも？』  
別の女の声。

レーゲンの目前まで迫った 福音 が突如として弾き飛ばされる。

弾き飛ばしたのは、青いISだった。

（あれは、イギリス製の ブルー・ティアーズ …！？形が少し違うが…パッケージか？）

ステルスモードからの強襲だった。

ブルー・ティアーズ は、さらに手にした大型のライフルで

福音 を撃つ。

『イギリス代表候補生、セシリア・オルコットと ブルー・ティアーズ ですわ』

「まさか、他にも」

言ったそばから、 福音 を背後から別の機体が襲う。

オレンジ色の機体は、手にした2丁のショットガンを浴びせ、福音 の体勢が崩れる。

「ラファール・リヴァイブ か…！」

『正確には、ラファール・リヴァイブ・カスタム？ だけどね』

リヴァイブ は「銀の鐘<sup>シルバー・ベル</sup>」の攻撃をシールドで防ぎ、素早く呼び出したアサルトカノンで 福音 を撃つ。

さらにオレの「ラピッドレイ」と ティアーズ と レーゲンからの射撃が加わり、 福音 がじわじわと消耗する。

『優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

光の矢をばら撒くと、スラスター全開で強行突破を図る。

「させるか…！」

スラスター全開で 福音 に立ちふさがり、レーザーの連射を浴びせる。

足止め程度だが、ムダにはならなかったようだ。

次の瞬間、赤い炎のような弾丸が 福音 を打ちすえた。

海面からさらに2機のISが飛び出す。

片方は5月以来の対面となる 甲龍<sup>シエンロン</sup> だが、もう片方の赤い機体はデータにも無い。

『離脱する前に叩き落とす!』

『アンタ、この前のレイラさんだっけ!よろしく!』

『そうか、5月の時の…!』

さらに両肩から赤い炎をまとった弾丸が放たれる。

『こちらこそ、よろしく』

5月と言えば

「ところで、オリムラさんは?」

『あいつは 今は、来れない』

『…そうですね。レイラさん、でしたっけ?ひとまずよろしくお願  
いしますわ』

『来るぞ!』

『「銀の鐘」<sup>シルバークロウ</sup> 最大稼働 開始』

福音 から眩いほどの光が爆ぜ、光の矢が一斉に放たれる。

「まずい!全機に通達!ビーム拡散膜がまだ残っているはずです!  
それを楯にしてください!」

同時に散布状況のデータを5機に送る。

『『了解!』』』

『『僕の後ろに!』』

ティアーズ と レーゲン と 甲龍 がそれぞれ拡散膜を楯  
にし、 リヴァイブ がエネルギーシールドで赤い機体を守る。

オレは拡散膜を楯にしつつ、AFCで空気ごと拡散膜を纏い直す。

だが、 福音 はなおも連射を続け、拡散膜も効果が薄れてくる。

『それにしても……これはちょっときついね』

リヴァイブの物理シールドが1枚破壊される。

「学園の皆さん、そちらに作戦は？」

『ラウラ！セシリア！レイラさん！足止めをお願い！』

突撃体勢の 甲龍 と赤い機体を見やる。

なるほど。

「了解！」

『言われずとも！』

『お任せになって！』

リヴァイブ が後退し、入れ替わりにオレ達が3方向から射撃を始める。

ティアーズ と ゴーストエース の高機動を活かした移動射撃と レーゲン の砲撃に、福音 の足が止まる。

『足が止まればこつちのもんよ！』

『もらったあああ！』

赤い機体が日本刀で、甲龍 が巨大な青龍刀でそれぞれ斬りつける。

だが、至近距離から「銀の鐘<sup>シルバークロウ</sup>」を浴び、甲龍 が海に落ちる。

『鈴！おのれ……！』  
その隙をつき、赤い機体の刀が福音 の残った片翼を斬り裂いた。

両方の翼を失った銀色の天使が、崩れるように海に墮ちる。

「しまった！ナターシャさん……！」

スラストを噴射し、急降下する。

海面に近づき

刹那、オレの視界が光に覆われた。

「な………！」

海面から爆発的に広がった光に、数十メートルほど吹き飛ばされた。

「一体何が」

海面が、そこだけ時間が止まっているように球状にへこんでいる。

その球の中心に　　うづくまる　福音　がいた。

「まずい！これは

セカンドソフト  
第二形態移行だ！！」

レーゲンの操縦者　ボーデヴィツヒだったか　が叫ぶ。

その声に応えるかのように、　福音　が顔を上げる。

そして、その頭部からゆっくりと光が沸きだす。

「っ、翼が」

エネルギーの翼を生やした銀色の天使が、静かに舞い上がる。  
そのバイザーが、ぎらりと反射し、オレ達を睨み据えた。

## No.16 ドッグ・ファイト（後書き）

福音編もいよいよ佳境です。

原作のヒロインズも揃ってきました。

ドッグ・ファイターは速攻で使い捨てられました；  
元々長距離移動用の装備なので戦闘力はありません。

ではまた次回！

## No.17 ベイル・アウト

「バカな！第二形態移行だと！？」  
セカンド・シフト  
ハワイの基地。

指令室の椅子から立ち上がり、イーリス・コーリングは叫んだ。  
スクリーンには、エネルギー翼が生えた シルバリオ・ゴスベル 銀の福音 の姿が映し出されている。

天使のような神々しさをもつソレは、本当に人の手で造られたものなのかと疑ってしまう。

「なんてえエネルギー量だよ！ケタが違いすぎる！」  
桐沢博士もモニターにかじりつくように見入っている。

「アレは 代表候補生と共闘しても、勝てるのか……？」  
「俺からは何とも だめだ！やられた！」

モニターの中では、あれだけの強さと連携を誇った代表候補生たちが次々と落とされていく。

「ぼーず！逃げる！そいつは 」「  
『ダメだ！まだ戦えます！それに、ナターシャさんが 』  
ドンツ という音と共に、映像と音声が続絶える。

「通信途絶！？」

ゴーストエース の視覚情報を映像として送信してもらっていたのだが、それが途絶えたのだ。

おそらく被弾で通信ができなくなったのだろう。  
最悪、撃墜された可能性もある。

「レイル、ナタル！無事でいてくれ……！」  
イーリス達には、ただ祈ることしかできなかった。



『セシリア!』

福音 からの一斉射撃を受けて ブルー・ティアーズ が海に沈む。

この戦場で残っているのは、オレ ゴーストエース と  
赤い機体 紅椿<sup>あかしほき</sup> と言うらしい だけだ。

オレも先ほど被弾してしまい、左足のアーマーがごっそり吹き飛んでいた。

『レイラさん!まだいけるか!?!』

紅椿 の操縦者 ホウキとか言った が叫ぶ。

「どうにか!くっ… エネルギーがそろそろ危ないか!…」

オレが墜ちるのも時間の問題か。

それでも、攻撃の手は緩めない。

左腕からレーザーを連射し、 福音 の足止めに専念する。

『おおおおおおお!』

その隙を付いて 紅椿 が両手の刀で斬りかかる。

かわされるが、なおも 紅椿 は加速し、刀を振るう。

その出力に、次第に 福音 のほうを押されていく。

「行ける!」

オレもひたすら足止めに専念する。

レーザーの連射に 福音 が体勢を崩した。

『 これなら!』

その隙を見逃さず、 紅椿 が必殺の突きを構え

唐突に、その四肢から力が抜けた。

『 なっ!また、エネルギー切れだと!? ぐあ!』

その隙を見逃さず、 福音 がその首を捕まえる。

まずい!

「 こんのおおおお!…! 」

レーザーを連射しながら突撃する。

かくなる上は、体当たりしてでも敵を止める。  
だが、それまでだった。

福音 の翼から光の矢が放たれ、オレに迫る。

( 接近しすぎた…！ )

後悔した時には遅く、かわしきれないエネルギー弾が直撃し、シールドごと左腕アーマーを吹き飛ばす。

さらに数発が直撃。

(ごめん、ナガさん…イーリ教官……ナター…シャ…さん…)

ズタズタになった ゴーストエース が、崩れるように墜ちる。

意識が薄れていく。

機能不全を伝えるウィンドウがいくつも開く。

墜落を訴えるアラームがやかましく聞こえる。

福音 の翼が 紅椿 を包み込む。

アイツもこれまでか

そう考えたのを最後に、意識が暗闇の中に墜ち

ギョーン！ と赤い閃光が 福音 を吹き飛ばした。

「え…？」

意識が戻る。

慌てて墜落寸前の機体を立て直す。

(荷電粒子砲…！それも、高出力の…！)

この状況で、誰が。

『俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！』

見上げると、そこには白く、輝きを放つ機体がある。

「白式…なのか？」

機体の意匠は、なんとなくだが5月に共闘した 白式 に似ている。

だが、あれはあんなシルエットだっただろうか。

『一夏っ！一夏なのだな！？体は、傷はっ……！』

紅椿 の操縦者が声を詰まらせながら叫ぶ。

白式 らしきその機体が 紅椿 をいたわるように近づく。

イチカ…と言うことは、やはりオリムラと 白式 なのだろう。

おそらく、第二形態移行でもしたのだろう。  
セカンド・シフト

(……そっぴや)

5月を思い出す。

(アイツに借りを返さねえとな)

機体の損傷チェック。全身のアーマーのほとんどが使い物にならないが、両肩と背中のスラスタは辛うじて動く。

エネルギーは残りわずか。

ネットクなのが、攻撃武器が無くなってしまった事だ。

だが、まだ最後の武器がある。

(ま、絶対にやりたくなかったんだがな)

だがそれでも足りない。

せめて最後に一矢報いるためには、決定打が

ふと周りを見渡す。

(ある！最後の切り札が ……！)

上空では、再び攻撃を仕掛ける 福音 と 白式 の攻防が始まっていた。

ならば、急ごう。

「切り札」の準備を

「ダメだあ！完全に通信ができない！」

基地では桐沢博士が奮闘していたが、どうやら通信は回復しないようだ。

「ちくしょう！せめて状況が分かれば

」

その時、作戦室のドアから一人の下級士官が入ってきた。

「桐沢博士！イーリス国家代表！お電話です！」

「……電話！？こんな時に！後にしてくれ！」

しかし、下級士官は少し慌てながらも、

「それが…准将からです。『彼』の処遇についてのお話があるそうです」

イーリスと桐沢は、顔を見合わせた。

オレは「切り札」の準備を終えると、プライベート・チャンネルを開く。

「久しぶりね、オリムラくん。この前はごめん！」

『あ、あの時の…！いえ、そんな！オレもあの時は無我夢中で…』

考えてみれば、もう機密を守る余裕もないか。

「借りを返させてもらう」

『え？』

「オレがアイツの攻撃を封じる！その隙に決めてくれ」

『そんな、その機体でどうやって』

「福音 の操縦者を頼む」

最後まで聞かず、ボロボロになった脚と腰の装甲をパージする。

最後の賭けを行うには、ギリギリのエネルギーしか残っていない。

ムダな重量を背負う余裕は、ない。

「行くぞ……！！」

スラスター全開。

福音 との距離はいささか遠い。

だが、問題は無い。

それを詰めるだけのスピードが、この ゴーストエース にはあ

るのだから。

福音 がこちらに気付くが、もう遅い。

今度は、反撃の時間すらやるつもりはない。

ドンツ！ と ゴーストエース がさらに一気に加速する。

イグニッション・ブースト  
瞬時加速。

ただでさえ高速な ゴーストエース のそれは、もはや瞬間移動と見紛うスピードだった。

一直線に 福音 まで向かうが

『ダメだ、あれじゃあ足りない…！』

オリムラが叫ぶ。

その通りだ。

これだけでは 福音 まで届かない。

その翼が輝きを増し、エネルギー弾を撃とうとしているのが分かる。

だが。

「1回だけだと思っなよおッ！！」

もう1回、イグニッション・ブースト瞬時加速を行い、さらに距離を詰め

「イーリス・コーリング直伝」

福音 との距離が爆発的に縮まる。

リボルバー・イグニッション・ブースト  
「個別連続瞬時加速！！」

イグニッション・ブースト最後の瞬時加速をかける。

その勢いで 福音 に超加速の体当たりをかける。

福音 が弾き飛ばされ、あまりの衝撃に半壊した ゴーストエース のアーマーが砕け、エネルギーがゼロになる。  
(特攻なんて、パイロットになっても絶対にやりたくない事だったのにな……)

今度こそ、全ての武器を使い果たした ゴーストエース が破片を撒き散らしながら墜落する。

福音 がオレに向けて一斉射撃を撃とつとする。

「ここまでだな…」

その翼の輝きが最高潮に達し

「ここまでだな、

シルバリオ・ゴスベル  
銀の福音」

突然、福音 のエネルギー翼がノイズでも走ったかのように乱れた。

予想外の出来事に、福音 も射撃をすることができない。

ビーム拡散膜。

周辺空域に残留していたそれを、AFCを使って ゴーストエース に纏わりつかせ、特攻の際に飛び散らせたのだ。

飛び散った拡散膜がエネルギー翼に干渉し、結果として、一時的にあの翼を封じることができたのだ。

ゴーストエース が海に沈む。

オレの意識も薄れていくが、今度は悔いはない。

やれるだけの事は出来たし、それに

目を閉じる前、最後に見たのは翼が乱れた 福音 に斬りかかる白式 と 紅椿 だった。

あいつらなら、心配はいらないだろうな。

オレの意識は、今度こそ完全に閉じた

：

## No.17 ベイル・アウト（後書き）

これにて 福音 戦終了です。

ビーム拡散膜とAFC様々でした。

AFCを考えた当初は、こんなに便利になるとは思わなかった…

それではまた次回！



No.18 スカイ・ドリーム

…

空。

なにもない虚空。

ああ、これは夢なんだな。

どこかでそう思いながらも、オレは虚空を漂う。  
色のない虚空が、青く染まって

空。

太陽が眩しい青空。

コクピットの外を、雲が流れていく。

「レイル。これが大空だ」

複座の戦闘機、その操縦席に座る父さんの声。

ぼくは小さな体を後部座席に預け、コクピット越しの空を見ていた。

ぼくもとびたい。

いつか、とうさんのようなパイロットになって、「ぶれいずせぶん」になるんだ。

そういつと、父さんは

「おまえが大きくなったらな」  
なんて言う。

はやくおおきくなりたいな

空。

雲ひとつない、青空。

なんでも、日本にすごい敵が現れたらしい。

ほんとにだいじょうぶなの？

「大丈夫だよ、父さんは必ず帰ってくるから、な。いい子で待ってるんだぞ」

ぼくの頭を撫でてから、自分の機体に乗る。

赤い文字で「7」と描かれた戦闘機が、青空に飛び立つ。

母さんが、それを心配そうな顔で見上げていて

空。

窓の外に見える、嵐の空。

父さんの大きな背中が沈んで見える。

「もうダメなんだ。パイロットの時代は終わったんだ」

母さんがそれを支えようとする。

「そんな…しっかりして。パイロットの仕事がなくなったわけじゃ

」

「もうお飾りなんだよ！男が空を飛べる時代は

終わったん

だ」

父さんが泣いている。

父さん、もう飛べないの？

ぼくは、飛べないの？

空。

灰色に染まった、曇り空。

「土は土に、灰は灰に、塵は塵に……」  
黒い服を着た大人たちに囲まれて、棺が土に埋められていく。  
オレと父さんは、ほとんど何も言えなかった。  
母さん。

あの優しかった母さんは、いなくなってしまった。

空。

三日月の夜空。

親父！もう飲みすぎだ！

そう言っても、親父は何も返さなかった。

ただうわごとで、空が飛べない、母さんがいないって呟いてるだけ。

親父。なんでこうなっちまったんだよ！ISのせいか！？

親父は少しだけ顔をこっちに向ける。

だったら、オレがやってやるよ……！！

空。

教室の窓から見える、すこし暮れ始めた空。

「レイルくん、キミもボクの家で遊ばない？」

そう言ってくれたクラスメイトがいた。

オレはいい。

「だからアイツなんか誘うなって言ってるだろ。アイツ毎回あんな感じだぜ」

「もういいや、行こ行こ」

クラスメイトが帰っていく。

オレも帰ろう。

空。

窓の外にオリオン座が光る夜空。

スタンドの光が机を照らす。

なるほど、PICってこういう意味なんだ。

難しい所もあるが、なんとか理解できるまで調べてみる。

家にはだれもいない。

親父はようやく再就職し、サラリーマンとして海外を飛びまわっている。

あれから、親父とはあまり話さなくなった。

帰ってきてても、一緒に飯を食うことすらない。

……別にいいけど。

空。

砂漠の夏空。

暑い……

空に2機のISが飛ぶ。

片方は アラクネ 。

もう片方の黒いISの装甲が開き、白い細身のISが出てくる。

さあ、目覚めの時間だ。

オレの手が白いISの手と触れ合い

目を開ける。

まず見えたのは、白い壁。

あ、天井か。

首を動かすと、窓にかかったカーテンが見える。

反対側に首を動かすと

「目が覚めたか」

黒いスーツの女性が座っていた。  
すらりとした長身に、黒い髪と鋭い眼を持つ女性だった。  
？

この人、どこかで

「私はIS学園の教員、おりむらちふゆ織斑千冬だ。君はうちの生徒に救助されて  
病院に搬送された」

思い出した。

この人が世界最強のIS操縦者、モンド・ケロツンIS世界大会初代「ブリュンヒ  
ルデ」か。

「あなたが『ブリュンヒルデ』ですか？ オレは」

「その呼び方はあまり好きではないんだ、できるなら名前で呼んで  
くれ、レイル・スカイラインくん」

「……！オレの名前を」  
言い終わる前に、ベッドの上に何か置かれた。

「医者によると、幸いケガは無いそうだ。体は動くか？」

言われて、手足に力を込めてみる。

強い疲労感があるが、動く。

少し上体を起こす。

ベッドの上に置かれたものも気になるが、今はそれよりも気にな  
ることがある。

「シルバリオ・ゴスベル銀の福音 はどうなったんです？」

「機密は守ってもらおう などと言っても無駄か。君自身、機密の  
一部だ」

オリムラさんは脚を組み直し、

「無事に停止した。操縦者も無事だ。後で会ってみるといい」

「そうですか…」

ほう、と胸をなで下ろす。

「この暴走事件は機密となる。君のことも含めてなるほど。」

「しかし驚いたな、まさか織斑以外に男のIS操縦者がいたとは」  
ん…？

オリムラってファミリーネーム、もしかして

「おおかた政府ぐるみで機密にされていたんだろう」

「ええ。ま、バレちまいましたからね。国に戻ったら何言われるのやら」

「その事についてだが 少々待て」

そう言つとオリムラさんは備え付けの電話の受話器を取り、誰かと話し始めた。

「 私だ。 …… ああ。 今代わる 」

オレに受話器を差し出す。

それを受け取ると、

『 レイル、無事だったか！ 』

「 教官！ ええ、 どうか無事です。 」

『 早速だが、 本題だ。 何のことは分かるな？ 』

「 はい 」

IS学園側にオレの正体が露呈してしまった以上、オレの処遇も何らかの形で変わるのだろう。

『 おまえの今後の処遇についてだが 』

「 ごくり、と唾を飲み込む。 」

『 ぼおおおうずうう！ 入学おめでとオ〜〜！！！！ 』

あまりの大声に、キーン、と耳が痛くなった。

「 ナガさん！？ 一体何を！ あと鼓膜破れるかと思いましたよー！ 」

『 いやースマンスマン 』

「 で、入学ってまさか 」

『そ、ぼーずはIS学園に転入してもらったことになったワケ』

「え！？だってオレの事は機密じゃ」

『だから、それがバレちゃったつしよ。「ばれちゃあ仕方ない。このままだと国際社会に何言われつか分からないし、コストもかからないからいつそ学園に入れちゃえ」って事らしいよ』

「がくり、と力が抜ける。」

「そんなんでいいのか、上層部。」

『ま、表向きはそんな感じで、裏では秘密主義の高官がなぜか次々と降ろされてるんだけどね』

「はあ…随分と対応が早いですね」

「皮肉も込めて言ってみた。」

「大方、最初からそうするつもりだったのだろう。」

『ま、あそこまでやるつもりは無かったんだけどね。とゆうワケで一度こつちに戻って来てよ。事情聴取とか、ゴーストエースの修理とかあるからさ』

「へいへい」

『それじゃ、ばいびー』

「切れた。」

「受話器を置く。」

「おまえの膝の上にあるのが転入関係の書類だ。詳しい事はそこに書いてあるから、夏休み中には出しに來い」

「分かりました」

「それだけ言うと、オリムラさんは踵を返し、戸口に向かう。」

「あの！」

「なんだ」

「弟さん…オリムライチカに伝えてくれませんか？『借りは返した』って」

オリムラさんは戸口で立ち止まると、  
「入学してから自分で言え。おまえには、その時間があるのだから」  
な

そう言っつて病室から出て行つた。

「……そうさせてもらいますか…ふああ…」

とたんに眠気が襲つてきた。

さっきまで眠っていたはずだが、よほど体が疲れてるようだ。

そうしてオレは、再び眠りに落ちた

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

月明かりが照らす岬。

そこに、織斑千冬と

篠ノ之束がいた。

千冬は木に背を預け、束は岬の柵に腰かけて話をする。

「」

「」

「」

「」

「……そうだな。私もひとつ例え話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違  
わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動  
けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが使える、  
と言うことになるな」

「ん？でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。おまえは、そこまで長い間同じものに手を加えること  
はしないからな」

「えへへ。飽きるからね」



「……で、どうなんだ？とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「では、とあるアメリカの男子については？」

「いやー、れっくんには何もしてないよ。むしろ原因はコアじゃないかな。コアナンバー007。人生最大の失敗作だと思ってたんだけど、まさか男の子が動かしちゃうなんてね」

「『れっくん』か……。まあいい。次の例え話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うないね」

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ」

「……」

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ。それに「それに？」

「わざわざハワイ沖で試験中のISを暴走させることで、とあるイレギュラーをIS学園に誘導する。天才の妹や、世界で唯一ISを使える男子と同じ場所にな」

「…へえ。すごい天才がいたものだね。まさに一石二鳥だね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、12カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

東は答えない。

千冬も、もう言葉は続けない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹く風が、少しだけ強くなる。

その風の中、何かを呟くと、忽然と束は消えた。

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかった。

月明かりが、腰かける人間がいなくなった柵をぼんやりと照らしていた。

翌朝、ナターシャさんと再会できた。

昨日はよく眠れたせいかわ調子も良く、ナターシャさんは「あの子」に守られていたから大丈夫、だそうだ。

お互い、色々な話をした。

特に、ナターシャさんからは 福音 の事をたくさん聞いた。

誰がこんな事件を仕組んだのかは分からない。

それでも、ただ一つ分かるのは

「… 福音 は最後までナターシャさんの事を守っていたんですね」

そう言つと、ナターシャさんは少しだけ笑顔と悲しみが混じったような表情をした。

IS学園に入学することになった、と言つと、彼女は祝福してくれた。

ついでに、「ブリュンヒルデによろしく」だそうだ。

あの人、その呼び名は好きじゃないと言っていたが。

で。

「もう、いいんですか？」

こくり、とナターシャさんが頷く。

少し離れた所には、数台の大型バスが停まっている。

IS学園の生徒が乗るバスだ。

ナターシャさんはバスに入ってオリムラに挨拶し、オリムラさん（女性の方）と何か会話を交わしてきたようだ。

会話の内容は気にならないし、聞く事もない。

「あなたはいいの？」

オレは

「ガラじゃないですし、学園でまた会えます。それにバスを見る。」

一番前に座っているオリムラが何やら女子数人にペットボトルを投げつけられていた。

「…あなたがまいた種じゃないですか、アレ？」

「思ったより素敵な男性だったから、つい」

「おまけに」

自分の服装を見る。

ISスーツで外出するわけにもいかないのは分かるが

どこから調達してきたのか、黒いスーツ（サイズがピッタリ）にサングラス、という格好だった。

「いいじゃない、カッコよくて。ボディガードみたいよ」

…まあ正直、鏡を見たときは自分でもビビったが。

「そりゃどーも」

改めてオリムラを見る。

なんか、4本のペットボトルを見て、げっそりとしている。

バスのエンジンがかかる。

ふと、オリムラが顔を上げ、オレの方を向いた。

目があったので（サングラス越したが）、思わず口元が緩んだ。

と、オリムラがバスの窓を開ける。

「あり？」

いきなり何かが投げつけられた。

「んな！？」

キャッチすると、500ミリのペットボトルのグリーンティーだった。

何のつもりか分からずオリムラを見ると、軽く手を振ってきた。

「ははっ」

オレも、軽く手を振る。

バスが走り出す。

なんかオリムラが数名の女子から睨まれていたが。

「仲良くやっていけそうじゃない」

ナターシャさんがバスを見送る。

「そうですね。今度ドクターペツィでもお返ししますよ」

「……それ、日本では罰ゲームに使われるそうよ」

そうなのか。

オレは割と好きなんだが。

冷えたグリーンティーのペットボトルを開け、一口飲む。

うまい。

夏にはやっぱり、冷たい飲み物だな。

……そういや、同年代の人間とこうして笑い合ったのって、何年ぶりだろう。

まだ昇りきっていない太陽が、眩しかった。

No.18 スカイ・ドリーム（後書き）

これでようやく原作3巻終了です。

次回からは原作4巻時点、つまり夏休み編です。  
なので本格的な入学はもう少しお待ちください。

私もドクペは苦手です。

それではまた次回！

## No.19 セブン・エンブレム

8月。

「暑い……」

レイル・スカイラインはベッドから起き上がると、枕元の時計を見る。

もう10時を過ぎていた。

別に寝坊したって構わない。

世間では夏休みだし、何よりオレはまだ学生じゃない。

「今日は訓練もねえし　　そうだな、荷物でもまとめとくか」

顔を洗い、着替えを済ませる。

かなり遅い朝食は、コーンフレークにたっぷりのミルクで済ませた。

「よし、やるか！」

シルバリオ・ゴスヘル  
銀の福音

の暴走事件から一カ月ほど。

結局あれからは事件の事情聴取とIS学園への転入手続きであったという間に過ぎた。

あれからいつもの訓練はない。

イーリ教官のISも修理中だし、ナターシャさんも査問委員会が  
あり忙しい。

何より、オレ自身、未だに　ゴーストエース　が直ってないのだ。

福音　戦での無茶のおかげで、ダメージレベルがD寸前まで行  
ったらしく、オレが日本に行く前までには直るとのことだ。

と言うワケで、手元に愛機がないのは寂しいけど、オレは割と元  
気だったりする。

「よ、ようやく終わったあ……」

桐沢永樹は椅子に座ったまま、体を伸ばす。

「お疲れ様です主任。コーヒーです」

レゼリオン社の開発室で、永樹はようやく直った ゴーストエースを見上げた。

助手が持ってきたコーヒーを受け取り、ぐいと飲む。

「ふいー……… ったく、派手に壊しやがってあのぼーず……」

福音 戦でのダメージの修復は、もはや作り直しに等しかった。

「しかし、思ってたよりも推進系のダメージがでかいですね。やはり個別連続瞬時加速が効いたんでしょうか？」

ゴーストエース のスラスタは、瞬時加速イグニッション・ブーストのような大出力は想定されていない。

そこに3連続で瞬時加速イグニッション・ブーストをかけたのだから、かなりの過負荷である。

だが、これは

「いや、このダメージは短時間で出来たモンじゃない。長時間の蓄積だな」

「……と言つと、彼、普段から」

「だろうねえ。あのぼーず、段々使い方が荒くなってやがる。稼働データ見てみな、最初とは大違いだよ」

助手はデータをみると、

「うわあ……スピードが段違いですね。反応速度も上がってる……」

「きつと、こいつに鍛えられてんだろうな」

新品の白い装甲に、俺の顔が映っていた。

と、開発室のドアが開いた。

「失礼します」

入ってきたのは、開発室には似合わない、端正な赤毛の少女だっ

た。

「エリーゼ嬢？どうしたのさ突然」

エリーゼ・レゼリオン。

レゼリオン社の社長令嬢にして、永樹達をレゼリオン社に迎えてくれた恩人である。

IS学園の2年生だが、今は夏休みでこっちに戻ってきている。彼女は封筒を取り出すと、

「これを渡しに来ました。これ、『彼』にも渡していただけですか？」

「えーと、この服はさすがに着ないよな……」

オレは「あっち」に持っていく荷物をまとめる。

生活用品、服、携帯の充電器、愛用のノートPC……

「……つと、コイツは慎重に扱わないとな……」

コイツ 数個の箱 をダンボールに詰める。

一応緩衝材に包んでおいたが、中身が壊れないように慎重に詰めていく。

生活必需品ではないが、どうしても持って行きたかった。

「ま、こんなもんかな」

気付けばもう夕方になっていた。

と、

ピンポーン、とインターホンの軽快な音が鳴った。

玄関に向かう。

開けると

「ただいま……」



「なんだ、帰ってきたのか、親父…」

「ガイル・スカイライン。」

「かつての空軍のエースにして、オレの親父だ。」

「現在はサラリーマンとして海外に飛びまわっているこの男とは、  
とある事情から疎遠な状態だった。」

「これから夕飯作るけど、食うか？」

「ああ…」

「だが、帰ってきたのなら丁度いい。」

「自分の進路ぐらい、話しておくべきだ。」

「…おまえ、ハイスクールに進学してないのか？」

「パスタを茹でてると、親父が話しかけてきた。」

「ナガさんから聞いたのか？」

「ああ」

「とはいえ、オレの事は極秘事項だった。」

「おそらく、最低限の事しか聞かされていないのだろう。」

「けど、夏休み終わったら転入することになった」

「そうか…どこに行くつもりだ？」

「親父はインスタントの安い紅茶を飲みながら、夕刊を読んでいた。  
そついや、身内にならもうバラしちやっついていいんだったな。」

「IS学園」

「ブフォオオオ！！ と親父は盛大に紅茶を吹いた。」

「ゲホゲホと咳き込みながら、」

「おま…何の冗談だ？」

「本当だつて。IS動かせるから入学することになったんだよ」

「一人だけ例外がいるらしいが、ISは男には動かせないだろう」

「だーかーらー、オレ動かしちゃったの！」

「なら証拠を見せてみる！ここでIS動かして見せる！」  
「う。」

「いや…今ISない…」

「それみる」

親父の目が、「今日は魔力が足りないから魔法が使えません」と言ってるインチキ魔術師を見る目になってる。

「今は修理中だけど！動かせるんだってば！」

「じゃあなぜニュースにならないのだ」

「機密だったんだよ！レベルA！」

と、ピンポーン、と場違いな音。

「あれ？お客さん？」

玄関に急ぐ。

戸をあけると

「よう。直ったよ」

「ナガさん！ちょっとソレすぐにごください！」

「あ、え？」

ナガさんの手からひったくるように白い腕時計を奪う。

「親父！これを見る！」

ゴーストエースの腕だけを部分展開してずい、と突き出す。

「むむう…！？」

「おー、ガイル。久しぶりだねー」

と、ずんずんと音を立ててナガさんに詰め寄る親父。

「ナガキ！こいつ本当に」

「あ、そっか知らなかったんだよね。丁度一年前ぐらいかな。オレの目の前で起動させちゃってさ」

「…そっか、本当なんだな…」

ようやく親父が落ち着きを取り戻す。

「あのさ、親父」

今なら、言えるだろう。

「オレ、パイロットになるの、諦めてた」

親父は何も言わない。

「けどさ、どんな理屈か知らねえけど、オレがISに乗れるってんなら」

まっすぐに親父の目を見て。

「オレ、飛ぶよ。親父の分まで」

親父はしばらく黙ったままだった。

そして、

「ちよつと待ってる」

と言つて部屋の奥に消えてしまった。

「……？」

一体何なんだ？

「へ、ぼーずもいつちよまえの事言つようになったな」

「そりやどーも」

「おおそうだ、今日はぼーずに渡すもんがあつてな」

「まだあるんですか？もしかして、新装備とか!？」

「いや、そうじゃなくて」

「待たせたな」

親父が戻ってきた。

「親父？」

オレの目の前まで来ると、

「これをやるつ」

親父が差し出したのは、バッジだった。

翼の生えた盾。

空軍のパイロットエンブレム記章だ。

ただし、この記章は他のものとは違う。

盾の中に書いてあるのは、数字の「7」だ。

「これ、スカイライン家のパイロット記章エンブレムじゃないか　！」

初代「炎の7」の手彫りによって刻まれた「7」の記章。  
フレイズ・セラン

以来、この記章は代々受け継がれ、親父もこれを付けていた。  
それをオレに渡すということは

「本当は、おまえが一人前のパイロットになった時に渡すつもりだ  
つたんだがな」

「そんな、オレはまだ　」

「ああ、自分でそう言っているうちはまだ半人前だ。だから、一人  
前になった時に付けろ」

なるほど。

オレはまだまだだな。

「　　分かった。もらっとく」

親父の手のぬくもりで暖まったそれを手に取る。

所々に刻まれた細かな傷は、この記章の年季を物語っていた。

「ホラ、いつまでもしんみりとしてないで飯作れ」

親父に背中を叩かれた。

「へいへい、だだいま作ります。あ、ナガさんもどうぞ。作りすぎ  
ちまいましたから」

「んじゃーお言葉に甘えるわ。それに、俺の話もまだ終わってない  
しね」

茹であがったパスタを、ソースと絡める。

「はい、ミートボールスパゲッティ！」

その頃、エリーゼも夕食の時間だった。

ただし、テーブルに並ぶのはどこの宮廷料理かと思つような料理  
の数々である。

そもそも、大企業の社長であるレゼリオンの家は、絵本に出てく

るような屋敷だ。

その気になれば、大きなパーティーだって開けるほどだ。

そして、エリーゼには「その気」があった。

「ふふ、楽しみです。彼、来てくれますよね」

「エリーゼさんから？オレに？」

ナガさんから渡された封筒には、確かにそう書いてある。

早速開けてみると

「パーティーの招待券！？」

「ああ、レゼリオン社の関係者でパーティーだとさ。ぼーず、スーツぐらいあるだろ？」

「いや、なんでオレが？たかだかテストパイロットですよ」

「だっておめー、エリーゼ嬢に勝ったんだし、第一テストパイロットだったってISの操縦者だろ。相応の資格はあるんだ。むしろ自覚しとけ」

「あ、はい……」

「開催は明後日。俺も招待されてっけど、ちゃんとした服着てけよ。スーツと言えば、日本で着た黒いスーツしか持ってないが、割としっかりとしたスーツだし、あれでいいだろう。」

「んじゃ、飯ごちそーさん」

ナガさんはそのままさっさと出て行ってしまった。

リビングに、オレと親父の2人だけが残される。

皿を洗っていると、親父が話しかけてきた。

「もしかして、おまえのIS、ナガキが作ったのか？」

「え？ああ、そうだよ」

「速すぎて扱いづらいだろう」

「よく分かったな」

「俺の時もそうだったからな。YF-39の時なんて死ぬかと思っ  
た」

「ハハ。親子そろってあの人に振り回されっぱなしか」

「フツ…そうだな」

洗い物が終わり、親父の向かいに腰かける。

「なあ親父。いつまでこつちにいられんだ？」

「仕事が一段落したからな、1ヶ月はいられるだろう」

「オレ、5日後に日本に発つ」

「そうか…：…久しぶりにおまえといられると思ったんだがな」

「…：…オレも、かな…」

今日は、少し穏やかな気分で過ごせた。

No.19 セブン・エンブレム(後書き)

ここから数話、夏休み編が続きます。

近くの本屋に原作7巻が売ってないorz

このまま6巻の内容までやったらどうなっちまうんだよ…

それでは次回！

## No.20 サプライズ・パーティー

「…で、ナガさん、何のパーティーなんですか？」

レゼリオンの屋敷に向かう途中、オレはナガさんに肝心な事を聞いた。

「さあ？夏休み記念パーティーとかじゃね？」

「いやいや、それ記念することか！？」

「春休みとか冬休みにも大規模なパーティーが！？」

「ま、金持ちってそんな感じじゃね？」

「適当ですね…」

「お、あれだ」

「うえー、すげえ…」

目の前には、「屋敷」が広がっていた。

「レイル、この屋敷を見てくれ。コイツをどう思う？」

「すごく…大きいです…」

金持ちってすごい。

ドアの前で使用人に招待券を見せ、やたら大きな扉の中に入る。

「お待ちしておりました、レイラさん、桐沢博士」

ドレス姿のエリーゼさんが待っていた。

彼女の赤い髪を引き立てるような銀に近い白のドレス。

正直、少しドキリとした。

「エリーゼ嬢、こんちやーす」

「ナガさん、挨拶が超失礼です。あとエリーゼさん、オレはレイラじゃなくてレイルです」

「ではこちらへ」

「へいへい」



ってオイ！

「スルー！？二人ともオレの的確なツツコミはスルーですか！？」  
屋敷の会場へと歩く。

「レイラさん、スーツ、とてもお似合いですよ」  
にこり、と微笑むエリーゼさん。  
む。

そんな顔で褒められるとなんか弱い。

「そういやエリーゼさん、今日は何のパーティーなんですか？」  
「ふふ、気になります？」

目つきが少し意地悪になるが、その容姿が加わると魅力になる。

「ま、まあ…ってか、一番重要ですよね」

「うふふ」

「笑ってないで教えてください」

すると、エリーゼさんは少し意地悪な笑みを浮かべながらリモコンを操作する。

ガー、と天井から垂れ幕が降るされる。

なんか書いてある。

なにになに…

祝　レイラさんのIS学園転入パーティー！

パパパパーン、と全方位からクラッカーが鳴らされ、盛大にテープが舞った。

あまりの出来事に頭がしばしフリーズした。

「おめでとうございます、レイラさん」

「ぼーず、おめでとー！」

「あっちでも頑張れよ」

「ブリュンヒルデによるしくね」

「一人前の空の男になってこい」

あれ！？

イーリ教官にナターシャさんに親父まで!?

「な…な…なにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!?!」

オレの悲鳴が、パーティーの始まりを告げた。

……あと、レイラじゃなくてレイルですよ、エリーゼさん。

「……つまり、オレ以外には根回しが済んでいたんですね」

数分後、エリーゼさんを問い詰めた結果がこれだった。

「いわゆる『サプライズパーティー』ですよ、レイラさん」

「ただ規模のデカイサプライズパーティーなんですか!?!あと、レイルです」

「ってか、オレー人のためになに関係者総出の夜会開いちゃったワケ!?!」

……金持ちの考える事って、ワケ分かん。

「けど、オレー人のためにこんなに盛大に…ホントありがたいというかなんというか…」

「いーんだよ!ほらぼーず!とにかく食べ!このステーキ美味いぞ!」

「はあ、いただきます」

ちなみに、そのステーキと言うのは鴨のステーキだった。

…味なんて分かんかったけど。

グラスに注がれているオレンジジュース(高級品らしい)で流し込む。

実のところ、こういう社交パーティーは初めてじゃない。

小さい頃、親父に連れられて軍のパーティーに来た事があった。

あんまり覚えていないが、同じ年の子供がいなかったので子供心

には退屈だった。

けど、今はオレもこの状況にある程度は楽しめるようになっていた。

そんなこんなで一応パーティーを満喫してた時。

「レイラさん、一曲いかがです?」

エリーゼさんからこんな誘いがあった。

それが意味する所は

「オレ、踊り方とか正直分からないですよ。あと、レイルです」

「なら、練習しましょう」

返事も聞かず、オレの手を取って前へ出るエリーゼさん。

…なんか、気恥ずかしい。

ナガさんが2828した目でこっちを見る。

あとで殴つとこころ。

そうして、クラシッくな曲が流れた。

「うー……」

ダンスが終わってから、オレは屋敷のテラスで涼んでいた。

(すげー恥ずかしかった…)

未だに顔が熱い。

エリーゼさんの細い腰に手をまわした時なんか、顔面が プロミ

ネンス・クイーン 戦より熱かった。

正直、オレは女子に対して免疫がないのだ。

そりゃもう、自覚できるぐらいに。

クラスメイトに女子がいなかったわけではないが、男だろうが女だろうが友達と呼べる人間がいなかった。

……なんというか、人とまともに向き合わなかったツケだろうか。こんなんで99・99パーセント女子校であるIS学園に行ったら死ぬんじゃないか、緊張しすぎで。

「あー……………」

その点、エリーゼさんって落ちついてて、なんというか、大人だなー。

実のところ、エリーゼは全然落ちついていなかった。

グラスを片手に、窓の外を見る。

(レイラさん、すぐに外に出てしまっなんて、私と踊るのがそんなに嫌だったのでしょうか……)

彼には少なからず興味があった。

ISを扱える、自分と対等な男性と向き合うのは初めてだった。

あの模擬戦の時の彼を思い出す。

何度打ちのめしても向かってくるあの強さ。

愛機を信じるあの優しさ。

それは、私が思い描く「かつこよさ」そのものだった。

彼を思い浮かべるだけで、耳まで熱くなる。

この気持ちは、まるで

考えがまとまるよりも早く、私はテラスに出た。

「あれ？エリーゼさん」

そろそろ中に戻ろうと思った時、彼女は出てきた。

「あら、レイラさん」

「レイルです。どうしたんです？」

「私も涼みに来ました。ご迷惑でなければ一緒に涼みませんか？」

「え、ええ。別にかまいませんよ」

「それでは失礼しますね」

手すりに寄りかかるように二人が並ぶ。

しばらくはお互いに何も話さず、夜風が穏やかに流れた。

「あの、レイラさん」

そんな時、彼女が話しかけてきた。

「何です？」

「ええと…。レイラさんは、その…なぜ、ISの操縦者に？」

「なんだ、そんなことか。」

「そりゃあ、たまたま偶然IS動かしちまったからですけど。」

「いえ、そういう意味ではなくて」

「え？」

「レイラさんは仕方なくISを動かしてるのですか？違いますよね」

「……なんで、そう思っんです？」

彼女は少しだけ肩を寄せて、

「楽しそうでしたから。戦っているあなたは、笑ってましたから」

「…そうでしたか？あんまし覚えてないですけど…。けど、楽しい

つてのは当たりです」

「あら」

「オレはね、戦うのが好きって言うより、空を飛ぶのが好きなんです

すよ。親父の影響ですかね？」

「…では、レイラさんは御父上の後を継いで飛んでいるのですか？」

「それは半分ハズレですよ。…スカイライン家のパイロット達は、

皆自分で望んで空を飛びました。強制されて飛んだ人はいませんよ」

無論、パイロット一族のしがらみのようなものはあっただろう。

しかし、個人を尊重するアメリカにおいて、彼らには選択の余地があった。

だが、それでもオレ達は飛ぶ事を選んだのだ。

「オレも…きつかけは降ってわいたモンですけど、この道は自分で選んだつもりです」

「…そうですか。それはとても素敵なことですね」

なぜかエリーゼさんはぼーっとした表情でこっちを見る。

「どうも。…ところで、エリーゼさん」

そうだ。

「ずっと言いたかった事があります」

「な、なんですか？」

エリーゼさんがものすごく緊張した表情になる。

よし、言つぞ。

はつきりと、声に出して。

「オレは『レイラ』じゃなくて『レイル』です」

「…はい？」

「だから、オレの名前正しく呼んだことないでしょうが。レ・イ・ル』です！」

よし言った。

はつきりと言った。

これで間違われることは無いだろう。

「……ああ、そうでしたね、分かりました、レイラさん」  
もの見事に分かつちよいねえ！

「だ・か・ら！レイルです！」

「分かってますよ、レイラさん」

「レイルですってばー！」

「はい、レイラさん」

「アンタ絶対わざとやってるだろ！レ・イ・ル！……！」

「分かってますよ、レイルさん」

「だからレイラだっつもの……！」

……………  
「ありゃ？」

「それでは、学園で会いましょうね、レイラさん」

「ぐうッ……！」

パーティーが終わった帰り。

見事に完敗したオレは、エリーゼさんにレイラレイラ連呼されながらとぼとぼと帰ることになった。

あーもう好きに呼んでくれ、チクシヨウ。

No.20 サプライズ・パーティー (後書き)

ISの欠片もない話でした。

原作7巻、ようやく買えました。

原作のとある新キャラと私が13話で登場させた「みーちゃん」が被ってしまった、微妙に焦りました。

次は夏休み・日本編です。

それではまた次回！



二人目のISを動かせる男性、米国にあらわる！

国際IS委員会の発表によると、スカイライン候補生は、今年の6月に初めてISを起動させた。今日まで公表されなかったのは、スカイライン候補生の身の安全を確保するためだったとしている。スカイライン候補生は今後、他国から一切の干渉がされないIS学園に転入し、1年生として学園生活を送るといふ

8月某日・読売新聞第1面より

「改めてみるとデケエ……」

レイル・スカイラインが、目の前に広がるIS学園に漏らした感想が、これだった。

敷地内に校舎はもちろん、訓練用アリーナやグラウンド、それに学生寮があるIS学園の広さは、もはやハイスクールの域を超えている。

よくもまた狭い日本でこれだけの土地を用意できたな、などと感心してしまふ。

「さて、行くか」

8月。

今日、夏休み中のIS学園を訪れたのは、転入関係の手続きをするためだった。

服装は件の黒スーツ<sup>くたん</sup>。

一応学校なのだから、きちんとした格好で行くべきだろう、というオレの勝手な配慮だ。

「えーと、職員室職員室…っと」  
広い敷地を歩きながら、職員室を探す。  
幸い、案内があるので迷わなかった。

「失礼します」

軽くノックをし、ドアを開ける。

「来たか。思ったより早かったな」

黒スーツのオリムラ先生が待っていた。

広い職員室にいるのは、オリムラ先生ともう一人、机にかじりつくように書類と格闘している眼鏡の先生だけだ。

「案内板がありましたから、迷わず来れました。で、これが書類です」

オリムラ先生はオレから書類を受け取ると一枚一枚チェックしていく。

「……よし、記入ミスは無いな、受理しよう。…山田先生、これも頼む」

その書類をそのまま渡された先生が、ひいんつ と悲鳴を上げる。

…あれだけの書類の山と向き合ってる最中に追加されたら、そりや悲鳴も上げるよな。

「スカイライン、こちらがおまえのクラスの副担任の山田先生だ。挨拶しろ」

「はい。…2学期からお世話になります、レイル・スカイラインです。よろしく願います！」

ぺこり、と頭を下げる。

ヤマダ先生は、

「や、山田真耶やまのたけやです。よ、よろしく願います！」

……この人、オレより年上……だよ……な？

というか、逆さに読んでもヤマダマヤだな。

まあいい。

ってというか副担任って…

「えーと、担任は誰になるんですか？」

「私だ」

あ、なるほど。

オリムラ先生が担任ですか…

「そ、そうなんですか。これからよろしくお願いします」

「ああ、私のクラスに入る以上、赤点など取ってくれるなよ。…そういうえば山田先生、彼の寮の部屋が決まったそうだが」

「あ、はい。えーと…ありました、1022号室ですね」

そうか、寮の部屋割つてもう決まっていたのか。

ここの寮は2人部屋だから、あのオリムライチカと同室になるの  
だろう。

「ちようどいい、せっかくだから部屋の下見ぐらいしておけ」

2学期から始まる寮生活。

その下見をしておくのも悪くない。

オレはオリムラ先生の後に続き、職員室を後にした。

後には、（少し増えた）書類の山と向き合うヤマダ先生だけが残  
された。

「私は一年生寮の寮長もしているからな、規則は守ってもらおうぞ」

「そりゃもちろんです」

寮の廊下は、思ったより広がった。

以前、寝ればいい、と言うレベルの米軍宿舎に泊ったときもあ  
ったが、広さも装飾も大違いだ。

さすがは国立、メイド・イン・ジャパン。

…ちよつと違うか？

「1022号室…ここだな。私は事務室にいるから、何かあったら  
来い」

そう言ってオリムラ先生はそのまま行ってしまった。

「…さてと、下見下見つと」

高級感のある木製のドアをノックする。

中から、はぐい、と間延びした声が聞こえてきた。

お、オリムラもいるのか。

丁度いい、ルームメイトとして挨拶しておこう。

…あれ？でも、オリムラってあんな声だっけ？

まあいつか。

ドアノブをひねり、

「ようオリムラ！ルームメイトになるレイル・スカイラインだ！

福音の時は世話になったけど、改めてよろ…しく…な…？」

オレの言葉が途中からおかしくなったのは、目の前の光景のせいだ。

二つ並んだ大きめのベッド。

その片方に

デカイぬいぐるみがごろん、と横になっていた。

「アレ？オリムラは…？つてか、なんだこのぬいぐるみ？」

すると、驚くべきことに、なんと、ぬいぐるみがごろん、と転がり、あまつさえ自力で起き上がった。

「こいつ…動くぞッ！？」

「ん？？おりむーに用？」

「ぬ、ぬいぐるみが喋ったああああ！？」

よく見ると、ぬいぐるみの顔があるべき位置に、人間の顔がある。

なんか、眠そうな眼をした女の子の顔だった。

「あーそっか。こっちに来るの、今日だったね」

部屋の中にぬいぐるみ、もとい着ぐるみの女の子がいる。  
つまり、

「スマン、部屋間違えた」

イケニッション・ブースト

瞬時加速もかくやという速度で部屋の外に出て、ドアを閉める。

「ふゝ、部屋を間違えるとは、オレとした事が」

そうそう、表札を見れば一目瞭然だ。

ホラ、ちゃんと「布仏本音」「レイル・スカイライン」って

「はあ!?!」

そうか、オレ疲れてるんだな。

時差ボケかなあ？

ゴシゴシと目をこすり、もう一度表札を見る。

ぬのほとけ……?

「布仏本音」「レイル・スカイライン」。

「アレえ……?」

ガチャツ とドアが開く。

「間違えてないよゝ。ここがゝ、れーぴよんの部屋だよゝ」

着ぐるみの子が顔を出す。

「れ、れーぴよんって、オレの事が…?」

「そうだよゝ」

「待てえい!」

「ひゃっ」

思わず着ぐるみの肩をつかみ、

「どおーいうことだよ!男女同室って!オレの他にもう一人いるん

だから、ソイツと組むのが筋ってもんだろ!」

「わ、私に言われてもゝ、会長権限だしゝ」

「会長?」

「うん、生徒会長権限でねゝ、おりむーを一人部屋にして、れーぴ

よんが私のるゝむめいになったんだよゝ」

ほほう。

要は、その会長のせいか。

「どこにいる？」

「へ？」

「その生徒会長とやらはどこにいる！？ちよいと『お話』したいんだが」

「え〜とね〜」

「どこにいる！」

すると着ぐるみはオレの背後に目をやり、

「後ろ」

「やあ」

バツ！ と振り向く。

そこに、扇子を持った女生徒がいた。

その顔に浮かべるのは 余裕。

（いつの間に ！）

「私が生徒会長の更識楯無なりしきたてなしだよ。よろしくね、転入生くん」

「れ、レイル・スカイラインだ。こちらこそよろしく。…そうか、

アンタが会長か」

「れーぴょん、会長は2年生だよ〜」

「……………そうとは知らず失礼しました。あなたがオレの部屋割をお決めになりやがったのですか」

額に血管マークを浮き出しながら尋ねる。

「うわ〜、微妙に敬語になってないよ〜」

「あら、本音ちゃんと一緒にイヤ？」

なるほど、この着ぐるみの名前はホンネと読むのか。

「それ以前の問題でしょうが。男女五歳にして同衾せず。この国の言葉ですよね」

「七歳だよ〜」

ぐっ…着ぐるみにつっこまれた。

「それに、この子にも迷惑でしょうし、何よりオレが緊張で死にます」

「私は構わないよ」

「なら、ごうしましよつか」

会長は手に持った扇子を広げ、

「勝負しましょう。IS戦で勝った方の言つとおりにする。これでどうかしら？」

扇子には、「勝負」と書かれている。

なるほど、そうきたか。

「いいですよ。最近飛べなくてウズウズしてた所ですし」

「わゝ、おもしろそゝ」

着ぐるみが異様に長い袖を振り回す。

その袖がぺしぺしと当たって、うっとおしかった。

数分後。

寮事務室でコーヒーを淹れていた千冬は、ドアの向こうにドタドタとした気配に気付いた。

ガチャアツ！ と勢いよくドアが開き、スカイラインが入ってくる。

「オリムラ先生！アリーナの使用許可をおねがいしますボギヤア！？」

「入る時はノックぐらいしろ、バカモノ」

「……は、はい……」

たまたま手元にあった出席簿が、正確にスカイラインの脳天を直撃した。

「……で、アリーナの使用許可だと？」

千冬は、これから起こるであろう面倒事に頭を抱えた。

No.21 ルーム・メイト（後書き）

学園が絡んできて、ようやく学園とラブコメが出せました。

次回、久々にバトルができそうです。

それではまた次回！



No.22 ミステリアス・レイディ

薫子まゆずみ かおるこは退屈たいくつしていた。

彼女は新聞部に所属しているのだが、夏休みに入り、生徒が少なくなっただけでもあり、特ダネがないのだ。

存在そのものが特ダネのような男、織斑一夏も、今日は外出して  
いていない。

「暇ひまだあ……」

そんな時。

「……それホント!?どこどこ!」

「確か……第3アリーナだったかな?」

「もう始まってんの?会長と噂の転入生のバトルって!」

数人の生徒が、そんなことを言いながら目の前を通り過ぎて行っ  
た。

(これは……!)

バッグからカメラを取り出す。

「特ダネの予感……!」

第3アリーナに向かって猛ダッシュした。

「つ、着いた……」

見ると、観客席には噂を聞きつけた生徒がちらほらと見受けられ  
る。

彼女はカメラを構え、

(さてと、噂の転入生……レイル・スカイラインくんは……お、たつち  
やんみつけ)

たつちちゃんとは、生徒会長の更識まろしき楯無たてなしの事である。

彼女のIS ミステリアス・レイディ は、面積の少ない水色の装甲をカバーするように機体を覆う水のヴェールが特徴だ。

その楯無が大型のランス「蒼流旋」そうりゅうせんに内蔵されたガトリングガン  
を撃つ。

薫子は素早く射線の先にカメラを向ける。

ガトリングガンが狙う先に、相手の転入生がいるはずだ。

戦闘中の転入生とは、シャッターチャンス !

のはずだったのだが。

「あれ？いない？」

次の瞬間、カメラの前を何か<sup>が</sup>横切った。

「え？」

カメラから目を離し、肉眼でアリーナを見る。

だが、見えるのは「蒼流旋」を構える楯無だけだ。

ただし、時折ちかちかと瞬く光があちこちに見える。

「一体どこに」

「あ、先輩！こっちです！」

声のした方に振り向くと、新聞部の1年生が手を振っていた。

そちらに駆け寄り、隣に座る。

「これ、どうなってるの？」

「それが……転入生の スカイラインくんのIS、最初に出てきた時から、動きが速すぎて速すぎて見えないんです」

「どんなISだったの？」

「えーと、ゴーストエース って名前で、白と赤の細いヤツでしたよ ホラ、あそこ！」

言われてみると、一瞬だが白い細身のISが、ライフルを撃つのが見えた。

放たれた弾丸がオレンジ色の光軸を描き、展開された水のヴェー

ルを突き破って ミステリアス・レイディ の装甲を掠めた。

「すごい…！アレを破るなんて…！」

「あの水って何なんですか、先輩？」

「あれは、ISのエネルギーを伝達するナノマシンで制御されているの。並大抵の攻撃では破れないはずなんだけど

白いISはもう見えない。

いや、速すぎて目に留まらないのか。

だが、その程度でくじける薫子ではない。

薫子は、バググからハイスピードカメラを取り出し、静かに構えた。

そんなこんなで、ギャラリーに圧倒的なスピードと攻撃力を見せてつけている（見えないが）レイルだったが、実際にはかなり苦戦していた。

さっきの攻撃も必殺を期して放ったのだが、装甲を掠めるだけにとどまった。

それに、観客に見えないほどのスピードも、酔狂で出してるわけじゃない。

これ以上遅いと、被弾してしまうのだ。

（クソッ…この女、強い！）

「なかなか機動性は高いのね。けど、それだけではおねーさんは倒せないわよ」

今はスピードでごまかしているが、あの正確な射撃は、確実にオレを追い詰めている。

その上、「ラピッドレイ」はあの水のヴェールに阻まれて通じない。

唯一通じるのは「メタルブレイカー」なのだが、単発では簡単に回避されてしまう。

本来ならばそのための牽制目的で「ラピッドレイ」があるのだが、  
「それなら！」

高速機動をしながら「メタルブレイカー」を数発連射する。

出力控えめとはいえ、特殊徹甲弾の連射は防げないのだろう。

滑らかな3次元機動で全弾回避した会長は、なおもガトリングガンを撃ってくる。

「ふふっ…なかなか楽しませてくれるじゃない」

オレは回避しきれなかった数発の弾丸を、シールドで防ぐ。

「余裕のつもりか…！」

弾切れになった「メタルブレイカー」のマガジンを素早く交換し、そのままフルオートで発砲。

「もちろん余裕よ。なぜなら」

会長は特殊徹甲弾の弾膜を易々とかいくぐり、ガトリングガンを連射する。

「この学園の生徒会長というのは、最強の称号なのよ」

「ぐっ…！」

数発の直撃弾に、耐えきれなくなったシールドが破壊された。

「それでもッ！」

スラスター全開で回避行動を取る。

「さすがに速いわね…けど、キミの機体、装甲が薄そうね。なら、避けられない攻撃に弱いよね」

「なに…！？」

「気付いたかな？キミの周り、やたらと霧が深くない」  
「…」

言われて気付く。

オレの周りに纏わりつくような霧に。

そうだ、アイツは何を操るISだったか

「く　！」

気付いた時には遅かった。

パチンツ　と会長が指を鳴らすと、オレの体は爆発に呑み込まれた

ミステリアス・レイディ　によって制御された水を霧状に散布し、送られたエネルギーをナノマシンが一斉に熱に転換することによって対象物を爆破する「クリア・パッション清き熱情」。

広いアリーナに散布した結果、本来の威力を発揮することはできなかったが、ゴーストエースの紙装甲には十分な威力だ。

回避もできず、レイルは霧に包まれている。

だが。

楯無は、勝利を確信していなかった。

その唇が、にこり、と微笑みに歪む。

「これで終わりじゃないでしょ？レイルくん」

その言葉に応えるかのように、霧の中から無傷の　ゴーストエース　が飛び出した。

『まさか完全に無傷とはね。さすがは一年近くISを操縦しているだけあるね』

プライベート・チャネルの会長の言葉に、オレは思わず心の中で

舌打ちした。

「表向きはまだ2、3ヶ月ってことになってるはずですけどねえ！  
後で話を聞かせてもらいますよ！」

ミスティアス・レイデイ が操るものは、水。

ならば、ゴーストエース が操るものは アクティブ・フルイド・コントロール 流体。

AFCは纏わりつく霧を振り払い、真空の空間で機体を守ること  
もできる。

いわば、ミスティアス・レイデイ の「天敵」だった。

再びスラスタ全開の超高速機動。

「メタルブレイカー」のマガジンを交換。  
残り10発。

（ここで決める！）

最高速度を維持したまま、両腕の「ラピッドレイ」を連射。  
水のヴェールで防がれるが、それは「回避不可能だから防御した」  
と言うことだ。

「もらったあッ！！」

「ラピッドレイ」の連射を続けながら イクニッション・ブースト 瞬時加速をかける。

一瞬にして距離が縮まり、ランスがこちらに向けられるが、もう  
遅い。

すれ違いざま、「ラピッドレイ」の連射はそのままに、「メタル  
ブレイカー」も連射する。

レーザーと特殊徹甲弾の嵐が ミスティアス・レイデイ を襲う  
が、なんと会長はそれすらもかわしてきた。

（けど、体勢は崩した ！）

今度は イクニッション・ブースト 瞬時加速を逆噴射する。

背中のスラスタ、両肩のスラスタによる個別連続瞬時加速。リボルバー・イグニッション・ピスト

イーリ教官でも成功率40パーセントのこの技は 福音 戦以来、一度も成功した事は無かったのだが、今回は成功した。

遠目には、オレがVの字を描くように飛ぶのが見えたはずだ。

再び ミステリアス・レイディ との距離が縮まり

「これでえッ！」

最大出力で「メタルブレイカー」を発砲。

マツハ5で飛ぶ特殊徹甲弾「釘」に対して、水のヴェールは減速の役割すら果たせなかった。

「釘」はヴェールを貫くだけでは飽き足らず、その衝撃波で水を完全に吹き散らした。

鉄壁の防御を崩された ミステリアス・レイディ に、必殺の弾丸が直撃した。

ミステリアス・レイディ 程度の装甲なら、一撃必殺も有りうる威力。  
オレが勝利を確信した瞬間。

直撃を受けたはずの会長の姿が崩れ、ぱしゃりと水に変わる。

「な まさか、偽物フェイク」

「だーいせーいかーい」

後ろからの声に振り向いた時は、既にランスが突き出された後だった。

「ぐあッ ー！！」

ランスの直撃を受け、吹き飛ばされる。

どうにか体勢を立て直す。

辛うじてシールドエネルギーは残っている。

まだ、もう一撃 ー！！

スラスターを全開にし、「メタルブレイカー」を構え

唐突に、何かに引つ張られるようにその軌道が右に逸れた。

「なに…！」

その隙が、会長の接近を許してしまった。

「残念でした！」

今度こそ、鋭いランスの突きが、オレのシールドエネルギーをゼ口にした。

「いや、れーぴょんはすごかったよ。国家代表相手にあそこまで戦えたんだからさ。」

ピットに戻るなり、着ぐるみ いや、今は制服に着替えてる。

ただし袖が異様に長い にこう言われた。

「そりゃどーも…って国家代表!？」

それを先に言え馬鹿。

「そう。ロシアの国家代表なのだ。」  
なるほど、道理で強いわけだ。

適当に相槌を打つと、オレはPICを解除し、膝をつくように着陸した。

そのままISから降り、機体の側面に回り込む。

「…？なにやってんのれーぴょん？」

袖を振りながら、異様に遅い動きで覗き込んでくるヌノホトケ。

「試合見てたろうが。最後の時、左肩のスラスターが死んでた。」

決着が着いてから確認したのだが、左肩のスラスターが機能を停止していた。

そのおかげであらぬ動きをすることになり、止めをさされる原因になってしまったのだが



「うわ、煙でてやがる」

左肩のスラスタは、その噴射口から煙を出していた。おまけに、フィン状の力場展開翼が若干溶けている。

これは一体

「それ、オーバーロードじゃないかな」

又ノホトケが、眠そうな目でスラスタを観察していた。

「分かるのか？」

「たぶんね。れーぴょん、すごく速い動きしてたから、スラスタに負荷がかかっちゃってるんだよ」

「んなバカな。オレは今までと同じように飛んでたし、ついこの前修理したばつ（ていじゆの組み直し）かだぞ」

と、そんな時。

「はいはい、新聞部です！」

カメラ片手にボイスレコーダーを持った、「いかにも」な女生徒が入ってきた。

「私は2年生の黛 薫子。新聞部副部長やってます。今日は話題の転入生、レイル・スカイラインくんインタビューを」

「すみません、コイツを直さなきゃなりませんから後にしてください」

「早!? あ、でも写真は撮らせてよ」

言ったそばからカシャカシャとシャッター音。

アンタも十分早いよ。

「れーぴょん、いけず」

「あーはいはい、イケズなんだよ、オレは……アチツ！」

ゴーストエースの装甲が熱を持っている。

こりゃあひどいな。

でも、オレ、そんなに激しい使い方したっけ？

と、又ノホトケがちよいちよい、とオレを突いてきた。

「何だよ？」

「れーぴょん、だったら私たちがみてあげるよ〜」

「いい、自分でできる」

「でも、これは一人じゃ無理だよ。それに〜、自分で原因が分からないんじゃないあ、なおさらだよ〜」

ぐっ…確かに一理ある。

「私、整備科だから手伝うよ！もちろん対価は独占インタビューね！」

「しかし…」

今日初めて会った人たちにそんな迷惑はかけたくない。

「れーぴょん、自分のIS、大切じゃないの〜？」

「それは」

そんな事をしている間に、

「ほら何をしている！終わったのならさっさと出る」  
オリムラ先生のアリガタイお言葉によって、オレ達は追い出された。

## No.22 ミステリアス・レイディ（後書き）

久々のバトルです。

にしても、周りが強いから主人公なのになかなか勝たせてあげられない…

レイルの強さは、大まかに言うと他の代表候補生と同じレベルです。ただし、機体性能が極端なので相性の良し悪しも大きく影響しますが。

あと、レイルは口調が割と乱暴ですが、今までは目上の人とばかり話していたので敬語が多かっただけです。

なので、個人的にはようやく素のレイルを書く事が出来て少しホッとしています。

それではまた次回！

「はあー…こりゃあすげえ」

各アリーナには、IS整備室が隣接している。

と言うワケでオレとヌノホトケとマユズミ先輩はすぐ隣の第3整備室にやってきた。

さすがはIS学園、エドワーズの航空機整備室を改修しただけのハンガーとは大違いだ。

設備も揃ってるし、何よりISの整備のためだけに存在する空間には、ムダがない。

「おーらい、おーらい…」

「よし、固定完了…っ」と

最低限の「着陸脚」しか持たないゴーストエースを立たせておくには、ハンガーに固定しておく必要がある。

固定具で機体を安定させ、ISから降りる。

「うわゝ、改めてみると、ねーびょんって体細いねゝ女の子みたい」

ISスーツ姿のオレが、そんなに珍しいのだろうか。

というか、女の子にじろじろ見られるのは、少し恥ずかしい。

「人をじろじろ見るな。あと、これでも筋肉は人並み以上に付いてる」

「ISスーツ姿のスカイラインくん…ベストショット！」

カシャカシャとシャッターが切られる。

「……アンタら、整備に来たのか？それともオレを見に来たのか？」

「あはゝ、そうだったねゝごめんごめん」

「私は両方よ！」

ホントにこの人たちに手伝ってもらって大丈夫だろうか。  
だが、そんな思いは数分で消えた。

「うわー、こりゃひどいね。内装品がすっかり焼けちゃってるよ」

「一応他のスラスタも見ておくれ」

後で聞いたところによると、マユズミ先輩は整備科2年生のエンジニアらしく、初めて触るはずのゴーストエースでもテキパキと作業している。

一方、又ノホトケもその手際は中々のもので、普段ののほほんとした雰囲気とのギャップに、少し驚いた。

操縦者であるオレも負けてらんないわけで、機体のコンディション表示をチェックする。

「わー、右肩も背中も焼けちゃってるね」

「左腕、すこしフレームがガタついてない？」

……オレ、どんな使い方したんだよ。

稼働データを見る。

「あー、やっぱり瞬間加速がまずかったんじゃない？ホラここ、火吹いてるし」

マユズミ先輩は、取材用のハイスピードカメラの映像まで見せてくれた。

「れーぴょんはさー、方向転換が強引過ぎだよ。ほら、この時のスラスタ稼働率なんて120パーセント超えてるし」

つまりどういふことかと言つと

「ぼーずは瞬時加速禁止！」  
「げえ……」

ここは、日本のナガさんの実家だ。都会では珍しいいかにも和風建築で、大戦中も大空襲を乗り切った家だと言うから、相当古い家だ。

転入までの間、オレと付き添いのナガさんはここで過ごすことになった。

「データ見るとさあ、ぼーずは最近、最高速でガンガン飛ばしてんじゃない？」

「ええ…でもオレ、そんなに速く飛ばしてるって実感無いんですけど」

結局あのは、スラスター部品を丸ごと交換する羽目になった。

その後も色々あったのだが、ようやくナガさん家に戻ったのは夜8時だった。

で、ちゃぶ台でナガさんと向き合って、現在に至る。

「ぼーずもすっかり高速戦闘に慣れちゃったみたいだね。ホラ、スラスター稼働率なんて右肩上がり」

ノートパソコンの画面を見ながら、オレは

「つまり、だ。たださえスラスターの負荷が大きくなってる所に瞬時加速なんてしたらそりゃぶっ壊れるって事だよ。そもそもAI Sはデリケートだから出力が大きいと壊れやすいんだ」

「はあ…オレ、やっぱ乱暴な使い方…」

「そう落ち込むなよ。よく言えば完全にゴーストエースの性能を引き出してることだし、それだけのスピードがありゃあ瞬時加速なんて使わなくても充分だろ」

その通りではあるのだが、せっかく習った切り札が禁止手というのは残念だ。

「分かりました。…ただ、このままだとまた使っちゃまいそうですか

ら、リミッターかけてくれませんか？」

するとナガさんはそれを手で制すと、

「いらねえだろ。どうしても使わなくちゃいけない時は使っているし、それはぼーずが判断できるだろ。それに」

「それに？」

「なんかこう、使えば後がない切り札って燃えね？こう、『この技は、使うたびに寿命が縮むのだ…』みたいな」

「黙れ中二病ッ！！」

「じゃきぐあん！？」

思いつきり殴つといた。

「くっ…頭が痛い…！まさか、ヤツが近くに…！？」

「ナガさん、もう一発いいですか？」

翌日の昼過ぎ。

オレは私服で街に繰り出していた。

Tシャツの上に赤のチェックの半袖Yシャツ、下は黒のジーンズといういたって普通の格好である。

ただし、頭にはロサンゼルス・エンゼルス野球帽、サングラスを装着している。

『特集！2人目の男性IS操縦者、レイル・スカイライン候補生の軌跡』

すぐその家電量販店のテレビで、そんな番組が流れていた。

野球帽とサングラスはこのためのものだ。

有名人のまま街を歩きたくはないからな。

なぜオレが外出しているかと言うと、昨日に遡らなければならぬ。

ゴーストエース の整備が終わってから、その後だ。

「二人とも、今日はどうも。おかげで何とか直りました」

「例には及ばないわよ。なぜなら今からスカイラインくんに独占インタビューだから！」

「そっぴや、そういう約束でしたね……」

「ではさっそく！IS学園転入の感想は！？」

「あー…まだ転入してませんし、書類出しに来るだけで模擬戦やるとは思いませんでした」

「それじゃあ、生徒会長のたっちゃんとの対戦の感想を！」

で、インタビューが終わってマユズミ先輩が帰ってから、更にその後の話だ。

「じゃあれーびよん、会長のところに案内するように言われてるからさ、着替えて待つててね」

「ああ、わかった。あの会長にはたっぷり聞きたいことがあるしな」

で、元の黒スーツに着替えて待つていると、制服に着替えた又ノホトケがオレを案内して そう、ここからだった。

夕暮れのIS学園は、あまり人気がなかった。

生徒会室まで案内してくれてるらしいが、又ノホトケは歩くのが遅いのでオレが先導していた。

案内表示を見れば、たどり着けそうだ。

まったく、どっちが案内してんだか。

話しかけたのはオレの方からだった。



「あ、えーと、又ノホトケ？」

「ええええ〜！私、自己紹介してなかった〜！？『ぬのほとけ』じゃなくて『のほとけ』だよ〜！布のほとけほんね本音！」

初めて聞くような大声で怒られた。

「すまん、悪かったノホトケ！」

「まあいいよ〜。それと、本音でいいよ。布ほんね仏ほんねって言うとおねえちやんと被おねえちつちやうからね〜」

「ふーん。学園に姉貴がいるのか？」

「うん。生徒会にいるから、これから会うことになるよ〜」

この子の姉貴か……オレには兄弟がいないので分かんが、やはり姉妹で性格って違うのだろうか。

つまり、のほほんとした妹に対し、キリッ！とした姉貴なんだろうな。

キリッ！としたホンネを想像してみる。

「うわ、想像できねー」

「れーぴよん、今、すご〜く失礼なこと考えてなかった〜？  
う、鋭い。」

「い、いや別に……ゲフンゲフン！話を戻すぞ。その、だな……」

ゴーストエースの整備、本当に助かった。ありがとう」

「じゃあお礼にケーキおごつて〜」

「そうか、ケーキがいいのか」

「ふえ？」

「いや、な。マユズミ先輩には整備のお礼にインタビューしただろ。ホンネにも、何かお礼できねえかなくて」

すると、ホンネは目を輝かせて、

「わ〜い、れーぴよんの奢り〜」

うわ、すごい喜びようだ。

長い袖をばたばたとゆらしながら飛び跳ねてる。

「ああ、ケーキでも奢ってやるよ」

「じゃあ、@クルーズ<sup>アット</sup>を希望しまーす！」

@クルーズ？

しまった、日本に来たばかりのオレでは、店の場所など分からん。

「れーぴょん、駅ぐらいなら分かるでしょ」

「ん、ああ。かなりデカイ駅だったな」

「じゃあね、そこにおつきな時計があるからね、3時に待ち合わせしよう」

「分かった。3時にデカイ時計の前だな」

「よし、ご機嫌な私は、れーぴょんを生徒会室まで案内しまーす」  
いや、さっきからオレが案内してる感じだったんだが。

ちなみに、生徒会室でもさらなる出来事がオレを待っていたのだが、それはまた別の話だ。

で、オレは約束通り、大きな時計の前でホンを待っていた。  
腕時計<sup>ゴーストウォッチ</sup>を見る。

もう3時10分だった。  
と。

「ごめーん、待った」

人を待たせてるにしては遅い動きでホンネがやってきた。

「遅い。言いだしっぺが時間に遅れるな……って、私服までそれか」  
彼女の服装は黄色のワンピースなのだが、やはりというか袖が異様に長い。

「えへへ、どう？似合っ？」

そう言われると、確かに似合ってるような気がする。

っていつか、ISスーツの時思ったけど、意外と胸あるんだよな…  
「れーぴよん？」

「のわぁ！似合ってる！似合ってるから安心しろ！」  
「わ〜いれーぴよんに褒められちゃった〜。お礼に頭なでなでしてあげる〜」

ホンネは背伸びをしながらオレの頭に手を伸ばそうとする。

「しなくていい。ホレ、とっととアツトなんとかに案内しろ」

「ういーりようかい！」  
ぎゅっ

「おいまで！腕に抱きつくなうっとおしい！」

「い〜じゃんデートなんだし〜」

「な　　なんでそうなるんだ　　」  
ふと冷静に考えてみる。

・男女が待ち合わせして「ごめーん、待ったー？」  
・というかそもそも2人きりでお出かけ

「ぐぁー！否定できねえー…ってそうじゃなくて！歩きづらいわ！」  
「え〜…」

結局、オレ達は並び立って歩いた。

「ってか、その『れーぴよん』っていつの、どうにかならんのか」

「え〜？れーぴよんはれーぴよんだよ〜」

「意味分からんわ！なんか呼ばれるたびに気が抜けるからさ、せめて他のあだ名にしてくれ」

「う〜ん…れーちゃん、れーすけ、れーたん、れーぴよん　のどれがいい？」

「…もう勝手にしてくれ」

「うんわかったよ〜、ぷりていれーたん」

「…れーぴよんでいいです」

「ういいうの、日本のことわざでなんて言うんだっけ。」

ノレンにイチオシ…だっけ？

「のれんに腕押し、だよ〜」

ああ、なんかムカツクのもバカらしくなった。  
なんか、コイツが相手だと力抜けちまう。

「…どーしたの？」

顔をのぞきこまれる。

「別に。ホラ、行くぞ」

「待って〜。案内するの、私だよ〜」

ま、これはデートとは呼ばねえよな。

……多分。

No.23 アフタースリー・デート（後書き）

のほんさんのシーンは、書きながら2828して  
ます。2828して俺きめえ。

レイルの帽子は、メジャーリーグの野球帽です。  
彼は地元のチームを応援するタイプです。

それではまた次回！

## No.24 アット・クルーズ

「いらつしやいませ。@クルーズにようこそ」

店に入ったとたん、布仏本音はメイドに出迎えられた。

「…なぜ、メイド？」

隣のレイル・スカイラインは目をまん丸にして驚いている。

「れーびよん、ここはね、メイドと執事喫茶なんだよ」

レイルは、メイドと執事が行き交う店内を見回すと、

「そうか、ここがOTAKU文化の聖地AKIBAか」

「いや、ここ秋葉じゃないよ」

「に、2名様ご案内します」

テーブルに着く。

レイルは少し落ち着かない様子だった。

「それにしても混んでるな。有名な店なのか？」

本音はメニューをテーブルに広げ、どれにしようかと考える。

「どうだろ？前にかおりんと来た時はこんなに混んでなかったよ

…れーびよん？」

なんか、レイルがメニューを見たまま固まってる。

気のせいか、目がきらきらと輝いているような気がする。

視線の先にあるのは

「『期間限定！エレガントレースクチュリナーダパフェ（2500

円）』…れーびよん、これが食べたいの？」

「は！？い、いや、何を言ってるやがりますか！？俺は別に…」

「すい」

メニューを右にずらす。

すると、レイルの視線も右に動く。

「ばっ」

メニューを上に掲げてみる。

レイルが上を向く。

「……ぱたん」

メニューを閉じる。

レイルがなんか泣きそうな顔になった。

「…メニューから目が離せなくなってるよ、れーびよん」

レイルに明らかな動揺が走る。

「ほ、ホンネはどれがいい？お、オレの奢りだから遠慮するな！な

！」

「じゃあ、ぼちっとな」

呼び鈴を押すと、執事が来たので、

「このエレガント（略）パフェと紅茶を2つつつお願いします」

「かしこまりました…ってあれ？」

本音は、金髪の執事とはお互いに面識があった。

「でゅっちー？」

「でゅ、でゅっちー？」

「なんだ？知り合いか？」

その金髪執事はオレを見るなり「あっ」と息をのんだ。

中性的、どちらかといえば女性に見える顔だちと、後ろで束ねた長い髪。

どこかで見たことあるような…

「私のくらすめいとだよ。フランス代表候補生のシャルロット・

デュノアさん」

なるほど。

IS学園の生徒だったのか。

そういえば、福音 戦で見たような気がする。  
たしか、オレンジの ラファール・リヴァイブ だったか…

まさか男だったとは。

きつとやむにやまれぬ事情でオレみたいに女装してたのだろう。

「あー、ども。レイル・スカイラインだ。2学期からIS学園に転入することになった。よろしくな」

「うん…こちらこそ」

「っていうか、IS学園ってオリムラ以外にも男っていたんだな」

「へ？」

「ああ、悪い。こっちに情報入ってなくてよ、男はオレとオリムラの二人だけだと思っててよ」

「いや、その…」

「同じ男同士、よろしくな。正直女ばかりって居心地悪くてさ…」

「そうじゃなくて、ね…」

「なんか、おまえ若干女っぽいって言われね？ま、いいけどさ。こっ、貴公子ってカンジで」

すると、デュノアの眉がぴくつと震えた。

ホンネがちよいちよい、と肩を突いてきた。

「なんだよ、ホンネ」

「れーぴょん、でゅっちはね、女の子だよ」

「……へ？」

「え、だって執事服着てるし、女にしちやあ似合ってるし」  
ぴくぴくっ

「だーかーらー、でゅっちは男装してるんだよ。まあ、確かに男の子より似合ってるけどな」

ぴくぴくぴくっ！

「む…そうだったのか。スマン、デュノア」

「いや、別にいいよ」



良かった、許してくれた。  
結構穏やかな性格なんだな。

「だが、男装姿もなかなか様になっていいんじゃないか？」  
ぶちっ

最後に相手を褒めておく。

うん、我ながらいいフォローだ。

「かしこまりました、ご注文はエレガント（略）パフェがおひとつに、紅茶が2つでよろしいですね？」  
アレ？

「いや、ちが」

「それではしばらくお待ちください」

そういつてデュノアはカウンターの奥に引っ込んでしまった。

「ええー…なんで？オレ、フォローしたはずなのに…」

「うわ〜…ねーぴょんって、おりむー並の乙女心ブレイカーだね」

「そ、そうなのか？オリムラの事は知らんが…」

うーん、褒めたはずなのになんで怒られたんだろう。

「あ、らうらうらうら」

今度は、メイドがお盆にパフェとカップを載せてこっちに来た。

「む、布仏か」

また知り合いだろうか。

メイドは、長い銀髪に眼帯という出で立ちだった。

そうだ、福音 戦でオレを助けた、ボーデヴィツヒとかいうドイツ人だ。

彼女はホソネの前に丁寧にパフェと紅茶のカップを置くと、

どんっ！ と半ば叩きつけるようにオレの前にカップを置いた。  
しかも中身は紅茶ではなくコーヒー。

「……………えーと……………」

「飲め」

有無を言わさぬ威圧感。

だが、オレとてそれでドン引きはしても萎縮する人間ではない。

「オレ、頼んだのはコーヒーじゃなくて紅茶なんだけ」

「黙れ。シャルロットを怒らせた罰は重い」

話通じねえ!?

「ではさらばだ」

そう言っ店奥に去ってしまった。

「…オレ、コーヒー苦手なんだが。しかもパフェがない」

「どんまい、れーびよん」

今にも崩れ落ちそうなオレと違い、注文通りのパフェをつつくホ  
ンネに言われても逆効果なんだが。

仕方なく、角砂糖を5つぐらいドボドボとブチ込んだ上で黒い液  
体を流し込んだ。

レイルが飲む@クルーズのコーヒーは甘い。

「れーびよんってさ、もしかして甘党？」

パフェをうまうまとパクつきながらホンネが聞いてきた。

「…悪いかよ。おしるこで饅頭が食える男だよ、オレは」

「うわ、それはさすがに…」

うう、分かりきった事とはいえドン引きされた。

オレは肩を落ししながら俯くのが精いっぱいだった。

「……ねえ、れーびよん」

「んー？」

顔を上げると

「はい、あーん」

スプーンですくわれたパフェが差し出された。

「え？くれるのか？なら遠慮なくいたただく」

ちよつと待て。

当然ながら、スプーンは一つしかない。

つまり、今差し出されているスプーンはさっきまでホンネが使っていたスプーンであり

「ばばば馬鹿！いらんわ！」

「えゝゝ食べたくないのゝ？」

いや、食べたいけどさ。

その、アレだ。

間接キスはゝさすがに、ねえ。

ま、確かに食べたいんだけどね。

「甘くておいしいのにゝ」

うゝゝ別の意味で甘くておいしそうだゝゝって何考えてんだオレ！

いや、パフェは食べたいけどやっぱりなんと言うかそのアレだよ  
ぱり間接キスはまずいというかいやおいしんだけどまずいんだよ  
よ別の意味でもパフェは食べたいしおいしそうだしっていうかホ  
ンネも自分の行動に疑問を持って

「ゝれーびょん、はい、あーん」

だから、それは

パフェは食べたいけど間接キスはどうかと

いや、待てよゝゝこれを受け入れれば美味しいパフェと可愛い女の  
子との間接キスが

つい、口をあけてしまう。

開けた口の中に、スプーンが

「全員、動くんじゃねえ！」

「わっ」

本音がスプーンを落とす。

無情にも、上に乗ったパフェがテーブルにべちゃりと落ちた。

うう、残念ゝゝって何考えてんだオレ！

んなことより。

先ほどの大声は、ドアをぶち破るような勢いで店内に入ってきた  
3人組の男のもののようなようだ。

その手に持つのは

(拳銃：！)

パン！ と銃声。

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

どつやら面倒なことになりそうだ。

No.24 アット・クルーズ(後書き)

パフェの名前にはつつこまないでください。

この辺は原作4巻に準拠してます。

バトルシーンじゃないと執筆速度が落ちる…

それではまた次回！

パン！ と銃声。

「きゃあああっ!？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

男たちの格好は、ジャンパーにジーパン、顔には覆面、手には銃。何とも分かりやすい事に、背中のバッグからは何枚か紙幣が飛び出している。

(うわ…なんて分かりやすい銀行強盗だよ…)

ホンネや他の客も同じ感想なのかぼかんとした表情を浮かべたが、それでも相手は銃を持った凶悪犯なので、言うことは聞いておく。

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。おとなしく投降しなさい。繰り返し」

視線だけ動かし窓の外を見ると、赤色灯を煌めかせるパトカーと、ライオットシールドを構える警官隊に囲まれていた。

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

このような数名の観客の呟きにはオレも同感。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺達全員」

「うるたえるんじゃねえっ！焦る事はねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

「へ、へへ、そうですね。俺達には高い金払って手に入れた『コイツ』があるし」

レイルはもう肩の力を抜いていた。

バカな連中だ。

銃さえ持っていれば自分たちは強いと、安心だと思っている。

そんな考えは、銃社会アメリカ力では通用しないし、増してやレイルは代表候補生として訓練を受けた身だ。

ありとあらゆる事態を想定した訓練には、銃の使い方や格闘術など、ISが展開できない状況での戦闘訓練も含まれている。今のレイルには、あの男たちなど相手にならないだろう。それに

ちらり、と視線を動かす。

すぐそこには、目立たないようにしゃがみつつ冷静に状況を分析するデュノアと、別の場所から様子をうかがうボーデヴィツヒがいる。

ちなみに、こちらの視線に気付いたデュノアには、軽い一瞥をもらった。

だから悪かったって。

あの程度なら、彼女たちに任せておけば解決するだろう。

オレは正義の味方でもヒーローでも何でもない。

正直、銃の使い方もなっていないようなバカ共を相手にするのはめんどくさい。

そう思い、我関せずを決めようとした時だった。

ジャキツ！ というポンプアクションの音がした次の瞬間、天井に威嚇射撃が放たれた。

「きゃああああっ！」

オレ達の真上にあつた蛍光灯が破裂し、割れた破片が降り注いだ。

「伏せる！」

「ひゃわわっ！」

咄嗟にホンネに覆いかぶさり、鋭いガラス片を浴びる。

（大丈夫か！？）

（うん…れーぴょんは？）

（大丈夫だ）

「大人しくしてな！オレ達の言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」

近くの女性が青ざめた顔で何度もうなずくと、声が漏れないようにきつく口をつぐんだ。

「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！もちろん、追跡者や発信機なんか付けるんじゃないぞ！」  
リーダーの男が警官隊に発砲し、パトカーのフロントガラスが割れる。

ホンネに覆いかぶさったままではまずいので、オレは目立たぬように体を起こす。

テーブルの上を見ると、紅茶もパフェもガラス片を浴びて台無しになっていた。

「そんなく、パフェが……」

ホンネが少し泣きそうになっていた。

とたんに、怒りが沸いた。

あの野郎どもにパフェを台無しにされた、というのもある。  
だが。

胸の底から湧きあがる怒りは、それだけでは説明できなかった。

「へへっ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当」

「テ……メエらああああ……」

気付いた時には、勢いよく立ちあがっていた。

強盗犯がこちらに気付くが、遅い。

オレはテーブルの上のカップを掴むと、その中身を勢いよく手前の男にぶちまけた。

「うあちゃあああ！？」

まだ冷めていない紅茶を顔面に浴びてわめいている男の懐まで飛



び込み、その手を勢いよく蹴り上げる。

手から離れたショットガンが宙を舞い、それを素早くキャッチし、その銃床を振り降ろす。

「ぐがあっ!?!」

首筋に一撃をくらい、一人の男が床に倒れた。

その勢いで、オレの野球帽がぱさりと落ちる。

「目標2、制圧完了」

高速戦闘で鍛えた速さは、伊達じゃない。

「ッざけやがって!このガキ!」

リーダー格の男が拳銃を撃とうとする。

しかし。

「やれやれだな」

その声にリーダーが気付いた時には、既にメイド姿のボーデヴィッヒはひざ蹴りを叩き込んでいた。

「目標1、制圧完了」

「あ、兄貴いつ!?!こ、こいつつ!?!」

リーダーをやられてうるたえる男が、手に持つサブマシンガンを構える。

「へ…へ…た、たかがガキの一人や二人」

「二人だけじゃないんだよねえ、残念ながら」

サブマシンガン男の背後に迫っていたのは、執事服のデュノアだった。

「い、いつの間に」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いっきり脚上げても平気だし」

デュノアはサブマシンガンを手ごと蹴り上げると、そのままの勢いで男の肩にかかと落としを決める。

ゴキッという鈍い音と共に、男の腕がだらりと垂れる。

その隙にオレは勢いよく飛びこみ、ショットガンの銃床を額に叩き込む。

男は悲鳴を上げる間もなく、糸の切れた操り人形のように倒れ伏せた。

「全制圧、完了。まったく、キミって意外と無茶するんだね」

苦笑したデュノアの一言と共に、事件は終わった。

「同感だな。本当なら私が飛びだすはずだったのだが」

ボーデヴィツヒは床に落ちた野球帽を拾うと、オレに投げ渡した。「別に。ムカついたから飛びだしただけだ」

帽子を受け取り、ショットガンを放り投げる。

呆然としていた客とスタッフが、のろのろと頭を上げ始めた。

「お、終わった……？」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ありがとうございます！メイドさんに執事さんに帽子クン！ありがとうございます！」

「れーぴょん、すごい」

店内がわつと騒がしくなる。

その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰りめかけてくる。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいってば！僕たちって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！スカイラインくんも！」

「え？オレも？」

「それもそうだな。このあたりで失敬するでしょう……何をしている、行くぞ」

3人は颯爽と立ち去った

もとい、約一名は他の二人に引

きずられるように立ち去った。

「っていつか、よくよく考えるとオレ食い逃げしてね？ホンネ…ス  
マン…」

「よし、ここまでくれば大丈夫だろう」

「っていつか、執事服のまままで逃げてきちゃったね。後で返さない  
と」

ようやく二人から解放されたのは、10分ほど経ってからだった。

「あー…どうしよ、ホンネ置いてきちゃった…」

オレの奢りの約束が、食い逃げ同然でここまで来てしまった。

「あー、ごめん」

「いや、あの場から離れなきゃあ警察のお世話だったからな。別に  
いいけど」

「しかし、貴様はなぜ飛び出した？最初の方は大人しくしていたよ  
うだが」

バレてたか。

「さつきも言ったろ。ムカついたからブツ飛ばしただけだ」

「あ、そうか」

突然、デュノアがぼんと手を打った。

「スカイラインくん、もしかして本音に危害が及んだから怒ったん  
じゃないの？いやー、なんていうか」

「待てい！なななな何言ってやがる！オレは別に　　そう、  
パフェが食えなかったからムカついただけだ！断じて！ホンネは関  
係ないっ！」

「そうか、私の嫁もそれぐらいの男気を　　見せてるな。至る所  
で」

ボーデヴィッツは何やら一人で納得している。  
っていつか嫁って何だ？

とにかく、ここは強引に話を切り上げよう。

「と、とにかく！オレは戻るぞ！」

「あ、待って」

デュノア、何故止めたし。

「2学期からよろしくね、スカイラインくん」

「そうだったな、私からもよろしくな」

なんか、人から面と向かって言われると少し照れくさい。

「レイルでいい。言いづらいだろ」

「じゃあ、僕の事もシャルロットでいいよ。ね、ラウラも」

「ああ。ラウラで構わん」

シャルロットに、ラウラか。

なんとかうまくやって行けそうだな。

「それじゃ、シャルロット、ラウラ」

それだけ言っつて、オレはホンネのところへ戻った。

「ふうん、なかなかいけるなこのクッキー」

その夜、桐沢家に戻ったオレは、ナガさんとクッキーを齧っていた（紅茶が無かったので緑茶で）。

ちなみに、このクッキーは@クルーズが事件に巻き込まれた客に配っていたもので、後で合流したホンネから、「いいよ〜れーびょんには助けてもらっちゃったし〜」と言われ、結局全部もらうことになった。

「で、どうだった？」

「何がです？」

「喫茶店デート」

口の中のお茶を残らず吹きだした。

「ゲホゲホッ…ケホ…違いますよ、何度も言ってるでしょう単なる

お礼だつて」

「そう？話聞く限り、その子ずいぶんぼーずに懐いてるみたいじゃん」

「あの人懐っこさは誰にでも向けているもんです。オレとは正反対に人徳があるんですよ」

「ふうん。まあ、IS学園は女の園だからさあ。よりどりみどりじゃないん？」

「息苦しいだけです。それに、オレ、恋愛とかしたことないですし」

「…なあぼーず、女の子だらけのIS学園と、オッサンだらけの開発チーム、どっちがいい？」

何その究極の選択。

「別に。どっちもどっちでしょ」  
するとナガさんは、

「何！？おまえ、まさか…どっちもイケるのか？」  
なんてことをぬかしやがった。

「殴りますよ。主にショットガンの銃床で」

「ちよ、それ強盗犯気絶させたやつっしょ！？」

「じゃあひざ蹴りが良いですかね？メイドが強盗犯倒すのに使ってますよ」

「あ…メイドさんになら蹴られてもいいや」

「いっぺん死ねー！」

そんなこんなでドタバタし、夜は更けていった

それから一週間後。

オレは、空港までナガさんを見送りに来ていた。

「悪いな、転入までいてやれなくて」

「いいですよ、鬼の居ぬ間に一人でのんびりさせてもらいますよ」

「いい身分だな、この。こっちはこれから更に忙しくなるのに」

「そうなんですか？ ゴーストエース はこれからデータ取りが主になるから、開発は一段落するって言うってたでしょ」

ナガさんは少し声を落とし、

「だからさあ、そのデータで2号機を作ろうって話があるんだよ」

「2号機？あのじゃじゃ馬の…？」

「そ。詳しい事は決まってるけど、エース向けの量産を前提とした実戦型になるらしいよ」

元々、ゴーストエース は次世代機のトライアルで敗れた機体だ。

それが再び日の目を見ることになったのは、オレの入学で注目が集まったおかげでもあるのだろう。

「ぼーずには感謝してるよ。おめーが使いこなしてくれなきゃ、倉庫でホコリ被ったままになるとこだった」

「オレも感謝してますよ。コイツに出会わなけりゃ、オレは飛べませんでしたし」

「嬉しい事を言うねえ。そんな感じで学園でも女の子を落とすんだぞ」

「だからなんでそうなるんですか！とつととアメリカに帰れ！」

「はいはい、それじゃ、ぼーず。ちゃんとデータ送れよ！See you！」

「分かってますっつてば…：See you .」  
それじゃ、また。

あつという間にナガさんは人ごみの中に消え、オレも踵を返す。

さて。

休みが明ければ、オレの新しい生活が始まる。

「…はあ、女の子に囲まれるって、すんげーキツいんだよな…」  
けど、転入前に顔見知りができたと、いうのは嬉しくもあった。  
なんとか、やっていけるかもしれないな。

……たぶん、な。

No.25 アクション(後書き)

ようやく次回から正式に転入できそうです。

ここまで来るのに長かったのは、レイルは当初、

マクロスFにおけるブレラ的な立ち位置、一夏からすれば

正体不明、敵か味方か?という感じに考えていた名残です。

それに、一夏と同時に入学する、というのは他の方の

小説でたくさん見られるので、あえて時期を思いつきり

離してみよう、という考えもあったからです。

以上、裏話でした。

それではまた次回!



No. 26 転校初日の苦勞人

「今日は、なんと転校生を紹介します！」

教室の中からは、ヤマダ先生の声が聞こえてくる。

ここはIS学園。

今日は2学期の始業式。

そして、オレ、レイル・スカイラインの転校日でもある。

(やべ、緊張してきた…)

「入れ」

オリムラ先生がドアを開ける。

一度深呼吸をしてから、思い切って教室に踏み入れる。

思わず逃げ出したくなった。

見渡す限りの女子、女子、女子。

それでもどうにか平静を保っていられたのは、その中にシャルロツトやラウラ、そしてホンネがいたからだ。

知ってる顔があるのは、少し安心する。

「はじめまして…じゃない人もいますね。アメリカから来ました、レイル・スカイラインです。見ての通り、男です。よろしくお願ひします」

よし、うまく言えた。

無難な自己紹介ではないだろうか

あれ？

なに、この気まずい沈黙の間は。

「男…の子…？」

「本当かな…」

「うーん…でも、ニュースでやってたし、本当じゃない?」

「でもやっぱり、シャルの時もあったし」

え?

何?この空気?

オレなんかした?

「「本当に男の子!?!」「」

「だから、オレは男ですけど…」

「本当!?実は女の子でしたってオチはない!?!」

「デユノアさんみたいにさ!」

「でも、男にしては体細くない?」

「やっぱり女の子なんでしょ?」

ええええええええええ!

転校初日から女の子疑惑う!?!

なんだ、そんなに男が珍しいか!?!

そりゃ、珍しいだろうけど。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

オリムラ先生の一言で、ぴたり、と喧騒が止んだ。

「スカイラインは正真正銘、2人目の男子だ。へんな目で見るな」

「では、スカイラインくんはその席に座ってくださいね」

「はい」

オレの席は、教室の一番後ろで

「えへへ」

ホンネの隣だった。

「では、授業を始める」

休み時間。

「れーびょーん、どうだった？」

「…死ぬ…」

授業は問題ない。

基礎知識は独学とイーリ教官の指導によって身に着いているし、むしろ復習みたいなものだ。

だが、この視線は何だ。

このクラスは、まだオリムラがいる分ある程度男子に慣れているからマシな方で、廊下には他のクラスや学年の女子が詰めかけている。

すぐそこにも、クラスの女子がオレに話しかけたくてうずうずしているのが見える。

本当なら、オリムラのところに行って男同士で話しかけたかったのだが、もはやその気力もない。

よって、オレは机にぶちまけられた水のごとく突っ伏していた。

「だいじょーぶ、そのうち慣れるよー。おりむーだって最初はこんな感じだったしー」

ちなみに、ホンネは友達から「いいなー、スカイラインくんと会話できるなんて」的な羨望を受けていた。

「よう、スカイライン」

オリムラがやってきた。

オレは首だけをぎぎぎ…とオリムラに向け、

「始めまして…じゃねえな。改めてよろしくな、オリムラ」

机に突っ伏してる分、すさまじくやる気のない挨拶になった。

「一夏でいいよ。千冬ね…織斑先生がいるから、ややこしいだろ」

「なら、オレもレイルと呼んでくれ…というか、イチカはよく平気

だな」

むくり、と体を起こし、教室の外の女子の大群を指す。

「オレも最初はしんどかったけど、すぐ慣れるよ。ま、男同士、互いにかんばろうぜ」

「ありがとよ。正直、同じ男がいるだけでも気が楽だ」  
「だよな」

「なんか、おりむくとれーぴよんの周りだけ、男の哀愁が漂ってるよ」

「本音はいいなー、部屋一緒なんでしょ？」

「え？ウソ！織斑くんとじゃないの!？」

「なんか、会長命令だつて」

「そんなあ…織斑くん×スカイラインくんの同室が…」

「何言つてんの！スカイラインくん×織斑くんでしょ！」

……勘弁してくれ……

あと、その「婦女子」、少し頭冷やそうか……

今日は実戦訓練はないらしく、午前中は座学だけで終わった。

さて、学食でも行

「スカイラインくん！お昼一緒に食べない!？」

「あたしお弁当作ってきたんだ！」

「ねえねえ、一緒に学食行こー！」

「あ、ずるーい！私が先だよー」

チャイム終了後、わずか3秒でオレは360度、全方位1組の女

子に囲まれてしまった。

女の子に囲まれる、というのは傍から見ればうらやましい光景なのだろうが、当人にとってはアリジゴクも同然だと言うことが分かった。

逃げ場はない。

そして、気を抜けば連れ去られそうなほど積極的に誘ってくる人たちがあしらうほどの器用さもない。

「ね、学食行こ！」

「弁当だよね！」

「よかつたら私たちと」

(どうする…！？)

「レイル、約束通り、一緒に昼飯食おうぜ！」

すくいのかみが あらわれた！

「と、いうわけだ。悪いけどオレはイチカとの先約があるから」  
無論、そんな約束はしていない。

「あちゃ〜、残念」

「じゃ、また次の機会に！」

群がっていた女子は、どうにか退いてくれた。

ありがとう、イチカ。

「サンキュな、死ぬかと思った」

「いいって。それより、みんな誘って飯行こうぜ」

……みんな？

「ええと、1年1組でしたね」

エリーゼ・レゼリオンはその教室の前までようやくたどり着いた。ここまで来るのに、ものすごい人の波に呑み込まれそうになったが、どうにか切りぬけてきた。

おそらく、他のクラスの女子の中でも一番乗りだ。  
教室の中を見る。

(…あら？いませぬね)

手近な女子に話しかける。

「すみません、レイラ・スカイランさんはこちらにおりませんか？」

「あー、レイルくんならもう織斑くんに行っちゃいましたよ」

がくり、とうなだれるエリーゼ。

「また、明日誘ってみますか」

「なんか、屋上で食べるのも久しぶりだなー」  
今日の天気のように能天気なイチカに対して、オレは戦慄していた。

集まった面々を見る。

オレ。

イチカ。

シャルロット。

ラウラ。

福音 戦で共闘したホウキ。

同じく、福音 戦で会った オルコット、だっけ？

5月の無人機戦でも遭遇した、ファン ナントカ。

オレが戦慄した理由その1。

全員、専用機持ちだ。

それも、ほとんどが代表候補生。

候補生クラスの間が、オレも含めて7人も集まっているのだから、戦争が起こせる戦力がこの屋上にいることになる。

理由その2。

オレとイチカ以外、なんだか火花を散らしてる。

こう、それぞれが互いを牽制し合っている、というかにらみ合い、  
というか。

触れれば感電しそうな空気が漂っている。

代表候補生同士のライバル心か、と思いきや、平時の彼女らを見る限り、特にそういうことはない。

しかも、みんなそろってランチボックスの包みを後ろ手に隠している。

これは

「あー、オレ、本当に同席してよかったのか？」

「何言ってるんだよ。男同士仲良くしようぜ。困った事があつたら頼  
ってくれ」

いや、男同士は何ともないんだ。

問題なのは

「ホラ、一夏。アンタの分」

ファンが、タッパーに詰められた回鍋肉ホイコーロを放り投げる。

「一夏さん？サンドイッチを作りすぎてしまってます。よろしければどうぞ」

オルコットがランチボックスを開けると、美味しそうなサンドイッチが整列していた。

「オホン！いい、一夏！お前の分の弁当だ！」

ホウキが差し出したのは卵焼きにキンピラごぼう、鮭の塩焼きetc...といったバランスの良い和食。

「ねえ、一夏。僕、唐揚げ作ってきたんだ。少しあげるね」

シャルロットの唐揚げは一口サイズになっており、食べやすそう  
だ。

「しかし、鯛焼きというのは、どうして和菓子なのだ？甘くはない

ようだが…」

ラウラ、もしかして、本当に鯛を焼いたんですか…？

ちなみに、オレは購買のコツペパン（つぶあんマーガリン）だ。

イチカは、オレと同じパンしか無かったはずだが、彼女達からの弁当のおかげでカオス、もとい豪華になっていた。

この差は何だ？

これって、まさか

「はい、レイルも、よかつたら食べて」

シャルロットが唐揚げをくれた。

「お、サンキュ…ん、うまいな、コレ」

冷めてはいるが、それも考慮された濃いめの味付け。

パリッとした衣を齧ると、肉汁のうまみが口中に広がる。

「あれ？アンタって一夏と違って小食なの？」

そう聞いてきたのは、ファンだった。

半ば反復運動で食べていたせいか、気がつけばパンを食べ終わっていた。

一方、イチカは大量のおかずを手を付けており、明らかにオレの倍近く食べていた。

「いや、オレだって人並みには食うぞ。ま、パン1つは少なかったかな」

食べざかりの高校生男子にとって、この程度、オヤツみたいなもんだ。

明日からは学食も見てみるか。

「なら、おひとついかがです？このままだと余ってしまいそうですから」

オルコットにサンドイッチを勧められた。

なぜだろう。



見た目もきれいでに美味しそうなのに、さつきから一つも減っていない。

「ん、なら遠慮なく」

なぜか、イチカが顔を真っ青にして何かを言おうとしたようだが、オレは手近な卵サンドを掴むと、がぶりと頬張った。

瞬間。

「むぐおお!？」

この世のカオスを全て凝縮したような味覚（としか表現できない）が口中に広がると、目の前にちかちかと輝く星が見えて、天と地がひっくり返った。

きらきらと天使が舞い降り、オレの意識は天に昇る。

ああ、そうか。

日曜の教会が嫌いだったオレでも、天国に召されるのか

傍から見た場合、ものすごい顔色で卒倒しただけなのだが。

「やべっ！しつかりしろ！レイルううう！顔色が真っ白だぞ！」

「あら、気絶するほど美味しいだなんて、わたくしも作ったかいがありましたわ。…顔色が真っ青ですわね」

「いや、むしろ真っ黒になってないか？」

「うーん…僕にはオレンジ色に見えるけど？」

「と、とにかく！保健室に連れて行きますよ！顔色が紫色よ！」

ドタドタドタ…

彼がようやく目を覚ましたのは、5時間目が終わってからだった。

No. 26 転校初日の苦勞人（後書き）

この回からIS学園転入として、タイトルも日本語になっています。ぶっちゃけ英語でタイトル考えるのがめんどくさ…ゲフンゲフン。

ここで、レイルにとってのISメインキャラクターズ。

・一夏 唯一の男友達。福音 戦の共闘で、なんとなくだが仲良くなっている。

・篝 紅椿 に乗ってた人。結構強かったな。そういえば、名字なんだっけ？

・鈴 無人機戦と福音 戦で会ったな。名前は、ファン なんだっけ？

・セシリア 福音 戦で見た。名前は、多分オルコット。サンドイッチはトラウマ。

・シャル @クルーズの事件で友達になる。始めてみた時は、男だと思ってた。一人称が僕なので、男友達のように気軽に話しかけられる。

・ラウラ @クルーズの事件で友達になる。シャルほど気さくな相手ではないが。

てなわけで、今のところはシャルとラウラと一夏以外はあまり仲良くないです。今後の展開でどうなるかは楽しみです。

それではまた次回！

ただ苦しくて、辛かった。

もう10年以上も前になるだろうか。

オレは、肺炎を患って病院のベッドで寝込んでいた。

一昔前なら助からなかった、と言われるほど重い症状だったらし  
く、とにかく苦しかった、というぐらいしか覚えてない。

苦しい。

くるしい。

苦しい苦しいくるしいクルしい苦しいくるしいくるしい苦しい

力なく、助けを求めるように手を伸ばす。

ぎゅつと。

そんな時、その手を握ってくれた人がいた。

そのぬくもりに、いくばくか苦しみが和らぐ。

まだ小さなオレの手を、暖かく包み込む大きな手

そうやって手を握ってくれた人は、もういない。

だから、これは夢なのだろう。

でも、今はその手のぬくもりを感じていたい、と思った。

「かあ、さん……」

……

まず目に入ったのは、蛍光灯付きの白い天井。

そして

「あ、起きた〜？」

オレの顔を覗き込む、ホンネの顔だった。

「……………」

とたんに恥ずかしくなった。

顔が近いが、それよりも問題なのは

なぜか、夢の中の手のぬくもりが消えていないことだ。

もちろん、

「ホ、ホンネ！手！なんで手え握ってんだよ！」

オレの右手は、袖の余った制服の布地越しに、ホンネの手のぬくもりを感じ取っていた。

がばり、と身を起こし、慌てて手を振りほどく。

「んーとねえ〜、れーぴょんがうなされながら手を伸ばしてきたんだよ〜」

「え……………」

どうも、夢の中同様、苦しくて思わず手を伸ばしていたらしい。額には汗が浮き出ており、夢の中の苦しさを物語っていた。

「……………今、何時だ？」

「れーぴょんは〜時計持ってたでしょ〜？」

時計を見ると、6時間目も終わり、放課後になっていた。午後の授業は座学で、大体の内容は既に頭に入っているから、ノートを見せてもらわなくても大丈夫だろう。

「はあ……………初日から保健室送りとはい…我ながらアホみてえだ…………」

「そーゆーこともあるよ〜。はい、カバン〜」

「お、ありがとうございます。じゃ、ちようど放課後だし…………行くか」

「体は〜大丈夫なのお？」

「ノープロブレム。…むしろ、あのサンドイッチによるトラウマの方が大きい」

「そりゃもう、肺炎の苦しい記憶が蘇るほどに。」

「????サンドイッチ？」

「いや、気にするな…ほれ、行くぞ」

「わ〜、まって〜」

オレと、少し遅れたホンネは保健室を後にした。

重厚な開き戸を開けた瞬間、丸い何かが目の前に突き出された。

反射的に身をかがめると、直後にパパン！という破裂音と共にキラキラしたテープが撒き散らされる。

「ずいぶんと反応が早いのね、避けないでよん」

クラッカーを持った2年生の女子 更識楯無生徒会長は、残念そうにそう言った。

「避けなかったら顔面テープまみれでしょうが。人を歓迎するのか追いつめるのかどっちかにしてください」

「あら、歓迎してるつもりだけど。…ま、とにかく入ってちょうだいな」

言われて、中に入る。

「それでは、すぐにお茶を淹れますね」

眼鏡に三つ編みの、お堅いが仕事はできる、といった風貌の3年生、布仏虚先輩（ホンネの姉貴）は、いたって真面目に紅茶を淹れ始めた。

ソファにかけ、本題に入る。

「約束通り、馳せ参じましたけど…会計、でしたっけ？」

「書記よ。本音ちゃんと一緒に、ガンガン働いてちょうだいな」

オレは夏休み中、「負けた方が相手の言うことを聞く」的な約束

をして、会長とIS戦をしたことがある。

結果は惨敗、約束として、会長の言うことを聞くことになったのだが、その結果がこれだ。

「とゆゝわけで、れーぴょんも一緒にがんばろうね」

「はいはい……」

オレの生徒会書記就任。

転校早々なんだよ！と言いたいところだが、約束なので仕方ない。

「本音、あなたはほとんど仕事してないでしょ。レイルくん全部任せよう、なんて思わないでね」

ティーカップにお茶を注ぎながら、先輩がホッソに釘をさす。

「てひひ、ばれた？」

おいこら、マジでそう思ったんかい！

と、何やらホッソがケーキを持ってきた。

「今日はケーキもあるのよ。ささやかながら、歓迎パーティーってとこよ」

オレも何かしないわけにはいかないと思い、ケーキの取り皿を並べることにした。

並べられた端から、チョコレートケーキが皿に乗つけられていく。

「それじゃ、レイルくんの書記就任……おめでと〜！」

「おめでと〜ございます」

「おめでたおめでた」

「……はあ、どうも……」

まあ、こんな美味しいケーキが食えるんなら、生徒会も悪くないかな。

……いや、生徒会に入ったのは仕方なく、だぞ。仕方なく。

……でも、やっぱり美味しいな。もぐもぐ……

「ふう〜、疲れたー…」

一夏は放課後のES特訓をようやく終え、片づけをしていた。

教えてくれるのは篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラといったいつものメンバーだが、いつも私が教えるいや私が、といった感じで奪い合いになっていた。

そこで、全員で一人に教えるのは効率が悪い、という結論に達し、明日から教官役はローテーション制にしよう、と話を付けた所だ。

レイルにも教えてもらおうかな、と話したら、「やっぱり男の方がいいのか?」と詰め寄られた。なんでだろう?

「一夏!ボーっとしてないで手伝いなさいよ!」

「はいはい…」

鈴に呼ばれてそっちに行こうとした時。

「すみません、少しよろしいですか?」

「はい?」

そちらを向くと、ひとりの女子　リボンの色からして2年生だ  
が立っていた。

腰まで届くさらさらの赤毛、セシリアのものに似たロングスカートの制服。

「レイラ…いえ、レイル・スカイラインさんがどこにいらっしやるのか、ご存じありませんか?」

「さあ…昼休みに保健室に運ばれて行かれてそれっきりで…」

「そうですか…」

2年生の人は、少しだけ残念そうな顔をした。

夕陽を反射した髪飾りが、きらりと光る。

「あ、でも、今の時間なら、もう寮に戻ってるんじゃないですか?」  
「なるほど、ありがとうございます。呼び止めてしまっすすみませ  
んね」

「いえいえ」



にこり、と微笑んだ顔が、かなりきれいだったので、思わずどきりとしてしまう。

「それでは」

長い赤毛をなびかせて、彼女は去って行った。

(レイルの知り合いかな…？単なる追っかけ…じゃないよな)  
そんなことを考えていると、不意に視線を感じた。

「……なんだよ、みんな」

「…別に」

「何でもありませんわ」

「なによデレデレしちゃって」

「やっぱ、一夏って年上好きなのかな…」

「私の嫁としての自覚が足りんな」

そのままぷいっ！と自分の作業に戻ってしまう。

えー？

俺、なんか怒らせるようなこと、したっけ？

学食のカツ丼は美味かった。

さすがは国立、といったところか。

ただ、他の女子に囲まれてしまい（主にホンネが声をかけたせい）、質問攻めにあった。

カツ丼と相まって、日本の刑事ドラマで見る取り調べシーンを連想してしまった。

で、部屋に戻ってきたオレは、

「疲れた……」

もはや机に突っ伏すことしかできない。

なんで夕飯食うだけでこんなに体力（というより精神力）使わにやならんのだ。

「じゃあ、私はしゃわを浴びてるね」

「あ、そ」

「……のぞいちやだめだめだよ」

「そんな気も体力ねえよ……」

「え、残念」

なんで残念なんだよ……と思いつつ、もはやツッコむ気力もない。バタン、と扉を閉める音を最後に、部屋が静かになった。

「……………」

コンコン。

もう指一本動かしたくない。

コンコン！

ああもう、なんだよいったい。

コンコンッ！

「は、いどおぞ……」

なんか、ホンネみたいな口調になっちまった。

ガチャツとドアを開けて入ってきたのは

「お久しぶりですね、レイラさん　ってどうしたんですか？」

「こちらこそ久しぶりですね。……あと、レイルです。いつになったら直るんですかそれ」

「しばらく直すつもりはないですよ」

「言い切りやがりましたね…あ、適当にかけてください」

エリーゼさんはゆっくりとベッドに腰掛ける。

「どうです？学園生活1日目は」

オレは今日あった出来事そのままを言った。

「女の子扱いされてサンドイッチ食べたら倒れてドアを開けたらクッラッカー浴びせられそうになってケーキと紅茶飲んで夕食で女子に

「困まれて死にそうになりました」

「……………い、色々あったようですな……」

「おかげで死にそうなほど疲れました」

「ついでに言うと、美人のエリーゼさんの相手は精神力使うので、今日は勘弁してほしい、というのがオレの偽らざる本音である。」

「何か困った事があれば言ってくださいね。後輩さん」

「はいはい。頼りにしてますよ、先輩……………インスタントですけど、どうぞ」

インスタントの紅茶の入ったカップを渡す。

「…ありがとうございますですね。そういえば、レゼリオン社の方で『2号機』の開発が進んでいますよ」

エリーゼさんはアメリカ代表候補生であり、レゼリオン社の社長令嬢だ。

会社の情報も、色々と入ってくるのだろう。

彼女は紅茶を一口飲む。

「2号機って言うと……………ゴーストエースの……………」

「ええ。と言っても、パーツの何割かは1号機レイラさんの機体から流用できますし、稼働データも1号機のものがありますから、1か月もすれば完成しますよ」

オレも紅茶を一口すすり、安いインスタントの味を堪能した。

生徒会室の紅茶を飲んだ後のせいかな、正直美味しくないが、多めのミルクと砂糖で我慢した。

「量産化が前提だった話でしたね」

「ええ。桐沢博士に加え、レゼリオン社のスタッフも参加していますから、コストパフォーマンスも性能も1号機より上ですよ」

「喜んでいいのやら何やら、複雑な気分ですね」

正直、自分の愛機より上、というのはなんとなく嫌だったりする。

もやもやした気分を、ミルクティーで飲み干した。

「ところで…レイラさんは女の子と同室なんですね」

思わず口の中の紅茶を吹きだした。

「急にその話題ですか！？勘弁してくださいよ。オレだって好きでこうなったんじゃないんですから」

「うふふ。そうですね…どうですか？女の子との同居の感想は？」

「エリーゼさん…？目が笑ってませんよ…」

「ご感想は？」

「色々勘弁してください。それ以上聞かれると胃に穴が開きそうです」

「あら。では、邪魔者は失礼させていただきますね。ごちそうさまでした」

紅茶のカップを置き、ドアに向かう。

「ちょっと！邪魔者って何ですか邪魔者って！」

「冗談ですよ、ふふ。それでは」

エリーゼさんが出ていった後、今度こそ精神力を使い果たしたオレは、ベッドに倒れこんだ。

ガチャッ

「あ、シャワ〜空いたよ〜…ってあれえ？れーびよ〜ん？生きてる〜？」

そうだよ。女の子と同居っていう、精神力を削り取るイベントがまだあるじゃないか…

彼と同室の女生徒Hさんの証言によると、その後の彼は、まるでゾンビのような死相だったという…

No.27 転校性はケーキが好き(後書き)

久々の更新になりました。

しばらくネット環境が無いところにいたもので…

更新が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

それではまた次回！

各アクチュエーター、正常に作動。

AIS、力場展開翼に異常なし。

ハイパーセンサー起動。視界が一気にクリアになる。

装備確認。ハンドシールド、メタルブレイカーを呼び出し完了。  
予備マガジンも量子変換済みだ。

対戦相手 中国製第3世代型IS 甲龍。

「準備はいいですか？スカイラインくん」

「いつでもOKです」

ヤマダ先生に返答すると、すぐに発信許可が出た。

カタパルトのガイドビーコンが表示され、カウントが始まる。

2、1、

「テイクオフ  
離陸！」

通常のISと違い、ゴーストエースの脚部はカタパルトを利用できるほどの機能すらないため、実際にカタパルトは利用しない。PICでふわりと浮きあがった後、猛烈なスラスタ加速と共に、一瞬でアリーナに躍り出る。

すぐに姿勢を制御し、目の前の相手と正対する。

「さあて、転校性の実力、見せてもらおうわよ！」

甲龍の操縦者、ファン・ナントカがその手に、2本の巨大な青龍刀「双天牙月」を連結し、ナギナタ状になったそれを構える。

「こつちこそ、クラス代表の力、見せてもらうぜ」

「メタルブレイカー」の安全装置を解除する。

「はじめ！」

オリムラ先生の合図と共に、オレはスラスタ全開で加速した。

9月3日。

2学期初の レイルにとっては転校後初の実戦訓練は、1組と2組の合同で始まった。

この訓練でもレイルは当然のように女子の注目を浴び、気がつけば鈴との対戦が勢いで決まっていた。

……まあ、俺も正直見てみたい気持ちはある。

そして。

アリーナの観客席。

1組の生徒が集まって観戦している中、俺 織斑一夏 と篤、セシリア、シャル、ラウラの5人もまた、アリーナの戦闘に目を奪われていた。

「鈴さん！何をやってますの！」

「レイルの専用機って本当に速いね…高機動パッケージ並だよ…」

「ふん、あれぐらい…私の嫁なら楽勝だ」

「いやいや、無理言わないでくれ」

序盤こそ、衝撃砲の「見えない弾丸」が有利に働き、鈴が押していたものの、それを見切ったのか、今ではすっかりレイルが優勢だ。

レイルの戦い方は、接近戦しか能が無い俺とは全く逆だ。

さつきから鈴に接近しようと思わず、距離を保った射撃戦を展開している。

そういや、福音 事件の時も、接近用武器は使っていない気がするから、もしかすると接近戦は苦手なのかもしれない。

あれなら

レーザーの連射を「双天牙月」で防いだ鈴が、衝撃砲を連射する。

しかしそれは、高速で動くレイルを捉えきれなかった。

『……ああもう！いいかげんに当たりなさいよっ！』

「まずい！動きを止めるな！」

動きが鈍った一瞬を見逃さず、甲龍をオレンジ色の光軸が直撃し、鈴がぐらりと体勢を崩す。

『もらったぞ！えーと』

ファン・リンリン！』

『あたしの名前は鳳鈴<sup>ファン・リン</sup>』

』

レイルがライフルを放つ。

薬莢が弾け飛び、オレンジ色の閃光を反射してきらめく。

レールガンの弾丸が数発ほど直撃し、薬莢がカラリと地面に落ちたところで、試合終了のブザーが鳴った。

『勝者、スカイライン！』

わあああ、と歓声が起こる。

『ご苦労だった。2人とも戻ってこい』

千冬ね　織斑先生の一言と共に、レイルはピットに引き返した。

『だから、話聞きなさいよ！あたしの名前は』

鳳<sup>ファン</sup>、聞こえなかったのか？とつと戻ってこい』

『わかりました……』

鈴の抗議は、レイルに届かなかった。

「だから、あたしの名前は鳳鈴音<sup>ファン・リンリン</sup>だっと言ってんでしょぅが！いいかげん覚えなさいよバカ！」

「バカとはなんだバカ。だから、ファン・リンリンだろ？どこが間違ってたんだ？」

カツ丼をががつと平らげつつ、レイルはそう返答した。

学食には、いつもの専用機持ちズが集まっており、特にオレはフ



アンから執拗に詰め寄られていた。

「だーからあー！リンリンじゃなくて、リ」

「れーぴょん、隣…いいかな？」

ファンが何か言いかける前に、ホンネがパスタを載せたトレイを持ってきた。

「ああ、別に断んなくていいだろ。いつもの事だし」

「そうだねえ」

彼女とは、クラスも部屋も同じで、生徒会でも一緒なので、3食は一緒に食べていた。

「…で、なに話してたっけ？」

「あたしの名前は、鈴」

「それにしても、りんりに勝っちゃうなんて、さすがだね」  
ほら、やっぱり「リンリン」じゃないか。

ちなみに、「りんりん」というのは本音が勝手につけたあだ名であるのだが、レイルは知るよしもない。

「ま、相性が良かったただだよ。正直、見えない弾丸相手は辛かった」

「なによ。後半はしつかり射撃を読んでたくせに」

「だよね。りんりの射撃のくせでも読んだの？」

「違う。センサーを調節して見えるようにしただけだ。ゴイツは推ゴーストキース進に衝撃砲と似たようなシステムを使ってるからな。センサーもそれに対応してるんだよ」

「ふうん。道理で」

「さてと、午後も実習だったっけ。機体調整しとかないと」

食後の緑茶を飲み、食器を下げに立ちあがる。

「あ、私も手伝った」

「食い終わったらな。……それじゃな、ファン・ヒーター」

「なんで正解から離れてんのよ！あたしは」

「レイル、着替えに行こうぜ」

「イチカお前、授業のたびにISスーツ着替えてんのか？午後も実習あるんだから着たまんまでいいだろ」

他愛ない会話をしながら、オレ達は食堂を後にした。

「だから、鈴音リンインだつてばー！」

「どうしたの？りんりん」

「……アンタは黙つてて……」

「やつぱり無駄に広いもんだ……」

「ま、使うのオレ達だけだからな」

ホンネに手伝ってもらい、機体の調整を済ませたオレは、ロッカールームで着替えた。

着替えたと言っても、ISスーツは着っぱなしなので上に着ていた制服を脱いだだけだ。

「やつぱり、燃費悪すぎるよな……」

イチカは白式のコンソールを開き、調整を始めた。

「あー、確かにさっきの試合、エネルギーが切れてたな。… 白式つてそんなに燃費悪いのか？」

「元々『零落白夜』はシールドエネルギーを削る武器だからな。第セ2形態移行で更に加速しちゃった」

「しかし、イチカつてIS使えるようになって1年も経ってないんだろ？よくそんな短期間に第2形態移行なんて……」

「やつぱ、おかしいのか？」

「まあ……シャルロット達だつてイチカよりは自機に長く乗ってるだろ。第2形態移行つてのはある程度経験が蓄積されないと発生しないんだぜ。オレだつて……」

一年以上経つのに、と言いかけてやめた。

オレは表向きは今年の5月にISに乗れるようになった事になってるんだから、半年も経っていない事になる。

「どうした？」

「ああいや、オレはイチカよりも操縦経験が少ないんだつたな。ハハ……」

「……？」

「……と、そろそろ時間だな。先に行ってるぜ。遅れんなよ」「ああ。後でな」

ロッカールームの戸を開ける。

(しー……)

目の前に、タテナシ会長が立っていた。

何を　　と言いかけたが、会長は口元に人差し指を当てて「しー、静かにして」と訴えてくるので、やめた。

あの目は、何か企んでる目だ。

会長はそのまま足音も立てずイチカの背後に忍び寄って行く。

おそらく、これからイチカがいたずらされるんだろつな。

やれやれ、と思いつつも止めないあたり、オレも生徒会の一員らしい。

「だーれだ？」と両手でイチカの顔を覆う会長は見ずに、オレはロッカールームを後にした。

イチカもカワイソウに。

「……遅刻の言い訳は以上か？」

予想通り、イチカはオリムラ先生にとっ捕まっていた。

「いや、あの……あのですね？だから、見知らぬ女生徒が」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ  
」

イチカという言葉が入り込む余地はないようだ。

「スカイライン、お前はその女子を目撃したか？」

「いえ、見てませんが」

適当にかぶりを振る。

悪いな、イチカ。

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしる。的はこの馬鹿者で構わん」

あらら、ドンマイ。

と、イチカがこっちに救いを求める視線を送ってきた。

以下、アイコンタクトによる会話。

(Help me!)

(Sorry, I can't. Ichika..... Good luck!)

(Nooo!)

以上、アイコンタクト終了。

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

オレの興味は、早くもシャルロットのラピッド・スイッチに移っていた。

もちろん、悲鳴を上げるイチカの末路は気にせずに。

「こんにちは」

「ども」

重厚なドアを開くと、既に会長が待つていた。

ウツホ先輩は、まだ来てないようだ。

「はいこんにちは。レイルくんもここに慣れてきたみたいじゃない」  
「まだ3日でしょう。ま、精神力が鍛えられてる感じはしますけど」  
一応、女子の質問攻めをサラリとかわせるぐらいには凶太くなってる。

「そりゃよかつたじゃない。……虚ちゃんがまだ来てないし、お茶入れてよ、レイルくん」

「はいはい…先輩ほどの味は期待しないでくださいよ」

「お姉ちゃんは特別だよ」

「…っていうか、ホンネも一応メイドだろ。オレよりは上手いんじゃないの？」

「がんばってね、れーぴょん」

「……おい、質問に答える」

結局、オレが淹れた。

「うーん、最高に美味しいわね」

「さいこーだよ」

自分でも飲んでみる。

「ウソでしょ」

「うん、ウソ。まだまだだね」

うわ、マジで言われた。

「れーぴょん、そのうちいいことあるさ」

「……だといけど」

そろそろ自室の備品以上に馴染み始めたテーブルに座り、書類を

片づける。

少しすると、ウツホ先輩も来て、仕事を始めた。

さすがというか、オレよりも仕事の手際がいい。

ホンネと比べるのは　　さすがにかわいそうだ、ホンネが。

そもそも、書記は既にホンネがいるのに、なぜオレが書記に任命されたかというところ…

これ以上は言わずもがな。

先輩曰く、「やっと書記がまともに機能するようになった」との事だ。

「明日は全校集会よ。私のありがたーいお話があるから、しっかり聞きなさいよ」

仕事をしていると、会長が腕を組みながらそう言った。

「ありがたいだけで済めばいいですけどね…」

生徒会メンバーである以上、その内容も知らされている。その内容は

「各部対抗おりむー争奪戦だね」

内容はこうだ。

IS学園の学園祭では毎年各部活動ごとに催し物を出し、それに対して投票を行い、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みだった。しかし、それではつまらないので、一位の部活動にイチ力を強制入部させる。

各部でイチ力を取り合えば、催し物もみんな本気を出し、学園祭も盛り上がる　　以上、会長からの受け売りだ。

「ホントはレイルくんも争奪させようと思ったんだけどね」

「ウソでしょ。せっかく労せずに入れたオレを、わざわざ手放しますか？」

「あら、労せずなんて言わないでよ。キミとの勝負、結構苦戦したわよ」

それもウソだ。

夏休みの対決は、明らかに遊ばれた。

勝負、というにも程遠いボロ負け。

まあ、負けた方が言うことを聞く、という約束で生徒会に入ったのだ。

約束についてどうこう言うつもりはないし、それに、  
この生徒会は、正直気に入っている。

「それじゃ、壁紙収集行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい」

「しつかりね、レイルくん」

「行つてらっしゃい」

……

「ホンネ、お前も来るんだよ」

「てひひ、ばれた〜？」

「とつと来い。一人だと深夜までかかちまうだろうが」  
半ばホンネを引きずるように、生徒会室を後にした。

さて、今からやりやあ、夜までには終わるだろう。

No. 28 実習とか生徒会とか（後書き）

久々にレイルをまともに勝たせたような気がする……  
今までの相手が強すぎましたからね。

あと、今まで忘れていたので、「メタルブレイカー」に廃莢の描写を入れています。

レイル視点での「先輩」は基本的に虚さんを指します。  
エリーゼや楯無も先輩ですが、それぞれ「エリーゼさん」「会長」と呼んでいます。

それではまた次回！





「れーぴょん、声に出てる」  
隣のホンネに指摘され、咳払いをして口をつぐむ。

『織斑一夏を、1位の部活動に強制入部させましょうー！』  
会長の一言と共に、再び叫び声上がる。

『さて、私からも一つ、みんなにお知らせします。…と言っても、学園祭とは別の話なただけど』  
静寂が起こる。

「あー…」  
これから話す内容を思い浮かべると、なんか頭が痛くなってきた。  
「くつくつく…れーぴょんよ…せいぜい頭を抱えるがいい…本  
当の地獄はこれからだ〜くつくつく〜」  
「マネすんな、アホ」  
痛いところを付いてきたホンネを小突いて黙らせる。

『みんなも知つての通り、ちょうど5日後、この学園で、映画の撮影が行われます』  
そう。

夏休みの終わりごろに決まった事なのだが、アメリカの映画会社が、映画の撮影のためにここを訪れる。

そう、アメリカの映画会社だ。  
『その映画には……なんと！』  
会長、そんなに期待を煽らないでください。

『我らがニューヒーロー、レイル・スカイラインくんが出演します』  
『！』

「おお〜〜〜！！！」  
「うわ〜恥ずかしい。」

出演するったって大した役じゃないし。

せめてもの抵抗として、その部分のスライドだけはやたらと地味に作っておいたのだが、もはや意味はない。

『そしてさらに！皆さんの中から有志を募り、エキストラを募集します！』

「おおおお~~~~~!!!!」

『ちなみに参加すれば 映画会社から、映画のディスクが配布されます！参加する人はプリントの通り、アリーナに集合！』

「おおおお~~~~~!!!!」

ちなみにエキストラの役名は、「IS学園の生徒たち」……まんまじゃん。

オレの役名は 今と言えない。

こうして、二人の男の不安を残したまま、全校集会は幕を閉じた。

同日、教室にて放課後の特別HR。

クラスごとの出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がった中で、箒は眉をひそめながら話を聞いていた。

「えーと……」

クラス代表として、意見をまとめる立場にある一夏が唸る。

「却下」

えええええー！！と大音量サウンドでブーイングが響くが、私も一夏と同じ意見だ。

内容が『織斑一夏とレイル・スカイラインのホストクラブ』『織斑一夏とレイル・スカイラインとツイスター』『織斑一夏とレイル・スカイラインとポツキーゲーム』云々なのだから。

レイルはともかく、一夏と他の女子を絡ませるなど、言語道断だ。

「あ、アホか！誰がうれしいんだ、こんなもん！」

「同感だ。なんでオレがツイスターなんざやらにゃあならんのだ」  
一夏とレイルから当然のような抗議が来る。

「私は嬉しいわね。断言する！」

「むしろツイスターやってよツイスター！」

「織斑くんとレイルくんは共有財産である！」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「しまいには、

「織斑くん、レイルくん！ツイスターに賛成してくれたらデザート無料券あげるからさあ〜」

なんていうアホな声まで飛び出した。

「アホか！デザートで釣られてツイスターやるわけないだろ！な、レイル！」

「……………そうか、デザート無料券か…いやしかしツイスターは…ゴニョゴニョ」

なんか、レイルが顎に手を当てながら、何やらぶつぶつと呟いてる。

「おい、レイル？」

「だがデザート半年間フリーパスとは…半年間デザート食い放題ということに…いやしかし…」

「レイル、まさか…」

「だけどツイスターだよツイスター恥ずかしくてやってられなかったのいやでもデザート無料かぁいやいやツイスターなんて断固拒否だデザート……………」

「もしもし!!」

一夏の一言でようやく意識が戻ったのか、はっ! と顔を上げるレイル。

もしかして、デザートとツイスターの間で悩んでいたのか?

「な、なんだよイチカ?」

「ツイスターなんてやだよな?」

「え? ああ... そうだな... しかしデザートか...」

「レイル!? こらまでデザートで釣られるなよっ!... くそ、おまえまで...」

思わぬ地雷を踏んだ一夏は山田先生の方を向き、

「山田先生、ダメですよな? こういうおかしな企画は」

「え!? わ、私に振るんですか!?!」

副担任です。

「え、えーと... うーん、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ...?」

やや頬を赤らめながら言う山田先生。

繰り返しますが、副担任です。

「織斑くんホストクラブ!」

「デザート... しかしツイスターは... いやしかしデザート...」

「織斑くん、先生はポッキーで...」

もはや四面楚歌。

もちろん私も反対だが、代案がなかなか出てこない。

このままでは...

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ったのは、なんとラウラだった。

一夏やレイルだけではなく、私も含めてクラス中がぼかんとしている。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確

か、招待券制で外部からも入れるのだろうか？それなら、休憩所としての需要も少なからずあるはずだ」

その口調はいつもと同じ淡々としたものだったが、あまりに本人のキャラにそぐわない。

私もクラスのみんなも理解に時間を要した。

「え、えーと……みんなはどう思う？」

一夏がみんなの反応を見る。

「いいんじゃないかな？一夏とレイルには執事が厨房を担当してもらえばオーケーだよな」

シャルロットの援護射撃に、見事に一組女子全員が射抜かれる。

私も思わず、ほわわ〜んと一夏の執事服姿を想像する。

(……すごくイイな……)

「織斑くん！執事！いい！」

「それでそれで！」

「衣装どうする！？私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

女子力というコーラに、執事というメントスを投げ入れられたこの盛り上がりは、もはや止められまい。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

またもやラウラから意外な声。

私も思わず目を丸くする。

「ごほん。シャルロットが、な」

「え、えつと、ラウラ？それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

クラスの女子は声を合わせて『怒りませんとも！』と断言する。

レイルも何か納得したようで、さつきからうんうんと頷いている。

かくして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。

放課後の第3アリーナ。

会長から「お疲れ様。今日は生徒会の仕事はいいから、第3アリーナで訓練でもしててちょうだい」と言われ、現在、オレは本当に第3アリーナで訓練中だ。

あの人の事だ。訓練するアリーナまでさりげなく指定してくるのだから、ここで訓練してれば何かあるのだろう。

「ね、レイルって何の役で出るの？」

ゴーストエース を展開し射撃訓練をしていると、横で訓練をしていたシャルロットが話しかけてきた。

彼女の専用機 ラファール・リヴァイブ・カスタム？ は、通常のリヴァイブとは違い、より機動性を高めた改造と、鮮やかなオレンジのカラーリングが施されている。

最大の特徴は拡張領域<sup>パス・スロット</sup>の多さで、実に20もの武器を装備しているという。

空気が2つしかない ゴーストエース とは対照的だ。

訓練を中断するため、そのオレンジのISが解除される。

オレも、ゴーストエース を解除する。

「んー…簡単に言うと、主人公のスタントマン、ってところだな」

「主人公！？それはまた大役ですわね…」

ISスーツ姿のセシリアが姿を現す。

スタントマン。

映画の撮影時、ビルの隙間を飛び越える、崖から飛び降りる、といった、「本物の」主役にやらせるには危険なシーンを代わりに演じる役だ。

「オレがやるのはISの戦闘シーン。オレの事が発表されてすぐに監督が飛び込んできた」

「へえ…」

代表候補生は国家公認のアイドルのようなものなので、何らかの形でそういう活動をすることも多い。

俳優をやってる人もいるので、オレのようなケースは珍しい事ではない。

聞けば、エリーゼさんも俳優の経験があるらしい。

詳しくは教えてくれなかったが。

「そうだ。よかったら、ちょっと練習に付き合ってくんないか？」

「え？いいけど、何するの？」

「普通にオレと戦ってくれればいい。そうだな…シャルロット、武器はなるべく威力が弱いヤツを頼む。セシリア、その『スターライトmk?』貸してくれ」

「え？まあ、構いませんが」

それぞれが再びISを展開、セシリアから2メートルに及ぶ長いライフルを受け取る。

通常、他のISの武器は使用できないのだが、使用者が許可を出せばオレでもセシリアのライフルを使うこともできる。

「こんな感じかな？」

シャルロットはサブマシンガン「キヤルコM99」を構える。

「ああ。それじゃあ、始めよう」

お互い、距離を離す。

オレは、借りた「スターライトmk?」を右手に持つと、左手に円筒状の火器を呼び出した。

キヤルコ社製「スマートリング」と呼ばれるそれは、細身のガトリングガンだ。

大型化しがちなガトリングガンを、アサルトライフルクラスまで小型化させながらも、同クラスのマシンガン以上の火力を持つ。

最大の特徴は銃の後部に埋もれた円筒状のマガジンで、螺旋樽ヘリカルドラムと呼ばれる方式を採用しており、小型サイズでありながら破格の装弾数を誇る。



本来は予備兵装<sup>サイドアーム</sup>だが、今回の訓練では必要なものだ。  
以上、うんちく終わり。

『なんと言いましょつか…武器に差がありませんかしら？』  
片やサブマシンガン、片やガトリングガンと大型レーザーライフル。

「仕方ねえだろ。自慢じゃねえが、装甲が紙なんだ。わざと食らうにはそれぐらいじゃないと危険なんだよ」

『わざと…？』

「ああ、気にすんな。それじゃ、セシリア、カウント頼む」

『ええ。では行きますわよ。……3、2、1、始め！』

シャルロットが迫る。

いつもなら派手に動きまわって攪乱するところだが、今回はそうはいかない。

代わりに、有効射程距離に捉えたシャルロットに、「スターライト」のレーザーをぶっ放した。

回避されるが、構わずに撃ちまくる。

『遅いよ！』

イクレッションブースト

瞬間加速で一気にシャルロットが視界から消える。

後ろ…いや…

「上かあ！」

瞬間、スラスターを反転させ、真上から襲い来るシャルロットと  
正対する。

『な』

躊躇せずに両手のトリガーを引く。

実弾の嵐と大威力のレーザーが空を裂き、シャルロットを呑み込む。  
む。

『11のー』

スラスター全開で弾膜を抜けたシャルロットが応射する。直撃とまでは行かないが、無傷でもなかったようだ。ガガンツ！とこちらの装甲も火花を散らす。

数発が命中するが、構わずにそのまま射撃を続ける。

シールドエネルギーが減るが、この程度なら問題ない。

「うわっ！」

ついにレーザーの一撃がシャルロットに直撃する。

だが、オレは構わずに「スターライト」を撃ち続けた。

加えて、両腕内蔵のパルスレーザー機銃「ラピッドレイ」も同時に撃つ。

しかし、シャルロットも代表候補生だ。

いったん体勢を立て直すと、安定感のある回避と射撃でオレを追い詰めてくる。

移動すらしめないオレに、ガンガンと敵弾が命中し、シールドエネルギーが削られる。

どうも、機動性でこちらを攪乱するつもりらしい。

「それなら……！」

両肩のスラスターで旋回し、シャルロットに正対した瞬間に「スターライト」を放つ。

射撃の反動でろくに狙いも定まらないが、それは他の武器でカバーした。

シールドエネルギーが残り少ない。

お互いに被弾が重なるが、オレの方が追い詰められていた。

再びシャルロットが視界から消える。

今度は　　後ろか！

スラスターの推力にモノを言わせた急速旋回。

シャルロットを正面に捉えるが早いか、全ての武器を一斉発射させた。

「ラピッドレイ」がレーザーの弾膜を張り、「スマートリング」が鉄の嵐を巻き起こす。

そしてその間を縫うように、「スターライト」を撃つ。  
何発かがシャルロットに直撃し、その体勢が崩れる。  
「これで！」

だが、その時。

カチリ、というとともに、「スマートリング」が沈黙した。

（弾切れ　　）

弾膜が薄れた瞬間を、シャルロットは見逃してくれなかった。

一気にこちらに接近すると、オレの周りを回るようにしてサブマシンガンの連射を浴びせてくる。

長いライフルは接近されると弱い。

実質的に使えるのが「ラピッドレイ」だけになってしまった今、オレの勝敗は既に決まっていた。

ちょうどシャルロットが全弾を撃ち尽くした時、　　ゴーストエースのシールドエネルギーはゼロになっていた。

No.29 男たちの災難（後書き）

なんかレイルのキャラが崩れている気がします、甘いモノ好きという設定は初期の方から考えていたものです。

「スマートリング」という武器が出てきますが、分かりやすく言うとマクロスシリーズのガンポッドです。これは、ゴーストエースのポツになったメイン武器ですが、名前が気に入っていたので出してみました。

それではまた次回！

「あれ？一夏」

「い、一夏さん？今日は第4アリーナで特訓と聞きましたけど」

俺達が第3アリーナに着くと、そこにいたのはシャルとセシリアだった。

どうも何かのデータを見ていたようで、部分展開した腕からモニターを投影している。

そこに映っているのは                    ゴーストエース、だろうか？

二人は俺とラウラ、それに                    楯無先輩の姿を見て、不思議そうな顔をする。

無理もないか。

俺だって放課後のクラス会議が終わってから、この人に色々と振り回され、生徒会室までお邪魔した。

あげくの果てに、負けたら楯無先輩が俺の専属コーチになる、という条件で勝負をし

見事、惨敗。現在、早速アリーナで特訓しよう、というわけだ。

「……そちらの方はどなたですか？」

当然のように楯無先輩が気になったのか、セシリアは少しムツとした表情で訊いてくる。

「……なんでムツとしてんだ？」

「せ、セシリア。生徒会長だよ」

「ああ……。そういえば、どこかで見たような顔ですわね」

「まあ、そう邪険にしないで。あ、私はこれから一夏さんの専属コーチをするから今後也會う機会があるわね」

さらっと言った先輩に、シャルとセシリアそれにラウラまでもがぎょっとした、その時。

「…あー…やっぱりね。大方、勝負に負けたら言いなり、とか言つてコーチになつたんでしょ、会長」

振り向くと、そこにはISスーツ姿のレイルがいた。

「まあね。キミの時とは違つて格闘技だったけど」

なんか、やけに親しげに話してるな。

「レイル、お前つて会長と知り合いなのか？」

「ああ。オレは生徒か」

「おねーさんとつきあつた仲よね」

「なっ」

楯無先輩がさらりと放つた一言に、先輩以外の全員が凍りつく。

「……今すぐ生徒会書記を辞職させてもらいます」

「あん、冗談よ」

「ある意味突き合つた、というか一方的に突かれましたよ！主に巨大ランスで背中をグツサリと！」

それはそれで怖い　　つて、書記？

「生徒会書記だよ、オレは。その会長に負けてな」

「マジか…生徒会にのほほんさんがいるだけでも驚きなのに、そのうえレイルまでいるなんて」

すると、レイルは小首を傾げ、

「ノホホンサン…？ああ、ホンネのことか？お前、あだ名で呼ぶなんて仲いいんだな」

「いや、本名知らなくてそう呼んでただけだよ」

「そうかい。…ノホホンサン、か…言いつれえな。やっぱホンネでいいか」

何やら一人で納得するレイル。

つていうか、何しに来たんだっけ……？

「じゃあ、はじめましょうか。レイルくん、一夏くん、IS動かせる？」

「俺は大丈夫です」

「さっき戦つたばかりですが、メンテは済ませました」

「それじゃ、二人で戦ってみてよ」

え？レイルと？

「んなこったろうと思いましたよ。…イチカ、先に準備してるぞ」

「あ、ああ」

そう返しながらも俺の脳裏によみがえったのは、レイルの圧倒的なスピードだ。

俺は、アイツに勝てるのか？

「あら、エリーゼちゃん」

第3アリーナの観客席に着くなり、呼び止められた。

「楯無さんですか」

彼女とはクラスこそ違いが同じ二年生であり、専用機持ち同士の交流もある。

「…あれは、あなたが？」

指差した先では、レイル・スカイラインと織斑一夏がISを展開し、バスケットのジャンプボールのように向き合っていた。

折しも、機体カラーは白同士。

これから、あの二人は戦うのだろう。

「あ、もしかして映画の事で来たの？」

こくり、と頷く。

5日後からの映画撮影では、彼だけでなく、私も出演する。

ある程度本国で練習してきたとはいえ、ISを使った連携も必要な撮影に向けて万全の準備をしておきたい。

それに

「もしかして、アレが届いたの？」

「ええ。できればすぐにでも ゴーストエース に量子変換インストールしませんと」

取り出したのは、小さな耐衝撃ケースに入ったメモリー。

この中には、撮影に必要なパッケージが入っている。

「とか言つて、レイルくんに会う口実でしょ？」

「なななななな…何をおっしゃるんです？」

「分かりやすいぐらい動揺が出てるわね。エリーゼちゃんってああいうのが」

ガキインツ！ とひととき大きな音が、アリーナに響いた。

「やば、もう始まつてるね」

フィールドには、弾き飛ばされる ゴーストエース の姿があった。

試合開始直後、斬りつけられた。

咄嗟に「雪片ゆきひら式しきがた型」の斬撃を受け止めたシールドがジョイントジョイントと引き千切られ、宙を舞う。

（瞬間加速 イクンツィヨン・ブースト …いきなり使ってくるとは…！）  
体勢を立て直すこともせず、スラスター噴射で距離をとる。

『そう簡単にやらせてくれないか…！』

イチカの 白式第二形態・雪羅 せつら が追いつがる。

高出力のスラスターを装備しているだけあって、速い。

いくら高機動型の ゴーストエース でも、動き方次第では追いつかれる。

「奇襲のつもりか、この野郎！」

「ラピッドレイ」を連射し、ひとまず牽制する。

だが、それでイチカの動きが止まる事はなかった。

命中の直前、左腕をシールドモードに変形させたイチカは、レ



ザーの連射をかき消した。

零落白夜<sup>れいらくひやくちや</sup>。

ブリュンヒルデの愛機、暮桜<sup>くすく</sup>のものと同じワンオフ・アビリティ。

その能力は、エネルギー質のものを無効化する。

これはエネルギー兵器に対する防御のみならず、攻撃時にもシールドバリアーを貫通し、一撃必殺レベルの威力を発揮する。

装甲の薄いゴーストエースだ。シールドのない今、一撃でも食らえば終わりだと思ったほうが良い。

「なら、近づかれなければ！」

スラスターを偏向し、ほぼ直角の軌道を描くように急降下する。

「くそ！逃がすかあ！」

イチカも少し遅れて急降下し、追いかけてくる。

「速いな、イチカ！ けどよ！」

降下の瞬間、一瞬動きが鈍った所を狙い、「メタルブレイカー」を連射モードで撃つ。

「うわっ！？」

シールドバリアーが展開され、「釘」が跳弾する。

これで幾らかはシールドエネルギーを削れたはずだ。

「オレはもつと速いぜ！」

空になったマガジンを交換。

一気に急上昇し、上空からレーザーの雨を浴びせる。

「零落白夜」で防がれるが、これでいい。

白式 の最大の弱点は、燃費の悪さだ。

特に、「零落白夜」はシールドエネルギーを消費するらしく、第二形態になってからはそれが顕著になったという。

一方、極限まで軽量化され、スラスターの燃費が良い ゴースト  
Eース なら、長期戦に持ち込むだけで勝てる。

『やるな、レイル!』

「おっと!」

足元を閃光が掠める。

そついや、荷電粒子砲も装備してるんだっとな、アイツ。

『悪いが、時間をかけてらんないんだ!』

再び瞬時加速をかけ、一気に距離を詰められる。

「同じ手を食うかよ!」

スラスター全開で斬撃を回避し、そのままの勢いで機体を反転させ、イチ力を正面に捉えた。

「メタルブレイカー」を発砲し、イチ力のシールドを削っていく。体勢が崩れた瞬間を見計らって一気に加速、一瞬で距離を離す。

「次で決めるっ!」

『させるかっ!』

荷電粒子砲が放たれ、頭上を閃光が照らした。

「へたくそお!もつとよく狙え!」

さらに立て続けに放たれる粒子砲をかわしながら、「ラピッドレイ」のレーザーをばら撒く。

適当に狙いも付けずに撃つたのだから、簡単に避けられた。

『今度こそ、決めさせてもらうさ!』

遠距離だが、イチ力は迷わず瞬時加速で突っ込んできた。  
イグニッション・フイスト

この速さでは、狙ってトリガーを引く、という2動作を必要とする銃よりも、振り下ろすだけの剣の方が速い。

だが、あの距離からでは瞬時加速では届かない。  
イグニッション・フイスト

まさか

ダブル・イグニッション・フイスト  
(2段階瞬時加速!?)

『おおおおおおお!』

「…っ！」

意識を集中する。

ハイパーセンサーでも捉えきれない速さの中。

イチカの太刀筋を見極めるように

スラスター全開で、回転するように刃をかわす。

次の瞬間には、エネルギー刃が胸部装甲を浅く裂いていた。

「な」

渾身の一撃だったのか、イチカの動きが硬直する。

刃をかわした勢いでイチカの後ろをとる。

「もらったあ！」

トリガーを引く。

銃口から放たれたオレンジ色の光軸が、狙い違わずイチカの背中に直撃する。

ISのシールドバリアーを易々と貫いた弾丸は、絶対防御によって食い止められた。

白式 のシールドエネルギーが一気に削ぎ落とされ

「勝者、レイルくん！」

会長の声が、第3アリーナに響き渡った。

「燃費さえ考えなければ 白式 の総合性能は ゴーストエース よりも上なのよ。一夏くん、なんで負けたか分かるかな？」

「えーと」

向こうで楯無が織斑一夏に指導する声が聞こえてくる。

聞こうと思えば聞こえるが、今の私には関係ない。

「完成したんですね。正直間に合うとは思ってなかった」

「それは間に合わせますよ。映画の撮影がかかっているんですから」

レイラさんと合流した私は、彼に件のチップを渡した。

「撮影まであと5日しかありませんし、慣らしも含めて早速インストールしましょう」

「そうですね」

「ではレイラさん、早速整備室に行きましょう。私が手伝いますから」

あわよくば、この作業を通して二人の仲も

そう思うと、顔が熱くなるのを感じた。

「そりゃあ助かりますよ、エリーゼさん！お願いします。あ  
と、レイルです」

「え、ええ」

(そんな、キラキラした瞳で見つめられたら  
もはや私の顔は、耳まで熱くなっていた。)

(二人つきりで、共同作業：まずはここからですね…)

「それじゃ、さらに増援を呼びますね」

……………え？

彼はおもむろに携帯を取り出し、

「人数多い方が早いですし、腕も信頼できますから……………あ、もしもしホンネか？…ああ、届いたぞ。今から第3整備室に来てくれ。…

またパフエでも奢るよ。あ、そうだ。整備科のエースの新聞部の  
そうそう、マユズミ先輩にも声かけてくれねえか？……………独占イン  
タビューとかでいいよ。……………ああ、じゃな」

携帯をポケットにねじ込み、彼は言った。

「じゃ、行きますか、エリーゼさん」

「え、ええ……………」

どうやら私の目論見は、失敗したようです。

「来たよ」

「レイルくん！後で一日密着取材よろしくねー！」

「ええ！？一日密着って…ホンネえ！おまえ」

「よいではないか、よいではないか、減るものじゃないさ」

「減るよ！主にオレの神経が！」

「じゃ、この話はなかったということ」

「くう…っ！一日密着取材でいいですからお願いします…」

「やったー！あ、エリちゃんも後でインタビューさせてよ」

「え…ええ、黛さん」

ホンネとマユズミ先輩は、すぐに来てくれた。

「で、私たちは何を手伝えればいいの？」

「ああ、撮影用のパッケージをインストールしているので、その後の調整を手伝ってくださいますか？」

一応 ゴーストエース 用に作られたものではあるが、いかにせん完成したばかりのため、細かな調整は現地で行わなければならぬ。

普通ならオレ一人でも事足りるのだが、今回のパッケージは規模がでかいため、調整もそれだけ面倒になる。

これを一人でやろうとすると、おそらく2日はかかってしまうだろう。

と、そう言えば紹介がまだだったな。

「ああ、こちらはアメリカの代表候補生で、オレが世話なってる会社の社長令嬢のエリーゼ・レゼリオンさん。…で、こいつがオレの同室の又ノ じゃなくて、ノホトケホンネです」

「よろしく願います」

「よろしく願います。…同室ですか…」

「え？」

「いえ、なんでもありません」

二人はぺこりとお辞儀をする。  
それにしても

「……」  
エリーゼさんが、オレやホンネをじろじろ見ているような気がするのだが、気のせいだろうか？  
と、

ピピッ と腕時計から電子音がした。

「よし、量子変換完了！」

「それじゃあ、作業開始だね」

「気合い入れていくよー！」

「では、さっそく」

こうして、オレ達は作業に取り掛かった。

薄暗い部屋の中に、大小無数のモニターが光っていた。

その中央の椅子に、篠ノ之束はいつものごとく、作業に没頭していた。

その彼女が、ふと顔を上げる。

かつかつと近づく足音。

「みーちゃん、どうしたの？」

みーちゃんは、そこで立ち止まった。

束は作業を中断し、そちらに椅子を向ける。

モニターの光を浴びて浮かび上がるのは、銀色の髪をショートにまとめた15歳程の少女だった。

「束。ゴーレム？の件だけど」

その唇が、短い言葉を紡ぐ。

「なになに、あれがどうしたんだい？」

「私も攻撃に加わりたい。『足止め』ならゴーレムだけで十分」

「とか言っちゃって、ホントはれっくんが恋しいんだね？だめだよ

「急ぎすぎると嫌われちゃうぞ」

「その冗談、笑えない」

「それにさ、みーちゃんじゃないといっくんは止められないよー」

「……」

「経験値積ませて様子見たいからね。邪魔はノンノン、だよ。わか  
つたね、三緒ちゃん」

「……わかった」

みーちゃんと呼ばれた少女　三緒　は、そのまま部屋の外へ  
出ていった。

「さてと、どうなっちゃうのかなー、れっくんとコナンパー007は」

数少ない興味対象の顔を思い浮かべ、彼女は再び作業に戻った。

「これで終わり、と」

ハンガーにはパツケージを装備し、最後の調整を終えた　ゴース  
トエース　が佇んでいた。

いや、今の姿をあの　ゴーストエース　だと思ふ人間はいないだ  
ろ。

操縦者のオレですら、膨れ上がったシルエットが自分の愛機だと  
は信じられないでいる。

「今日は色々と手伝ってもらって、ありがとうございます」

「いやいやー、カメラに作業風景を収められたってだけで十分だよ」

「早速明日から慣らしに入りましょう」

「かっこいいね」

「そうだな。………それでは、お疲れ様でした」

「……お疲れ様」

黛先輩は先に帰っていった。

「れーぴょん、着替えたらさー、ごはん食べよー」

「ああ。」

「……それではお先に」

「お疲れ様です」

なぜか、エリーゼさんは少し沈んでいるように見える。……気のせいかな？

「それじゃあ、後でね」

「あ、ああ」

ホンネが更衣室に向かうと、整備室に一人だけ残された。

改めて自分の愛機と向かい合う。

もはや華奢なゴーストエースの面影はなく、全身には重装甲のゴテゴテした装備が取り付けられ、大きさも二回りほど大型化している。

「重たいだろうが、しばらく頼むぞ」

ISを待機状態に戻し、オレも更衣室に向かった。

大柄なISがいなくなったハンガーは、ぽっかりと穴があいたような空虚を見せていた。



## No.30 白の戦い（後書き）

久々にみーちゃんを出せました。

誰だっけ？という人は13、14話をご覧ください。

彼女は今後、出番が増える…と思います。

一夏との戦いは、IS2次創作なら大概通る道ですが、30話にしてようやく実現できました……。

それではまた次回！

自分の部屋に戻ると、今でもヘンな気分になる。

部屋の左右で分かれた机や棚。

その上に鎮座するのは、

片や、クマやキツネのぬいぐるみ。

片や、プロペラ機から最新鋭ジェットまでのプラモデル戦闘機。

愛くるしいディスプレイの向かい側に、ごてごてとミサイルを積んだ戦闘機がディスプレイされている光景は、中々にシユールだ。

どちらがオレのもので、どちらがホンネのものかは言うまでもない。

「ねえねーぴょん」

オレの後に部屋に戻ったホンネは椅子に座るなり、オレに話しかけてきた。

「なんだ？映画のネタバレは受け付けねえぞ」

ノートパソコンを開き、起動させる。

「そ〜じゃなくて　れぜりおん先輩と付き合ってるの〜？」

「なあ！？なんでそおなんだよ！」

「でもほら〜、なんか親しげだったというか〜、いい雰囲気だったよ〜」

あのな。

「お前アホか。女子と親しげに話してるだけで付き合ってる、ってんならオレこの学校で誰と話せばいいんだよ。イチカ一人か？」

「えっ…そのお…」

「まったく、こんなことでいちいち噂が立つようなことがあったらどうすんだ。」

「だいたいよ、その理屈で言ったら　ホンネとも付き合ってる」  
とになるんじゃないの？」

「え……？」

「あ………」

言ってから、後悔した。

ホンネはオレの一言に、眠そうな目を見開いて驚いた。

「いやあの、あくまでその…例え話だからな…」

「…うん、そうだね…」

「……………」

お互いに、気まずい沈黙が流れた。

ホンネは背中を向け、何も語る気配が無い。

オレはオレで、パソコンを操作するでもなく、ただ画面を眺めて

沈黙の痛さを軽減した。

そりゃあそうだろうな。

急に「オレと付き合ってることになる」なんて言われたら、……

嫌だよな。

それに、オレ達はしばらく同室で過ごすのだ。

それなのに、かなり軽率なことを言ってしまった。

黙ってるだけではダメだ。

謝らないと

『ホンネとも付き合ってることになるんじゃないの？』

れーぴよんの口から出てきたのは、意外な言葉だった。

私はびっくりしてしまった。

れーぴよんを男性として意識していない、と言えば嘘になる。

同室、同クラス、同じ生徒会役員、と、彼と過ごす時間が一番多いのも自分だろう、という意識もあった。

けれど、彼に接するのは、単にIS学園の貴重な男子だから興味がある、といった程度だ。

それはおりむーに関しても同じ。

本気で異性を好きになる、というのがどういふ事なのかは、せつしーやでゆっちー達を見れば分かる。

れぜりおん先輩（現在あだ名考え中。ただし先輩なので失礼のないように）の事を聞いたのも、興味半分だった。

『女子と親しげに話してるだけで付き合ってる、ってんならオレこの学校で誰と話せばいいんだよ』

そうだ。

彼は、そう言う立場なのだ。

もしかして私は、彼の立場も気持ちも考えずに話してしまったのでは？

（れーぴよんには悪かったね〜…謝らないと）

「あのね…」

「……」

「……」

ハモってしまった。

「えっとお…先にいいよ」

「その…さ、悪かった。軽々しく変なこと言っちゃって…」

「ううん、先に失礼なこと聞いたの、私だから…ごめんね」

「いや、その、アレだ……」

れーぴよんらしくもなく、なんだか歯切れが悪い。

「えーとだな…、アレだ、おまえにそんな顔されると困る」

「え……」

れーぴよんはぼりぼりと頭を掻きながら続けた。

「んだからさ…お互い水に流そうぜ。お詫びにまたケーキでも奢るよ」

れーぴよんは照れくさかったのか、横に視線を逸らすと。

「……ん？それ……」

れーぴよんの視線の先にあるのは、部屋の隅に置いてあるニワトリのぬいぐるみだ。

ただのニワトリではない。

デフォルメされた可愛らしい顔をしているが、フライトジャケットを羽織り、ヘルメットを付けたその姿は、勇ましくもある。

「『チキンエース』だっけ？懐かしいな」

「れーぴよんも見てたの〜？」

「チキンエース」はニワトリのパイロットがプロペラ戦闘機を乗りまわす、子供向けアニメだ。

パイロット、戦闘機、というと男の子向けのようだが、キャラクターのコミカルな可愛さから女の子にも人気だった。

アメリカで製作されたアニメなのだが、日本でも人気だったらしい。

「小さい時にな。ま、うちの親父は本物のパイロットだったけれどーぴよんはぬいぐるみを持ち上げ、羽をばたばたといじり始めた。

「私はね〜、小さい頃、かんちゃんと一緒に見てたよ〜」

「かんちゃん？」

「会長の妹さんで〜、私はかんちゃんの専属メイドなんだよ〜」

「へえ〜…あの人、妹いるんだ…」

そう答えながらも、懐かしい物を見たれーぴよんの目は、ぬいぐるみに釘付けだった。

その姿に、私はふと、思いついた。

「よかつたら、それあげるよ〜」

「え？」

きよとん、と目をぱちくりさせるれーぴよん。中々貴重な光景だ。「さっきのお詫びだよ〜」

「え、ああ……だが」

「部屋のそつちに飾っておけば私からも見えるし、気にしないで大丈夫だよ」

「うーむ……」

と、れーぴよんは急に何か思いついたのか、机の中を漁り始めた。目的のものを見つけると、それを私に差し出す。

小さなケースだった。

ふたを開けると、そこには金属のバッジが鎮座していた。

盾から翼が生えたデザイン、そして盾の中に刻まれた「7」の文字。

これは

「ウチに代々伝わる航空エンブレム記章だ。親父から『一人前になった時に付ける』って言われたんだけどな、オレにはまだまだ似合わねえし、やるよ」

「でも、そんなの私がつっていたら」

「ここに名パイロットがいるだろ」

彼が指差したのは 手に持ったぬいぐるみ。

そのジャケットの胸に、航空記章を留めた。

「これでよし、と」

そのぬいぐるみを、彼は窓辺に置いた。

ちょうど、れーぴよんと私のスペースの間ぐらいだ。

「ぬいぐるみはオレのもん、けど航空記章はホンネのもんだ。なら、間をとって真ん中に置く。これでどうだ？」

すこし得意げに、れーぴよんは笑った。

なんだか、その笑顔にさっきまでのもやもやが溶けていった。

「そうだねー。それでいいや。えへへ」

「……へへ。しばらくはコイツが炎のフレイズ・セブン7だな」

エースパイロットの称号を得たニワトリをはさんで、二人は笑った。

そういえば 彼の、あんなに屈託のない笑顔を見たのはこれ

が初めてだ。

なら、もう少し、この笑顔を見ていたい、と思った。

「映画の撮影が始まるのって今日だよな。一体何の映画の撮影なんだ？」

あくる日の放課後、一夏はいつものメンバ<sup>ハーレム</sup>で話していた。

「え？一夏、知らなかったの？ここ最近、学園祭の次に盛り上がった話なのに」

「会長に……いや、会長が付きつきりで知らないんだよ」

「私という夫がありながら……」

「まったくだ」

「ホラ、これ読みなさいよ」

篝とラウラにジト目で見られたが、鈴が一枚のプリントを渡してくれた。

「監督：ステイブ<sup>ン</sup>・ルークス『偽りの翼』……？」

「ええ。読んだことありませんの？」

「読んだ？」

「ええ。これはベストセラー小説の映画化ですわよ。シルク・K・ミストラル作『偽りの翼』。2年前に発刊されたアメリカの小説で、ISを動かせる殿方がアメリカからIS学園に入学する、という話ですわ。小説としても面白いので、発売当初から売れてはいたのですが」

そこでセシリアは俺を見やり、

「3月ごろ、日本でISを動かせる殿方が現実になってしまいました。この作品は『2年前の大予言』と呼ばれ、一気に注目を浴びたそうですわ。それに、遅れてアメリカのISを扱える殿方も現実になりましたから、その人気は加速し、今ではハリー・ポッターも霞むほどのベストセラーですわよ」

なるほど……俺達の存在は、そんなところにまで影響しているのか。

「一夏、これを貸してやろう」

篤が差し出してきたのは、ハードカバーの本だった。

タイトルは、「偽りの翼」。

日本語版らしく、作者名の下に訳者の名前が書いてある。

「へえ。篤って、こういうの読むんだ」

「まあな。映画化される、ということを買ってみたのだ。なかなか面白いぞ」

「ありがとな、篤。読ませてもらうよ」

「……か、貸すだけだからな！忘れるでないぞ」

「ああ。……で、レイルが演じるのって」

人物紹介のページを開くと、シャルが指を指した。

「うん、この役だね。正確には、スタントマンだけど」

シャルが示した名前。それは

「アルディ・サウスバード。主人公だよ」

第2アリーナは、今日からしばらくは撮影のため貸し切りになる。

オレとエリーゼさんは、ISスーツで待機していた。

なぜエリーゼさんがいるのかというと、彼女はなんと、ヒ

ロインのセシリー役である。

それも、IS戦闘シーンだけではなく、俳優としてセシリー役をこなすというのだからすごい。

『今日はメイクなしで、動きの確認をするよ。二人とも、準備はいかい？』

「はい」

「来なさい、プロミネンス・クイーン」



「テイクオフ、ゴーストエース！」

エリーゼさんが扱うのは、普段の プロミネンス・クイーン に原型をとどめないほどの装飾を施したものだ。青いカラーリングが目を引き。

両肩の大型バインダーを外して装飾や武器を施す作業は大掛かりなものになったため、こちらは本国で調整済みらしい。

だが、その プロミネンス・クイーン の変化も、オレの ゴーストエース の変化に比べれば些細なものだ。

『どうですか？ ストライク・バーディ の調子は』

「重いです……」

ストライク・バーディ は、もはやパッケージの域を超えていた。

増加装甲、と言えば簡単だが、 ゴーストエース の原型を完全に失わせるようなものをパッケージの一言で済ませてよいのだろうか。

機体サイズは通常のISの二回りも大型化しており、増加装甲で完全に覆われた機体カラーは、鮮やかな青色に縁どりとしてオレンジのラインが走っている。

背中の大型スラスタは長方形の形をしており、無骨な印象に拍車をかけていた。

腰にも菱形のエネルギータンクが取り付けられており、大型化された脚部には、この巨体を動かすためのプロペラントタンクが格納されており、歩行機能も完備している。

無論、パワーの低い ゴーストエース がこんな装備を扱えるはずもないため、増加装甲の関節部にはパワーアシスト機能が内蔵されている。

その仕様はもはや、「フルアーマーゴーストエース」「ISが着るパワードスーツ」と言ったところか。

『それじゃあ、まずはシーンC1からね。はい、ストライク・バ  
ーディ が飛んで、それから 』

その夜、自室にて。

「 。。。ここで決め台詞です！」

「『Power is justice!』：アメリカ人に喧嘩売っ  
たこと後悔するんだね』」

このセリフ、すごく気持ちいい、などと思ってしまうのは、オレ  
が同じアメリカ人だからだろうか。

「いい感じですね。だいぶ演技力が良くなってきましたよ」

「。。。スタントマンってさ、台詞覚える必要あるの？」  
部屋には、オレとホンネ、エリーゼさんが台本片手に向かい合っ  
ていた。

撮影とは関係ないホンネだが、彼女にはオレとエリーゼさん以外  
のセリフを担当してもらっている。

「声は後から付け足されるにしても、演技するには感情が乗ってな  
いとダメだろ。それに、口パクでも動かしてなきゃならんし」

「それではもう一度行きますよ。さっきのところから、レイラさん  
台本の読み合わせが再開された。もちろん、「レイルです」と訂  
正するのは忘れない。」

「『Power is justice!。。。アメリカ人に喧嘩  
売ったこと後悔するんだね』」

「『つく、させるかあ』（棒）』」

「そこで私が敵の射線上に躍り出ます！」

「『なっ？』（棒）』」

「『ファイナルですわ！』」

「敵のスラスターを攻撃し…敵が防御態勢に入りました！」

「『見かけにだまされちゃだめだよ？』」

「『何といいましても彼は…』」

「『『嘘つきだからね』』」

「そこでレイラさんが発砲！…こんなところでしょうか」

いい感じた。…………… ホンネのセリフはともかくとして。

「…だいたい演技の方は大丈夫そうですね。…あと、レイルです」

「そうですね。明日は撮影本番ですけど、これならいけそうですね  
俳優経験のあるエリーゼさんの折り紙つきなら、安心できるレベル  
だろう。

「それにしてもさ、あるでーって面白い主人公だよな」

ビスコッティの袋を開け、まず一番に自分で食べながら、ホンネ  
が言う。

「おまえは小説のキャラにまであだ名をつけたのか…。ま、確かに  
クセが強いつて言うか 変わったやつだよな」

もつとも、この学園に来てからというもの、常時眠そうな某ルー  
ムメイトとか、某唐変北・オブ・唐変北ズとか、人の名前をレイラ  
レイラと間違える某先輩とか、隙あらばイタズラしてくる某生徒会  
長とかがいるので、アルデイが特別変わった人物、という印象が持  
てない。

むしろ、同じカリフォルニア出身だと言う事には少しだけ親近感  
を覚える。………… オレはロスだが。

「ありがとうございます、布仏さん。いただきますね」

「いえいえ」

ホンネとエリーゼさんは、件のパッケージの調整作業で打ち解け  
たようだ。

「『嘘つき』、か…………」

彼の「クセ」を呟き、ビスコッティをかじる。

サクサクとした食感を味わいつつ、ぱらぱらと小説を捲る。

そこには、アルディ・サウスバードという男の生き様が記されていた。

（オレ、こんな風に嘘をつけるのかよ…）

その日は、アルディの事が頭から離れず、あまりよく眠れなかった。

## No.31 スターの憂鬱（後書き）

ものすごく久しぶりの更新になってしまいまして、大変申し訳ありません。

今回はバトルも特にない話ですが、次回は逆にほとんどバトルになりそうです。

さて、「偽りの翼」ですが、ご存知の方もいらっしゃると思いますが、しるく様が連載中の「IS インフィニット・ストラトス〜偽りの翼〜」とのコラボです。「偽りの翼」のアルディ・サウスバード君とレイルが同じアメリカ人、と言うことで、しるく様の発案により、お互いの小説で二人をコラボさせることになりました。

ただ、「この作品内でISを扱える男性は（今のところ）一夏とレイルだけである」という前提を崩したくは無かったため、「レイルが劇中劇でアルディを演じる」という形で出させていただきます。

あと、レイルたちがビスコッティを食べているのは、作者がたまたまビスコッティを食べながら書いていたからです。某犬日々とは関係ありません。

それではまた次回！

撮影当日。

休みの日だと言つのに、アリーナの客席には想像以上の数の生徒エキストラがいた。

そんな中、アリーナのフィールドを見つめる本音もその一人だ。既にあちこちに無人カメラが浮かんでおり、撮影準備は万端のようだ。

客席の一画では、ルークス監督が指示を飛ばし、スタッフが動きまわっている。

「いよいよだね〜！なんかわくわくしてきた！」

隣に座る癒子が興奮を抑えきれずにそう言ったが、反対の隣セシリアを見ると、何やら若干沈み気味である。

「せっし〜、おりむーがいなくて残念だったね〜」

「ななな！？べ、別にそんなことはありませんわ！」

期待通りの反応だった。他のメンバー　　篤、鈴、シャルロット、ラウラも同じような表情だ。

仕方がない。

エキストラに期待されるのは「一般的なIS学園の生徒」つまり、女子だけである。

従つて、現在一夏は蚊帳の外である。

無論、セシリア達も好きでエキストラなどしてはいない。

各国の代表候補生である彼女たちは、カメラに写りこむだけで宣伝になる。

そういった意味で、代表候補生はほぼ強制参加になっていた。

「それじゃあ本番始めるぞ！二人とも、準備はいいか？」

『はい！』

いよいよ撮影開始。

ルークス監督の声が、アリーナに響き渡った。

「それじゃあ本番始めるぞ！二人とも、準備はいいか？」

向こうの第2アリーナから、監督らしき人物の声が聞こえてくる。

「いいよなー。俺も行きたかったよ」

一夏は、隣の第3アリーナで自主訓練に励んでいた。

会長から教わったマニュアル制御や、基本的な空間機動を反芻し、白式を駆る。

多くの生徒が第2アリーナでエキストラをし、いつもの専用機持ちメンバもいないとなると、アリーナは一夏の貸し切り状態だった。

「3、2、1……」

（なんと言うか、空しい……）  
そんなことを考えていた時。

「アクション」

ズズン！という音が、大気を揺らした。

「何だ！？」

音のした方を見る。

第2アリーナの方から、煙が上がっていた。

その光景に、ふと既視感を覚える。

あれは、そう。5月のあの日。クラス対抗トーナメントの時、無人のISが遮断シールドを破って乱入してきた時とそっくりだ。

（考えすぎか？あつちの本物のIS使ってたし、映画の撮影の一環だよな）

続く轟音が、一夏の思考をかき消した。  
目の前に何かが炸裂し、土煙を上げる。

「な　　！？」  
そこに現れたのは

戦闘シーンの一つである「謎の敵の乱入」は、確かに謎の敵が遮断シールドを突破してアリーナに乱入するシーンだった。

だが、そこに乱入してくるのはスタントマン扮する紫と黒のIS  
のはずであるし、そもそもタイミングが早すぎる。

そして何より　　あの機体は初めて見る気がしない。  
漆黒の装甲が全身を覆う全身装甲<sup>フル・スキン</sup>。

機体のシルエットこそ大きく違うが、意匠は5月に戦った無人機  
と似ている。

ただし、敵の姿はより人型に近くなっていた。

ゴリラのようなマツシブさはなく、より細く、全身のバランスも  
通常のISに近い。

いや、「全身」ではない。

その両腕は、大型のブレードと化しており、カマキリを連想させ  
る。

「まさか　　」  
その先をいう間は、与えられなかった。

敵がいきなり発砲してきたからだ。

「おっと！」

無論、不意打ち程度で被弾するレイルではない。

サイドステップで鮮やかに回避



突然、機体に衝撃が走った。

「何イ!?!」

一瞬、何が起こったか分からなかった。

『レイラさん!それはいつものゴーストエースではないんですよ!』

エリーゼさんの声が響く。

そうだ。

今のコイツは ストライク・バーディ だった。

忘れかけていた事実を反芻しつつ、ダメージチェック。

敵の攻撃は、腕に装備したビームガンによるものらしいが、さすがは重装甲。ダメージはほぼ無に等しいレベルだ。

(落ちつけ...!この装甲なら、被弾したって大したダメージにはならねえ。ここは ストライク・バーディ の戦い方でやるしかねえ...!)

敵の攻撃を防ぎつつ、レイルは両手に構えた荷電粒子砲を撃ち放った。

当然、突然の乱入者と言う事態に対し、生徒にも避難の指示が出た。

それはさながら5月の無人機乱入事件の再現となり セキユ  
リテイが乗っ取られてアリーナに増援を送れないという事態も再現  
された。

「前と同じですね...」

モニターを睨み、苦渋の表情を浮かべているのは、いつもの山田先生ではなく、榊原先生だった。

ちなみに、その山田先生はと言うと

「映画スタッフの避難誘導に手間取っていた。

「ですから！早く避難してください〜！」

「カメラ！このまま回せ！後は編集ででっち上げる！」

「ストーリー変わっちゃいますよ監督〜！早く避難しましょうよ〜！ひい！？」

「すぐそばを、荷電粒子砲の光軸がライトアップする。

「これだ…！これこそ、私が求めていた究極のリアリティ…！ホラ何してる！撮れ！」

「ですから〜！避難してください！危ないですよ〜！」

結局、スタッフは最後まで避難せず、山田先生はその周りをオロオロするだけだった。

それはそうとして、話を戻す。

「また遮断シールドがロックされているか…本当に前と同じだな」  
だが、前と同じなら、対策も前と同じ様にできる。

コンマ数秒で結論を出した千冬は、榊原に指示した。

「織斑を呼び出してください。ヤツの『零落白夜』で遮断シールドを突破します」

「はい…！織斑くん！聞こえますか？緊急事態です！」

返事は、すぐに来た。

「い、言いたい事は分かりますけど…！ダメです！こっちは今、手が離せません…！ぐあ…！」

一瞬ノイズが走り、通信が乱れる。

「大変です！織斑くんがいる第3アリーナまで遮断シールドが…！切り札を封じられたか。

千冬は内心で舌打ちし、一夏に呼びかけた。

「落ちつけ。そちらの状況を教える」

『千冬ね…じゃなくて…！と、とにかく、正体不明のISが襲いか

かってきて、交戦中です！」

「ど、同時襲撃…？」

榊原先生の一言が、今回の襲撃を一番簡潔に表現していた。

「ぐっ……！」

振り下ろされた大剣を「雪片式型」で受け止めたが、大剣の威力を打ち消せずに弾き飛ばされた。

一夏はウイングスラスターの加速で、一度距離を取った。

『この程度か。あまり私を失望させるな』

敵の声が、プライベート・チャンネルに響く。

(冗談じゃない！あいつ、強いぞ…！)

いきなりアリーナに突っ込んできたと思ったら、次の瞬間には襲いかかってきたのが、あの敵ISだった。

グレーのカラーリングに、背中から生える翼と尾が目を引く。

一夏は知る由もないが、かのISは福音暴走事件の際、レイルたちを襲撃した かいりゅう 灰龍 である。

『どうにか振りきれないか？』

千冬姉に聞かれるが、おそらく無理だ。

さつきから何度も試しているが、敵ISは、俺を遮断シールドに近づけたがらない。

おそらく、増援の可能性を徹底的に潰すつもりだ。

「出来る限りやってみます！」

それだけ言って、再び敵に突撃する。

右手に「雪片式型」、左腕の多機能武装腕「雪羅」をクロームードにして斬りかかるが、敵はそれらを大剣一本で受け止め、捌いてしまう。

(けど )

雪片で大剣を弾き、その勢いで敵の上を取ると、そのままスラス

ターを全開にし、イグニッション・ブースト瞬時加速で一気に距離を離す。

(よし、このままシールドを破れば )  
遮断シールドが目の前に迫る。

それを零落白夜で破

ゴウツ!!と。

全身を殴られるような衝撃が来た。

「な……に……!!」

制御を失い、墜落しかけた機体の体勢を辛うじて戻す。

シールドを破ることはできなかった。

だが、それよりも、一夏には気になることがあった。

「今の攻撃、まさか」

この衝撃と似たような攻撃を、俺は食らったことがある。

敵を見ると、その胸部アーマーの中央が上下に割れ、中から砲口のようなものが露出していた。

意図的なものか偶然か、その姿は大口を開ける龍のように見えた。

( !!! )

考えるより先に、体が動いていた。

直後、自分がいた地面が、見えない弾丸が直撃したかのように深々とえぐり取られた。

「まさか、衝撃砲か!？」

『察しがいいな、織斑一夏』

鈴の 甲龍 にも搭載されている射撃武器。

5月のクラス対抗戦で、一夏はその威力を身を持って思い知らされていた。

更に衝撃砲が放たれ、辛うじて回避する。

一夏の頭に疑念がよぎる。

アレ、まさか中国製

!?

エリーゼの発案で、便宜上、レイルたちは2機の全身装甲のISを、フルスキンA、アルファブラボBと呼称することにした。

そのフルスキンBが、一気にレイルの懐に迫り、そのブレードを振るう。

回避しようとして果たせず、右手の荷電粒子砲「ファイアーフライ・レプリカ」が真つ二つになった。

切磋に荷電粒子砲から手を離すが、内部のコンデンサーが誘爆し、爆風を浴びたゴーストエースもといストライク・バードイが弾かれるように飛んだ。

「速いぞ、こいつら…！」

破壊された荷電粒子砲の代わりに、右手に「メタルブレイカー」を呼び出す。

同時にマイクロミサイルを数発放ち、なおも接近戦に持ち込もうとするフルスキンBを牽制した。

すぐそこでは、シルエツトの変わったプロミネンス・クイーンが、普段の重装備からは想像もつかない高機動戦闘でフルスキンAと交戦中だ。

「そこです」

エリーゼさんの大型レーザーライフルが放たれ、まっすぐにフルスキンAを襲う。

そのまま胴体に直撃するかに思えたそれは、しかし敵の予想外の挙動によって、無駄弾に終わった。

命中の寸前、フルスキンAは上半身を360度一回転させ、レーザーをかわしていた。

無論、そんな挙動が人間を乗せたISにできるはずがない。

「やはり、無人機ですね」

敵の斬撃をかわすと、エリーゼさんは肩に装備したビットを放つ

た。

ビットと言っても撮影用のものなので、ブルー・ティアーズのような複雑な操作はできない。

プログラミングされた数パターンの動きしかできないが、その拳動はビット兵器のそれだった。

四方八方からのビームが フルスキン A の動きを封じ込める。

「そこだッ！」

すぐに「メタルブレイカー」を構え、撃

咄嗟にフレキシブル・スラスターで離脱した。

その直後、目の前をビームガンの光軸が走ったかと思うと、フルスキン B がブレードで斬りつけていた。

完全にはかわしきれず、腕のアーマーが挟られる。

その隙に、フルスキン A はビットの網から逃れ、エリーゼさんに牽制弾を放っていた。

「クソッ……！チャンスだったのに……！」

向こうは動きが速い上に、連携が取れている。

一方、こちらは練習したとはいえ、普段と違う機体で戦わなければならぬ慣れさがある。

左手の「ファイアーフライ・レプリカ」を放つが、敵の動きを捉えきれない。

「それなら……！」

この ストライク・バーディ をパージすれば、いつもの ゴーストエースに戻る。

これ以上この重い機体で戦える自信は無いし、ゴーストエースなら敵の機動性に付いていける。

すぐにパージを実行しようとして

ERROR

たった一言のメッセージによって、それは遮られた。

「え　　!?!」

応射されたビームガンの光軸が脚部アーマーを直撃し、シールドエネルギーが減少する。

おかしい。

緊急用のパージシステムが働かない。

もう一度実行。

ERROR

もう一度。

ERROR

「クソツ!どうなってんだ!?!」

『レイラさん、どうしました?』

「パージができない!何回やってもエラーが出る…!」

振るわれた大剣を、「雪羅」のクローで受け止める。

その隙に「雪片式型」で斬ろうとするが、突如としてあらぬ方向からビームが飛来し、体勢を崩されてしまう。

一夏を狙ったのは、敵ISが放出したビットだった。

それぞれが放つビームを零落白夜のシールドで防ぐが、その分エネルギーが減少していく。

敵は、エネルギー兵器では通じないと判断したのか、長大なレールガンを呼び出し、発砲してきた。

咄嗟に回避するが、超音速の弾丸がスラスターを掠めた。

スラスター出力が若干減少。

「くそつ…!あいつ、何でもありかよ!」

さっきは中国製かと思っていたが、あのビットの技術は　ブルー・

ティアーズのようなイギリスのものかもしれない。

続けざまの射撃を會長に教わったマニユアル機動で避けつつ、「雪羅」の荷電粒子砲を薙ぎ払うように撃つ。

だが、その攻撃が敵に届くよりもビットの動きの方が速かった。ビットは敵ISを囲むように移動すると、各々の間にエネルギーフィールドを発生させ、荷電粒子砲を弾いていた。

何でもあり。

先ほど自分で言った言葉を反芻してみる。

そう言えば、パッケージなしであらゆる局面に対応できるのは、第4世代のISだったはずだ。

もしかすると、あの灰色のISは第4世代かもしれない。

『歯ごたえのない。足止めが目的だったが、もういい』  
敵の声と共に、ビットが背中に戻って行く。

あのビットは、翼状の背部ユニットの一部だったようだ。

ビットを収めた半固定部位アンロック・ユニットの翼が、敵の胸部アーマー 龍の頭

を中心に円を描くように動く。

衝撃砲を撃つ気か      ！？

『これで終わりにする』

胸の龍が、口を開ける。

その口腔の砲口が一夏を向き

すさまじい轟音と衝撃が、第3アリーナを揺らした。



## No.32 アクション(後書き)

行事中に何者かが乱入してくるのはお約束。

IS学園でまともに行事を完遂出来る日は来るのでしょうか・・・。

久々の 灰龍 登場。

今後も出番は増えるので、近々設定も公開したいです。

あと、乱入してきたフルスキンのISは、ゴレム？ と言います。

クラス代表決定戦でゴレム？、原作7巻でゴレム？が登場したので、間の「？」はどんな機体なのだろうか、と想像しながら

書きました。武装は両腕の小型のビームガンとブレードという、接近戦

仕様です。ゴレム？は「？」と「？」の特徴を両方あわせ持った

機体と言う設定です。

それではまた次回！

## No.33 偽りの翼の偽り

IS3機によるIS学園襲撃。

その内の 灰龍 には第3アリーナで訓練中の織斑一夏と戦い、シールドバリアーの突破を防ぐ。

その隙に2体の無人IS ゴレム? を ゴーストエースと もう一体のISに差し向ける。

モニターの向こうで繰り広げられる計画の順調さに、篠ノ之東はほくそ笑んだ。

「やっぱりすごいねー! みーちゃんはさー」

三緒の腕なら一夏に後れを取ることは無いし、万が一の時も、灰龍 のアレを使えば一夏は簡単に抑え込める。

そう考えたとたん、興味が失せた東は別のモニターに視線を移した。

「さてさて、本命のれっくんの調子はどうかなー?」

「ぐあッ…!」

地面に叩きつけられ、ISの保護機能でも殺しきれない衝撃に、レイルは肺の空気を絞り出された。

脳が揺れ、一瞬意識が遠のくが、辛うじて残る視界に敵の姿が見え、慌ててフレキシブル・スラスターを噴かす。

地面を削るようにして横滑りした直後、フルスキンA の突きがさつきまでいた地面に突き刺さり、土煙が舞う。

が、それが フルスキンA の隙となった。

「くらいなッ!」

横になつたまま「メタルブレイカー」を構え、発砲。

ろくに狙いも付けずに撃つたが、超音速の弾丸は敵の左腕を貫通し、捻じ切っていた。

千切れた敵の腕が宙を舞うのは見ず、すぐに離脱して体勢を立て直す。

今ので、ようやく敵にダメージを与える事ができた。

自機の損傷確認。

あちこちがやられており、華奢なゴーストエースなら戦闘不能になってもおかしくないダメージ量だが、戦闘には支障はない。

ストライク・バーディの重装甲のおかげだろう。これならゴーストエースの正式装備として採用してもいいぐらいだ。

だが、エネルギーの方はその限りでもない。

重くなった機体で無理な機動をした結果か、エネルギー残量が残り少なくなっていた。

これではあと5分動ければ良い方が。

エリーゼさんの方は

『こちらは大したことはありません。ですが  
レーザーライフルを撃ちながらも続ける。』

『今でこそ2対2でどうにか互角に戦っていますが、レイラさんのエネルギーが尽きて2対1になってしまつと危ういですね…』

レイルです、とツツコみたかったが、今はそんな余裕はないのでぐつとこらえた。

「なら一気に決着をつけるしかないですね…！」  
とは言ったものの、敵は動きが速い。

ストライク・バーディ 自慢の火力も、当たらなければ意味はない。

ゴーストエース なら残りのエネルギーでも10分近くは動けるだろうが、未だにパーシはできない。

「クソツッ…！こんな無理だ……！」

所詮、撮影用の付け焼刃の練習ではダメだったのだ。  
オレに、この ストライク・バーディ を使いこなすことはできない。  
ない。

「偽りの翼」のアルディのようには  
待てよ。

アルディのように？

敵の攻撃を防ぎながら、丸暗記した台本と、何度も読み返した原作を思い出す。

そして 分かった。

そうだ。

オレには ストライク・バーディ を使いこなすことはできない。  
なぜなら、この機体は アルディ・サウスバードのものだからだ。  
ならば

『レイラさん、避けて！』

エリーゼさんの声が聞こえるや否や、片腕になった フルスキン

A がブレードを振り回しながら突撃してきた。

それを、スラスター噴射で紙一重でかわす。

「僕はレイラじゃないですよ！」

『とにかく、いったん体勢を って、「僕」！？』

さすがエリーゼさん。

耳ざとく聞かれていた。

「別におかしくはないでしょう？アルディの一人称は『僕』なんですから」

『え…？』

とまどうエリーゼさんを無視して、「僕」は続ける。

「エリーゼさん！一か八かですが、提案があります」

『はい、なんですかの？わたくしにできる事なら何でもおっしやって  
ください』

今度は、こちらが一瞬戸惑った。

だが、すぐに分かった。

合わせてくれた、と。

「僕」は手短かに作戦を伝えた。

「…じゃあ、頼むよ。セシリー」

『こちらこそよろしくお願いしますわ、アル』

お互い声をかけると、「僕」たちは同時に飛びだした。

第3アリーナは、土煙が一面を覆っていた。

灰龍 の衝撃砲のあまりの威力に、直撃した地面が盛大に抉られた結果だった。

この土煙が晴れば、そこには巨大なクレーターと、その中央で倒れている 白式 が見える事だろう。

あのタイミングなら、ヤツが得意な瞬間加速イグニッション・ブーストでも回避は不可能だ。既に数十秒が経過しているが、敵の動きが全くない事を考えても、直撃は確実だ。

白式 と織斑一夏を撃破できたのは間違いないだろう。

無人で自律行動が可能な ゴーレム？ だが、有人の指揮機によって、その行動を統率することもできる。

その指揮機の役割を担う 灰龍 の三緒は、白式 を衝撃砲の一撃で片付けた事で、ゴーレム？ の指揮に専念できるようになっていた。

と言っても、やる事は大まかな戦略を指示するだけだったのだが、

ここにきて敵の行動に変化があった。

(…動きが変わった?)

レイル・スカイラインだけではない。

ヤツと共に戦っているもう一人も、さっきまでとはまるで違う動きで、ゴーレム? に向かっていく。

ストライク・バーディ は防御をその重装甲に任せて無駄な回避はせず、フレキシブル・スラスターによる旋回によって、ゴーレム? を狙うようになった。

もう1機のISは、肩に装備したビットをフル活用して、ゴーレム? を牽制し、隙あらばレーザーライフルで狙撃する。

まるで、動きが違う。

そう、別人のように。

(まさか )

この時、三緒の意識は完全にレイルたちの戦いのモニタリングに奪われていた。

もしも周りを警戒するだけの注意力が残っていれば

土煙を突き破って斬りかかる 白式 に反応できただろう。

『うおおおおおおお!』

叫び声と共に振るわれた「雪片式型」が 灰龍 の片翼を切り裂いた。

「なにっ…!?!?」

切磋に後退しようとしたが、うまく動けない。

この翼には、アラクネ と同様、独立したPICを搭載しており、機動性を大きく向上させていた。

それが片方失われたせいで姿勢制御が間に合わず、続く一撃を、大剣で防ぐしかなかった。

姿勢が安定しないせいで、罅迫り合いでも力負けしてしまう。

「バカな…！あれをかわせるはずがない！例え瞬間加速でも避けようがなかったはずだ！」

ガタガタと揺れる機体を抑えながら、三緒は自分の顔に焦りが浮かぶのを知覚した。

自分の顔はバイザーで隠れているが、口元で表情を悟られたかもしれない。

そして、織斑一夏の口元には、笑み。

『ああそうさ…避けられはしなかったよ！でも、防ぐことはできたさ！』

更にクローモードになった「雪羅」が振り回され、大剣で防ぐも灰龍の機体が大きく弾き飛ばされた。バカな。

衝撃砲の最大出力はアリーナへの突入時、遮断シールド突破をこなすほどの大威力だ。

並のシールド程度なら粉碎、仮に「雪羅」に防がれたとしても、それを突き破って白式は戦闘不能になるはずだ。

だが、今の白式は細かい傷と、全身の土汚れ以外、ダメージらしいものは見受けられない。

『以前、衝撃砲のエネルギーを瞬間加速に利用した事があって…』

ようやく姿勢を回復するも、2撃、3撃と続く斬撃を捌ききれない。

『同じ衝撃砲なら、同じ手を使えば防げるだろ！あのまま加速したせいで盛大に地面削ったけどな！』

土汚れはそのためか。

そう理解した頭にカツと血が昇り、三緒は大剣を握りしめた。

小賢しい真似で、この灰龍に傷を。

束の作つた 灰龍 に傷を !

「なめるなああ！」

大剣で「零落白夜」を弾き、距離を離すと同時に、残り半分になったビットを射出する。

3方向から 白式 を囲み、それぞれがビームの光軸を放つた。回避して体勢を崩した 白式 に衝撃砲を放つが、紙一重でかわされてしまう。

とつとと墜ちろ。

ゴーストエース の特徴的な大型スラスタは、 ストライク・バーディ を装備するにあたって背部に回され、外部装甲ユニットをかぶせられた箱型のユニットに変貌していた。

「ウエポンスクエア」と呼ばれるそれは、増加スラスタだけではなく、マイクロミサイルポッドや荷電粒子砲と言った武器が詰まっている、この機体の最重要部位とも言つべきユニットだ。

その「ウエポンスクエア」のハッチが開き、マイクロミサイルが露出したのも一瞬、レイルはそれらに発射の指令を送った。

複数の噴射炎が フルスキンA に殺到するが、この程度では避けられてしまうだろう。

(「僕」だつてそれぐらい分かつてるさ！)

直後、あらぬ方向から複数のレーザーが放たれ、ミサイルを次々と撃墜、爆破していった。

爆炎が フルスキンA を包み、その姿を見えなくする。これで敵の視界は遮られる。

その隙に、エリーゼさん いや、今はセシリーだ がその背後に回り込む。

「これで……！」



「僕」は「ウェポンスクエア」を前にせり出させ、ミサイルや荷電粒子砲、内蔵する全ての武装を爆炎に包まれた敵に向けた。更に片手で荷電粒子砲「ファイアーフライ・レプリカ」、*「メタルブレイカー」*を構えた。

アヴァランチ。

言ってしまうえば単純な全武装総攻撃なのだが、この重装備の機体から放たれる火力は、小型気化爆弾2個分にも相当する。

（小説だともっと威力高いんだけどね。外付け装備じゃこれが限界か…。けど！）

今こそ、あのセリフだ。

「Power is justice! ……アメリカ人に喧嘩売ったこと後悔するんだね」

思い切って言ってみると、ものすごく気持ちいいセリフだった。

爆炎が晴れた時、敵が見たものは

自分に向けられた圧倒的火力。

だが、その行動は全て三緒の知るところとなった。

（やはりな…）

「偽りの翼」は三緒も読んだことがある。

束いわく、「事実」は小説より奇なり、って言うけどこれは事実と同じぐらい奇だね。ま、面白いからいいけど」とのことだが。

そんな三緒だからこそ気付いた。

奴らの動きは、小説のアルディとセシリーそのものだということに。

ならば、この後の予測は容易だ。

ようやく安定してきた機体を右に左に飛ばし、白式の斬撃を

かわしながら、小説のワンシーンを反芻する。

ミサイル爆破は目くらまし。

ストライク・バーディ が攻撃すると見せかけ、気を取られた隙に後ろに回り込んだセシリー役が ゴーレム？ を撃つ。

なら

(ゴーレムAは反転、後ろを取ったつもりのセシリー役をやれ！  
ゴーレムBはレイル・スカイラインを後ろから斬れ！)

素早くて確かな指示を送ると、2機の ゴーレム？ はその通りに動く。

作戦の裏をかがれ、背後から斬られるレイル・スカイラインを幻視し、三緒は唇の端を吊りあげた。

「そんな…！動きが読まれるなんて！」

背後から フルスキンA を狙っていたエリーゼは、突然振り向いた敵機に心臓を跳ねあがらせた。

レイルを見ると、今まさに背後から フルスキンB が斬りかかるんとしており、完全にこちらの動きを読まれた形だ。

格闘装備のないレイルは、対処できずに斬られてしまうだろう。

人間相手ならともかく、AIで動く無人機なら大丈夫だと思っただが、甘かった

『セシリー！上昇して！』

「え…？」

言われたとおりに上昇する。

直後

敵への嘘は見破られてしまった。

背後を取ったはずのセシリーは正面から敵と対峙することになり、僕も背後から襲われようとしている。

だが、嘘とは敵に対して使うものだとはい限らない。

僕はにやりと嗤った。

「セシリー！上昇して！」

「え…？」

エリーゼさんが言われたとおりスラスター加速で上昇するが早いか、僕はトリガーを引いた。

エリーゼさんに正面から対峙し

その実、僕に背中を向けている フルスキンA に向けて。

意図的に無反動機能をオフにした「メタルブレイカー」からオレンジ色の光軸が放たれ、片腕となった フルスキンA の左肩を吹き飛ばす。

同時にフレキシブル・スラスターを全開にして急旋回。

「メタルブレイカー」の反動をも利用した急旋回で瞬時に後ろを向き、同時に突き出された「ファイアーフライ・レプリカ」の銃口が

ドガッ！ という音と共に、 フルスキンB の腹にめり込んだ。

あくまで銃口でしかないため大した威力にはならないが、敵がトップスピードで突っ込んできたおかげで装甲を破る程度には突き刺さった。

「長大な銃で接近戦は無理だとも思った？」

無論、それだけで機能を停止する フルスキンB ではなく、す

ぐに逃げようとするが

「見かけに騙されちゃダメだよ。何と言っても僕は  
トリガーを引く。」

敵機の腹に刺さったままの「ファイアーフライ・レプリカ」が荷  
電粒子の火を噴いた。

装甲の内側から放たれた荷電粒子砲は、背中に貫通するまでにコ  
アを含む内装品にめちゃくちゃな破壊をもたらし

結果として フルスキンB は一瞬で腹から真っ二つになり、生  
き別れ、いや死に別れの上半身と下半身がそれぞれ地面に落ちた。

「嘘付きだからね」

直後、ダメージによるものなのか、自爆機能でも付いていたのか、  
フルスキンB の残骸が爆発した。

それを見届けることなく、次のターゲットを探す。

狙いは、両腕の武装が無くなり、アリーナから脱出しよう  
としている フルスキンA 。

「まったく、なんで最初から言ってくれませんか？」

エリーゼさんはライフルを撃ちつつ、そう言ってきた。

その問いに対する答えは簡単だ。

「敵をだますにはまず味方から、てね。嘘付きらしいでしょ！」

言いながら、ウエポンスクエアの全武装を展開。

両手で残弾わずかな「メタルブレイカー」と「ファイアーフライ・  
レプリカ」を構える。

すると、やるうとしてしている事を察したエリーゼさんは、ビットま  
で展開してくれた。

『最後ぐらい、私にも見せ場を作ってくださいませ』

「…もちろん」

ターゲットに「LOCK ON」の表示が灯る。

こちらの意図に気付いた敵が逃げようとするが、もう遅い。

「残弾もエネルギーも、全部もっていくといいさ…！」

全砲門射撃シーケンス「アヴァランチ」発動

それは、炎の嵐だった。

ミサイルとバルカンと高圧荷電粒子砲と、本来の ストライク・バーディ にはないレルガンに、更にエリーゼさんのレーザー。小型気化爆弾3発分にも及ぶ弾丸火力が豪雨のように荒れ狂い、敵の姿が見えなくなったのも一瞬。

着弾点から大爆発の煙が上がり、戦いの終わりを告げる狼煙のろしとなつて第2アリーナの空を漂った。

その爆発は、離れた第3アリーナからも観測できた。

「ここまでとはな…!」

一夏は片翼の龍の声を聞いた。

お互いにダメージが蓄積しているが、白式 のエネルギー残量がそろそろヤバイ。

対して、あの威力の衝撃砲をバンバン撃つた割に、敵ISにその様子はない。

「…フン」

突然、敵がこちらに背を向け衝撃砲の発射態勢に入る。

逃げる気か。

そう直感した俺はスラスターを全開にした。

「逃がすかああ!」

エネルギー残量からしてギリギリだが、「零落白夜」発動。発射態勢の敵はスキだらけだ。

この一撃なら、決められる。

敵が目の前に迫る。

一夏は「雪片式型」を振りかざし

「くらええええッ！」

回避の暇も与えず、敵ISを袈裟斬りにした。

『それだけか』

敵ISは、健在だった。

「え　！？」

バカな。

「零落白夜」の一撃は確かに当たっていたはずだ。

だが、直撃したはずの敵にはさしたるダメージは見られなかった。

「零落白夜」が発動しなかった　？

『次は殺す。織斑一夏』

ドウツ！　という轟音と共に、衝撃砲が俺の横をかすめ、アリーナの遮断シールドを直撃した。

シールドが耐えきれずに破壊されると、敵はスラスタを全開にして破孔から飛び去った。

「待て　」

エネルギー残量0

「え？」

おかしい。

今の「零落白夜」が不発に終わったなら、その分のエネルギーを消費しない分、まだいくらか余裕ができるはずだ。

ならば

「零落白夜」は発動したけど通じなかった？

アリーナの地面が、ゆっくりと近づいてくる。

「…こんなとこまで原作再現しなくてもいいでしょうに」

レイルは今、エリーゼさんにお姫様だっこされていた。

『いいではないですか。どの道撮影するシーンなのですから』

原作小説でもアルがセシリーにお姫様だっこで運ばれるシーンがあるが、まさにその再現となった。

これというのも、オレが最後の「アヴァランチ」でエネルギーをすべて使い果たして自力飛行ができなくなったのと、その発射時の衝撃でスラスター爆発演出の火薬が誤作動したおかげである。

結果だけを見れば、スラスター爆発も含めて原作再現である。

そして、原作同様すさまじく恥ずかしい。

茹でタコのように赤面する顔を悟られぬよう、極力顔を背けなければならなかった。

『さ、着きましたよ』

「…どうも」

ようやく地面に下ろしてもらうが、途端に思い出したようにストライク・バーディの重みがのしかかり、慌ててISを解除した。「…まったく、あんなエキストラは聞いてないっての…」

ISの重みが無くなった分、反動で体が羽のように軽く感じる。

エリーゼさんも同じようにISを解除すると、オレにこう聞いてきた。

「レイラさん、なんであの時、わざわざ作戦を変えたのですか？」

「ああ、台本通りにやると見せかけて裏をかいた時ですか？」

「ええ。結果的にはそれでよかったものの、なぜ…？」

「そりゃあホラ。あの時のオレは嘘付きのアルディでしたから。敵をだますにはまず味方からってね。なんか、自然にそういう考えになっちゃって」

「自然に…？」

「ええ。そしたら、やっぱり台本通りにやるんじゃない事にならねえなー、なんて考えちまいました…あ、ヤマダ先生」

…とルークス監督達撮影スタッフが駆け寄ってきた。

「二人とも、ケガはないですか？もう、無茶して」

「いやー、いい絵が撮れたよ。まさかモノホンの戦闘シーンが取れるとはなー！これでチヨチヨイと編集すりゃ、ダイナミックかつリアルなシーンのできあがりだよー！」

ゴーストエースの急上昇もかくやと思えるほどにアップしなくなる監督のテンションに、ヤマダ先生のセリフが途切れる。

「えーと、つまり…オレ達の撮影の方は？」

恐る恐る、聞いてみた。

「GOOD！もっ最高！いやー、君らをスタントマンにして良かったよ！これだけあれば、アカデミーもカンヌも夢じゃないよ！ヒヤッハー！」

余談だが数カ月後。

公開された「偽りの翼」は世界中でヒットするロングランとなり、映画史にその名を刻む名作となった。

「画面に引き込まれました！原作読みましたけど、両方好きです！」

「ストーリーが面白いですね。ISを動かせる男性が現れた今見てみると、とても感慨深いです」

「あの戦闘シーンヤバくね？もうなんかー、本物みたいな迫力ってカンジー？」

映画雑誌「オールタイプ」インタビュー記事より

ドアが開くと、彼女は相変わらずモニターと向き合っていた。

「…ただいま」

「やあやあおかえりみーちゃん！お疲れさまさまだねー！」



三緒は黙って腕輪　待機状態の　灰龍　を差し出した。

「ああ、灰龍　直してあげないとね〜どれどれ」

「東…ごめん、せつかく作ってもらったのに…」

「いいよいいよー。それだけいっくんが強くなっただからさー。  
で、そういえばみーちゃん」

東の声が、急に真面目さを帯びたのに気がついた。

常人には普段との違いなど分からないだろうが、何年も一緒の三緒にはそれが分かった。

「ゴーレム？　ってさ、2機ともやられちゃっただよね。学園の中で」

「そうだけど…？　東も見てたでしょ」

レイル・スカイラインに2機とも。

「ところがねー。後にやられた方…えーと、Aの方だっけ？　その反応はね、海で途絶えてるんだ」

「…え？」

東はモニターを三緒に向けると、話を続けた。

「やられる直前、誰かが遮断シールドをいじったみたいだね。だからゴーレムちゃんはやられる前に脱出してるの。ここまでは分かっただけだね」

つまり、ゴーレムA　はアリーナで破壊されたのではなく

「海の上に出たとたん、ぶつりり通信できなくなっただよ。衛星から見ても分からなくなっただよ」

その口調は気軽なようだが、およそ電子機器と名のつくものでハッキングできないものはない東の目をかいくぐって　ゴーレムA　を破壊した　あるいは鹵獲した　者がいるとは信じられない。

「だからさ、灰龍　は急いで修理するからさ、みーちゃん探してきてよ」

新たな「お使い」を前に、三緒はただ、頷いた。

No. 33 偽りの翼の偽り（後書き）

映画撮影編はこれにて終了です。

この撮影で使われた ストライク・バーディ は、ゴーストエースに

追加装備を付けたものなので、スペースの関係上搭載火器は減っており、

撮影用と言うこともあって、オリジナルよりも火力は低いです。

「アヴァランチ」の威力も下がっています（その分燃費は改善されています）。

書くのに時間かかってしまい、すみません。

それではまた次回！

## No. 34 祭りの前

あれから数日。

波乱の映画撮影の熱気も冷め、IS学園は今や学園祭に向けて一直線モードだ。

レイルも、クラスの出し物である「ご奉仕喫茶」に向けて執事のふるまいを練習をしたり、装飾を手伝ったり、放課後にはようやく本来の姿に戻った。ゴーストエースのデータ取り。

部屋に戻れば先日大活躍のストライク・バーディの運用レポートをまとめ、大分慣れてきたとはいえまだ若干気を使うホンネとの共同生活…と、忙しい日々を過ごしていた。

その上、以前「福音事件」でオレ達を襲った謎のIS 灰龍が今度はイチカを襲ったとあり、この事件は未だに未解決と言う感が絶えない。

そんな中、音楽鑑賞はレイルの数少ない息抜きになった。レポートを書く手を止めることないのもさることながら、日本の音楽は独特で素晴らしい。

というわけで、オレは借りたCDを返しに、イチカの部屋を訪ねた。

イチカは現在、会長 更識楯無生徒会長 と同室だった。理由は知らないが、オレがホンネと同室になった事とも関係しているらしい。

「織斑一夏」「更識楯無」の表札を確かめ、オレはドアをノックしようとして

『ぎゃあああっ！はっ、あはははっ！や、や、やめっ………』

イチカのものと思われる悲鳴（後半笑い声）に、ノックをしようとした手が、ラウラのAICよろしくぴたりと硬直した。

数秒間停止していた思考が戻る。

おそらく、さっきの悲鳴はイチカが会長にくすぐられていたものだろう。

オレも一回やられたことがあるが、アレはヤバい。

くすぐり自体の破壊力（腹筋が筋肉痛になった）もさることながら、背中からやられるとあの豊富な胸が背中に密着することになるため、色々な意味でヤバい。

増してや「唐変木・オブ・唐変木」のイチカのことだ。

あのラヴ・コメディー体質のことだから、ドアの向こうでは不幸な（その実全国の男子がうらやむような）光景が展開されている事だろう。

そんな見たくもない光景を見たくなければ、今部屋に入るのは得策ではない。

しばらく待とう。

少しすると、笑い声が聞こえなくなった。

もういいか。

コンコン、とノックをする。

『はい』

会長の返事を聞いて、ドアを開けた。

「イチカ。この前借りたCD、返し……に……」  
瞬間、入るタイミングを間違えたと確信した。

なんか、ベッドにうつ伏せになってる会長の尻を、鼻血出しながら揉んでるイチカがいた。

「……………」

「やあ」

会長が軽く手を上げるが、イチカはオレを見るなり、脂汗を浮かべながら訴えてきた。

「レイル！これはっ…違うんだ！これは単なるマツサージであって、決してやましいことなど…」

「やんつ。一夏くんのえっち（はあと）」

なんだか弁解しようとしてるが、鼻血垂らしてるムツツリが言ってもまるで説得力が無い。

オレは、とりあえず努めて冷静に振る舞うことにした。

「CD、ここに置いとくな。それから…」

こういう時、日本語で何と言えればいいのか考え

「じゅっくり」

そう言って、練習した執事の優雅なる振る舞いでドアを閉めた。

『ちよっ…誤解したまま出ていくなあ！』とか聞こえた気がしたが、目的は果たしたわけだし、自室に戻る。

まあ、生徒会書記として普段から会長に振り回されてるオレも、冷静に考えれば単にイチカは会長に振り回されただけなのだろう。

だからと言って助ける気はない、というより助ける余裕はないが、  
「れーぴょくん、私もう寝るね」。おやすみい」

普段から眠そうな目を更に眠そうにしながら、ホンネが枕を抱え

てそう言った。

そういえば、オレの同室はなんだかんだ言ってまともな部類かもしれない。

会長と比べてるからまともに見えるだけかもしれないけど。

「……?どうしたの、れーぴょん?そんなにじろじろ見て」

かすかに赤面しながら、薄い目を少しだけ開けたホンネが首をかしげる。

「……いや、なんでもない。同室がホンネでよかった、ってだけだ」

「ふえ!?!そそそそれって」

「なに顔赤くしてんだ?会長みたいなんじゃないかって良かったってことだよ」

「あ、そお」

なんか、心持ち沈んだように見えるのは気のせいだろうか。

「いいからとつと寝ろよ。Good Night」

「うう……おひやすみ……」

寝静まったホンネは気にせず、端末に向かって ストライク・バーデイ のレポートをまとめる。

以上のように、 ストライク・バーデイ は ゴーストエース 本来の機動性を大きく損ねてしまうが、その防御力と火力は目を見張るものがある。

軽装甲の ゴーストエース では難しい閉所での戦闘などでの運用が期待でき、これを撮影用に留めておくのではなく、 ゴーストエース の正式なパッケージとしての転用を進言する。

こんな感じでようやく仕上がったレポートをナガさんに向けて送信。

すぐに返事は来た。

『よう、ぼーず。レポート読んだぞ……』

「あれ、テンション低いですね、ナガさん」

画面の向こうの眼鏡中年は、髪もボサボサで目の下にクマも見える。

『時差を考えるよなあ。こっちは朝5時半だったの』  
『うっかり失念していた。』

日本に慣れたせいだろうか。

『ま、それだけじゃなくなってるねえ。コアがないのよコアが』

「コア？」

『話したろ？ゴーストエース2号機。使えるコアが回ってこないんだよ。…つたく、本体は9割がたできてるってのに』

「そりやまた、大変な話ですね」

『ま、ぼーずに愚痴ってもコアは来ないわけだけどな。ああそう、』

ストライク・バーディの活動データ見たけどさ』

「何か分かったんですか？パージできなかつた原因とか」

『それもあるんだけどさ。おまえさ、アンノウン戦で絶対防御カットしなかつた？』

「……はあ？」

なぜそんな事を聞くのだろう。

絶対防御とは、敵の刃や銃弾から、自ら生み出す殺人的なGから操縦者の命を守るための機能である。

オレは自分で命を捨てるような自殺願望はないし、そもそも絶対防御はカットできない仕様だ。

その事を言うと、ナガさんは腕を組んで考え出した。

『だよなあ。けど、実際に戦闘中に絶対防御が切れてる時があつてな。…うーん、となると……まあいいや、死なないで何よりだよ。で、パージの件だけだ』

いつの間に淹れたのか、ナガさんはコーヒーを一口飲むと、

『プログラムも本体も見た限りじゃ異常なし。パージしようと思え』

ばできたはずだよ。 IS側が了承すれば』

「どういうことですか？」

『ISには意識のようなものがあるってのは知ってるな？多分、そいつがパージを拒んでたんだろうな』

「つまり、ゴーストエースが『やだーパージしたくないー』って感じて拒否ったってことですか？」

『ま、その言い方で合ってるかもな。案外、ストライク・バーデイを気に入って手放したくなかったんじゃない？』

「マジですか…？」

『知るかよ。知りたかったら本人に聞けよ』

「はあ、それではGood Night。」

『こっちはGood Morningだったの』

端末の電源を切り、ベッドにもぐる。

本人に聞け、か。

ゴーストエース  
腕時計を見る。

「なんでパージしなかったんだよ。おまえが拒否ったんだろ？」

本当に話しかけてから、これでは単に痛い人だと分かった。

ホンネが寝ているから知る人はいないだろうが、恥ずかしさで耳が熱くなるのを感じた。

バカなことをやってないでさっさと寝よう。

向こうのベッドですやすやと眠るホンネの寝息を聞きながら、意識がゆっくりと眠りに落ちて

ここはどこだ。

真っ青な空間。

ああ、そうか。



大空だ。

オレは今、空に浮いているのか。

答えてあげるよ

声。

女の子の声？

どこから？

こっち

いた。

真っ白なヒトガタの影。

青空の中だと、雲みたいだ。

ストライク・バーディ が必要だった

どっついうことだ？

まさか、パージしなかった話か？

そう。必要だったから、捨てられなかった

なぜ必要なんだ？

それはまだ言えないね。でも、いずれ分かるよ

いずれ？いずれっていつだよ！おい

…

ホソネと共に生徒会の仕事を一段落させて夕食に向かうと、食堂にはいつもイチカハレムスの面々が集まっていた。

そして当のイチカはと言うと

「…生きてるか？」

「あ〜……」

「会長に振り回された結果か……」

「う〜……」

ぶちまけられた飲み物のようにべちゃりとテーブルに突っ伏すイチカを、他の面々は苦笑いで眺めていた。

オレは手近な空席に着き、ホソネも隣でオチャツケの載ったトレイをテーブルに置いたところだった。

「お茶飲む？ごはん食べられないなら、せめてそれだけでも」

「おう……サンキュ……」

シャルロットがお茶を差し出し、イチカがそれを受け取る。

それをホソネ並ののろのろとした動作で受け取り、ずずりと音を立てて嚼む姿は老人に近い。

「ホレ。少しでも胃に何か入れとけ」

さすがに見かね、カップのフルーツゼリーを差し出した。

「サンキュ……つか、レイルは元気だな……」

「ん？」

「レイルだって楯無さんに振り回されてるはずだよ……この差はなんだよ……」

「オレだって同室になったらお前みたいになるよ」

ホソト、会長と同室にならなくてよかったと心の底の奥の底辺から思う。

もつとも、映画撮影からこっち、学園祭の仕事に追われてそれに疲れてはいるが。

「それで、あの女はどうしたのだ？」

少しピリピリとした感じでラウラが言う。

まあ、イチカハーレムズにとつては会長はかなり気になる存在だろうな。

「一夏。あの女はどうしたんだと訊いたんだ」

「ああ、会長なら今頃生徒会室だ」

トレイに載った中華丼を箸でかき混ぜつつ、オレが答えた。

「そーそー。書類がちよ溜まつてるんだよね」

「…おまえら生徒会書記だろ。会長を手伝えよ」

「手伝つてるつつの。これ食ったらまた仕事に戻るさ」

「そおだよ」。私たちは忙しいんだよ」

…いや、ホンネは仕事増やしてなかったか？

とは言わないでおく。

「しかし、その様子だと会長には振り回されっぱなしか。同情はしてやるよ」

「同情するなら助けてくれ…」

「助けられると思うか？オレが？」

無理だと理解したのか、イチカは再び机に突っ伏した。

「ねーねー、お茶漬は番茶派？緑茶派？思い切つて紅茶派？私はウーロン茶派」

ライスの上にサーモンの切り身を乗せ、ウーロン茶をかける。

単純ながら美味しそうで、思わず日本食の神秘に感動してしまつた。

「イチカよ。オチャツケなら食べるんじゃない？食いやすそうだし」

「うう…それなら…」

体を起こしこちらを向いたところで。

「なんとこれに」

おお、ホンネ。

オチャツケにはまだ続きがあるというのか。

奥が深い料理だ。

「……これに？」

「卵を入れます」

なに？

かばっ マジで？

「ぐりぐりぐり」

オチャツケの粘り気が増す。

ぐちゃぐちゃにかき混ぜられたドンプリの中は、かなりカオスな  
ことになっている。

食欲を更に無くしたのか、イチカが再び机に突っ伏した。

オレもこれ以上食欲がなくならないうちに、中華丼を平らげること  
にした。

卵かけご飯といいオチャツケといい、この中華丼といい…日本食  
はご飯をぐちゃぐちゃに混ぜるのが流行りなのだろうか？

くだらないことを考えていると、気がつけば中華丼を完食してい  
た。

味は分からなかった。

ともあれ夕飯を済ませ、生徒会室。

「あれがおいしいんだよ。今度試してみなよ」

「マジか…。食べ物はグロテスクな方が美味しいというが…」

日本食の奥の深さを追求するなら試してみてもいいかもしれない

……たぶん。

「ダメだ、夢に出てきそう」

夢と言えば、昨日変な夢を見た気がする。

内容は思い出せないが、所詮は夢。

別に思い出さなくても損はしないので放っておこう。

「スカイライン君、これもお願いします」

「はい」

先輩から書類の束を受け取り、手早く処理していく。

「それで、我らが生徒会の『シンデレラ』のことなんだけど」

ほぼ単純作業で退屈さが出てきたころ、会長がこんなことを言うてきた。

「シンデレラ」自体はガラスの靴やら12時で消える魔法やらで有名な童話なのだが

なんてっ たってあの会長発案の出し物である。

当然、必然、絶対にまともなはずはなく、生徒会の一員であるはずのオレでさえタイトルと「観客参加型演劇」であることしか知らないのだから、その内容の恐ろしさが読み取れる。

そう。

恐ろしさが……

「レイルくんも参加ね」

「イヤです」

言った瞬間、会長の手の扇子がパツと開き、「却下」の文字が見えた。

「ダメよん」

「コンマ数秒で却下された!？」

「はい参加決定」

「マジかよ…!」

もう会長に逆らえないのは分かっているのでこれ以上は反論しない。

「で、何やるんです観客参加型演劇って?オレも詳しく聞かされてないんですけど」

「ヒ・ミ・ツ」

「だめだこりゃ」

もう、嫌な予感しかない。

そして学園祭当日、やはりというか運命と言つか運命石の扉の選  
択と言つかとにかく嫌な予感ハバッチリの中することになる。

## No.34 祭りの前（後書き）

今回は特に戦闘もなくg d g dになってしまいました。

この辺は原作5巻準拠で、次回から学園祭当日になります。

ウーロン茶＋卵お茶漬けいっぺん食べてみたいです。

意外に美味しそうかもと思える自分があります。

ではまた次回！

「いらっしやいませお嬢様。ご奉仕喫茶へようこそ」

学園祭当日。

一年一組のご奉仕喫茶は朝から盛況で、オレ達は大忙しだった。オレ達、というのは引つ張りだこなオレとイチカのことであり、ガールズは割と楽しそうだ。

接客班（コスチューム・プレイ担当）は他にもイチカハーレムズの4人 ファン・ヒーター（名前これでよかったか？）は2組なのでいない がいるが、全員メイド服が似合っていた。

残りは調理班と雑務班に分けられ、ホンネは雑務班に割り当てられているものの生徒会の仕事で抜ける事が多い。

「はい、こちら2時間待ちです」

教室の外から聞こえる声に、半ば絶望的な気分になった。

当然と言えば当然だが、学園に2人しかいない男子が1クラスに集中しているわけだから女子が怒涛のごとく押し寄せてくるわけで、列整理のクラスメイトには頭が下がる。

だがそれにしたって忙しいのには変わりない。

何せ、メインの男子は2人しかいないのだから。

そこで、2人で後退して休憩を取ることにし、

「じゃ、後頼むぞイチカ」

「おっ」



オレが先に休憩を取ることになった。

「ごめん、待った？」

デート初めのテンプレみたいなセリフで現れたのは、仕事から戻ったホンネだった。

「いや、今休憩に入ったとこ。それよりいいの？ クラスの仕事は？」

「いや、ちょうどかおりんが代わってくれてさ、だあい感謝だね」

「ん、ならいい」

元々誘ってきたのはホンネなのだが、正直オレはこの申し出に感謝していた。

今思えばひどく寂しい生き方をしてきたせい、この手の祭りはまるで勝手が分からない。

なのでホンネが一緒に回ってくれるというのは非常にありがたい。

「んで、どこ回るんだ？」

「ん？ ねーびよんの行きたいとこでいいよ」

「んなこと言われてもな… オレこつこついうの良くわからねえしさ、ホンネが案内してくれよ」

「そおなの？ならお任せあれ」

頼りない声で頼もしい返事をされ、軽く吹き出した。

その頃一夏は

「織斑くん、3番テーブルに注文入ったよー！」

「お待ちせしましたお嬢様。……こゝ、湖畔に響くナイチンゲールのさえずりセット」がおひとつですね。それでは少々お待ちください」

「あ、織斑くん。6番テーブルお願い」

「『深き森にて奏でよ愛の調べセット』がお二つですね」

「こちら3時間待ちです！」

(ひいー！レイル、早く戻ってきてくれー…)

「ぶえくしっ！」

「れーぴょん、風邪ひいた？」

「そういえば少し悪寒が…まるで死にかけの生き霊がひいーとか言いながら早く戻ってこいと訴えてるような怨念を感じるな…」

耳を澄ませば聞こえてくる。  
ヒュ〜ドロドロという音が……

「つてマジで怨霊!?!」  
振り向くと

長い髪のお化けが立っていた。

「おわああああ!?!」

「きゃっ……!」

あれ?お化けの方がオレに驚いた。

「え、えっと、1年3組のお化け屋敷はいかがですか……?」

よく見ると、お化けに見えたのはメイクをした女生徒だった。  
おまけに周りも明るいので雰囲気は全く出ていない。  
こんなのに悲鳴を上げてしまったのかと思うとめっちゃ恥ずかしい。

「れーぴょんれーぴょん、おもしろそ〜」

ホンネが余った袖をぱたぱたさせながらオレを引っ張った。

「2名様ご来場〜」

え?オレは別に入りたくは  
と考えた時には、オレは入り  
口に引きずり込まれていた。

暗幕で仕切られた教室の中に入ると、空気が一変した。  
古めかしいボロボロの木造小屋に、立ち並ぶ墓石（日本風）の数々。

スチームでも使っているのか、辺りには霧のようなものまで立ち込めており、いかにも何か出そうな雰囲気だった。

「いかにも、だな…」

入る時に渡された懐中電灯を点け、ホンネと並んで歩きだす。

防音効果の高いIS学園の教室の中では、2人分の足音がひたひたと響いた。

入ってしばらくは特に何もなかったが、その間が逆に恐怖を倍増させる。

これを考えたヤツは、なかなか頭が良い。

しばらく何も出ず、いくらか気が抜けた所で

ぼう、と浮かぶ亡霊ゴーストが現れた。

「うお！？」

「ほえ〜…。これよくできてるね〜…ホログラムだね〜」

あれ？ビビってるのオレだけ？

どうやら幽霊程度ではホンネののほほんオーラを崩すことはできないらしい。

「れーぴよんって意外に怖がりさん？」

「ななな何言ってる！ ゴーストエース が亡霊ゴーストにビビってられっ

か  
「

ぴと、と首筋に冷たい何かが張り付いた。

「ひいえ!?!」

「あ、こんにやく。私もぴたぴたってやりたくい」

見ると、確かにコンニャクだった…。

ぐわ、なんか恥ずかしい……

「と、とにかく行くぞ! 長居は無用だ」

とにかくここを離れたい一心でホンネの手を引っ張ってずかずか進んでいく。

「ちよっ…れーぴょん、手!」

背後でホンネが何か言ってるが気にしない。

訓練で研ぎ澄まされた神経をフル活用し周囲を警戒する。

そこかッ!

手が動いたのと、茂みの中から何かが現れたのは同時だった。次の瞬間には、つり下げられた提灯お化けを撃退していた。

「次はどいつだ!」

「うわ…壊しちゃダメだよ」

「ギリギリ壊さないようにするわ」

これは偽物。フェイク



「大丈夫？れーぴょん」

「ん…？」

あれ？オレ今気絶してた？マジで？

それに、なんか柔らかさと温もりを感じるのだが……  
瞑っていた目を恐る恐る開く。

瞬時に状況把握。

ホソネに思いつきり抱きついていた。

「のわああ！？」

さつきから悲鳴あげてばかりだと頭の片隅で思いつつ、慌てて体を離す。

顔から火が出る、という言葉の実情をたつぷりと味わう羽目になった。

「あ、え？え？いや、この、それは」

「れーぴょんってやつぱり怖がりさんだね」

瞬間、顔から出た火にガソリンを注がれた。

「う、うっせ！わりいか！デンジャラスな恐怖とホラーな恐怖は別モンなんだよ！」

そりゃ代表候補生としてデンジャラスな恐怖には十分耐性があるつもりだが、お化けへの対処法など訓練で教えてはくれない。

「でも抱きついちゃうなんて大胆」

なぜ頬を染める。

「うわあああごめんよおおおおおおおおおおおお」

オレは脱兎のごとく駆け出していた。

途中でいろんなゴーストと遭遇した気がするが、覚えてない。

「す、すごい悲鳴でしたね。息も切らしてるし……そんなに怖かったんですか？」

出口から廊下に出ると、さっきの受付（お化け）が引き気味に話しかけてきた。

「何か大切なものを失った気がするよ……」

「え？」

首をかしげる受付をよそに、ホソネはいつもののんびりとした動作で廊下に出てきた。

「あら、いらっしやいませレイラさんに布仏さん……って何だか苦しそうですね。頭も膨れてませんか？」

「ほっといってください……うっぶ。あと、レイラじゃなくてレ……うっぶ」



その後、恥ずかしさのあまり料理部と茶道部でヤケ食いたせいだった。

ちなみに頭が膨れているのは茶道部で菓子をヤケ食いつたところをオリムラ先生に殴られたからである。

で、ここはエリーゼさんのクラスだ。

ここでの出し物は

パンツッ！ という音が響くと、棚に載せてある菓子の空き箱が倒れた。

「お見事！ 2つ倒しましたので、商品はこの中からお選びくださいー  
いー」

要するに「射的」だ。

「あー、あれか〜わい〜」

キツネのぬいぐるみを指差したまま、ホンネはこつちを見た。  
その目がキラキラと輝いている。

「うぐっ……やりやいいんだろ、やりや」

「500円になります。どうぞこちらへ」

エリーゼさんに案内されると、テーブルの上にマスケット銃が置かれていた。

コルクの弾を先端に詰めてスプリングの力で飛ばすタイプで、威力は結構ある。

そこから離れた所には、菓子の空き箱が並べてある棚があり、そ

の空き箱をいくつ倒せたかで商品が決まる、というのがエリーゼさんから受けた説明だった。

「…にしても遠くね？」

ここからのまでは、およそ10メートルある。

「IS学園ですからね。授業で射撃も教わりますし、代表候補生には狙撃の技能を持った人もいますからね」

銃の先端にコルクを詰める。

弾は5発。

あのぬいぐるみは、4発命中の商品のようだ。

「ではどうぞ」

構える。

仮にも代表候補生として恥ずかしい限りだが、狙撃は得意ではない。

だが

「ふあいと」

オレはどもも、すっかりアイツに弱くなってしまったらしい。  
深呼吸し、トリガーを引く。

1発目。

ぱこん、と菓子箱が倒れる。

命中。

「お」

2 発目を込める。  
発射。  
命中。

「さすがですね」

3 発目。  
狙い 撃つ。

「しまった…！」

弾は菓子箱の横を掠め、空しく地に落ちた。

「しっかり」

しっかりとしないのほんとした声。  
だが、外すわけにはいかないという気持ちが強くなる。  
外したくない。

4 発目。  
コルク弾の込め方まで念入りに確認してから構え  
菓子箱が弾け飛ぶ。 発砲。

「ふあいと〜あといっぱい」

思わず口元が緩んだ。  
なのに、気持ちは絶対にはずすものかと強固になる。

最後の弾をこめる。

偏らないように、弾道が逸れないように。

両手で銃を固定。

一番隅の菓子箱に狙いを定め

やれるよ

「え？」

どくん、と左手の脈を感じる。

はずみで引き金を引いていた。

放たれた弾は一直線に、しかし菓子箱からわずかに逸れた軌道を描き

棚を支える支柱にぶつかって軌道を変え、近くの空き箱に命中した。

今のは、なんだ？幻聴？

でも、初めて聞く気がしない

「おめでとつございまーす！4発命中でーす！商品をどつぞー！」

ふと我に返った。

「うわぁーおーやっぱりねーぴょんはすごいねー」

「おめでとつございます。……はい、これ」

キツネのぬいぐるみを渡される。

そういえば、このぬいぐるみはホシネの着ぐるみと似ているかも

しない。

「ほらよ」

「うわゝ、ありがとおねゝえへへゝ」

ぬいぐるみを受け取ったホンネは、心底喜んでいた。

普通に考えれば、オレは500円を損して射的に苦労しただけで、景品はホンネのものになったただけだ。

けど、ホンネがこんなに喜んでくれるなら、それだけで価値はあるのかもしれない。

それに、笑ったホンネは特に

(…って何考えてんだ、オレ！)

と、懐の携帯が振動した。

画面に表示されたのは「Ichika Orimura」の文字。

「Hello?」

『俺だけだ。そろそろ代わってくれないか？そろそろ知り合いとの待ち合わせも近いしさ』

「ああ。わりい。すぐ戻るよ」

携帯を切る。

「ホンネ、そろそろ戻るぞ」

「もう？？」

「あら、忙しいのですね」

「じゃ、エリーゼさん。後でウチのクラスも覗いてくださいね」

「もちろんですよ」

ホッペを促し、廊下を速足で歩く。

「レイル・スカイラインくんですね」

教室に戻る途中、いきなり声をかけられた。

「そうですけど…?」

スーツの女性だった。

「失礼しました。私、こういう者です」

差し出された名刺には、「IS 装備開発企業『みつるぎ』 渉外担当・巻紙礼子」と書かれている。

「装備開発…?」

「はい。こちらの近接用ブレードはいかがでしょう?」

……またか。

にこにこ笑みを浮かべながら資料を差し出すが、相手にする気はない。

珍しいISを扱える男子であるオレに装備を使ってもらえる、というのは企業側にとってはかなりの宣伝効果があるようだ。

この学園祭でも何社かに声をかけられたが、レイルは体よくあしらっていた。

ゴーストエース が使える装備は少ないし、パッケージも間に合っている。

何より、下手な追加装備で機体が遅くなるのは勘弁だ。

「あー、そういうのは結構です。近接武器使いませんし…あ、連れも待たせてるんで、それじゃ！」

「へ、私…ってあ〜れえ〜」

相手が何か言いだす前に、ホンネの手を引いてマツハで逃げた。  
…それにしても、今の人、どこかで会った気がするが……

こうして直接顔を見たのは1年ぶりか。

結構苦労した。

何がつて、あのガキの顔を見た瞬間、湧き出る殺意を封じ込めてニコニコするのにすごく苦労した。

1年越しにぶっ殺してやるぜ、クソガキがあー！！

No.35 嵐の前（後書き）

デンジャラスな恐怖とホラーな恐怖は別物だと思ってます。

私の通っていた中学校ではハロウィンパーティーがあり、生徒それぞれが

仮装をします。しかし、私の友人は何を思ったのか「戦車」の格好で現れ、曰く「これも怖いでしょ」とのこと。直後、別の友人から

「それはホラーな恐怖じゃなくてデンジャラスな恐怖だろ」というツッコミを受けてました。

ちなみに私はどちらも耐性はありません。

あと、この回から改行による空白を多くしました。

今までが文章詰めすぎて読みにくい感じでしたので。

ではまた次回！



No. 35 毒蜘蛛の逆襲

第4アリーナ更衣室。

そこにオレとイチ力はいた。

「レイル、おまえ大丈夫か？」

「頭痛がね……」

「え？大丈夫か！保健室行くか？」

「いやほら、会長がオレ達を演劇に巻き込んで何するのかと考えると頭痛がね……」

「あゝ……俺も頭痛くなってきた」

着替え終わったオレ達は、少女マンガにでも出てきて白馬にまたがってそんな王子様の格好をしていた。

「やつほー、一夏くんもレイルくんもちゃんと着替えた？」

「オイ、ノックしてから入ってこいよ会長！」

「……………」

「開けるわよ」

「「開けてから言わないでください！」」

「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。おねーさんがっかり」

「……オイ」

「なんでですか」

「レイルくんもやってみたら？開けてから『開けるよ』って。主に女子更衣室で」

「遠慮します。オレだってまだ死にたくない」

「…あら？男子更衣室の方が良かった？それはそれで喜ぶ人もいるけど」

「なんでそーなりやがるんですか！あとイチカ、なぜ一歩引く！？」

「ま、それはいいとしてハイ、王冠」

「よくねエです…」

「さて、そろそろ始まるわよ」

セットの設営はオレも関わったから分かるのだが、第4アリーナ  
いっぱいに作られたセットはかなり豪華だ。

外をのぞいてみると、観客席は満席、時折聞こえる歓声はこっち  
まで届いている。

「あのー、脚本とか台本とか一度も見てないんですけど」

イチカの言うことももつともだ。

そもそも生徒会の一員であるはずのオレでさえ見てないのだから  
当然だ。

「大丈夫、基本的にこちらからアナウンスするから、その通りにお

話を進めてくれればいいわ。あ、もちろんセリフはアドリブでね」

会長の大丈夫は大丈夫じゃない。

そう確信を抱きつつ舞台袖に移動する。

「イチカ……オレ、この演劇が終わったら結婚するんだ……」

「オイヤめるフラグを立てるな！」

「黙れ一級フラグ建築士！」

「俺がいつフラグ立てたよ？」

「……イチカ、お前のその思考が死亡フラグなのかもしれないな」  
「え？」

『さあ、幕開けよ！』

ブザーが鳴り響き、照明が落ちる。

『昔々あるところに、シンデレラという少女がいました』

出だしは普通だ。

だが油断はできない。

『否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らと呼ぶにふさわしい称号……それが「灰被り姫」！』

……え？シンデレラってそんな話だっけ？それに

『今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜がはじまる。王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会と言う名の死地に少女たちが舞い踊る！』

「なあ、イチカ。教えてくれ」

「…なんだ？」

「『灰燼』ってなんだ？難しい日本語は」

「もらったあああ！」

「うわ！」

いきなりの叫び声に現れたのは、白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスを身に纏った

「ファン・ヒーター！？」

「いいかげん名前覚えるこの！」

イチカを狙うついでに、中国の武器　ニンジャのシュリケンに似ている　がオレのすぐ横を掠め、髪が数本切れる。

「殺す気かあ！」

「し、死んだらどうすんだよ！」

「一夏は死なない程度に殺すわよ！あとアンタは死ぬ程度に殺す！」

「完璧に殺す気だあー！」

ファン・ヒーターは更にシュリケンを抜き放ち、イチカがテープの上のティーセットをひっくり返し、そのトレーで防ぐ。  
だれか彼女に正しいシンデレラを教えてあげてください。

「レイル！助けてくれ！」

「だりゃあ！」

シュリケンの刺さったトレーを飛び蹴り上げで吹き飛ばされたイチカが助けを求める。

「ああ！オレはイチカを見捨てて逃げるほど落ちぶれちゃいねえ！」  
「おお、レイル…！」

そのままイチカを助けに飛び込

寸前で、赤い光線がイチカの頭（正確には王冠）を照らしているのを見つけ、足をとめた。

直後、イチカの顔の横がパンツと吹き飛んだ。

「のわあ!?!」

これはスナイパーライフルによる狙撃だ。  
ということは　オルコットか。

瞬間、サンドウィッチのトラウマが蘇りそうになったが耐える。

さらに数発の狙撃がイチカの王冠を狙い、イチカはセットの陰に身を隠した。

オレも手近なセットを盾にして隠れるが、どうもあの狙撃はイチカのみを狙っているらしい。  
すぐに次の狙撃がイチカをセットから追い出し、いつしか行き止まりに追い詰めていた。

イチカに駆け寄ろうとするも、牽制の弾丸とヒーターのシュリケ

ンが行く手を阻む。

このままイチカは狙撃の餌食になるかと思いきや、

「一夏、伏せて！」

「!?!」

間一髪、耐弾シールドを装備したシャルロット（シンデレラ・ドレス）がそれを防ぐ。

「しかし、何だっただまったく…」

物陰に隠れつつ見ると、シャルロットはイチカを逃がすかと思いきや、王冠を外すように促しているようだ。

しかし、

『王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます』

直後、王冠を外そうとしたイチカが悲鳴を上げ、バリバリと電流が流れる音がした。

王冠を戻すと収まったようだが、アレが自分にも起こりえると思うとゾツとする。

しかし、どいつもこいつもイチカの命ではなく王冠が目当てのようには思える（命だったら怖いけど）。

更に篠ノ之、ラウラが日本刀とタクティカル・ナイフを持って現れイチカに襲いかかった。

「イチカ、逃げ

」

駆け寄ろうとするオレに、篠ノ之とラウラの刃が突き付けられた。

「夫婦の邪魔をしないでもらうぞ」

「悪いが、これはゆずれんのだ」

ヤバい。目が本気だ。

他のイチカハーレムズも王冠を手に入れようと殺気立っており、とても勝てそうにない。

イチカを助けるのは不可能だ

『オレはイチカを見捨てて逃げるほど落ちぶれちゃいねえ！』

そうだ。

オレはさつきそう言ったんだ。

なら、「逃げる前にやること」があるハズだ。

「前言撤回！すまんイチカ、お前の犠牲は無駄にしない！」

きちんと逃げる前に謝ってから背を向けて走り出す。

「そんなあああああ！」

後ろから金属音と悲鳴が聞こえるが、振り返ってはいけない。

オレは、生きなければならぬのだから

「どこに行くのですか？レイラさん」

ギク。

振り返ると、エリーゼさんがいた。

何故かシンデレラ・ドレスを着ている。

そして、何故かその手には竹刀。

「ダァッシユー!!」

が、竹刀の一閃が行く手を阻んだ。

「あー、エリー、ゼ、さん？」

「レイラさん。その王冠、譲ってもらえませんか？」

微笑みながらこちらに近寄るが、これは逆に怖いタイプの笑顔だ。

「イヤですよ電流流れるし何より王冠渡したらすぐくイヤな予感が」

「大丈夫です部屋が一緒になるだけですから」

今、さらりとトンデモナイ事をぬかしやがりませんでしたかこの人。

「ダッシユで逃げる!!」

「あら、布仏さんはよくて私はダメなんですか？」

いえ、ホンネでも良くはありませんが！

「いいですよ。それなら」

ひゅんっと王冠を竹刀が掠める。

「実力で取りますよ」



「くっ！」

間髪いれずに振るわれる竹刀を避けながらステージを走る。

あれだ。

セットの余り物である資材置き場。

その中から適当にみつくりつた棒材で竹刀を防ぐ。

びりびりと手に痺れが走るが耐える。

「こつなつたら……！こつちも実力で逃げさせてもらいますよ！」

2度、3度と竹刀と棒材がぶつかり合い、しのぎを削る。

これが日本のチャンバラ・ムービーなら火花が散り、某宇宙戦争ならライトセイバーが音を立ててスパークしている事だろう。

エリーゼさんの剣戟はすさまじく、オレは防戦一方だった。

舞台のあらゆる場所を移動しながら、某宇宙戦争E.P.3のラストデュエルのような斬り合いを繰り広げた。

時に崩れゆくセットを走り、時に数十人の一般参加を振り切り、しまいには隅に追い詰められてしまった。

というかぶつちやけ、オレが弱いのだ。

そもそもの戦闘スタイルが距離を保つての射撃戦なのだから格闘が上達するはずもなく

一際強い一撃を防ぎきれず、オレの手から棒材が弾き飛ばされた。

「私の勝ちですね。地の利を得ました」

舞台の上に立ち、高所の利を得たエリーゼさんはドヤ顔で宣言した。

「いや、オレ勝とうとか思ってたませんし」

勝ち誇るエリーゼさんを放って、とつと逃げだした。

「え、あ、ちよつと」

「…さすがにここまででは追ってこないよな…」

あの後も散々逃げ回ったオレは、アリーナの更衣室に向かっていた。

観客席や舞台に人が集中している反動か、この廊下は人がほとんどいない。

舞台劇なのに楽屋裏まで逃げ込むのは我ながらどうかと思うが、そんな事を言ってもらえる状況ではない。

とりあえず、このクソ忌々しい王冠を外すことにした。

衣装の上着を脱ぎ、王冠をそつと持ち上げる。

一瞬、心臓に悪い音と共に電流が走るが、すぐに収まった。

「やりにッ」

王冠は安物のセンサーが「頭から外れたと判断すると」電流が流れるもので、そのセンサーさえ騙せば電流が流れる事はない。

例えば、丸めた上着を押しこんでそれをオレの頭だと誤認させるとか。

とはいえ、衣装のあちこちに電極とバッテリーが仕込まれている

のは生きた心地がしないので、とつとつと着替えたい。

そういえばイチカのヤツは無事に逃げ切れただろうか、と今更ながらに心配になった。

……見捨てて逃げたのオレだけど。

コソコソと進みながらようやく更衣室にたどり着いた時だった。

「……何の音だ？」

扉の奥。

そこからガンガンと金属が弾けるような音がした。

イチカが先に着替えているのか、と考えたが、着替えているだけ  
で出る音ではない。

扉を開けようとしたがロックがかかっていて開かない。

その時、短い電子音がした。

左腕　そこにはめられた待機状態の　ゴーストエース　から  
だった。

何かあったのかと凝視すると同時に、小さなディスプレイが目の  
前に投影された。

「これは…！」

表示されたのは、コア・ネットワークを介して送られた　白式  
の現在の状況だった。

たった一行、

戦闘状態、と。

上着の詰まった王冠を放り捨て、意識を集中する。

「テイクオフ、ゴーストエース！」

緊急展開。

着ていた衣装が量子化して消える一方、着なれたISスーツが自動的に纏われる。

「光って変身」といえば分かりやすいが、これだけでも無駄なエネルギーを使うため緊急時以外は使いたくない。

だが、今こそがその緊急時だ。

まずは扉を破って侵入したいところだが、連射レーザーの「ラピッドレイ」では威力不足、「メタルブレイカー」では逆に貫通力が強すぎてどんな被害が出るか分からない。

だから左腕に装備したシールドの先端、ブレード状のそこにシールドバリアのエネルギーを集中させる。

ゴーストエース 唯一の格闘武装ともいえるそれを、勢いよく扉に突き立てた。

敵の射撃が、盾にしたロッカーを数秒とかわらずスクラップにした。さっきから敵に近づけない。

巧みな射撃でこちらの接近を防ぐ敵IS アラクネ の拳動に、一夏は歯噛みした。

「ヒヤハハハハ！どうしたどうした！オータム様の前には手も足も出ないか、あア！？」

あのシンデレラ達から俺を助けだし、ここまで連れてくるなり豹変したオータム　その時は巻紙と名乗っていた　に襲われ、白式　を緊急展開した一夏だったが、敵の腕もあって思いのほか苦戦を強いられていた。

「逝っちまいなあッ！」

ロッカーの一つがついに完全に吹き飛ぶと、マシンガンを構えたアラクネ　が迫る。  
マズい、避けられない

刹那、ドアが音を立てて弾け飛び、間髪いれず放たれたレーザーの光弾を浴びた敵がロッカーの陰に退いていった。

「大丈夫か、イチカ！」

白い影　　ゴーストエース　を纏ったレイルは一瞬で俺の前に現れると、バイザー越しの視線をこちらに寄越した。

「ああ！ありがとな、レイル！」

「雪片式型」を構え直し、俺も敵に意識を向ける。

いる。ロッカーの陰、隙を見せれば撃ってくるだろう。

『どんな敵だ？お前が目当てか？』

レイルの声がプライベート・チャンネルに切り替わった。  
俺もプライベート・チャンネルで応答する。

「ああ。白式 がほしいとか何とか…。蜘蛛みたいなISでさ」

『蜘蛛…？まさかッ……！』

レイルの語気が怒りを帯びた、と思った瞬間、次の攻撃は来た。

目の前のロツカーがサッカーボールのように弾け飛ぶと、毒々しい装甲の塊がカタールを振り下ろした。

咄嗟にシールドで受け止めた時、レイルは黄色と黒で塗装された装甲、独立したPICを搭載した8本の脚、そしてバイザー越しにも分かる殺意を持った眼を知覚した。

「やはりテメエか！ アラクネ え！」

「オイオイ、オータム様って立派な名前があんだって…言うてなかったかあッ！？」

ついにパワー負けしたゴーストエース がカタールに弾かれ、床を削りながら大きく後退した。

すかさずレーザーを連射するが、ろくに狙いもつかない光弾は敵を大きく反れ、ロツカーに穴をあけるにとどまった。

応射されたマシンガンにアーマーを削られ、慌ててロツカーの陰に隠れつつイチカと合流する。

『レイル、知ってるのか？』

「知り合いたくもなかったけどな…ッ」

曖昧に返しながら周囲を見回す。  
狭い。

ただでさえ狭い室内がロッカーと言う障害物で埋め尽くされていて、高機動戦は無理だ。

かと言ってレーザーガンでは決め手に欠けるし、一撃必殺の威力を持つ「メタルブレイカー」もこんなところで撃てばたちどころに壁を貫通し、下手をすればアリーナの人間を巻き込むかもしれない。

つまり、接近戦しかない。

「イチカ、オレが囿になる。お前は回り込んで後ろから斬れ！」

『わかった！…けど、無茶はするなよ』

「そりゃ難しいかもな…行くぞ！」

合図と同時にスラスターを焚き、アラクネに肉迫する。

『バカがア！やられに来たのかよ！』

オータムは「アヤトリ」のように両手を動かすと、それを投げつけた。

目の前でパツと広がったのは、エネルギー・ワイヤの網。  
一年前はコイツにやられた。

だが、今は違う。

左腕を振るうと、網はあっけなく真っ二つに裂けた。

『何い！？』

ゴーストエース 唯一の近接武器であるシールド。  
普段はシールド表面を保護するエネルギー・フィールドをシールドの刃部分に集中させれば切れ味も増す。  
本来の仕様にはなく、ぶつつけ本番で試してみたのだが、見事に成功した。

「くうらえええ！」

「ナメてんじゃねえッ！」

敵のカタールとシールドが鏝迫り合い、火花を散らす。  
何度も刃がぶつかり合うが、パワーで負ける ゴーストエース  
がじりじりと追い詰められていく。

「そらよー！」

一際強い衝撃と共にシールドが弾かれ、体勢を崩される。  
だが、元よりそのつもりだった。

「もらったああ！」

アラクネ が気付いた時には、その背後から突撃したイチカが  
刀を振り上げていた。

今から振り向いても反応できない距離。  
のはずだった。

「甘えな」

ガキン、と鉄の噛み合う音。

オータムは振り向かず、背中の「脚」のうちの2本で「雪片式型」



を受け止めていた。

そして残りの6本が 白式 の方を向いて

『なにっ…!?!?』

「イチカ! 退が」

言いかけた時には遅く、至近距離から「脚」の砲撃を食らったイチカが弾かれていく。

レイル自身も下がる暇などなく、振り下ろされたカタールに装甲を抉り取られ、続く蹴りによって壁に叩きつけられていた。

「がはっ…!」

『テメエは寝てる! 一生なあ!』

続けて放たれたマシンガンが、トドメとばかりに ゴーストエース のアーマーを撃ち抜いていく。

弾丸がバイザーを砕いて額に命中し、レイルの意識は暗い闇に落ちていった。

No.35 毒蜘蛛の逆襲（後書き）

「誰だよお前」と言われそうなほど久々な更新で申し訳ありません。

今回は原作5巻の内容にあたります。

現時点でのオータムさんは、1年前にレイルに敗れた経験がある分原作より強めという設定。なのでレイルと一夏を同時に相手しても地の利もあつて圧倒できます。

自分で設定しといて何だけどゴーストエース室内だと雑魚い…

それではまた次回！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0305s/>

---

IS-Blaze7- &lt;インフィニット・ストラトス~ブレイズ・セブン~&gt;

2012年1月1日01時50分発行